

仙台市文化財調査報告書第482集

六反田遺跡 ほか

発掘調査報告書

洞ノ口遺跡第24次、沖野城跡第17次、
郡山遺跡第290・293・298・300・301次、
六反田遺跡第15次、富沢館跡第8・17次、
羽黒堂遺跡第1次、長楯城跡第1次

2020年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第482集

六反田遺跡 ほか

発掘調査報告書

洞ノ口遺跡第24次、沖野城跡第17次、
郡山遺跡第290・293・298・300・301次、
六反田遺跡第15次、富沢館跡第8・17次、
羽黒堂遺跡第1次、長楯城跡第1次

2020年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より9年が経ち、復興・創生期間4年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々務めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って平成29年度から令和元年度にかけて発掘調査を実施した、洞ノ口遺跡第24次、沖野城跡第17次、郡山遺跡第290・293・298・300・301次、六反田遺跡第15次、富沢館跡第8・17次、羽黒堂遺跡第1次、長楯城跡第1次の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ、次の世代へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。それは地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます、お礼の言葉とさせていただきます。

令和2年3月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例 言

1. 本書は、平成29年度から令和元年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、洞ノ口遺跡第24次、沖野城跡第17次、郡山遺跡第290・293・298・300・301次、六反田遺跡第15次、富沢館跡第8・17次、羽黒堂遺跡第1次、長楯城跡第1次の各発掘調査報告をまとめたものである。
2. 本書の本文執筆、挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は妹尾一樹が行った。
第1～3章・第5章・第9章—妹尾一樹 第4章第3節・第6章第1・2節・第7章・第8章—及川謙作
第4章第1・2節—五十嵐 愛 第4章第4・5節—庄子裕美 第4章第6節—木村 恒
第6章第3節—佐藤恒介
遺物の基礎整理～実測図作成—斎野裕彦、妹尾一樹、柳澤 楓、向田文化財整理室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレース—向田文化財整理室作業員
遺物観察表作成—斎野裕彦・妹尾一樹 遺構註記表作成—各担当職員
遺物写真撮影・図版作成—向田文化財整理室作業員 遺構写真図版作成—各担当職員
3. 本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。
4. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々および事業者から多くのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略)
加藤 昇 セキスイハイム東北株式会社 吉田秀享 庄子いち 庄子悦雄
株式会社アイ・プランニング・コーポレーション 株式会社アルディア 株式会社ランドクリエーション
大和ハウス工業株式会社 株式会社ジーエスコンサルタント 平和陽行株式会社 株式会社RINGS
株式会社東栄住宅 佐藤秀子 積水ハウス株式会社 ナイス株式会社 株式会社北杜プランニング
株式会社住宅情報館 和井内安部事務所 三瓶誠毅 高橋 勇 北野博司 田中則和 藤澤 敦
竹井英文 七海雅人
5. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文中の「遺跡と周辺の遺跡図」は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。
2. 図中の座標値は世界測地系を使用している。しかし、郡山遺跡の座標はこれまでの調査成果との整合性を保つため、任意の原点（X=0、Y=0）を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から6° 44' 7'' 西傾）を基準にして設定された座標を使用している。また、図中では対照のため日本測地系の座標値を記している。

3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SA：柱列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SI：竪穴住居跡 SK：土坑
SL：土塁跡 SX：性格不明遺構 P：ピット

4. 遺物の略称は以下の通りである。






A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非ロクロ調整） D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 Ia：土師質土器 Ib：瓦質土器 Ic：陶器
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 O：自然遺物 P：土製品

5. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。

6. 遺構図に使用したトーンは以下の通りである。また、各図に必要な応じて凡例を付した。

：柱痕跡 ：焼土範囲 ：堀跡

7. 遺物実測図に使用トーンは以下の通りである。

：被熱 ：鉄滓
：黒色処理 ：節理面 ：敲打痕

8. 遺物観察表の（ ）がついた数値は図上復元した推定値ないし残存値である。

9. 遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り3分の1で掲載している。

10. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田 a 火山灰（To - a）」と考えられている。その降下年代は西暦 915 年と推定されており、これに従う。
庄子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡 - 昭和 54 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会 2000 『沼向遺跡 第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田 a と白頭山（長白頭）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 洞ノ口遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第24次調査	3
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3章 沖野城跡の調査	29
第1節 遺跡の概要	29
第2節 第17次調査	29
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 確認調査の発見遺構と出土遺物
	5. 本発掘調査の発見遺構と出土遺物
6. まとめ	
第4章 郡山遺跡の調査	43
第1節 遺跡の概要	43
第2節 第290次調査	43
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3節 第293次調査	54
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第4節 第298次調査	62
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第5節 第300次調査	72
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第6節 第301次調査	77
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第5章 六反田遺跡の調査	83
第1節 遺跡の概要	83
第2節 第15次調査	83
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
	3. 基本層序
4. I・II区の発見遺構と出土遺物	5. III区の発見遺構と出土遺物
	6. まとめ

第6章 富沢館跡の調査	109
第1節 遺跡の概要	109
第2節 第8次調査	110
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3節 第17次調査	113
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第7章 羽黒堂遺跡の調査	117
第1節 遺跡の概要	117
第2節 第1次調査	117
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第8章 長楯城跡の調査	125
第1節 遺跡の概要	125
第2節 第1次調査	126
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
	3. 基本層序
4. 確認調査の発見遺構と出土遺物	5. 本発掘調査調査の発見遺構と出土遺物
6. まとめ	
第9章 総括	147

挿図目次

第1図 平成30・令和元年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)	2	第16図 SK10 土坑出土遺物(2)	16
第2図 洞ノ口遺跡と周辺の遺跡	3	第17図 SK11・12・13 土坑出土遺物	17
第3図 第24次調査区位置図	4	第18図 II区遺構外出土遺物	18
第4図 第24次調査区配置図	4	第19図 沖野城跡と周辺の遺跡	29
第5図 I区調査区平面図	5	第20図 第17次調査区位置図	30
第6図 I区東・南壁断面図	6	第21図 第17次調査区配置図	30
第7図 I区溝跡・土坑断面図	7	第22図 第17次確認調査区平面・断面図	32
第8図 I区溝跡・土坑・ピット出土遺物	7	第23図 第17次本調査区平面図	33
第9図 SX1 性格不明遺構出土遺物(1)	9	第24図 第17次本調査区断面図	34
第10図 SX1 性格不明遺構出土遺物(2)	10	第25図 SD1 溝跡出土遺物	35
第11図 I区遺構外出土遺物	11	第26図 SD2 溝跡出土遺物	36
第12図 II区調査区平面図	12	第27図 第5次・第17次調査区合成図	37
第13図 II区南壁・土坑断面図	13	第28図 沖野城跡 検出堀跡・土塁跡位置図	38
第14図 SK9 土坑出土遺物	14	第29図 郡山遺跡と周辺の遺跡	43
第15図 SK10 土坑出土遺物(1)	15	第30図 郡山遺跡調査地点位置図	44
		第31図 第290次調査区位置図	45

第 32 図	第 290 次調査区配置図……………	45	第 69 図	SI2 竪穴住居跡平面・断面図 ……	92
第 33 図	第 290 次調査区平面・断面図 ……	47・48	第 70 図	SI2 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	94
第 34 図	土坑・ピット断面図……………	49	第 71 図	SI2 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	95
第 35 図	溝跡・土坑・基本層出土遺物 ……	50	第 72 図	I・II 区遺構外出土遺物 ……	95
第 36 図	第 293 次調査区位置図……………	54	第 73 図	III 区V 層上面検出遺構……………	97
第 37 図	第 293 次調査区配置図……………	55	第 74 図	III 区調査区断面図……………	98
第 38 図	1・2T 調査区平面・断面図 ……	56	第 75 図	III 区下層調査区平面・断面図 ……	99
第 39 図	3T 調査区平面図……………	57	第 76 図	III 区出土遺物 ……	99
第 40 図	3T 調査区・溝跡断面図 ……	58	第 77 図	I・II 区と第 9 次調査区合成図 ……	101
第 41 図	第 41 次調査区・第 293 次 3T 調査区 合成図……………	59	第 78 図	III 区と第 5 次調査 6F 区合成図……………	102
第 42 図	第 298 次調査区位置図……………	62	第 79 図	富沢館跡と周辺の遺跡……………	109
第 43 図	第 298 次調査区配置図……………	63	第 80 図	富沢館跡調査区地点位置図……………	110
第 44 図	第 298 次調査区平面・断面図 ……	64	第 81 図	第 8 次調査区配置図……………	110
第 45 図	SI2534 竪穴住居跡・土坑平面・断面図…	65	第 82 図	第 8 次調査区平面・断面図……………	111
第 46 図	溝跡・土坑・性格不明遺構・ ピット断面……………	66	第 83 図	第 17 次調査区配置図……………	113
第 47 図	竪穴住居跡・土坑出土遺物……………	68	第 84 図	第 17 次調査区平面・断面図……………	114
第 48 図	第 300 次調査区位置図……………	72	第 85 図	富沢館跡 検出堀跡位置図……………	116
第 49 図	第 300 次調査区配置図……………	73	第 86 図	羽黒堂遺跡と周辺の遺跡……………	117
第 50 図	第 300 次調査区平面・断面図……………	74	第 87 図	第 1 次調査区位置図……………	118
第 51 図	溝跡出土遺物……………	74	第 88 図	第 1 次調査区配置図……………	118
第 52 図	郡山遺跡 方四町 II 期官衙大溝位置図…	75	第 89 図	1T・3T 調査区平面図……………	119
第 53 図	第 301 次調査区位置図……………	77	第 90 図	2T 調査区平面・断面図……………	120
第 54 図	第 301 次調査区配置図……………	78	第 91 図	長楯城跡と周辺の遺跡……………	125
第 55 図	1T 調査区平面・断面図……………	79	第 92 図	長楯城跡と周辺の城跡 (国土地理院地図傾斜量図使用) ……	126
第 56 図	2T 調査区平面・断面図……………	80	第 93 図	長楯城跡各区画施設と調査区位置図 ……	126
第 57 図	溝跡・基本層出土遺物……………	81	第 94 図	確認調査区断面図……………	128
第 58 図	郡山遺跡第 301 次調査区と周辺遺構 ……	81	第 95 図	調査区全体図……………	131・132
第 59 図	六反田遺跡と周辺の遺跡……………	83	第 96 図	南区遺構検出状況……………	133
第 60 図	第 15 次調査区位置図……………	84	第 97 図	南区土橋石積み検出状況……………	134
第 61 図	第 15 次調査区配置図……………	85	第 98 図	南区下層・底面石積み検出状況 ……	135
第 62 図	II 区 III 層上面検出遺構……………	86	第 99 図	南区遺構完掘状況……………	136
第 63 図	I 区 V 層上面検出遺構……………	86	第 100 図	北区遺構完掘状況……………	137
第 64 図	II 区 V 層上面検出遺構……………	87	第 101 図	調査区南壁断面図・オルソ画像 ……	138
第 65 図	SI1 竪穴住居跡平面・断面図……………	88	第 102 図	南区各遺構断面図……………	139
第 66 図	SI1 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	89	第 103 図	南・北区各遺構断面図……………	140
第 67 図	SI1 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	90	第 104 図	調査区内出土遺物……………	141
第 68 図	SI1 竪穴住居跡出土遺物 (3) ……	91	第 105 図	SD1 堀跡・土橋状遺構・SL1 土塁 構築順序模式図……………	142

挿表目次

表 1	平成 30 年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	1
表 2	令和元年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2
表 3	SI2 竪穴住居跡土層註記表	93
表 4	2T 掘立柱建物跡・土坑土層註記表	121

写真図版目次

写真図版 1	洞ノ口遺跡第 24 次調査 (1)	21	写真図版 19	郡山遺跡第 298 次調査 (2)	70
写真図版 2	洞ノ口遺跡第 24 次調査 (2)	22	写真図版 20	郡山遺跡第 298 次調査 (3)	
写真図版 3	洞ノ口遺跡第 24 次調査 出土遺物 (1)	23		・出土遺物	71
写真図版 4	洞ノ口遺跡第 24 次調査 出土遺物 (2)	24	写真図版 21	郡山遺跡第 300 次調査・出土遺物	76
写真図版 5	洞ノ口遺跡第 24 次調査 出土遺物 (3)	25	写真図版 22	郡山遺跡第 301 次調査・出土遺物	82
写真図版 6	洞ノ口遺跡第 24 次調査 出土遺物 (4)	26	写真図版 23	六反田遺跡第 15 次調査 (1)	102
写真図版 7	洞ノ口遺跡第 24 次調査 出土遺物 (5)	27	写真図版 24	六反田遺跡第 15 次調査 (2)	103
写真図版 8	洞ノ口遺跡第 24 次調査 出土遺物 (6)	28	写真図版 25	六反田遺跡第 15 次調査 (3)	104
写真図版 9	沖野城跡第 17 次調査 (1)	39	写真図版 26	六反田遺跡第 15 次調査 (4)	105
写真図版 10	沖野城跡第 17 次調査 (2)	40	写真図版 27	六反田遺跡第 15 次調査 出土遺物 (1)	106
写真図版 11	沖野城跡第 17 次調査 (3)	41	写真図版 28	六反田遺跡第 15 次調査 出土遺物 (2)	107
写真図版 12	沖野城跡第 17 次調査出土遺物	42	写真図版 29	六反田遺跡第 15 次調査 出土遺物 (3)	108
写真図版 13	郡山遺跡第 290 次調査 (1)	52	写真図版 30	富沢館跡第 8 次調査	112
写真図版 14	郡山遺跡第 290 次調査 (2) ・出土遺物	53	写真図版 31	富沢館跡第 17 次調査	115
写真図版 15	郡山遺跡第 293 次調査 (1)	59	写真図版 32	羽黒堂遺跡第 1 次調査 (1)	122
写真図版 16	郡山遺跡第 293 次調査 (2)	60	写真図版 33	羽黒堂遺跡第 1 次調査 (2)	123
写真図版 17	郡山遺跡第 293 次調査 (3)	61	写真図版 34	羽黒堂遺跡第 1 次調査 (3)	124
写真図版 18	郡山遺跡第 298 次調査 (1)	69	写真図版 35	長楯城跡確認調査	129
			写真図版 36	長楯状跡第 1 次調査 (1)	144
			写真図版 37	長楯跡跡第 1 次調査 (2)	145
			写真図版 38	長楯城跡第 1 次調査 (3) ・出土遺物	146

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

【文化財課】 課長 長島栄一

【調査調整係】 係長 平間亮輔

主任 及川謙作

主事 妹尾一樹 相川ひとみ 木村 恒 柳澤 楓 佐藤恒介

文化財教諭 元山祐一 大友 渉 栗和田祥郎 尾形隆寛

専門員 斎野裕彦

【整備活用係】 係長 佐藤 淳

主任 小野寺啓次 高橋敬子

主事 庄子裕美 五十嵐 愛

文化財教諭 齋藤健一 三浦昂也 佐藤文征

専門員 渡部弘美

第2節 調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

第3節 調査実績

平成30年度～令和元年度（平成31年1月～令和元年12月）にかけて実施された調査は表1、2の通りで、公共事業が8件、民間開発が25件、合計33件である。本書に収録したのはこのうち7件と平成29～30年12月までに実施した5件の計12件である

表1 平成30年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

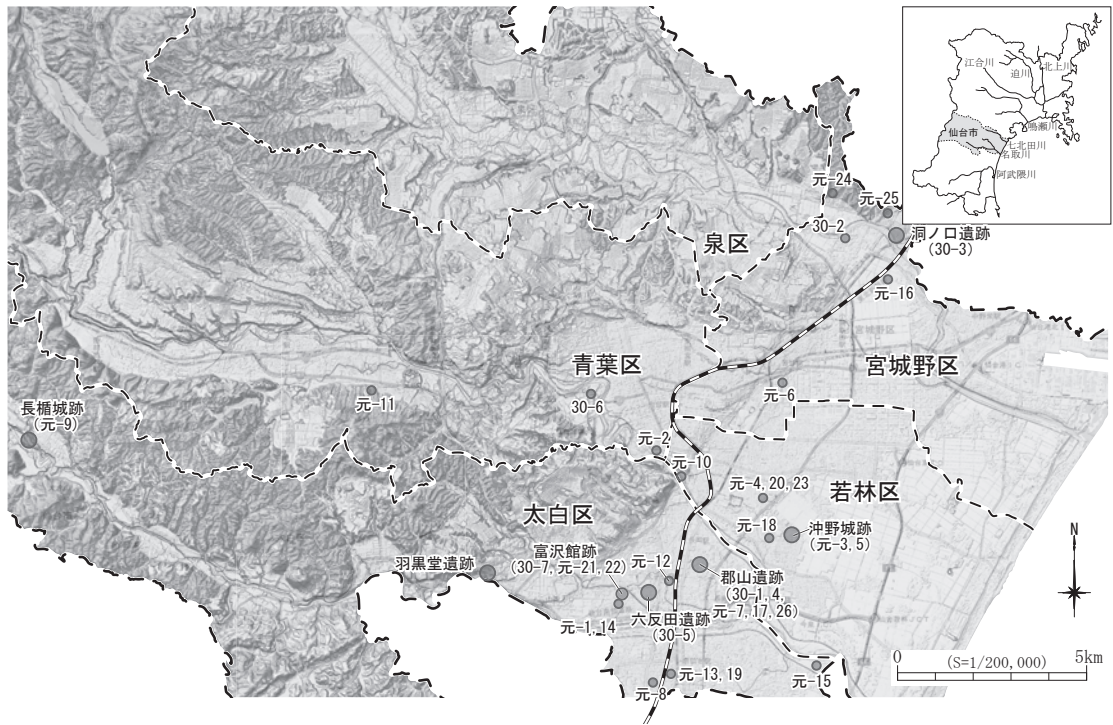
図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H30-84	民間	郡山遺跡	太白区郡山五丁目	宅地造成	216.8 ㎡	30.0 ㎡	1月21日	遺構・遺物なし	H30 105-111	第291次
2	H30-85	民間	稲荷館跡	宮城野区岩切字水分	長屋住宅	227.7 ㎡	21.0 ㎡	1月17日	遺構・遺物なし	H30 105-113	—
3	H30-86	民間	洞ノ口遺跡	宮城野区岩切字青津目	長屋住宅	173.1 ㎡	24.0 ㎡	1月21日	遺構・遺物なし	H30 105-110	—
4	H30-88	民間	郡山遺跡	太白区郡山五丁目	宅地造成	378.6 ㎡	88.8 ㎡	2月18日～20日	溝跡2条、遺物なし	H30 105-119	第293次
5	H30-39	公共	六反田遺跡	太白区大野田五丁目	校舎増築 給食棟増築	122.0 ㎡ 385.0 ㎡	71.0 ㎡ 93.0 ㎡	8月27日～10月22日 2月18日～3月18日	堅穴住居跡2軒、溝跡、 土坑、小溝状遺構群	H23 107-6 H30 104-79	第15次
6	H30-90	公共	経ヶ峯伊達家墓所	青葉区霊屋下	トイレ新設	25.0 ㎡	12.0 ㎡	3月12日	遺構・遺物なし	H30 文観観 第2071号	—
7	H30-91	民間	富沢館跡	富沢駅西36街区	長屋住宅	664.6 ㎡	72.0 ㎡	3月25日～27日	堀跡1条、溝跡1条 遺物なし	H30 105-133	次年度以降

(平成31年1月1日～3月31日)

表2 令和元年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H31-2	民間	鍛冶屋敷前遺跡及び隣接地	太白区富沢字鍛冶屋敷前	長屋住宅	284.2	39.0	4月4日	ピット15基	H30 105-132	—
2	H31-4	民間	土樋遺跡	青葉区土樋一丁目	共同住宅	207.2	30.0	5月8日	遺構・遺物なし	H31 102-7	—
3	H31-8	民間	沖野城跡	若林区沖野七丁目	宅地造成	2649.0	220.0	6月3日～6月18日	堀跡2条	H31 102-16	第17次(確認調査)
4	H31-10	民間	南小泉遺跡	若林区一本杉町	宅地造成	109.3	15.0	6月17日	遺構・遺物なし	H31 102-30	—
5	H31-14	民間	沖野城跡	若林区沖野七丁目	宅地造成	2649.0	320.0	7月3日～8月7日	堀跡2条	H31 102-16	第17次(本調査)
6	H31-15	公共	南目城跡	宮城野区南目館	消防ポンプ室	39.0	39	7月9日	遺構・遺物なし	H29 104-80	—
7	H31-16	民間	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	宅地造成	1461.8	39.6	7月17日～8月2日	竪穴住居跡1軒、溝跡4条、土坑9基、柱穴1基	H31 102-25	第298次
8	H31-18	民間	栗遺跡	太白区西中田七丁目	共同住宅	136.2	16.0	7月31日	遺構・遺物なし	H31 102-35	—
9	H31-19	公共	長楯城跡	太白区秋保町長袋字館	道路改良	1183.0	128.2	8月19日～11月15日	土塁・堀跡	H28 104-29	第1次
10	H31-25	公共	根岸遺跡	太白区根岸町	雨水管移設	7.30	7.3	8月24日	遺構・遺物なし	H31 104-3	—
11	H31-26	公共	鹿除土手	青葉区下愛子字館	河川災害復旧	—	—	9月22日・9月6日	土手	H31 104-22	—
12	H31-27	公共	王ノ壇遺跡隣接地	太白区大野田一丁目ほか	都市計画道路	2596.4	67.0	9月3日～6日	遺構・遺物なし	—	—
13	H31-28	民間	安久東遺跡	太白区西中田四丁目	共同住宅	1465.6	120.0	9月2日～5日	溝跡	H31 102-47	次年度以降
14	H31-29	民間	鍛冶屋敷前遺跡	太白区富沢字鍛冶屋敷前	共同住宅	354.0	60.0	9月10日・12日	小溝状遺構	H31 102-50	—
15	H31-30	公共	昭和北遺跡隣接地	太白区四郎丸字岡谷ほか	雨水幹線	64.0	48.0	9月12日～17日	遺物僅少	H30 109-92	—
16	H31-31	民間	鴻ノ巣遺跡隣接地	宮城野区岩切地区及び燕沢地区	日本貨物ターミナル駅移転事業	226000	1109.6	9月17日～11月15日	水田耕作土	H31 104-23	—
17	H31-35	民間	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	長屋住宅	104.3	30.0	10月2日～4日	Ⅱ期官衙外郭大溝	H31 102-45	第300次
18	H31-37	民間	神柵遺跡	若林区沖野三丁目	賃貸住宅	166.3	9.0	10月23日	堀跡	H31 101-246	—
19	H31-39	民間	安久東遺跡	太白区西中田四丁目	共同住宅	1465.6	609.0	10月28日～2月21日	溝跡、土坑など	H31 102-47	次年度以降
20	H31-40	民間	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	建売住宅	56.3	12.0	10月31日	ピット2基	H31 102-71	—
21	H31-42	民間	富沢館跡	太白区富沢字館	建売住宅	61.2	10.0	11月18日～19日	遺構・遺物なし	H31 101-333	—
22	H31-43	民間	富沢館跡	太白区富沢字館	建売住宅	58.2	10.0	11月18日～19日	堀跡1条、土坑1基	H31 101-334	第17次
23	H31-44	民間	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	共同住宅	174.6	12.0	11月20日	遺構：なし、遺物：僅少	H31 102-66	—
24	H31-47	民間	入生沢遺跡	宮城野区岩切字入生沢	水道管・下水管理設工事	195.7	24.0	12月2日～3日	土坑	H31 102-74	—
25	H31-49	民間	羽黒前遺跡	宮城野区岩切字羽黒前	区画整理	102800	148.7	12月9日～16日	竪穴住居跡1軒	H31 102-79	—
26	H31-50	民間	郡山遺跡	太白区郡山五丁目	建売住宅	117.1	30.0	12月9日～16日	Ⅱ期官衙外郭外溝	H31 102-69	第301次

(平成31年4月1日～令和元年12月31日)



第1図 平成30・令和元年度調査地点位置図(国土地理院地図を一部改変)

第2章 洞ノ口遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

洞ノ口遺跡は仙台市宮城野区岩切字洞ノ口に所在する。仙台市の東部、JR岩切駅の北側に位置し、七北田川によって形成された自然堤防上から後背湿地にかけて立地している。遺跡の範囲は東西500～600m、南北1000mにおよび、現況での標高は約8.0mである。

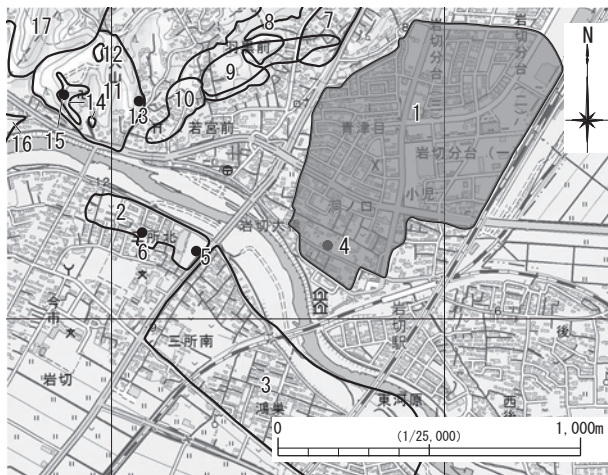
遺跡では区画整理事業や個人住宅建設などに伴い、これまでに23次にわたり調査が行われ、古墳時代から近世にかけての遺構、遺物が発見されている。遺構は13世紀頃の屋敷跡と、15世紀後半から16世紀にかけての城館に関する堀跡や建物跡などが発見されている。遺物は在地の土器類の他、遠隔地からもたらされた陶磁器や、金属製品、木製品など多種多様な製品が出土している。

遺跡の所在する岩切地区は中世の遺跡が集中して分布する。西側は東光寺遺跡や羽黒前遺跡などの板碑群が集中する等、宗教的空間が展開している他、岩切城跡、東光寺城跡、化粧坂城跡など軍事的な性格をもった遺跡が分布している。また、七北田川の対岸では今市遺跡や鴻ノ巣遺跡といった屋敷跡が広がっている。市場とのかかわりや陸上、水上交通の要衝であったことが指摘されており、岩切周辺は中世における重要な地域であったと考えられる。

第2節 第24次調査

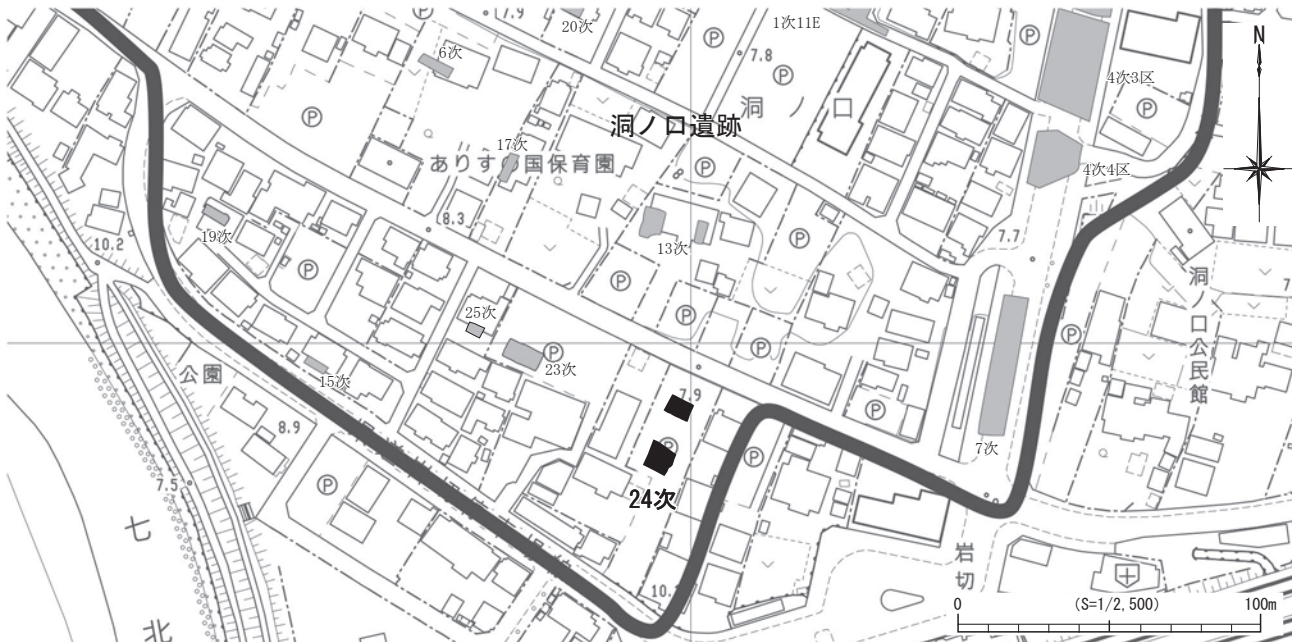
1. 調査要項

遺跡名	洞ノ口遺跡（宮城県遺跡登録番号 01372）
調査地点	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口 92番1の一部
調査期間	平成29年10月2日～10月30日
調査対象面積	283.78 m ²
調査面積	約83 m ² （1区：44 m ² 、2区：39 m ² ）
調査原因	共同住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 妹尾一樹 文化財教諭 及川 基



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡、城館跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	古墳～近世
2	今市遺跡	集落跡、包含地	自然堤防	古代、中世
3	鴻ノ巣遺跡	集落跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	弥生～中世
4	洞ノ口板碑群	板碑	自然堤防	中世
5	岩切三所北A板碑	板碑	自然堤防	中世
6	岩切三所北B板碑	板碑	自然堤防	中世
7	化粧坂城跡	城館跡	丘陵	中世
8	羽黒前遺跡	城館跡、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
9	羽黒前板碑群	板碑	丘陵	中世
10	若宮前遺跡	城館跡、信仰遺跡	丘陵	縄文、古代～近世
11	東光寺遺跡	城館跡、石窟仏、寺院跡、集落跡、板碑群	丘陵斜面	中世
12	東光寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
13	地藏堂板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
14	東光寺板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
15	東光寺磨崖仏群	石窟仏	丘陵斜面	中世
16	新宿団遺跡	散布地	自然堤防	古代
17	岩切城跡	城館跡	丘陵	中世

第2図 洞ノ口遺跡と周辺の遺跡



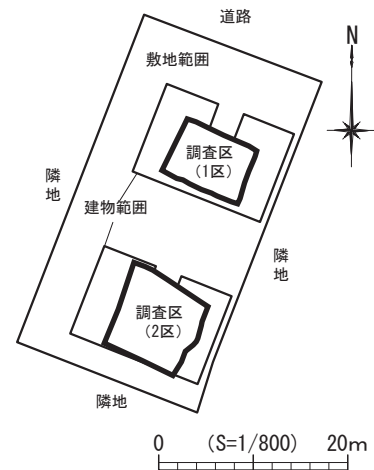
第3図 第24次調査区位置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成29年7月13日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成29年7月18日付H29教生文第103-022号で回答）に基づき実施した。

対象地内北部に南北5.5m、東西8.0m、南部に南北6.0m、東西6.5mの調査区を設定し、それぞれをⅠ区、Ⅱ区とした。調査は調査時の排土置き場確保のためにⅠ区から行い、Ⅰ区の調査終了後、埋め戻したのち、Ⅱ区の調査を行った。Ⅰ区、Ⅱ区共に重機により基本層Ⅰ～Ⅲ層を除去した後、人力によりⅣ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、Ⅰ区では溝跡2条、井戸跡1基、土坑8基、性格不明遺構2基、ピット64基、Ⅱ区では溝跡5条、土坑5基、ピット3基を検出した。

調査では必要に応じて、平面図（ $S = 1/20$ ）、断面図（ $S = 1/20$ ）を作製し、デジタルカメラにて写真記録を行った。



第4図 第24次調査区配置図

3. 基本層序

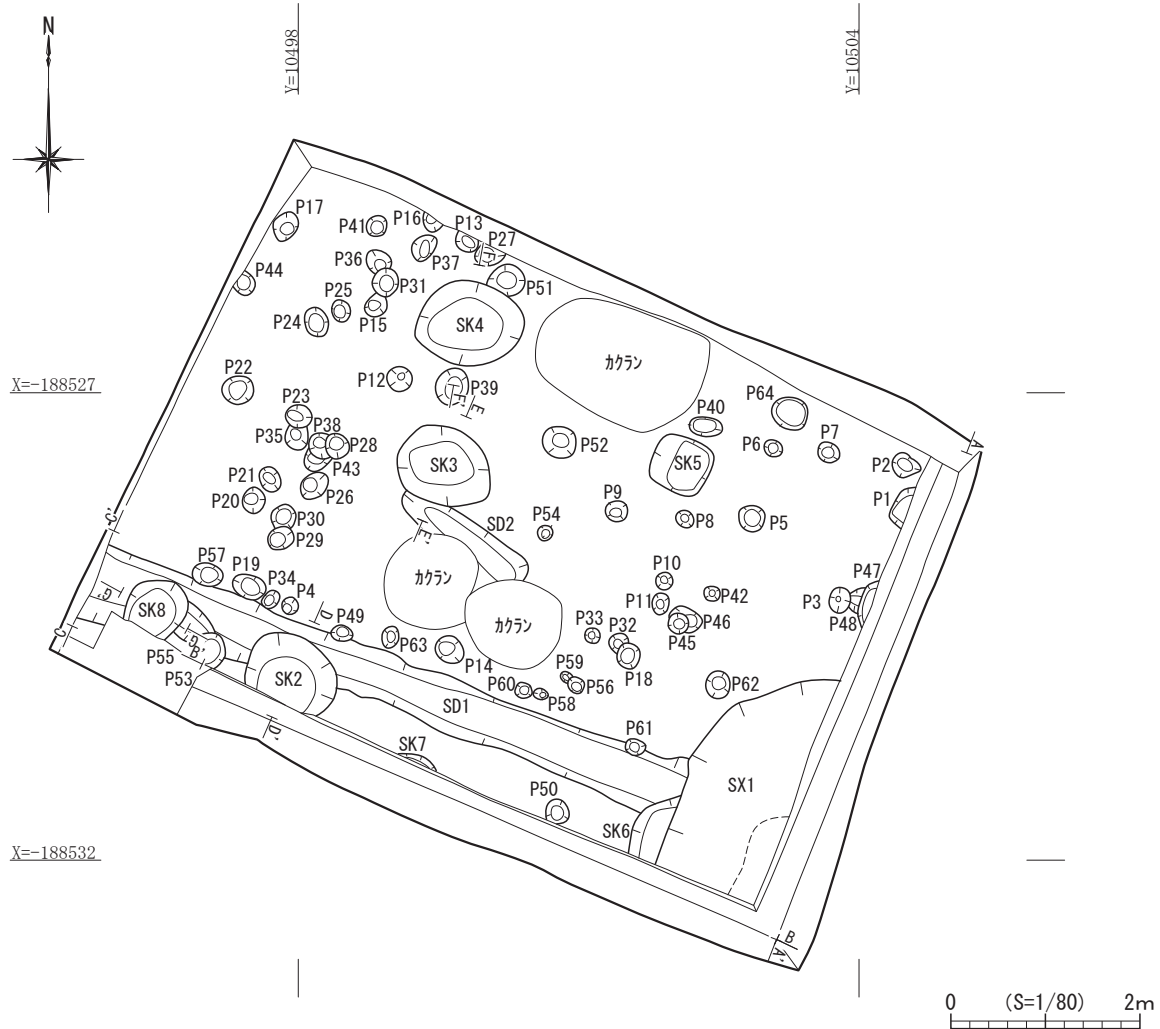
盛土（約0.7m）の下に大別5層、細別8層の基本層を確認した。現地表面から遺構検出面であるⅣ層上面までの深度は1.5～2mである。Ⅰ区と比べ、Ⅱ区はⅣ層上面の標高が0.4m程度低くなっている。

Ⅰ a 層：10YR4/4 褐色砂質シルト。炭化物を斑状に含む。層厚20～40cm程度。宅地造成前の旧耕作土層と考えられる。

Ⅰ b 層：10YR3/4 暗褐色砂質シルト。炭化物を斑状に含む。層厚30～40cm程度。Ⅰ区でのみ認められた。旧耕作土層と考えられる。

Ⅱ a 層：10YR3/3 暗褐色砂質シルト。炭化物を多量に含む。層厚は40～50cm程度。

Ⅱ b 層：10YR3/3 暗褐色砂質シルト。炭化物を斑状に含む。黄褐色砂を多量に含む。層厚20～50cm程度。Ⅱ区でのみ認められた。



第5図 I区調査区平面図

- III 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト。炭化物を斑状に含む。層厚 10～15cm 程度。II区でのみ認められた。
- IV 層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。炭化物を少量含む。層厚 35～45cm 程度。上面は今回の遺構検出面である。
- V a 層：10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト。マンガン粒を極めて多量に含む。層厚 20cm 程度。
- V b 層：10YR5/4 にぶい明黄褐色砂質シルト。酸化鉄を極多量に含む。また、炭化物を斑状に含む。

4. 発見遺構と出土遺物

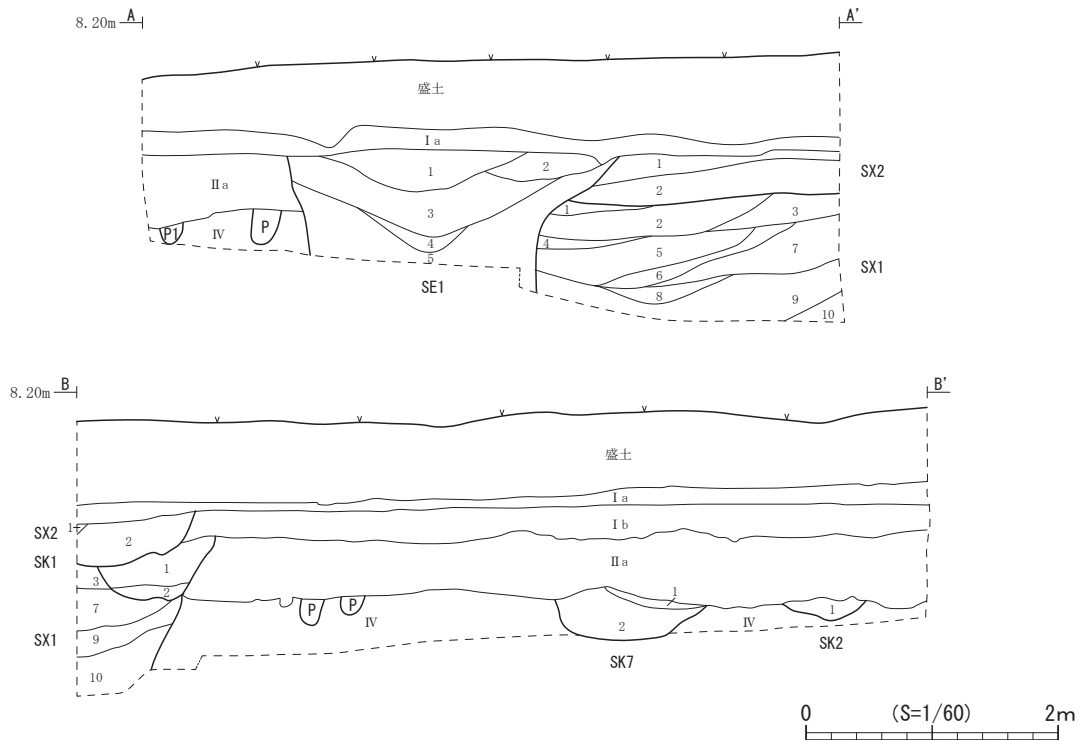
【I区】

(1) 溝跡

SD1 溝跡 (第5・7図)

調査区南部で検出された。北西から南東方向の溝跡で、両端は調査区外へと延びる。SK2、6、8 土坑、SX1 性格不明遺構、P19、49、53、55、57、61 よりも古く、P34 よりも新しい。検出長 6.5m 以上、上幅 48～77cm、深さ 24cm である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は 2 層に分層された。遺物は土師器、須恵器、常滑産陶器、鉄製品が出土している (写真図版 3-1・2)。1 は須恵器甕の体部で、2 は常滑産と考えられる中世陶器甕の体部である。

第2節 第24次調査



遺構名	層位	土色	土性	備考
SE1	1	10YR4/4 褐色	シルト	暗褐色砂質シルト含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘土ブロック (φ 5mm~50mm) 多量に含む。
	3	10YR4/4 褐色	シルト	明黄褐色砂、酸化鉄粒多量に含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物、褐色砂含む。
	5	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物含む。
SK1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物含む。5~10mmの礫、砂を少量含む。
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む。
SK2	1	10YR2/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	1~10mmの礫、炭化物を含む。
SK7	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を含む。
SX1	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂少量、炭化物 (φ 10mm) 少量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	砂少量混じる、酸化鉄粒、炭化物 (φ 10mm) 含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	酸化鉄が斑状に、炭化物斑状に含む。
	4	10YR4/4 褐色	砂質シルト	砂含む。
	5	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄、炭化物多量に含む。
	6	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物 (φ 10mm) 少量、酸化鉄粒斑状に含む。
	7	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄、炭化物含む。
	8	10YR2/1 黒色	砂質シルト	炭化物を多量に含む。
	9	10YR6/6 明黄褐色	シルト	炭化粒含む。
	10	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物多量に含む。
SX2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	砂含む、酸化鉄粒斑状に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	砂、炭化物 (φ 10mm) 少量含む。

第6図 I区東・南壁断面図

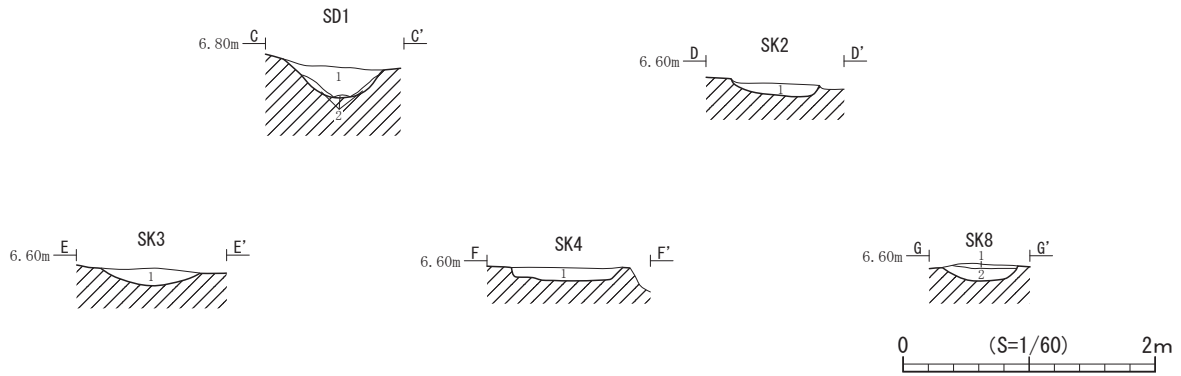
SD2 溝跡 (第5図)

中央部で検出された。北西から南東方向の溝跡。SK3 土坑よりも古い。規模は検出長 1.5m、幅 38cm、深さは 20cm 程度である。堆積土は単層で、遺物は土師器と須恵器が出土している。

(2) 井戸跡

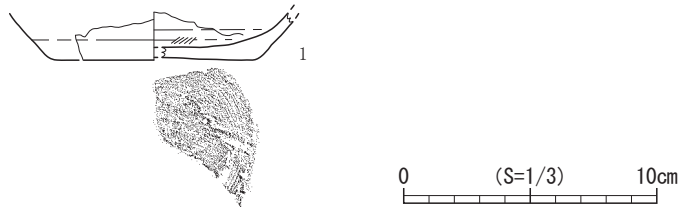
SE1 井戸跡 (第6図)

調査区東壁面にて検出された。SX1 性格不明遺構より新しい。規模は南北長 2.5m で、深さは 100cm 以上である。堆積土は 6 層に分層された。掘り込み面は II a 層上面で、壁面の立ち上がりや規模から井戸跡と推定される。遺物は出土していない。



遺構名	層位	土色	土性	備考
SD1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	酸化鉄粒斑状に含む。
SK2	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を多量に、礫(φ10~25mm)少量含む。
SK3	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物、酸化鉄粒少量、III層ブロック(φ3cm)含む。
SK4	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物少量含む。
SK8	1	7.5YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化粒少量含む。

第7図 I区溝跡・土坑断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ia-1	SK7	堆積土	土師質土器	皿	-	(8.0)	(1.9)	体：ロクロナデ 底：回転糸切 無調整	ロクロナデ→体～底：ナデ	胎土砂粒少量含む	3-4
-	E-6	SD1	堆積土	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む	3-1
-	Ic-5	SD1	堆積土	陶器	甕	-	-	-	ナデ	自然軸	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	3-2
-	E-7	SK4	堆積土	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む	3-3
-	Ic-6	P22	堆積土	陶器	甕	-	-	-	ナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	3-5
-	Ic-7	P59	堆積土	陶器	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	3-6
-	Ic-8	P64	堆積土	陶器	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	3-7

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
-	0-1	SD3	堆積土	動物遺体	馬歯?	-	-	-	重さ 18.9 g	3-8
-	G-2	SK3	堆積土	瓦	丸瓦	5.0	4.2	1.7	凹面：布目 凸面：ナデ 重さ 31.7 g	3-9
-	G-1	P22	堆積土	瓦	平瓦	10.2	7.7	3.1	凹面：糸切痕→布目 凸面：縄タタキ 重さ 187.7 g	3-10

第8図 I区溝跡・土坑・ピット出土遺物

(3) 土坑

SK1 土坑 (第5・6図)

南東部の南壁で検出された。SX1 性格不明遺構より新しい。掘り込み面はII a層上面である。平面形は不明である。規模は径 95cm、深さ 48cm である。断面形は逆台形を呈す。堆積土は2層に分層された。遺物は出土していない。

SK2 土坑 (第5～7図)

南西部で検出された。南側は調査区外へと延びる。SD1 溝跡よりも新しい。平面は楕円形を呈し、規模は長軸 101cm、短軸 71cm 以上、深さ 10cm である。断面形は浅い皿形を呈す。堆積土は単層である。また、遺物は須恵器が出土した。

第2節 第24次調査

SK3 土坑 (第5・7図)

中央部で検出された。SD2 溝跡よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 108cm、短軸 83cm、深さ 15cm である。断面形は浅い皿形を呈し、堆積土は単層である。遺物は古代の丸瓦が出土している(写真図版 3-9)。

SK4 土坑 (第5・7図)

北西部で検出された。P51 よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 117cm、短軸 93cm、深さ 11cm である。断面形は浅い皿形を呈し、堆積土は 2 層に分層される。遺物は土師器と須恵器(写真図版 3-3)が出土している。

SK5 土坑 (第5図)

東部で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸 63cm、短軸 59cm、深さ 7cm である。断面形は浅い皿形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK6 土坑 (第5図)

南部で検出された。SD1 溝跡よりも新しく、SX1 性格不明遺構よりも古い。平面形は不明である。規模は長軸 85cm 以上、短軸 33cm、深さ約 30cm で、堆積土は単層である。遺物は須恵器、土師質土器、常滑産の中世陶器が出土している。

SK7 土坑 (第5・6図)

南部で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 117cm、短軸 32cm 以上、深さ 43cm である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は 2 層に分層される。遺物は土師質土器が出土している(第8図1)。

SK8 土坑 (第5・7図)

南西部で検出された。P55 よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 64cm、短軸 59m 以上、深さ 13cm である。断面形は浅い皿形を呈し、堆積土は 2 層に分層される。遺物は土師器が出土している。

(4) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構 (第5・6図)

南東部で検出された。調査区外の南東へと広がる。SK6 土坑、SD1 溝跡よりも新しく、SE1 井戸跡、SK1 土坑よりも古い。II a 層上面から掘り込まれる。本遺構は調査区の壁際に位置していたため、安全上の判断により、地表面から 1.8m の掘削に留め、完掘は行わなかった。規模は南北 2.8m、東西 1.6m 以上で、深さは 104cm 以上である。平面形は不明である。堆積土は 10 層に分層された。7、9 層からは炉壁や鋳型等の鋳造関連の遺物がまとまって出土した。

遺物は須恵器、中世陶器、土師質土器、炉壁や鋳型などが出土している。第9図1は福島県八郎窯産と推定される陶器の高台付底部である。器種は片口鉢と考えられる。高台が付き、比較的古い様相を示す。13世紀前半頃と考えられる。2は外面に溶解物が付着しており、とりべの可能性はある。

3～11は鋳型である。還元作用や被熱による器面の変色、器面に薄く貼り付けられた非常に緻密な胎土の存在、形態的な特徴を基準として鋳型と判断した。3は逆三角錐状の土製品で、上端には格子目状の沈線が施される。また、紐掛けのためか、凹線が側面及び、底面付近に認められる。鋳型の湯口を塞ぐための蓋の可能性はある。4は合子蓋の外型と考えられる。残存状況は不良だが、端部に内型と合わせるためのハバキ部分が残る。5は鉄鍋の外

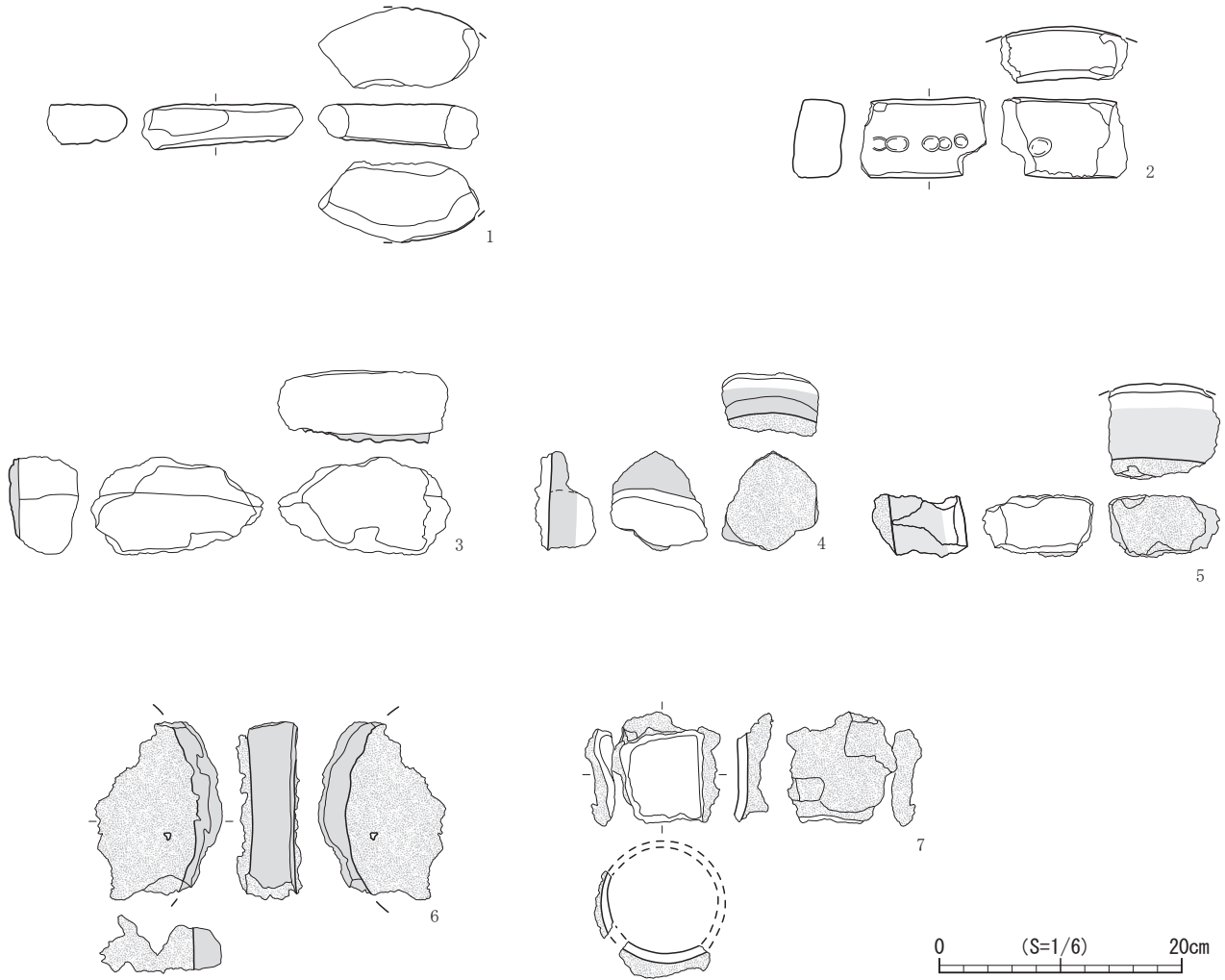


図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-1	SX1	堆積土	陶器	鉢	-	(13.4)	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	高台付 胎土緻密 産地は在地(八郎窯)	3-12
-	E-8	SX1	10	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む	3-11

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
2	P-26	SX1	堆積土	土製品	とりべ?	-	高 (3.5)	1.5	体部破片 外面:溶解物付着 一部に緑青付着 重さ 21.8g	3-13
3	P-14	SX1	堆積土	鋳型 (湯口蓋?)	-	7.4	6.8	(3.5)	半分欠損 上面:斜格子状沈線 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 143.4g	3-14
4	P-15	SX1	堆積土	鋳型 (外型)	-	-	(7.3)	(4.4)	合子蓋の鋳型(外型)破片 端部にハバキ スサ・砂粒を多量に含む 重さ 136.2g	3-15
5	P-18	SX1	7	鋳型 (外型)	-	-	高 (5.2)	(2.9)	鍋の身の鋳型(外型)破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 仕上げマネ 0.5mm残存 重 40.7g	3-18
6	P-19	SX1	7	鋳型 (外型)	-	-	高 3.7	3.8	鍋の身の鋳型(外型)破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 重さ 41.4g	3-19

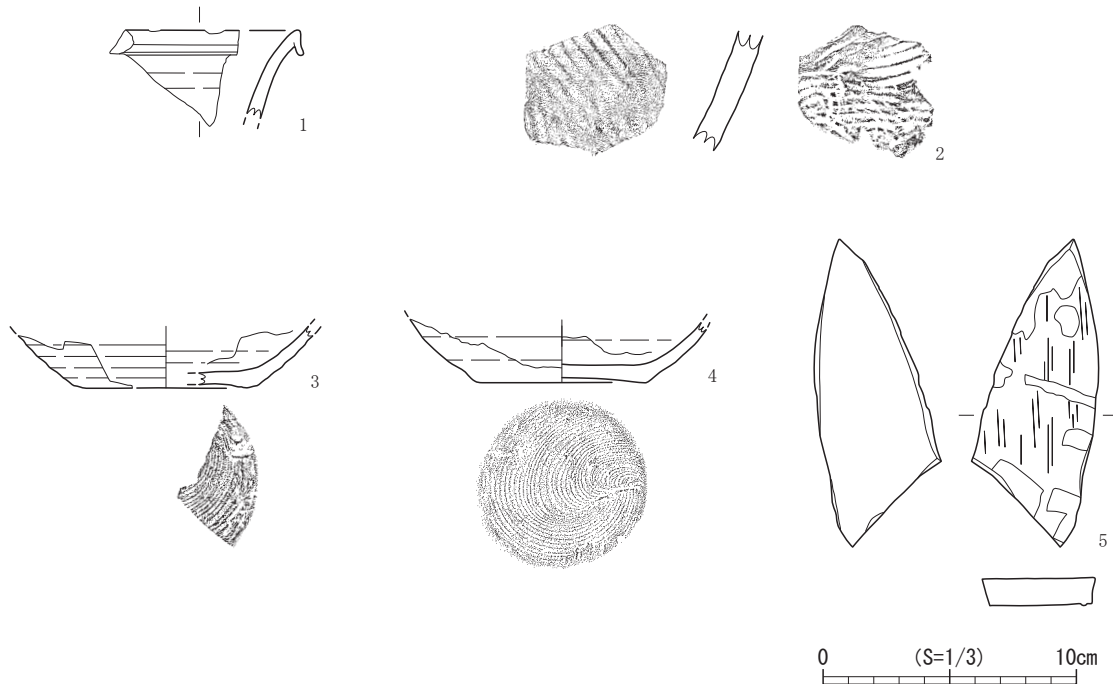
第9図 SX1 性格不明遺構出土遺物(1)

第2節 第24次調査



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
9-7	P-21	SX1	堆積土	鋳型 (内型)	-	-	高 4.4	5.5	鋳型 (内型) の底部破片 スサ・砂粒を多量に含む 外面被熱 緑青付着 重さ 68.8g	3-20
9-8	P-20	SX1	9	鋳型 (外型)	-	-	高 7.4	2.3	鍋の身の鋳型 (外型) 破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 重さ 92.2g	3-22
9-9	P-23	SX1	9	鋳型 (内型)	-	-	高 (4.2)	径 2.3	鋳型 (内型) の脚部破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 26.3g	3-23
9-10	P-24	SX1	9	鋳型 (内型)	-	-	高 (4.3)	径 2.3・1.9	鋳型 (内型) の脚部破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 20.7g	3-24
9-11	P-25	SX1	9	鋳型 (内型)	-	-	高 (2.7)	径 (1.5)	鋳型 (内型) の脚部破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 11.4g	3-25
10-1	P-1	SX1	7	炉壁	-	-	高 3.3	(6.3)	I類 口縁部破片 スサを多量に含む 砂粒を少量含む 外面被熱 重さ 369.3g	4-1
10-2	P-2	SX1	堆積土	炉壁	-	-	高 (6.5)	4.2	I類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 内・外面に指頭圧痕 重さ 276.5g	4-2
10-3	P-5	SX1	9	炉壁	-	-	高 (8.1)	(5.4)	II類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 外面：ナゲ調整 粘土の積上痕 内面：鉄滓付着 重さ 500g	4-5
10-4	P-7	SX1	堆積土	炉壁	-	-	高 (8.2)	(3.0)	III a類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 内面：鉄滓付着 重さ 189.0g	4-9
10-5	P-10	SX1	堆積土	炉壁	-	-	高 (5.2)	(6.5)	III a類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 内面：鉄滓付着 重さ 329g	4-10
10-6	P-12	SX1	堆積土	炉壁	-	-	高 (10.4)	-	III b類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 内面：鉄滓多量に付着 重さ 445.0g	5-1
10-7	P-13 ①	SX1	7	羽口	-	-	-	0.8	スサ・砂粒を多量に含む 外面：鉄滓付着 重さ 174.4g	5-2
	P-13 ②	SX1	9	羽口	-	-	-	0.7	重さ 48.0g	5-3
-	P-3	SX1	堆積土	炉壁	-	-	-	-	I類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 217.8g	4-3
-	P-4	SX1	堆積土	炉壁	-	-	-	-	II類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 61.0g	4-4
-	P-6	SX1	9	炉壁	-	-	-	-	III a類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 外面：器面剥落 内面：鉄滓付着 重さ 249.6g	4-6
-	P-8	SX1	9	炉壁	-	-	-	-	III a類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 内面：鉄滓付着 重さ 263.2g	4-7
-	P-9	SX1	7	炉壁	-	-	-	-	III b類 体部破片 スサ・砂粒を多量に含む 内面被熱 内面：鉄滓付着 重さ 59.3g	4-8
-	P-16	SX1	7	鋳型 (外型)	-	-	-	-	合子蓋の鋳型 (外型) 破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 86.2g	3-16
-	P-17	SX1	7	鋳型 (外型)	-	-	-	-	合子蓋の鋳型 (外型) 破片 スサ・砂粒を多量に含む 重さ 72.1g	3-17
-	P-22	SX1	9	鋳型 (内型)	-	(2.8)	(3.3)	-	鋳型 (内型) の底部破片 スサ・砂粒を含む 外面被熱 重さ 9.6g	3-21

第10図 SX1 性格不明遺構出土遺物 (2)



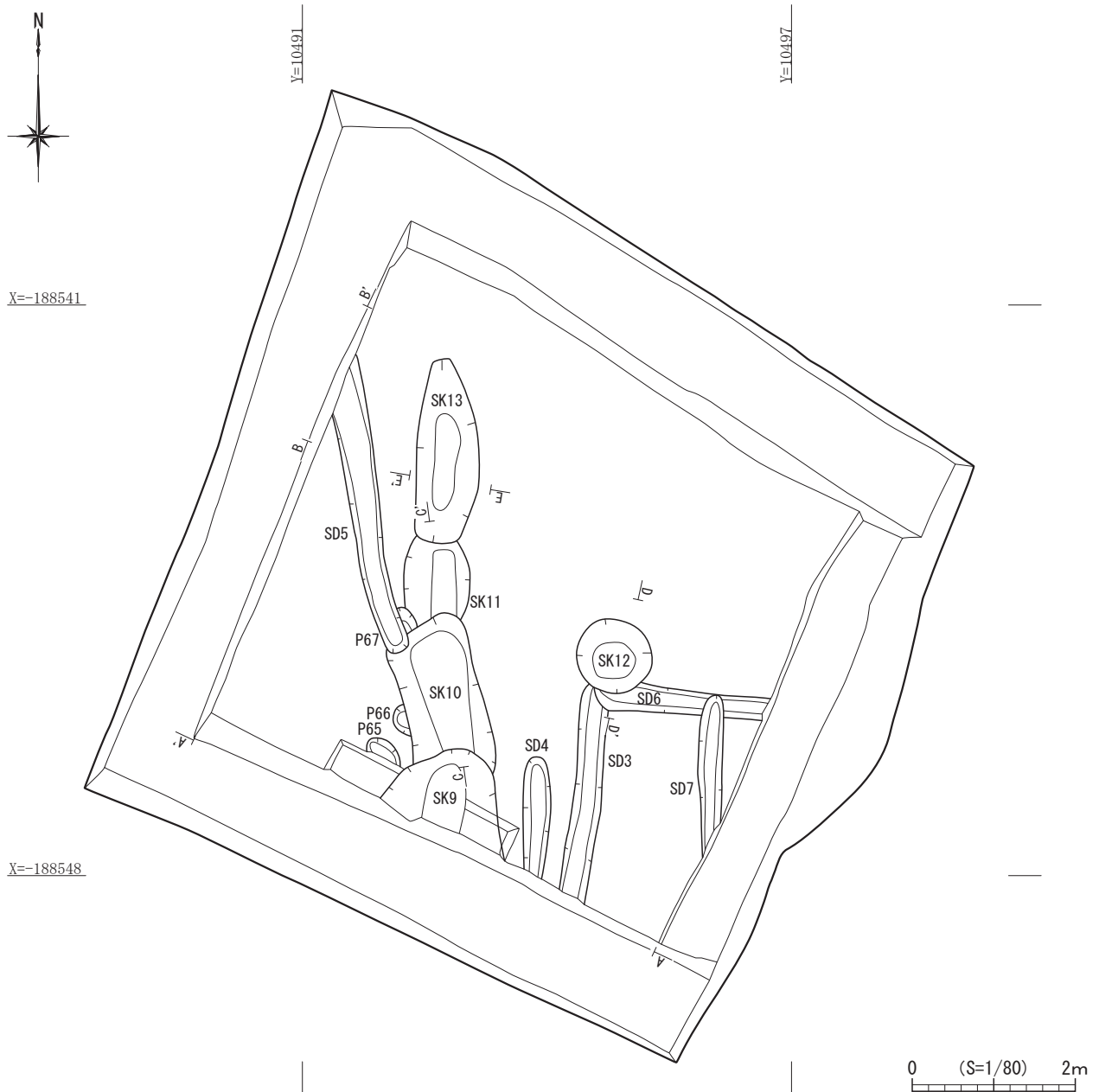
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-1	-	IV	須恵器	壺	-	-	(3.8)	ロクロナデ 口：自然釉	ロクロナデ 自然釉	胎土緻密	5-5
2	E-5	-	IV	須恵器	甕	-	-	(4.6)	平行タタキ	当て具痕(青海波文)	胎土砂粒多量含む	5-7
3	E-3	-	IV	須恵器	坏	-	(7.3)	(2.4)	体：ロクロナデ 底：回転糸切 無調整	ロクロナデ	胎土緻密	5-9
4	E-2	-	IV	須恵器	坏	-	(6.6)	(12.5)	体：ロクロナデ 底：回転糸切 無調整	ロクロナデ	胎土緻密 明灰色を呈し軟質	5-8
5	Ic-2	-	IV	陶器	甕	12.2	5.0	1.1	ロクロナデ	-	体部破片の内面を砥石に転用	5-11
-	E-4	-	IV	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む	5-6
-	D-1	-	IV	土師器	坏	-	-	-	ロクロナデ→手持ヘラケズリ 底：手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	5-4
-	Ic-3	-	IV	陶器	甕	-	-	-	自然釉	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	5-10
-	Ic-4	-	IV	陶器	壺	-	-	-	自然釉	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：瀬美	5-12
-	Ic-9	-	I~IV	陶器	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	5-13
-	Ic-10	-	IV	陶器	甕	-	-	-	自然釉	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：常滑	5-14
-	J-1	-	I~IV	磁器	碗	-	-	-	蓮弁文 釉	釉	青磁 産地：中国(龍泉窯系) 13~14C	5-15
-	J-2	-	I~IV	磁器	皿	-	-	-	釉	釉	白磁 産地：中国	5-16

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
-	G-3	-	I~IV	瓦	平瓦	5.8	3.9	2.3	凹面：ナデ 凸面：ナデ いぶし瓦 重さ 33.7 g	5-17
-	N-1	-	IV	鉄製品	不明	3.9	2.6	1.9	片面が平坦になっている 重さ 8.8 g	5-18
-	N-5	-	I~IV	鉄滓	-	-	5.4	5.4	下面に粘土粒付着 重さ 92.2g	5-19
-	N-6	-	I~IV	鉄滓	-	-	-	-	気泡を含む 一部白色を呈す	5-20

第11図 I区遺構外出土遺物

型と考えられる。6は5と胎土や色調が類似することから同一個体と考えられる。内側の器面には非常に緻密な胎土が薄く残っており、還元作用により灰白色を呈する。7は容器の内型と考えられる。3面が残り、五角形状を呈する。8は容器の外型と考えられる。内面には型挽きによる水平方向に走る細かい筋が認められる。9~11は内型と考えられる。形態から脚部と推定される。

第10図1~6は炉壁片である。主に9層中からまとまって出土しており、これらは同一個体であったと考えられる。全体的に残存状況は悪く、外面を確認できないものが多い。胎土中にはスサや砂粒が多量に混じり、器面には部分的に指頭圧痕が残る。また、接合痕や破片の残存高から積上げの単位がおおむね2~3cmと考えられる。炉壁は内面の鉄滓付着状況から以下のように分類できる。Ⅰ類：内面に付着物はなく、被熱により赤褐色に変色するもの、Ⅱ類：内面に付着物はないが、還元作用により、器面が灰白色に変色するもの、Ⅲ類：内面に鉄滓が付着するもの。Ⅲ類はさらに鉄滓の状態でa：気泡や不純物が目立たないもの、b：不純物が多く含まれ、炭の抜けた痕跡などが認められるものの2類に細分できる。炉の上部から下部に行くに従い、作業時に使用した炭や生成され



第12図 II区調査区平面図

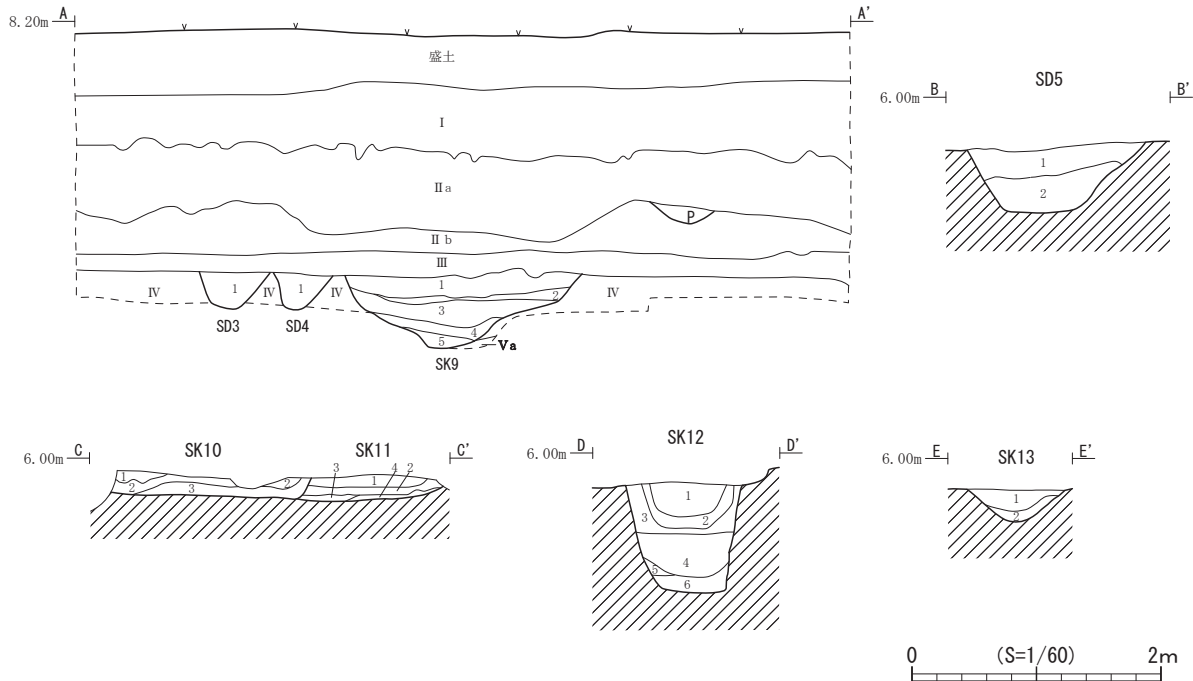
た鉄滓が溜まりやすいため、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲa類→Ⅲb類と炉の上部から下部へと位置すると考えられる。そのため、1、2は炉の上部、3、4は炉の中部、5は中部から下部、6は炉の下部に位置するものと考えられる。第10図7は羽口である。径は約9.2cmと復元される。

SX2 性格不明遺構 (第6図)

調査区東・南壁面にて検出された。SK1 土坑、SX1 性格不明遺構よりも新しく、SE1 井戸跡より古い。壁面でのみ確認したため、平面形等の詳細は不明である。規模は南北長2.1m以上、東西長0.9m以上で、深さは36cm。堆積土は2層に分層された。遺物は出土していない。

(4) ピット (第5図)

64基検出された。規模は径18～32cm、深さ15～30cmであり、柱痕跡は確認されなかった。また、建物跡を



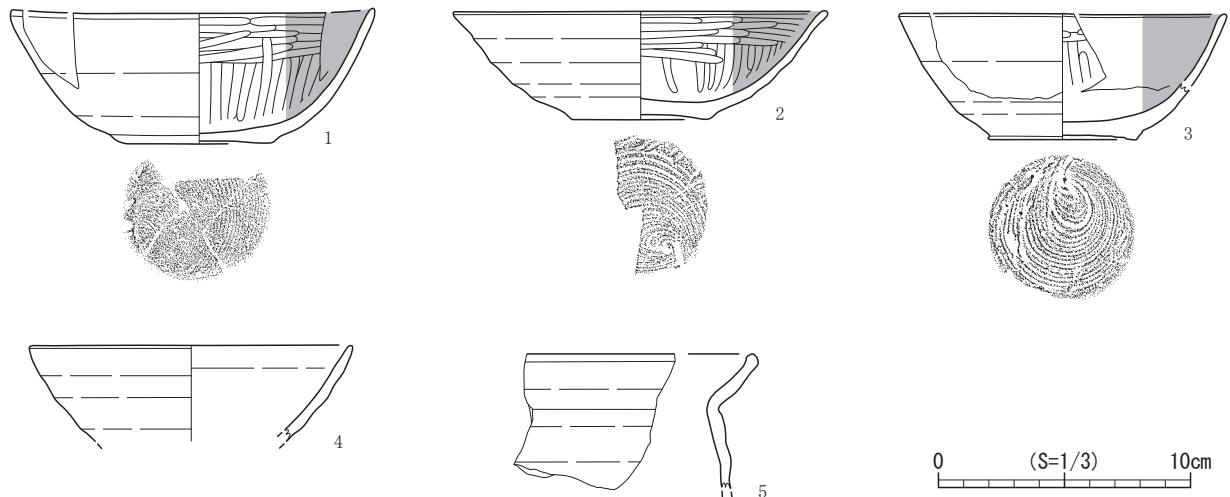
遺構名	層位	土色	土性	備考
SD3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄粒少量含む。
SD4	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄粒少量含む。
SD5	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄粒少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。
SD6	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む。
SD7	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄粒少量含む。
SK9	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒少量含む。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物少量含む。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物少量含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物含む。酸化鉄粒少量含む。
SK10	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物多量に混じる。酸化鉄粒、礫（φ 20mm）少量含む。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物含む。酸化鉄粒斑状に含む。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物含む。酸化鉄粒（φ 10mm）斑状に含む。
SK11	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物、酸化鉄粒少量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物多量に含む。酸化鉄粒斑状に含む。
	4	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化粒、酸化鉄粒少量含む。
SK12	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄粒少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物多量に含む。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	炭化物少量、酸化鉄粒斑に含む。
	4	10YR2/1 黒色	砂	炭化物、炭化材を極多量に含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物多量に含む。
	6	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	均質。
SK13	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	均質。
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	酸化鉄粒少量含む。

第 13 図 II 区南壁・土坑断面図

構成するようなプランは認められない。遺物はP22 から平瓦（写真図版 3-10）や常滑産の甕（写真図版 3-5）、P59、64 からは常滑産の甕が出土している（写真図版 3-6・7）

(5) 遺構外出土遺物（第 11 図）

基本層IV層からは土師器、須恵器、瓦、陶器、鉄製品などが出土しており、攪乱からは中国産青磁、白磁がそれぞれ出土している（第 11 図、写真 5-4・6・10・12～20）。第 11 図 1～4 は須恵器で 1 は壺の口縁部、2 は甕の体部、3、4 は坏の底部片である。5 は産地不明の陶器の甕の体部で、内面には磨面が認められる。砥石に転用されたと考えられる。その他に中世陶器は常滑産の甕（写真図版 5-10・13・14）や渥美産の壺（写真図版 5-12）などが出土している。攪乱からは青磁（写真図版 5-15）と白磁（写真図版 5-16）が出土している。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-7	SK9	1~3	土師器	坏	14.3	5.8	5.3	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 底/口:0.38	6-1
2	D-8	SK9	1~3	土師器	坏	14.8	5.4	4.3	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 底/口:0.36	6-2
3	D-9	SK9	1~3	土師器	坏	12.8	5.8	5.0	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 海綿骨針含む 底/口:0.32	6-3
4	D-10	SK9	1~3	赤焼土器	坏	12.8	-	(3.8)	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	6-4
5	D-11	SK9	1~3	土師器	甕	-	-	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	6-5
-	E-16	SK9	1~3	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ 自然釉	ナデ	胎土緻密 砂粒少量含む	6-6

第14図 SK9 土坑出土遺物

【II区】

(1) 溝跡

SD3 溝跡 (第12・13図)

南部で検出された。南北方向の溝跡で、南端は調査区外へと延びる。SK12 土坑、SD6 溝跡よりも古い。規模は検出長 2.5m 以上、幅 57cm、深さ 28cm である。断面形は U 字形を呈し、堆積土は単層で、遺物は須恵器とウマと考えられる動物の臼歯 (写真図版 3-8) が出土している。

SD4 溝跡 (第12・13図)

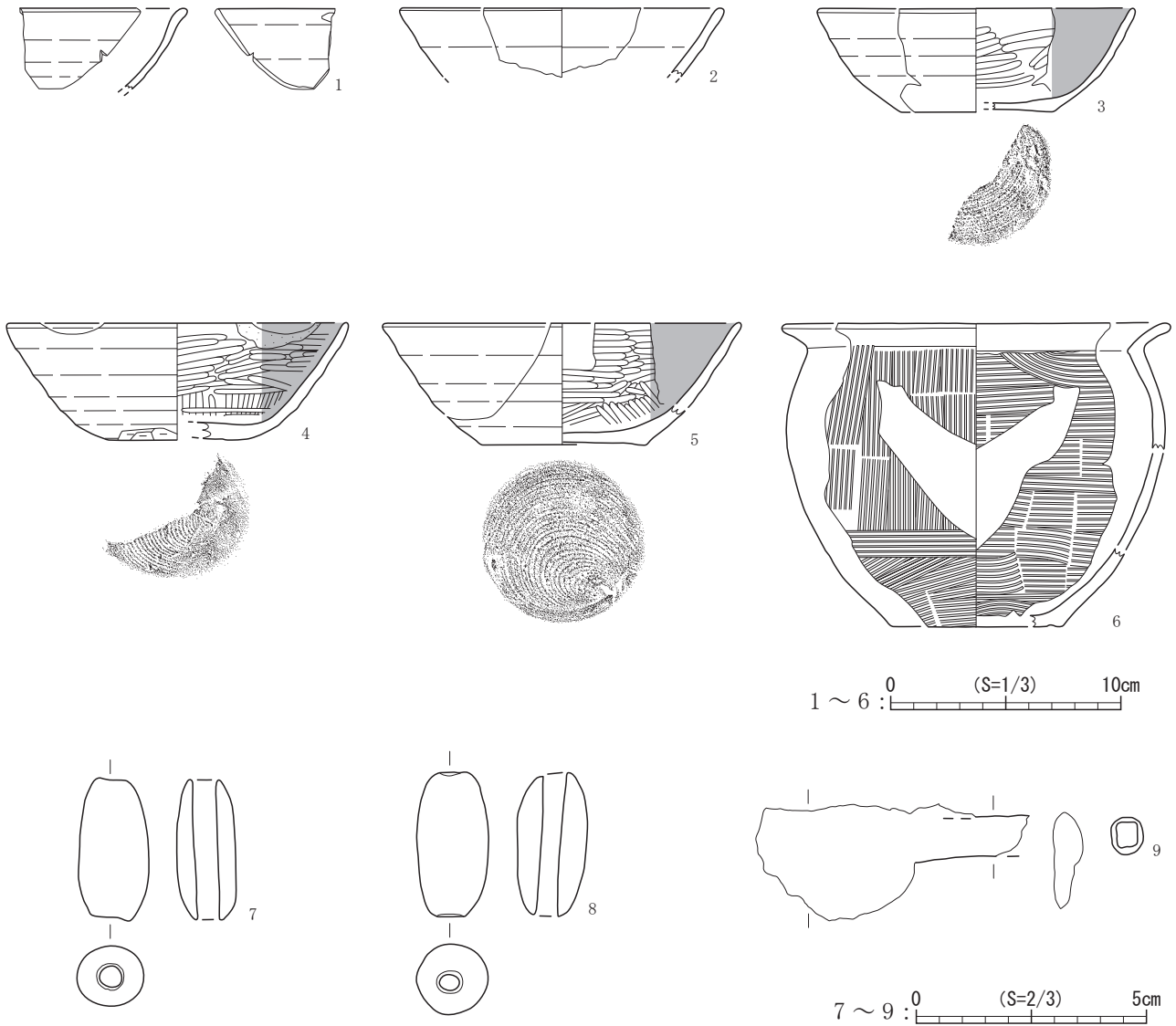
南部で検出された。南北方向の溝跡で、南端は調査区外へと延びる。規模は検出長 1.4m 以上、幅 47cm、深さ 30cm である。断面形は U 字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は土師器が出土した。

SD5 溝跡 (第12・13図)

西部で検出された。南北方向の溝跡で、北端は調査区外へと延びる。SK10 土坑、P67 よりも新しい。規模は検出長 3.5m 以上、幅 42cm、深さ 58cm である。断面形は U 字形を呈し、堆積土は 2 層に分層される。遺物は須恵器や産地不明の中世陶器が出土している。

SD6 溝跡 (第12図)

南部で検出された。東西方向の溝跡で、東端は調査区外へと延びる。SK12 土坑、SD7 溝跡よりも古く、SD3 溝跡よりも新しい。規模は検出長 2.1m 以上、幅 36cm、深さ 31cm である。断面形は U 字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は土師器が出土した。



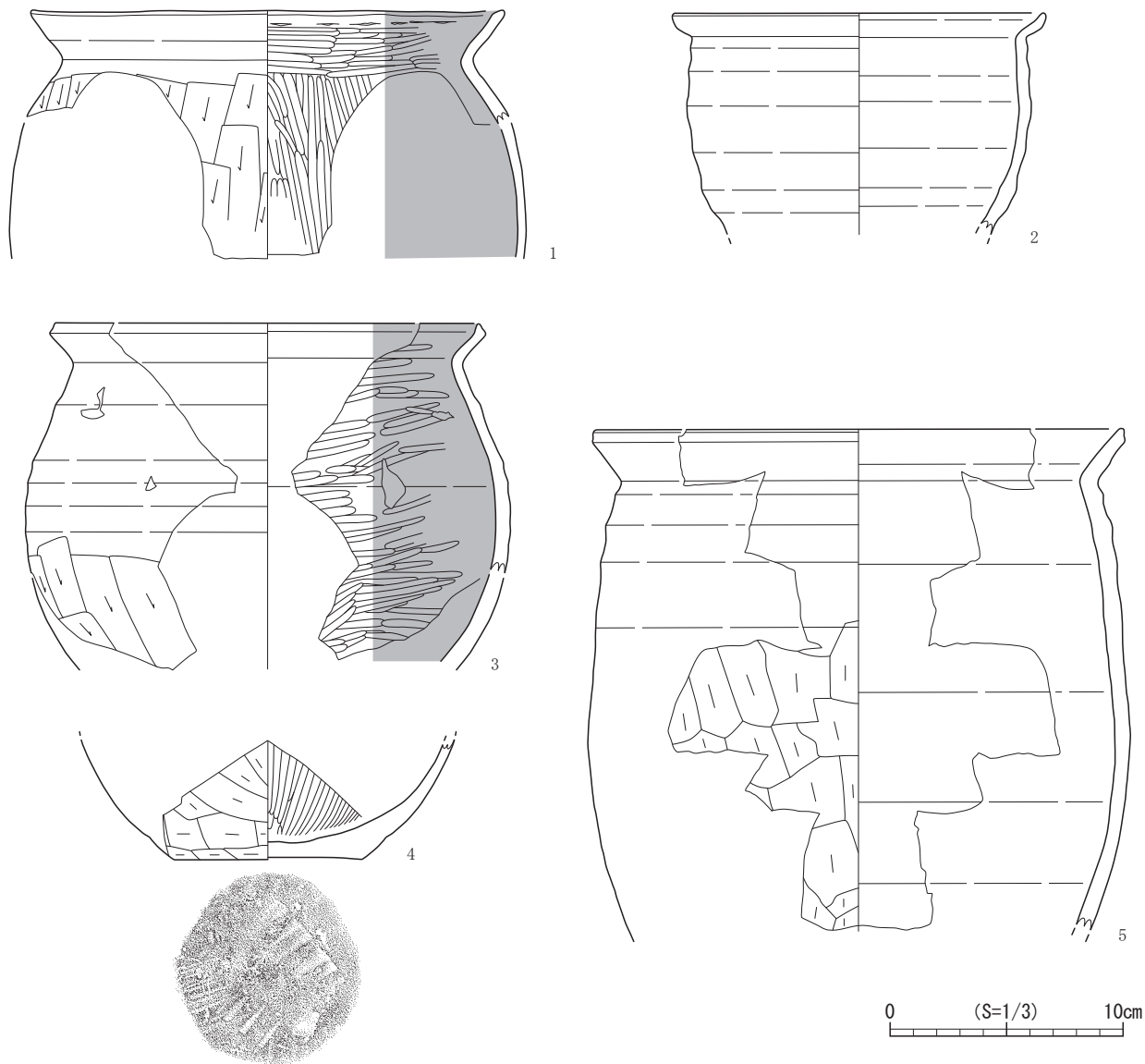
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-15	SK10	1	赤焼土器	坏	-	-	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	6-7
2	E-17	SK10	1	須恵器	坏	(14.0)	-	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	6-8
3	D-13	SK10	1	土師器	坏	(13.6)	(6.6)	4.5	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 海綿骨針少量含む 底/口:0.49	6-9
4	D-12	SK10	1	土師器	坏	14.7	6.0	5.1	ロクロナデ→下半:手持ヘラケズリ 底:回転糸切→手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 底/口:0.41	6-10
5	D-14	SK10	3・4	土師器	坏	(15.4)	7.1	5.3	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 海綿骨針少量含む 底/口:0.47	6-11
6	D-17	SK10	3・4	土師器	甕	(16.6)	(7.4)	(13.2)	ロクロナデ→体:ハケメ	ハケメ	胎土緻密 砂粒含む 1/6 残	6-12

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
7	P-28	SK10	1	土製品	土錘	3.1	1.5	1.3	胎土緻密 砂粒含む 重さ 5.9 g 完形	7-3
8	P-29	SK10	堆積土	土製品	土錘	3.1	1.55	1.5	胎土緻密 砂粒含む 重さ 8.3 g 完形	7-4
9	N-3	SK10	1	金属製品	不明	(5.9)	-	-	鉄製品 刀子か? 重さ 11.0 g	7-1
-	N-4	SK10	1	鉄滓	-	-	-	-	重さ 89.9 g	7-2

第15図 SK10 土坑出土遺物 (1)

SD7 溝跡 (第12図)

南東部で検出された。南北方向の溝跡で、南端は調査区外へと延びる。SD6 溝跡よりも新しい。規模は検出長 1.8m 以上、幅 32cm、深さ 26cm である。断面形は U 字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は土師器が出土した。



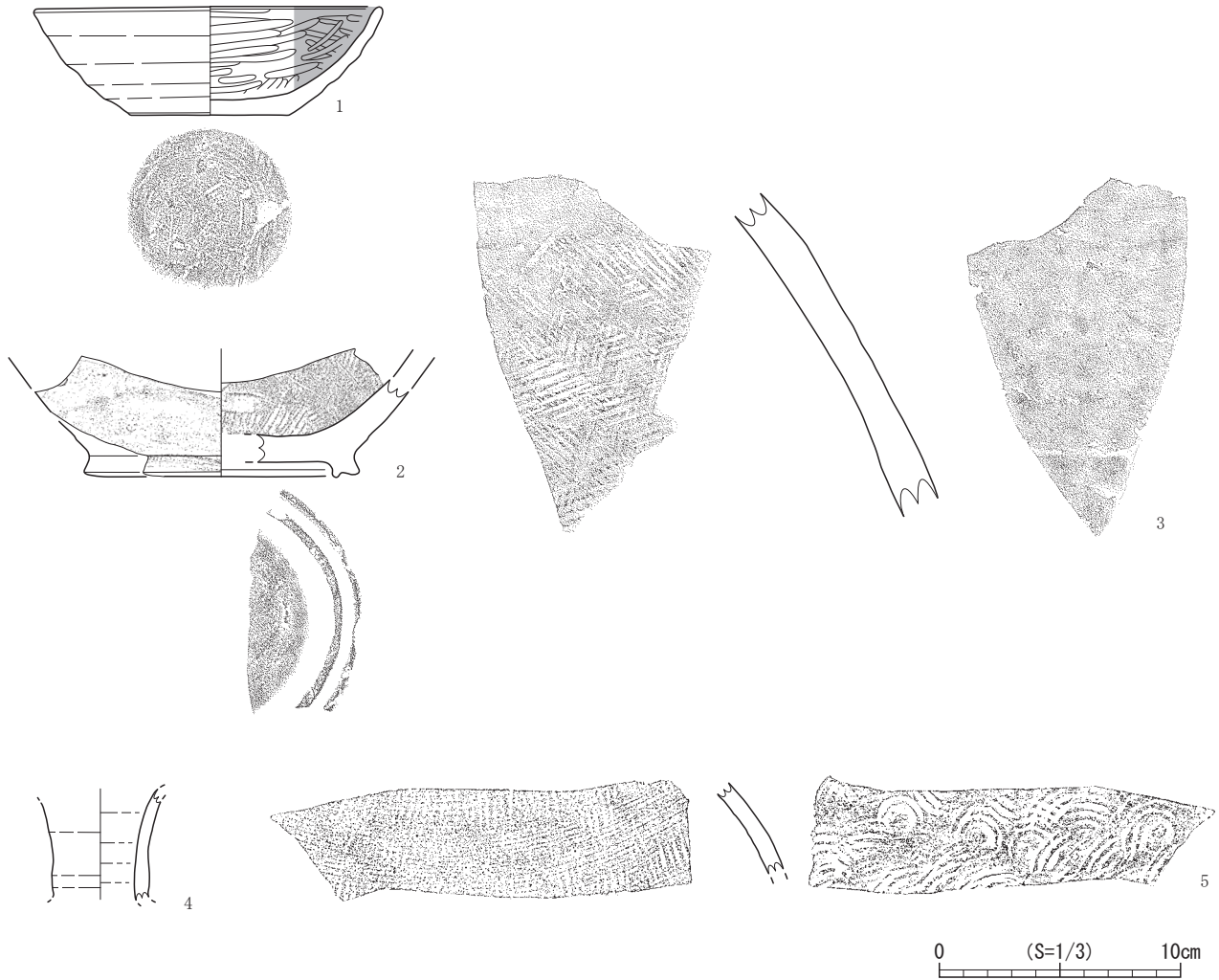
図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	器高				
1	D-18	SK10	堆積土	土師器	甕	(20.2)	-	(10.6)	ロクロナデ→体:手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	6-13
2	D-20	SK10	1	土師器	甕	16.0	-	(9.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	6-14
3	D-19	SK10	1~2	土師器	甕	(18.2)	-	(14.9)	ロクロナデ→体下半:手持ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	6-15
4	D-21	SK10	1~2	土師器	甕	-	8.0	(5.1)	ロクロナデ 体・底:平行タタキ→手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	6-16
5	D-16	SK10	堆積土	土師器	甕	(22.6)	-	(21.5)	ロクロナデ→下半:ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	6-17

第16図 SK10 土坑出土遺物(2)

(2) 土坑

SK9 土坑 (第12・13図)

南部で検出された。南側は調査区外に広がる。SK10 土坑よりも新しい。平面形は不明だが、規模は長軸 173cm、短軸 102cm 以上、深さ 58cm である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は2層に分層される。遺物は土師器、須恵器が出土している (第14図)。1~3はロクロ調整の土師器の坏で、内面調整はいずれもヘラミガキ・黒色処理が施される。また、切り離しは回転糸切りである。4は内外面ロクロ調整の赤焼土器である。これら土師器の時期は10世紀前半頃と考えられる。



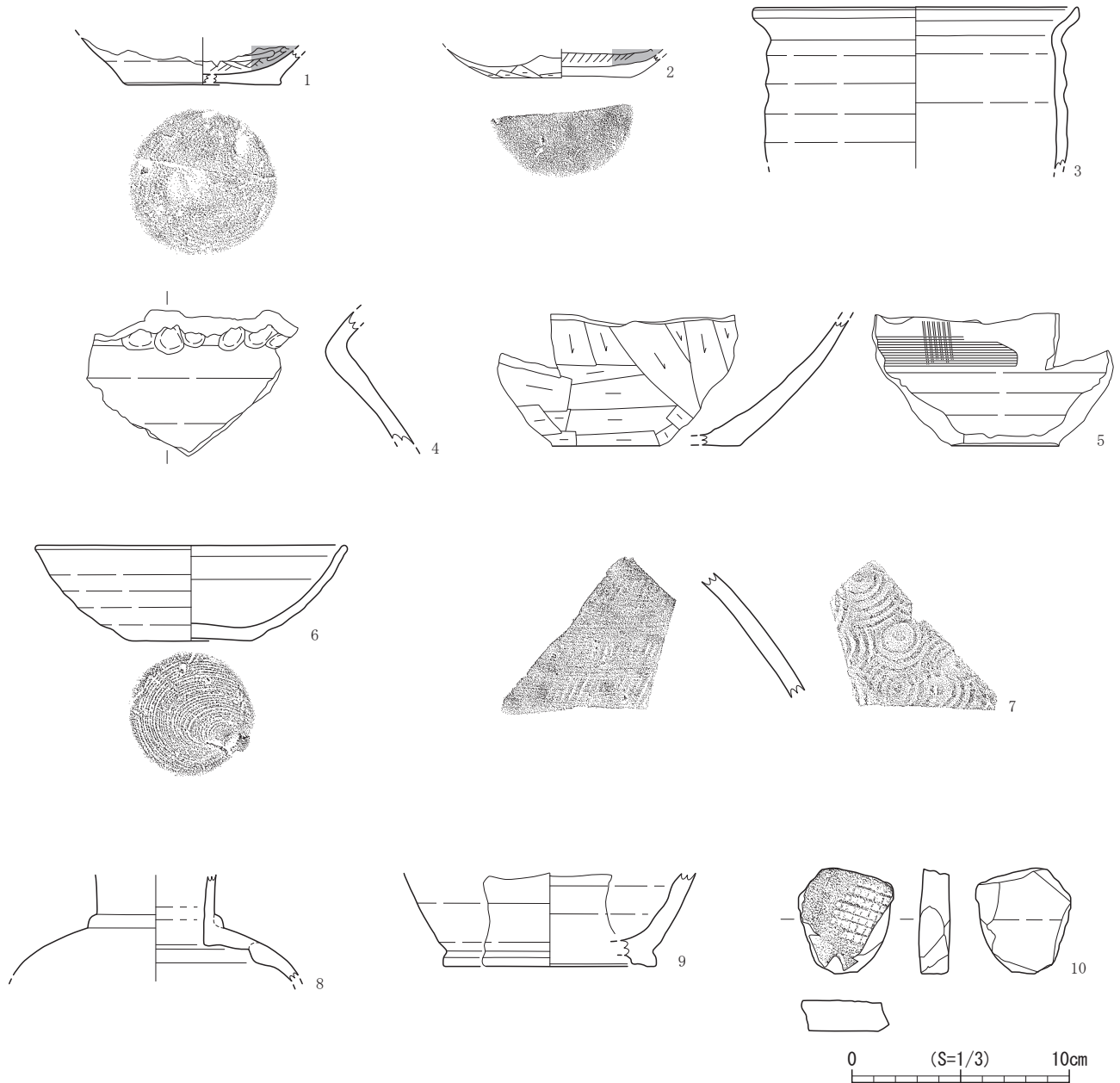
図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	器高				
1	D-22	SK11	1~2	土師器	坏	14.2	6.6	4.5	ロクロナデ 底:回転糸切→手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 海綿骨針少量含む 底/口:0.46	7-5
2	E-19	SK11	堆積土	須恵器	壺	-	(11.4)	(5.3)	ロクロナデ→一部に布目痕	ハケメ→ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	7-7
3	E-18	SK11	1~2	須恵器	甕	-	-	(13.5)	ロクロナデ→平行タタキ (斜格子状)	ロクロナデ ナデ	胎土砂粒含む	7-6
-	E-20	SK11	1~2	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ (格子状)	平行タタキ	胎土緻密 砂粒含む 焼台接着	7-8
4	Ic-18	SK13	堆積土	陶器	壺	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	灰釉陶器 胎土緻密	7-12
5	E-21	SK13	堆積土	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ→ロクロナデ	当て具痕 (青海波文)	胎土緻密 砂粒含む	7-9
-	Ic-16	SK12	1~2	陶器	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地:常滑 年代:中世	7-10
-	Ic-17	SK12	1~2	陶器	片口鉢	-	-	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地:山茶碗 窯系 12~13C	7-11

第 17 図 SK11・12・13 土坑出土遺物

SK10 土坑 (第 12・13 図)

南部で検出された。SK9 土坑、SD5 溝跡よりも古く、SK11 土坑、P66・67 よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 157cm、短軸 93cm 以上、深さ 20cm である。断面形は U 字形を呈し、堆積土は 3 層に分層される。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、土製品、鉄製品が出土している (第 15・16 図)。第 15 図 1 は坏の口縁部で内外面ロクロ調整の赤焼土器である。第 15 図 2 は須恵器坏の口縁部。第 15 図 3~5 はロクロ調整の土師器の坏で、いずれも内面ヘラミガキ・黒色処理が施される。また、切り離しは回転糸切りである。第 15 図 6 はロクロ調整の土師器の小型の甕で内外面はヘラ状工具によりナデが施される。第 16 図 1~5 はロクロ調整の土師器の甕である。1、3、4 は球胴形の器形で、体部外面にはケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。2 は小型、5 は長

第2節 第24次調査



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版	
						口径	底径	器高					
1	D-2	-	I~II	土師器	坏	-	7.0	(2.2)	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	8-2	
2	D-3	-	IV	土師器	坏	-	6.2	(1.3)	ロクロナデ→体下半:手持ヘラケズリ 底:手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む 海綿骨針微量含む	8-3	
3	D-4	-	I~IV	土師器	甗	14.8	-	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	7-14	
4	D-5	-	I~IV	土師器	甗	-	-	(6.7)	ロクロナデ→指押え	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	7-13	
5	D-6	-	I~IV	土師器	甗	-	-	(5.7)	体:ヘラケズリ 底:手持ヘラケズリ	ハケメ→カキメ→ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	8-1	
6	E-11	-	I~IV	須恵器	坏	14.2	5.5	4.4	ロクロナデ 底:回転糸切 無調整	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 軟質	8-4	
7	E-12	-	I~IV	須恵器	甗	-	-	(5.7)	平行タタキ→ロクロナデ	当て具痕(青海波文)	胎土緻密 砂粒含む	8-5	
8	E-13	-	IV	須恵器	壺	-	-	(4.9)	ロクロナデ 自然釉	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒少量含む 環状凸帯	8-6	
9	E-14	-	IV	須恵器	壺	-	-	(9.7)	(4.3)	ロクロナデ 自然釉	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒少量含む	8-7
10	Ic-12	-	I~IV	陶器	甗	4.9	4.4	1.4	円盤状に打ち欠かれる 格子押印	ロクロナデ	産地:常滑 年代:12~13C	8-8	
-	Ic-11	-	I~IV	陶器	壺?	-	-	-	自然釉	ロクロナデ	産地:渥美 年代:12C	8-9	
-	Ic-13	-	I~IV	陶器	甗	-	-	-	自然釉	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地:常滑 年代:中世	8-10	
-	Ic-14	-	I~IV	陶器	甗	-	-	-	ナデ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地:常滑 年代:中世	8-11	

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
-	N-2	-	I~IV	金属製品	古銭	-	-	-	熙寧元宝(北宋・初铸1068年)	8-12

第18図 II区遺構外出土遺物

胴形の器形である。いずれも調整はロクロナデのみ。これら土師器の時期は9世紀後半～10世紀前半頃と考えられる。第15図7、8は土錘で大きさ、形態ともに類似する。第15図9は鉄製品で、形状から刀子の可能性が考えられる。

SK11 土坑 (第12・13図)

南部で検出された。SK10、13土坑、P67よりも古い。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸85cm以上、短軸69cm、深さ21cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は4層に分層される。遺物は土師器、須恵器が出土している(第17図1～3)。1はロクロ調整の土師器の坏で内面ヘラミガキ・黒色処理が施される。切り離しは回転糸切りである。9世紀後半頃の時期と考えられる。2、3は須恵器。2は壺の底部で、3は甕の体部破片である。

SK12 土坑 (第12・13図)

中央部で検出された。SD3、6溝跡よりも新しい。平面形は円形を呈し、直径92～94cm、深さ87cmである。断面形は箱形で底面は平坦である。堆積土は6層に分層される。4層は炭化材を極めて多量に含んだ砂層であり、その上を密閉するかの様に、3重に粘土層が貼り付けられる(1～3層)。炭また、粘土の貼り付けは防湿のためと考えられ、高温の焼成を行うための施設の下部構造と考えられる。同様の構造は福島県猪倉B遺跡などに認められ((財)福島県文化センター1996)、炉跡と推測される。遺物は堆積土から須恵器、中世陶器が出土している。中世陶器は常滑産の甕(写真図版7-10)と山茶碗系の片口鉢(写真図版7-11)であり、10が13～14世紀、11が12～13世紀の時期と考えられる。

SK13 土坑 (第12・13図)

北部で検出された。SK11土坑よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸227cm、短軸77cmで、深さは26cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は2層に分層される。遺物は須恵器、灰釉陶器、鉄滓が出土している(第17図4・5)。4は小型壺の頸部である。釉薬は確認できないが、胎土が緻密であり灰釉素地と考えられる。5は須恵器甕の体部片である。

(3) ピット

3基検出された。規模は径20～30cm、深さ20cm程度で、いずれも柱痕跡は確認されなかった。遺物は土師器が出土している。

(4) 遺構外出土遺物

基本層からは土師器、須恵器、陶器、金属製品が出土している(第18図)。1～5はロクロ調整の土師器である。1、2は坏、3～5は甕である。6～9は須恵器である。6はほぼ完形の坏、7は甕、8、9は壺である。10は常滑産の中世陶器で円盤状に打ち欠かれている。細かい格子状の押印を持ち、12～13世紀頃と考えられる。同様のものは松木遺跡(仙台市教育委員会1986)などで出土している。その他、渥美産の壺(写真図版8-9)や常滑産の甕(写真図版8-10・11)が出土している。

5. まとめ

今回の調査区は洞ノ口遺跡の南東部に位置する。今回の調査では溝跡7条、土坑12基、性格不明遺構2基、ピット66基を確認した。遺物は土師器、須恵器、中世陶器、陶器、鉄製品、炉壁、土製品が出土した。遺構の時期は、

第2節 第24次調査

主に古代（9世紀～10世紀）と中世（12～14世紀）の2つの時期が認められ、基本層Ⅱa層上面からは中世の時期の遺構が、基本層Ⅳ層上面からは古代と中世の遺構が検出されている。

古代の遺構は、Ⅱ区のSK9～11土坑やピット（P66・67）である。これらの遺構からは、ロクロ調整の土師器、須恵器が出土しており、さらにSK9、10土坑からは赤焼土器が出土している。出土した土師器の坏はロクロ調整のち、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。これらの特徴は東北地方南部の表杉ノ入式に該当する。表杉ノ入式は口径に対する底径の比率が、時代が下るにつれ減少していく。また、坏類全体の中で赤焼土器の割合が増え、須恵器の割合が減少していくような変遷が追える（村田1995）。赤焼土器は10世紀代から組成するとされるが、中野高柳遺跡では灰白色火山灰降下後の凹地に一括廃棄されたSX2030土器集積遺構が確認されており、坏22点が出土している。内訳は土師器10点、赤焼土器9点、須恵器3点で年代は10世紀前葉が与えられている（宮城県教育委員会2006）。SK9、10土坑からは土師器、須恵器の他、赤焼土器が出土することから10世紀以降と考えられるが、坏の割合は土師器が多くを占め、中野高柳SX2030土器集積遺構のように赤焼土器の割合が5割近くも認められないことから、10世紀前葉の間に収まると考えられる。また、SK11土坑からは赤焼土器が出土せず、坏の底径/口径比がSK9、10土坑と比べ大きくなることから、遺構の時期は9世紀後半頃と考えられる。

今回の調査区から西に約50mに位置する第23次調査では、9世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居跡が2軒検出されている。また、北東に約110mに位置する第7次調査でも古代の竪穴住居跡が検出されており、遺跡南東部の地域において古代の集落域が広がっていたと考えられる。

中世の遺構はⅠ区のSD1溝跡やSX1性格不明遺構、Ⅱ区のSK12土坑などであるが、遺構の重複関係や出土遺物から今回調査した遺構の多くが中世に属すると考えられる。SX1性格不明遺構からは鑄造関連遺物として、鑄型や炉壁が出土した。13世紀前半と考えられる中世陶器も出土しているが、部分的な調査で留まっているため年代は確定できない。また、SK12土坑は高温焼成のための炉跡と考えられる。出土遺物から遺構の時期は13～14世紀頃と考えられる。

SK12土坑とSX1性格不明遺構から出土した鑄造関連の遺物との関係については不明である。また、作業場などの建物跡は今回、検出されなかったが、近辺に存在していた可能性もある。遺跡南辺では町屋が広がっていたと考えられており（入間田・大石編1992）、鑄物師のほか、さまざまな職人が活動していた場が存在していたと考えられる。遺跡内における場の使い分けや、七北田川対岸の鴻ノ巣遺跡や今市遺跡といった同時期遺構群との関係についても検討する必要がある。

参考文献

- 朝岡康二・田辺律子 1982 『日本人の生活と文化7 暮らしの中の鉄と鑄もの』ぎょうせい
- 入間田宣夫・大石直正編 1992 『よみがえる中世7 みちのくの都 多賀城・松島』平凡社
- 仙台市教育委員会 1986 『柳生』仙台市文化財調査報告書第95集
- 仙台市教育委員会 2005 『洞ノ口遺跡—第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第281集
- 仙台市教育委員会 2018 『洞ノ口遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第468集
- (財)福島県文化センター 1996 『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第326集
- 宮城県教育委員会 2006 『中野高柳Ⅳ 宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書』宮城県文化財調査報告書第204集
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器群」『福島考古』36号



1. I区調査区遺構完掘状況（北西から）



2. SD1 溝跡完掘状況（北西から）



3. SX1 性格不明遺構調査状況（北から）



4. SK3 土坑断面（北西から）

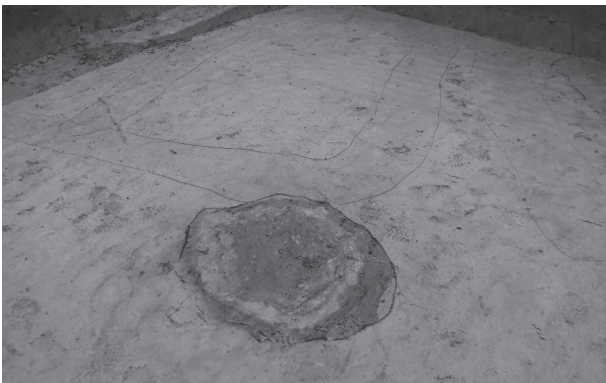


5. I区調査区東壁（北西から）

写真図版1 洞ノ口遺跡第24次調査（1）



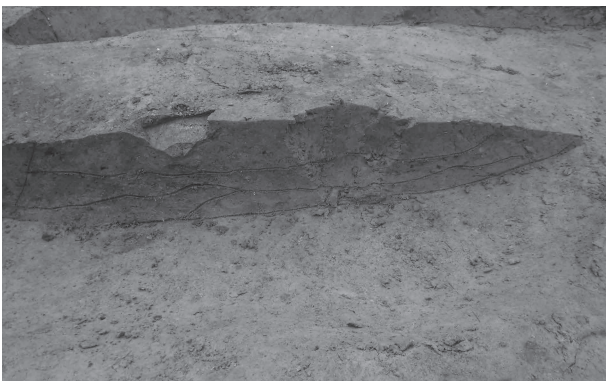
1. II区調査区遺構完掘状況（北西から）



2. SK12 土坑検出状況（北から）



3. SK12 土坑断面（北から）



4. SK10 土坑断面（南東から）

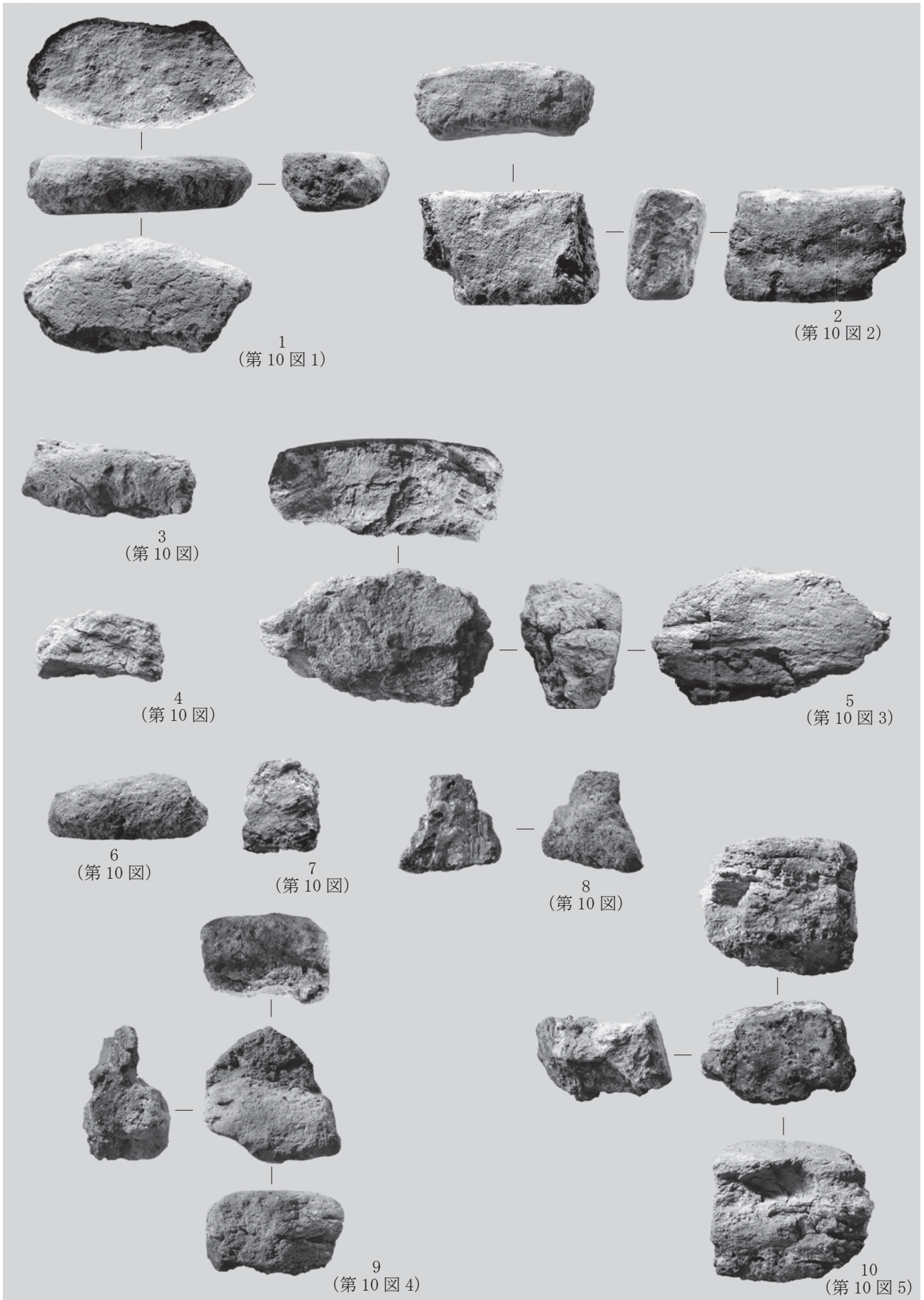


5. SK10 土坑遺物出土状況（南東から）

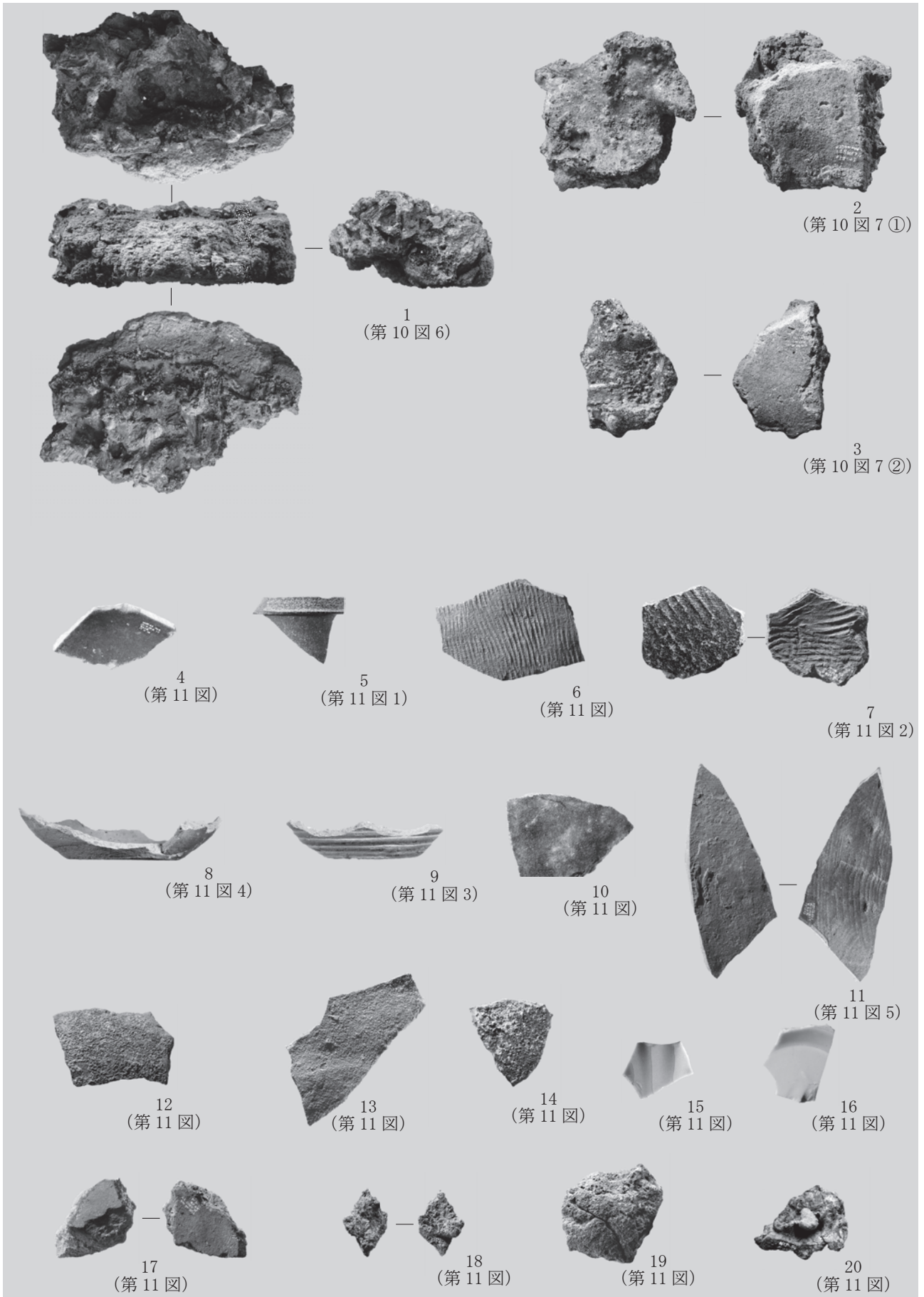
写真図版2 洞ノ口遺跡第24次調査（2）



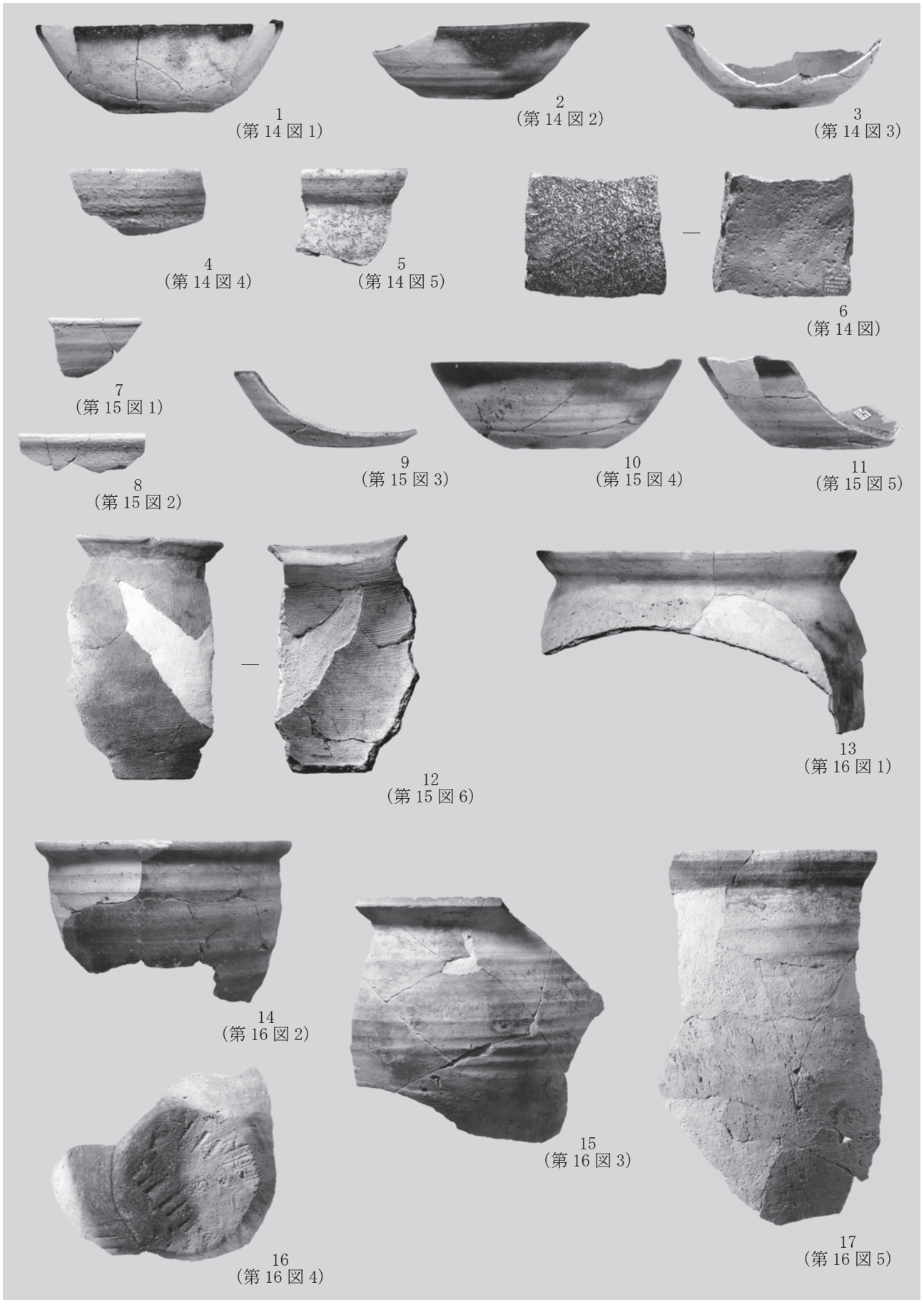
写真図版3 洞ノ口遺跡第24次調査出土遺物(1)



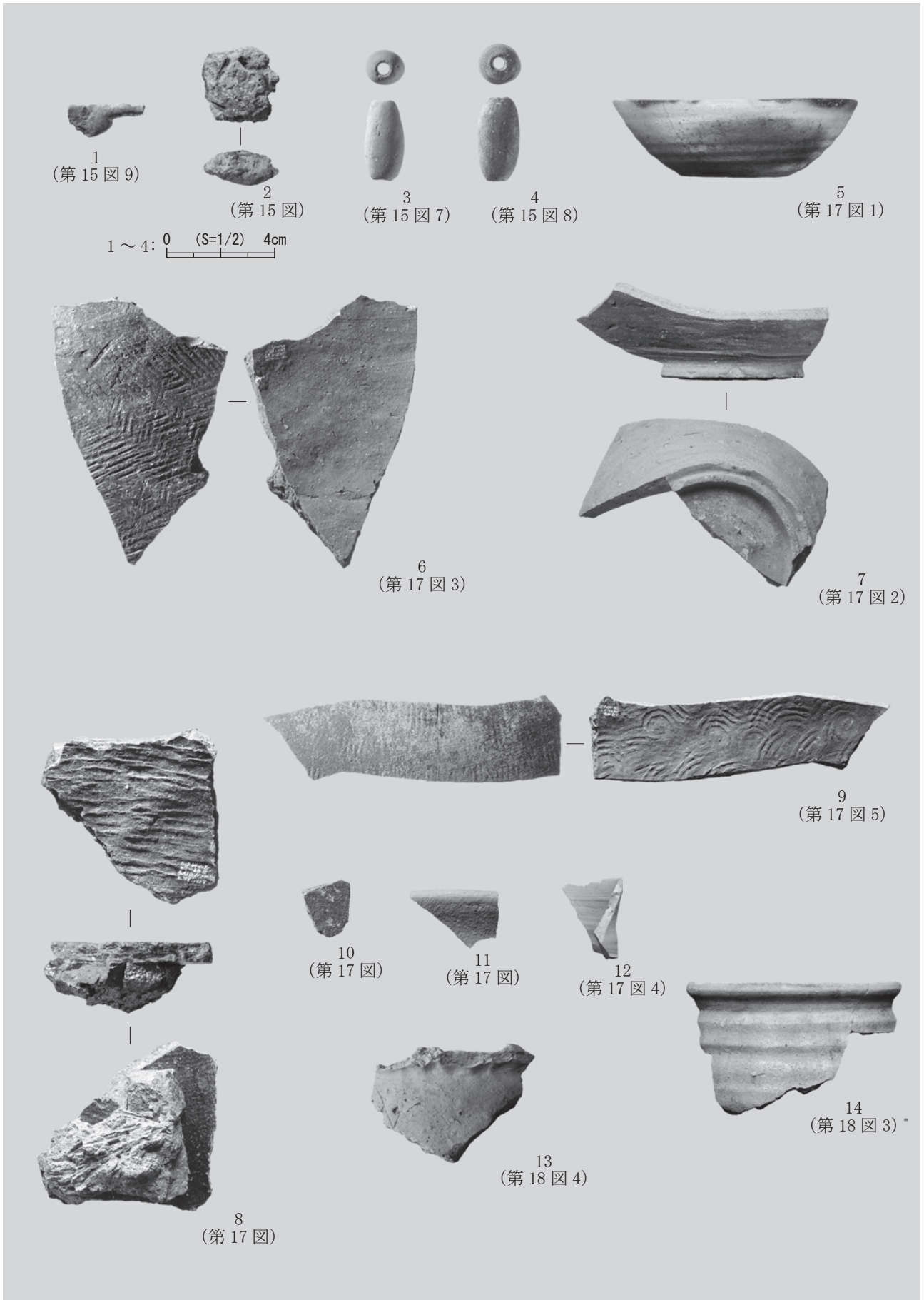
写真図版4 洞ノ口遺跡第24次調査出土遺物(2)



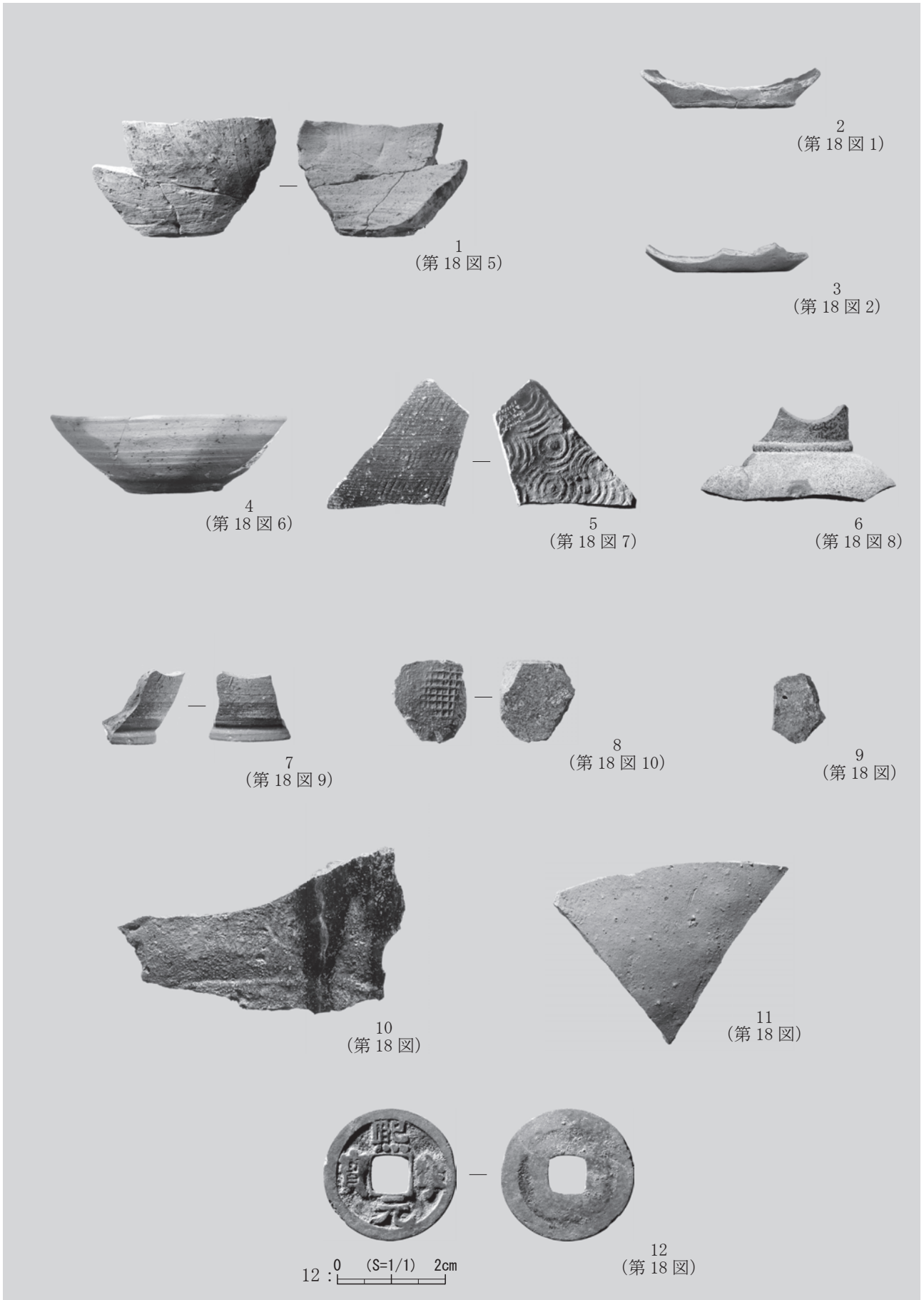
写真図版5 洞ノ口遺跡第24次調査出土遺物(3)



写真図版6 洞ノ口遺跡第24次調査出土遺物(4)



写真図版7 洞ノ口遺跡第24次調査出土遺物(5)



写真図版8 洞ノ口遺跡第24次調査出土遺物(6)

第3章 沖野城跡の調査

第1節 遺跡の概要

沖野城跡は仙台市若林区沖野七丁目に所在する。JR 仙台駅の南東約 6.8km に位置し、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約 340m、南北約 250m に広がり、標高は約 6.0m である。現況は宅地が広がり、一部が畑となっている。

明治時代中期頃の地籍図をみると、遺跡周辺では水田が広がっているのに対して、沖野城跡の範囲は宅地や畑地となっており、それを取り囲むように細長い水田が認められる。江戸時代に記された『仙台領古城書上』によると、沖野城は付近一帯を治めていた栗野氏の出城であったと記されている。宅地化の進んだ現状では城館の様相を把握することは難しいが、一部に土塁状の高まりを残す箇所があり、また、細長い宅地や畑地の形状から堀跡の位置を推定できる箇所もある。

沖野城跡ではこれまでに個人住宅建設や宅地造成に伴い 16 次にわたる調査が行われてきた。調査では主に区画施設と推定される溝跡が検出されている。遺跡西部では 2 条の堀が巡っていることが確認されている。また、遺跡中央部で行われた第 5 次調査では、土塁を伴う、幅 13.5m の大規模な溝跡が検出されており、底面には障壁が確認されている。この溝跡の東側に沿うようにもう 1 条の溝跡が確認されており、遺跡西部で確認されている堀跡と規模、構造が異なることから城館をさらに区画していた堀跡であると考えられる。

以上のように区画施設とみられる溝跡は確認されているが、沖野城跡に関わる建物跡などの施設は検出されておらず、詳細については不明な点が多い。

第2節 第17次調査

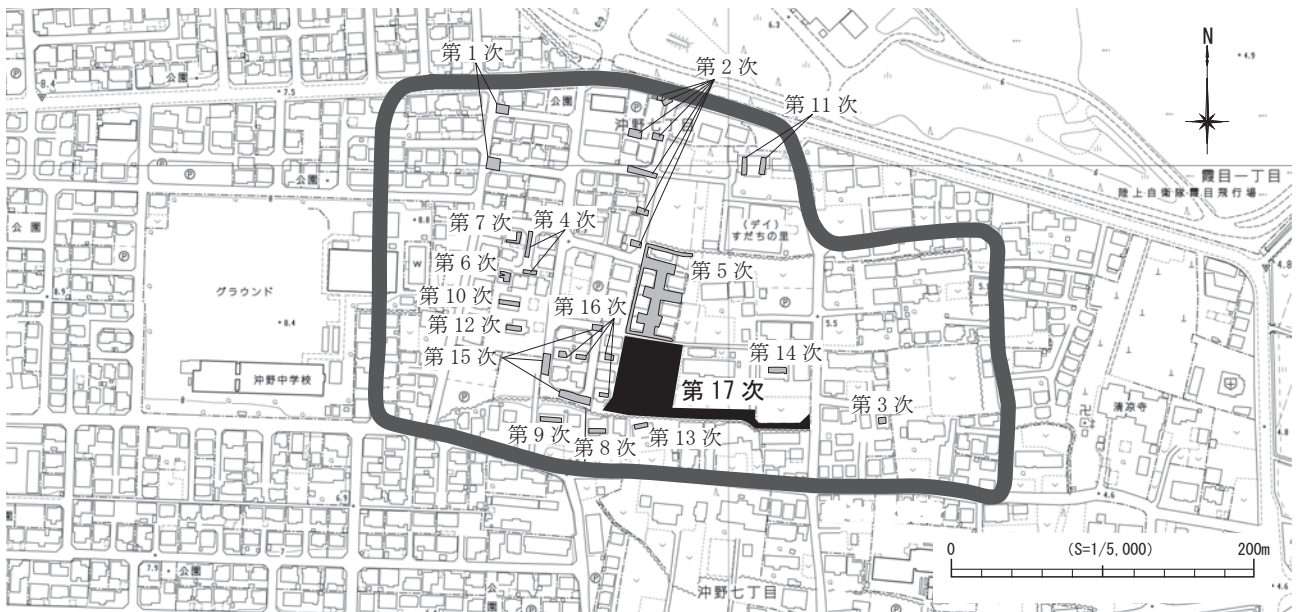
1. 調査要項

遺跡名	沖野城跡 (宮城県遺跡登録番号 01234)		
調査地点	仙台市若林区沖野七丁目 387-1、2、388		
調査期間	確認調査	令和元年 6 月 3 日 ～ 18 日	
	本発掘調査	令和元年 7 月 3 日 ～ 8 月 3 日	
調査対象面積	283.78 m ²		
調査面積	確認調査	219 m ²	
	本発掘調査	340 m ²	
調査原因	宅地造成工事		
調査主体	仙台市教育委員会		
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係		



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
2	南小泉遺跡	集落、屋敷	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
3	神櫓遺跡	官衙関係	自然堤防	奈良、平安
4	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
5	中櫓西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
6	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
7	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安

第19図 沖野城跡と周辺の遺跡



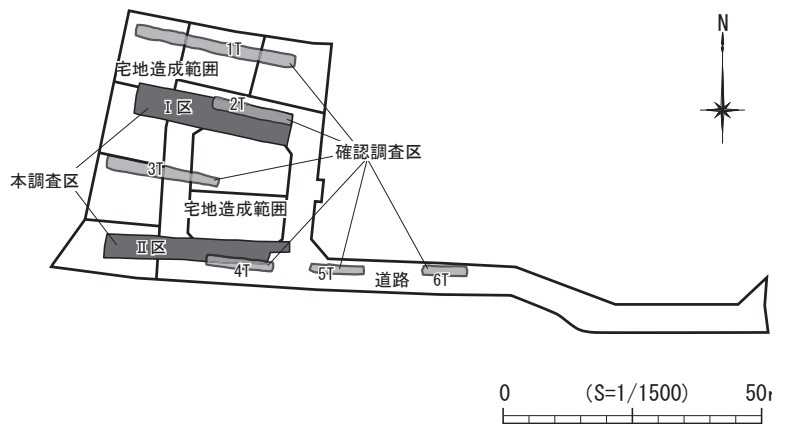
第20図 第17次調査区位置図

担当職員 確認調査 主任 及川謙作
 主事 佐藤恒介 木村 恒
 本発掘調査 主事 妹尾一樹
 文化財教諭 元山祐一

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和元年5月8日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」（令和元年5月10日付H31 教生文第102-16号で回答）に基づき実施した。

確認調査は対象地内に6ヶ所の調査区を設定し、北西側から順に1～6Tとした。重機により基本層I層を除去し、II層ないしIII層で遺構の検出作業を行った。その結果、1、2、3TでSD1溝跡を1、2、4TでSD2溝跡が確認されたため、土層観察のサブトレンチを設定して、溝跡の規模を確認した。その後、一度埋め戻しを行い、確認調査の結果に基づき、申請者との協議を経て本発掘調査を実施する運びとなった。



第21図 第17次調査区配置図

本発掘調査は対象地の北部に東西30m、南北6m、南部に東西40m、南北5mの規模で調査区を設定し、北からI区、II区とした。重機によりI～II層を除去したのち、III～V層上面で遺構検出作業を行った。その結果、確認調査で確認していた、溝跡2条を確認した。人力により遺構の掘り下げを行ったが、掘削予定深度の関係などにより、溝跡底面の確認はII区でのみ行い、I区では平面規模と障壁の確認を目的として、幅1.0mのサブトレンチを設定し、部分的な掘削に留めた。また、SD2溝跡の規模確認のため、埋戻し前にII区東側を東西5m、南北2mの規模で調査区を拡張した。しかし、SD2溝跡の東側の上端は確認できなかった。

調査では必要に応じて、調査区平面図（ $S = 1/20$ ）および断面図（ $S = 1/20$ ）を作製し、写真記録はデジタルカメラにより撮影した。8月3日に調査機材の撤収と埋戻しを行った。

3. 基本層序

基本層を大別5層、細別8層確認した。

I a層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。現代の畑耕作土である。層厚9～45cm。

I b層：10YR3/3 暗褐色シルト。I a層と比べしまりが強い。現代の畑耕作土である。層厚8～37cm。

I c層：10YR3/3 暗褐色シルト。天地返し層。

I d層：10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。現代の耕作土である。層厚3～62cm。

II層：10YR2/2 黒褐色粘土。酸化鉄を少量含む。部分的に認められる。層厚8～19cm。

III層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。層厚10～33cm。

IV層：10YR2/3 黒褐色の粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚9～33cm。

V層：10YR4/1 褐灰色シルト。ほぼ均質である。

VI層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。砂を含み、10YR2/3 黒色粘土がラミナ状に堆積する。

4. 確認調査の発見遺構と出土遺物

確認調査では1、2、3TでSD1溝跡、1、2、4TでSD2溝跡、6Tでピットを2基検出された。

(1) 溝跡

SD1 溝跡（第22図）

本調査のSD1溝跡に対応する南北方向の溝跡で、1、3Tでは東西両肩が、2Tでは東肩部分が検出された。地点によっては、現代の耕作により上端が削平されている。確認された規模は上端幅12.1mで、深さは0.4m以上である。堆積土は8層に分層された。遺物は出土していない。

SD2 溝跡（第22図）

本調査のSD2溝跡に対応する南北方向の溝跡で、1、2、4Tでそれぞれ西肩部分が検出された。SD1溝跡同様に現代の耕作により上端は一部削平されている。確認した規模は上端幅9.6m以上、深さは0.5m以上である。堆積土は9層に分層された。遺物は出土していない。

(2) ピット

6トレンチで2基検出された。径は25cm～40cmで、深さは約30cmである。いずれも単層で、柱痕跡は確認されない。遺物は出土していない。

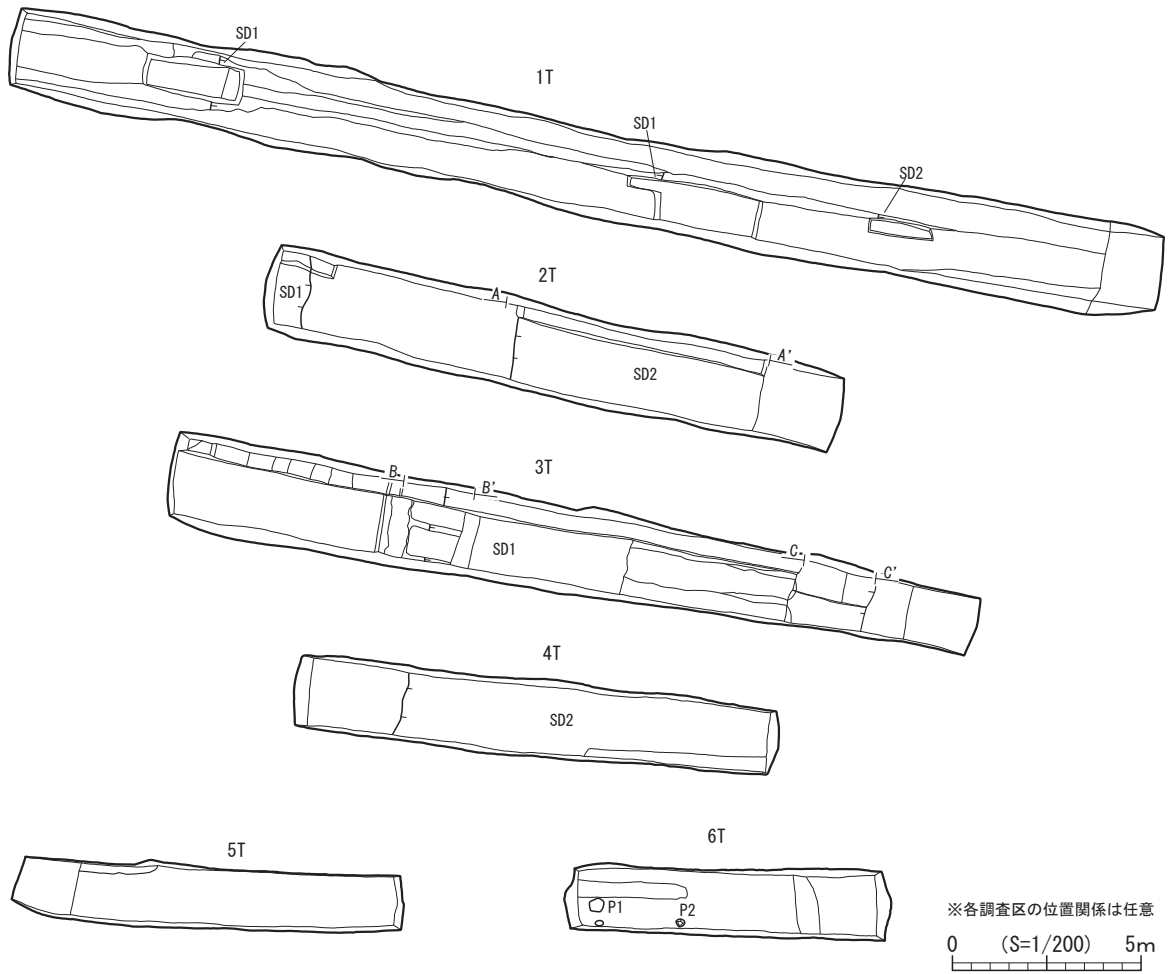
5. 本発掘調査の発見遺構と出土遺物

(1) 溝跡

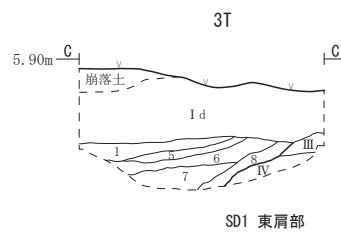
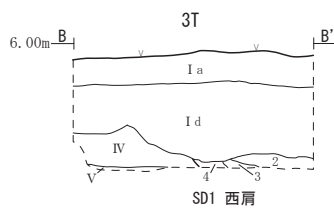
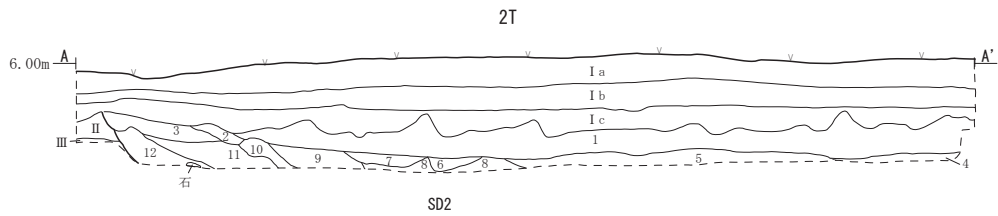
SD1 溝跡（第23・24図）

対象地の西側で検出された溝跡で、I区、II区を南北に縦断する。確認調査のSD1溝跡に対応する。検出長は35mで、さらに調査区外へと南北に延びる。上端幅12m～13.7mで、底面では基本層V層を削り出した畝状の高まりが2条確認でき（以下、「畝」とする。）、溝跡と平行するように南北方向へと延びる。西側畝は上幅40～60cm、東側畝は上幅60～90cmで、溝内は畝状の高まりによって仕切られ西側、中央、東側の3条の凹部が形成される。

第2節 第17次調査



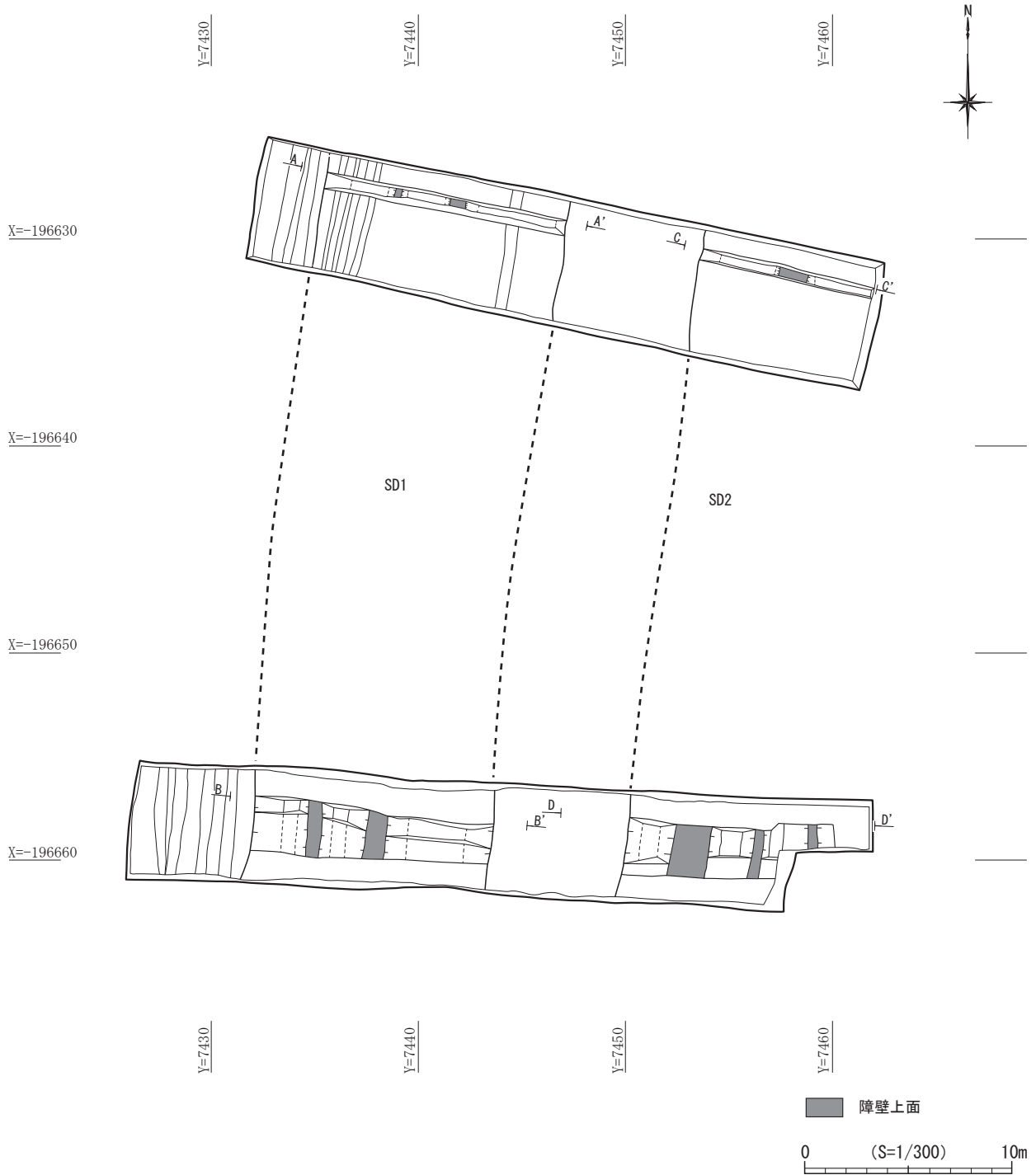
※各調査区の位置関係は任意
0 (S=1/200) 5m



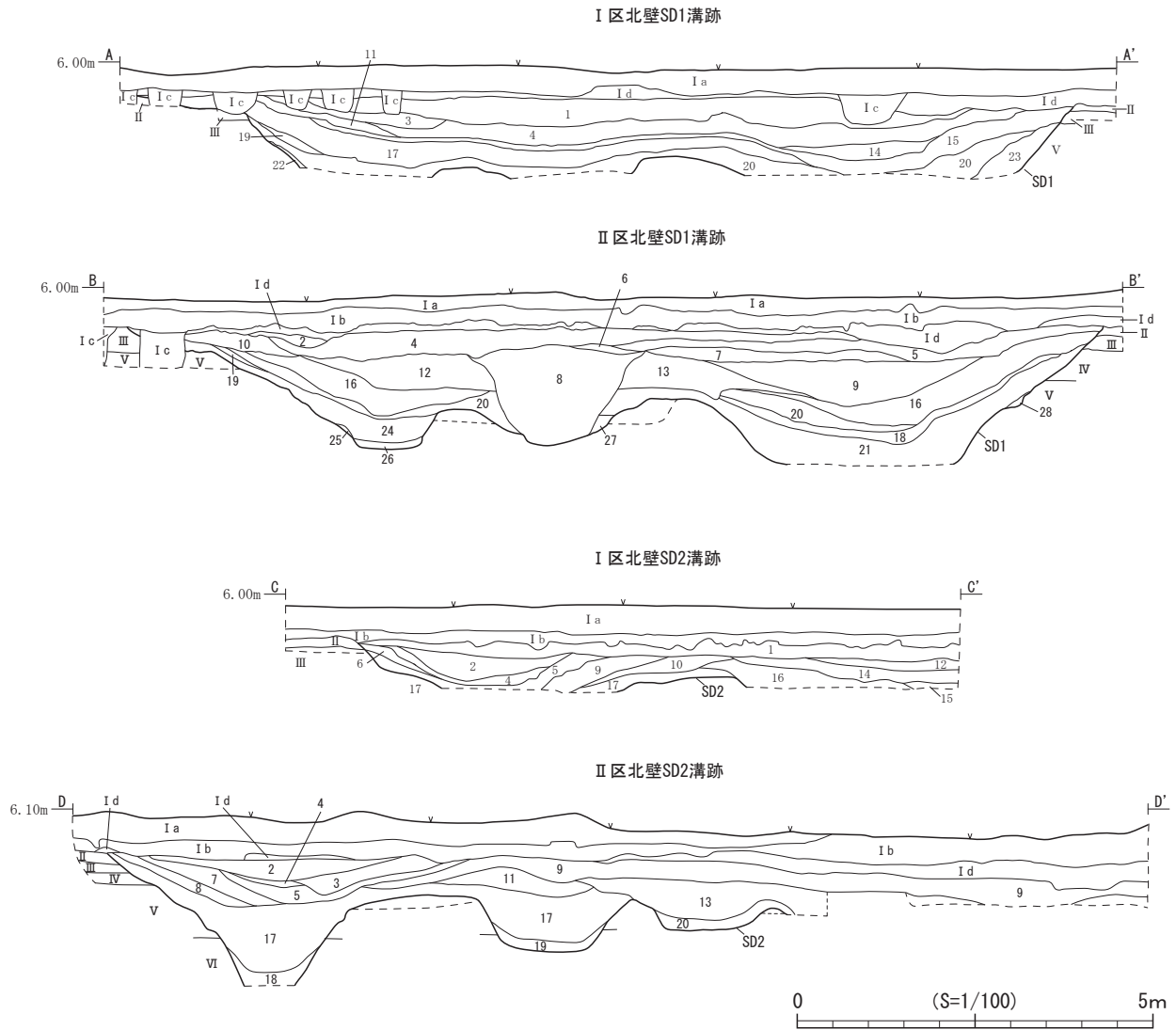
0 (S=1/60) 2m

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック(φ1cm)斑状に含む。	SD2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	ほぼ均質。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック主体、黒褐色粘土ブロック(φ1~3cm)混入。		2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロック(φ1cm)を少量含む。
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土	ほぼ均質。		3	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色シルトブロック(φ2cm)を少量含む。
	4	10YR2/2 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック(φ1cm)を少量含む。		4	10YR3/3 褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック(φ1cm)を少量含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	ややグライ化、酸化鉄ブロック(φ2cm)を少量含む。		5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック(φ1cm)を少量含む。
	6	7.5YR2/1 黒色	シルト質粘土	ややグライ化、酸化鉄ブロック(φ1cm)を斑状に含む。		6	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック(φ2cm)を少量含む。
	7	7.5YR3/1 黒褐色	粘土	グライ化、ほぼ均質。		7	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄ブロック(φ1cm)を斑状に含む。
	8	10YR2/3 黒褐色	粘土	酸化鉄粒(φ2mm)を斑状に含む。		8	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック(φ2cm)を斑状に含む。
				9		10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄ブロック(φ1cm)を斑状に含む。	
				10		10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック主体。	
				11		10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック(φ1~2cm)を斑状に含む。	
				12		10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック(φ1cm)を斑状に含む。	

第22図 第17次確認調査区平面・断面図



第23図 第17次本調査区平面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR5/6 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを含む。	SD2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に、砂を少量含む。
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック、明黄褐色粘土ブロックを含む。		2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物、褐灰色粘土、斑状を含む。
	3	10YR4/4 褐色	粘土	黒色粘土ブロックを含む。		3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土を斑状に、明黄褐色砂ブロックを少量含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	黒褐色粘土小ブロック、酸化鉄を含む。		4	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐灰色粘土を少量含む。
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック、混じる。		5	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、黒褐色粘土ブロックを多量に含む。
	6	10YR6/6 明黄褐色	粘土	酸化鉄、黒褐色粘土小ブロックを含む。		6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロックを多量に含む。
	7	10YR4/1 褐灰色	粘土	黒褐色、明黄褐色粘土ブロック混じる。		7	10YR2/2 黒褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを斑状に、炭化物、明黄褐色砂を少量、含む。
	8	10YR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック、多量に混じる。		8	10YR3/2 黒褐色	粘土	黒褐色粘土、明黄褐色砂を含む。
	9	10YR4/1 褐灰色	粘土	明黄褐色、黒褐色粘土小ブロックを含む。		9	10YR3/2 黒褐色	粘土	明黄褐色砂を斑状に含む。
	10	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を含む。		10	10YR3/2 黒褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロック、多量に混じる。
	11	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を少量含む。		11	10YR6/6 明黄褐色	砂	黒褐色粘土ブロックを含む。
	12	10YR3/2 黒褐色	粘土	植物遺体、酸化鉄少量を含む。		12	10YR3/3 暗褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロックを含む。
	13	10YR3/4 暗褐色	粘土	植物遺体を含む。		13	10YR3/3 暗褐色	粘土	明黄褐色砂を少量含む。
	14	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土	黒色粘土ブロックを含む。		14	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を含む。
	15	10YR3/4 暗褐色	粘土	植物遺体を含む。		15	10YR7/6 明黄褐色	粘土	明黄褐色砂を多量に含む。
	16	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を斑状に、炭化物、植物遺体を含む。		16	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄を斑状に、自然遺物を含む。
	17	10YR3/2 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。		17	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。
	18	10YR2/2 黒褐色	粘土	植物遺体を多量に含む。		18	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。
	19	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。		19	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。
	20	10YR2/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む。		20	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐灰色粘土を含む。
	21	10YR3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。					
	22	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。					
	23	10YR4/1 褐灰色	粘土	褐灰色砂を含む。					
	24	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む。					
	25	10YR3/1 黒褐色	粘土	明黄褐色砂を多量に含む。					
	26	10YR3/1 黒褐色	粘土	砂を含む。					
	27	10YR2/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。					
	28	10YR3/1 黒褐色	粘土	明黄褐色砂を含む。					

第24図 第17次本調査区断面図

壁はやや急に立ち上がり、Ⅱ区で見ると、西側凹部では深さ1.7mで、西側畝との比高差約0.6m、中央凹部では深さ1.6m、西側・東側畝との比高差0.5～0.7mで東側の方が比高差が大きい。東側凹部では深さ1.9m以上、東側畝との比高差0.9m以上と西側、中央凹部と比べより深くなる。堆積土は28層に分層され、上部は人為堆積層（1～10層）、下部は自然堆積層（11～28層）である。また、Ⅱ区の中央凹部では、時期は不明だが溝状に底面より深く掘り返し、その後、人為的に埋め戻されている（8層）。

遺物は自然堆積層から陶器が出土したほか、自然遺物（クルミ類の種子）や動物骨などが出土した（第25図）。1は小野相馬産と推定される蛇の目釉剥ぎ碗の高台付底部で、見込みに菊型16弁の印花文をもつ。時期は18世紀中頃と考えられる。2は大堀相馬産と推定される高台付底部で器種は碗と考えられる。内面は施釉が認められない。時期は18世紀頃と考えられる。（写真図版12-3）は前脛骨と考えられる動物骨である。

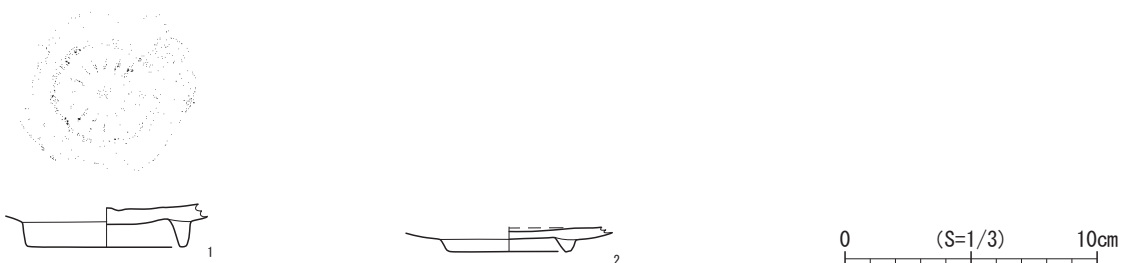
SD2 溝跡（第23・24図）

対象地の東側で確認された溝跡で、Ⅰ区、Ⅱ区を南北に縦断する。確認調査のSD2溝跡に対応する。検出長は33mで、さらに調査区外へと南北に延びる。上端幅14.6m以上で、底面では基本層Ⅴ層を削り出した畝状の高まりが3条確認でき、溝跡と平行するように南北方向へと延びる。西側畝は上幅150～180cm、中央畝は上幅40～60cm、東側畝は上幅30cmで、溝内は畝状の高まりによって仕切られ西側、中央西、中央東、東側の4条の凹部が形成されている。西壁はやや急に立ち上がり、Ⅱ区で見ると、西側凹部では深さ1.8mで西側畝との比高差は約1.2mあり、他の凹部と比べて立ち上がりの傾斜が急である。中央西凹部では深さ約1.3m、西側畝・中央畝との比高差0.7～0.8mである。中央東凹部では深さ約1.0m、中央畝・東側畝との比高差0.3～0.5mである。東側凹部では深さ0.9m以上、西側畝との比高差0.1m以上である。堆積土は20層に分層され、SD1溝跡と同様に上部に人為堆積層（1～12層）、下部に自然堆積層（13～20層）が確認された。

遺物は自然堆積層から瓦質土器や木製品のほか、自然遺物（クルミ類の種子）が出土した。そのうち木製品（第26図1～3）を掲載した。1、2は漆器の椀で、破損のため器高は確認できない。1は内外面黒漆仕上げで、両面に朱漆によって文様が描かれる。また、底部外面には「十」と描かれる。2は内面朱漆、外面黒漆仕上げで外面に文様を描かれる。高台はいずれも0.6～0.9cmと浅く、また、体部に稜を持たない。3は連歯下駄である。

6. まとめ

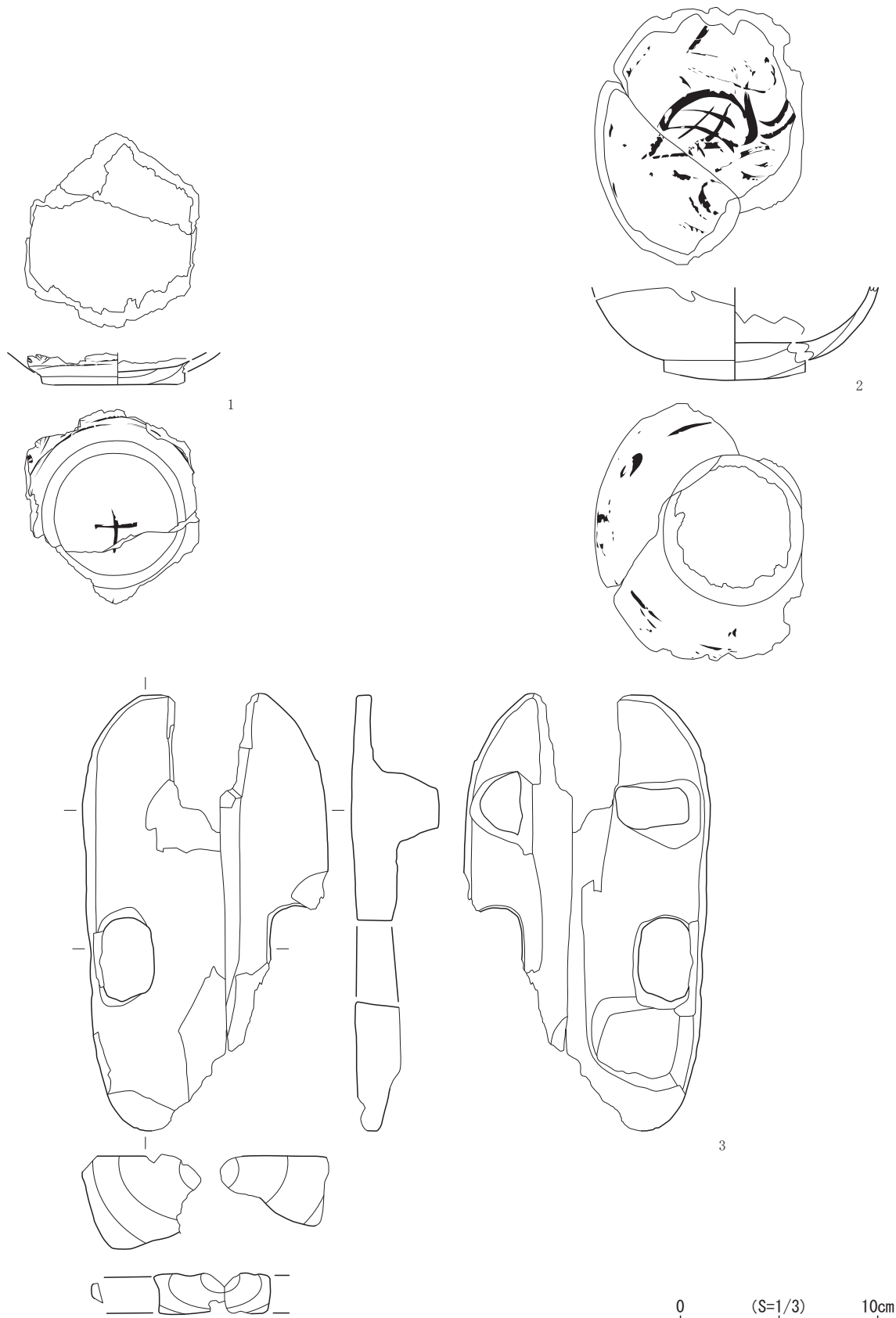
調査では南北方向の溝跡が2条検出された。今回の調査で確認できた規模はSD1溝跡で長さ約35m、上幅13.7m、深さ1.8m以上で、SD2溝跡は長さ約33m、上幅14.6m以上、深さ1.9m以上である。これらの溝跡は長さ、



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-1	SD1	15	陶器	碗	-	6.2	(1.7)	淡青色釉	淡青色釉 蛇の目釉剥ぎ	胎土緻密 砂粒含む 菊印花文(16弁) 産地：小野相馬 18c	12-1
2	Ic-2	SD1	堆積土	陶器	碗	-	5.0	(1.0)	灰釉		胎土緻密 産地：大堀相馬 18c	12-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
-	0-1	SD1	15	動物遺体	動物骨	21.1	4.8	2.6		12-3

第25図 SD1 溝跡出土遺物

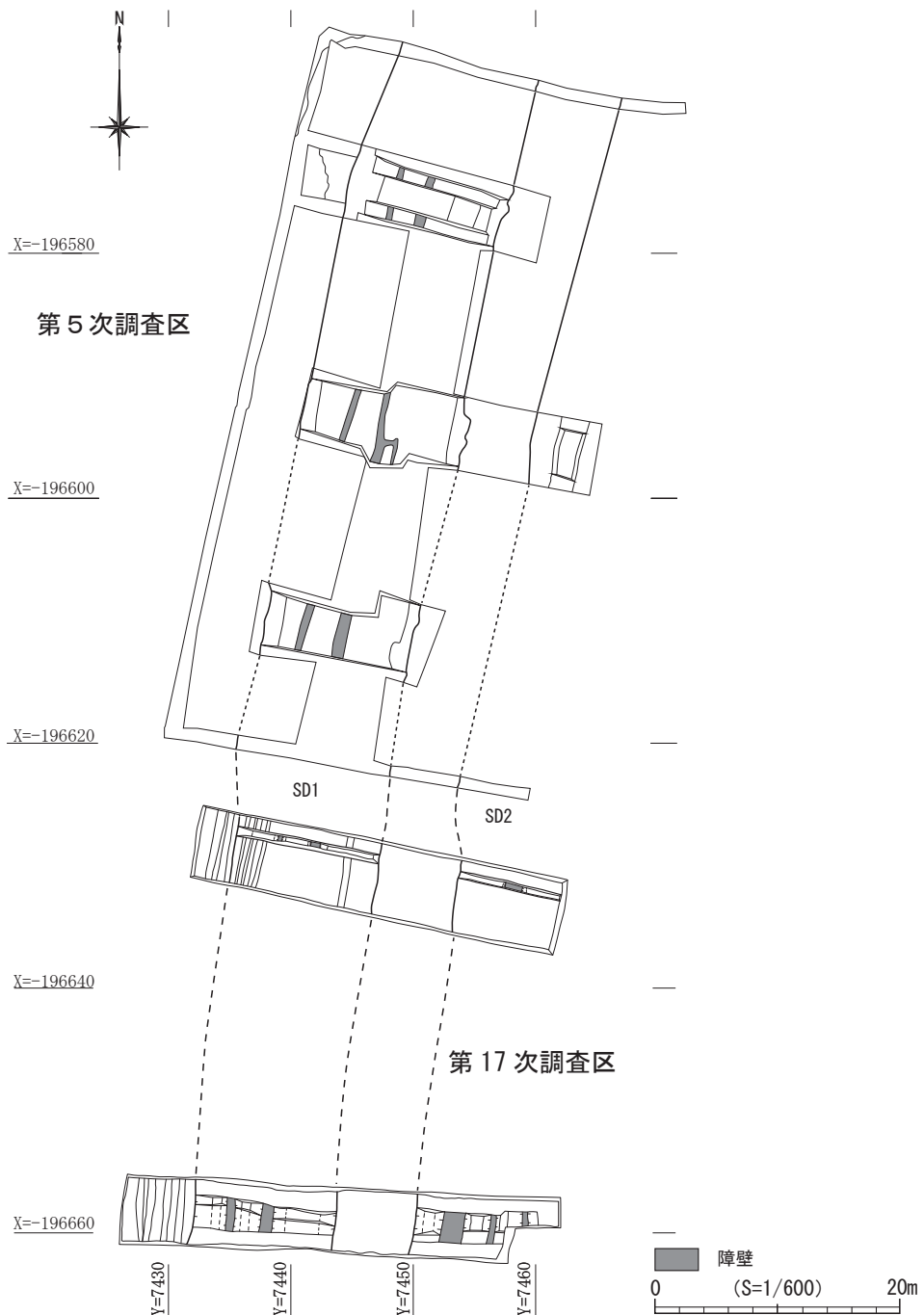


図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真 図版
						口径	底径	器高		
1	L-1	SD2	17	木製品	椀	-	7.2	(1.7)	横木取 外面：体部・底部黒漆下地に赤漆で文様 底部は「十」 内面：赤漆	12-4
2	L-2	SD2	17	木製品	椀	(14.5)	7.2	(4.7)	横木取 外面：黒漆下地に赤漆で文様 内面：黒漆下地に赤漆で文様	12-5
3	L-3	SD2	16	木製品	連歯 下駄	22.0	12.5	4.4	広葉樹の芯持材を素材 隅丸長方形 組孔は長方形	12-6

第26図 SD2 溝跡出土遺物

幅、深さが大規模であることから沖野城跡に伴う堀跡と推定される。また、底面ではSD1、SD2 溝跡ともに畝状の高まりが確認された。遺跡の性格や堀の規模を考慮すると、これらは堀跡に伴う障壁であると考えられる。北側隣接地で行われた第5次調査でも南北方向への堀跡が2条検出されている。第5次調査SD1 溝跡の底面では堀跡と平行するように造られた障壁が2条確認されており、障壁の一部が鍵状に屈曲し、他の障壁と接続する部分を確認されている。今回確認したSD1 溝跡と規模、堆積土、障壁を伴う点などが類似しており、同一の堀跡であったと考えられる。また、第5次調査SD2 溝跡と本調査のSD2 溝跡も方向や規模から同一の堀跡と考えられる。第5次調査では調査区の制約により限られた範囲でしか規模の確認ができなかったが、今回、SD1 溝跡と同様に障壁を伴う堀跡であることを確認した。

SD1 溝跡からは18世紀代の陶器が出土しており、埋没年代は18世紀以降と考えられる。SD2 溝跡からは漆器と



第27図 第5次・第17次調査区合成図

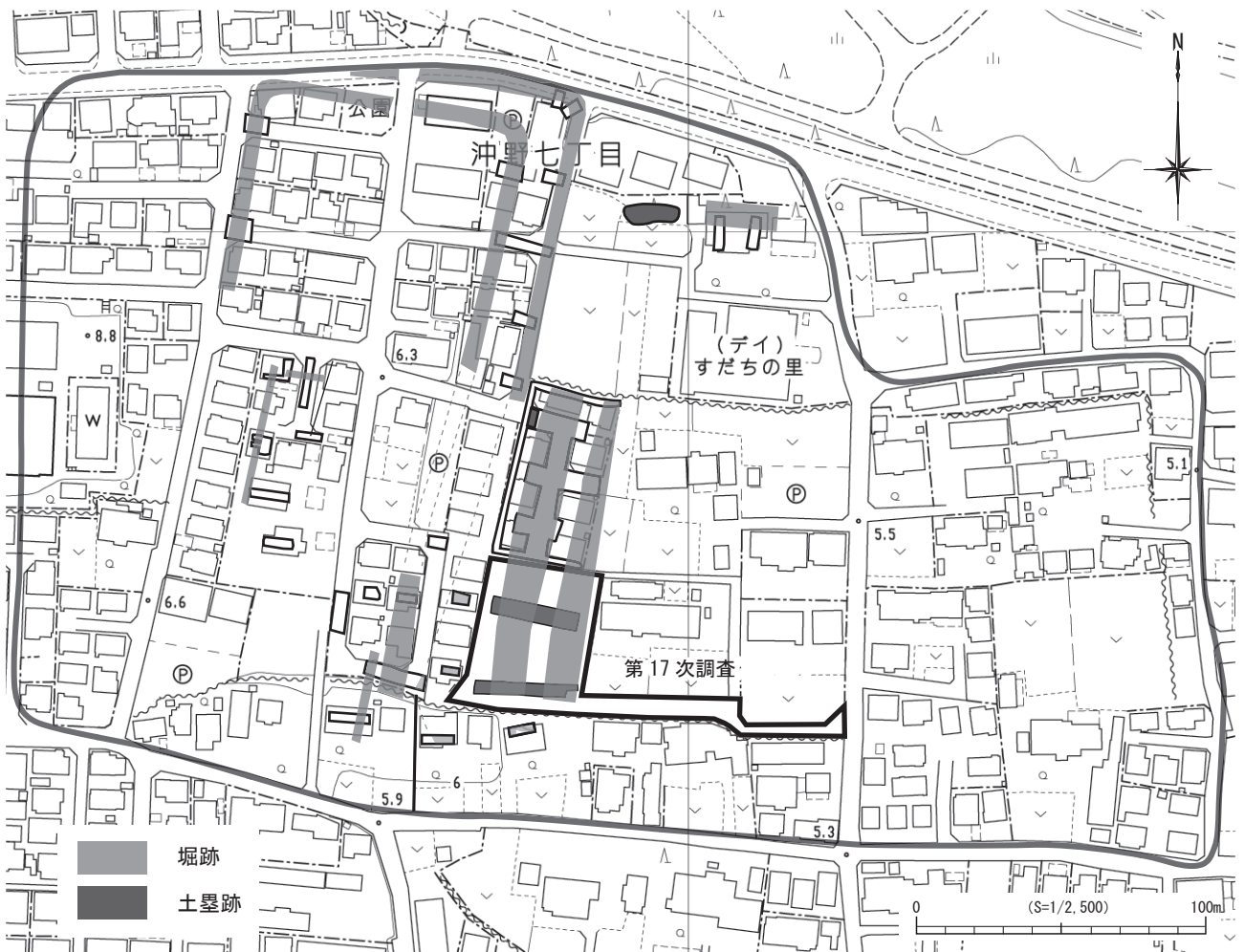
第2節 第17次調査

下駄が出土したが、明確な時期については不明である。仙台城二の丸跡第9地点で出土した漆器は、内外面黒漆地のものが多く、この時期に限って外面同様内面にも文様を施されるものが多いことが指摘されており、17世紀初頭から前葉の年代が与えられている（関根 1998a）。今回、出土した漆器（第26図1）も同様の特徴を持つことから近い時期のものと推定される。しかし、出土資料は僅少であり、明確な時期決定資料がないため、構築または埋没した年代や、2条の堀の新旧関係などについては、今後も検討が必要である。

第5次調査を含め、確認された堀跡はSD1、SD2溝跡ともに総長100mに及ぶ。遺跡の西側でこれまでに検出されている堀跡とは規模や様相が異なっており、遺跡の東部と西部に別区画が展開していた可能性も考えられる。今後の調査成果を合わせて、検討すべき課題である。

参考文献

- 関根達人 1998a 「6. 木製品・漆器」『東北大学埋蔵文化財調査年報9』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
関根達人 1998b 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
仙台市教育委員会 2010 『上野遺跡他』仙台市文化財調査報告書第372集
仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』



第28図 沖野城跡 検出堀跡・土塁跡位置図



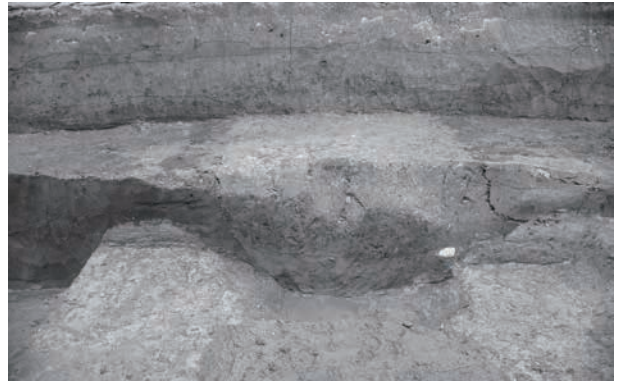
1. I・II区調査区全景（南から）



2. II区 SD1 溝跡完掘状況（南西から）



1. II区 SD1 溝跡断面 (1) (南から)



2. II区 SD1 溝跡断面 (2) (南から)



3. II区 SD1 溝跡断面 (3) (南から)



4. 作業状況 (西から)



5. II区 SD2 溝跡完掘状況 (南東から)



1. II区 SD2 溝跡断面 (1) (南から)



2. II区 SD2 溝跡断面 (2) (南から)



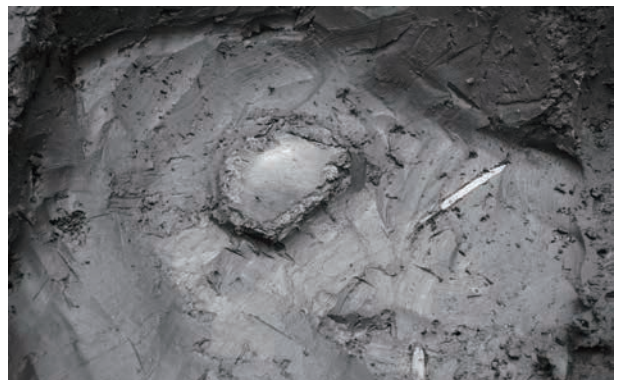
3. II区調査区北壁 (南から)



4. II区東側拡張時 SD2 溝跡検出状況 (南西から)



5. 漆器 (L-1) 出土状況 (北西から)



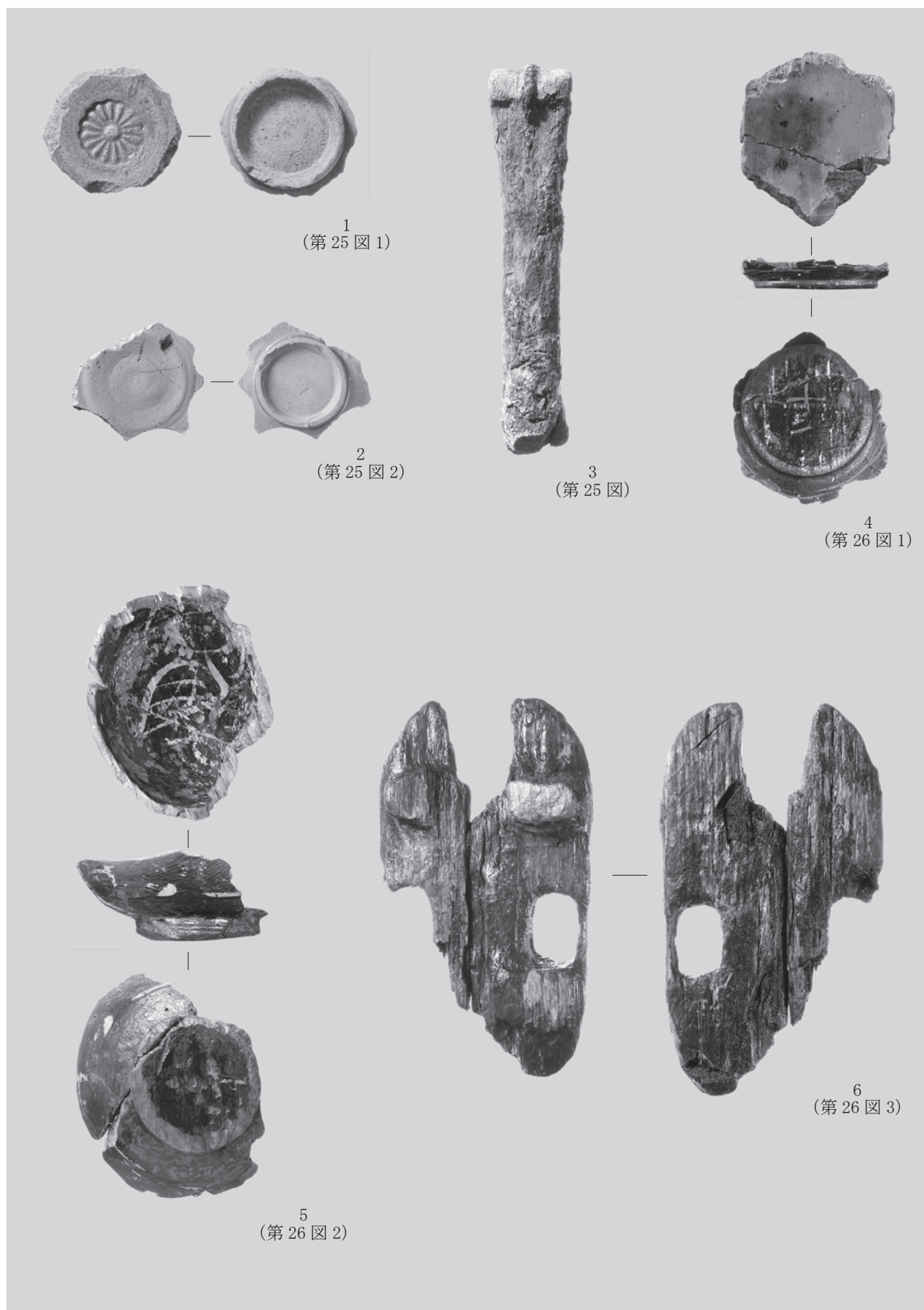
6. 漆器 (L-2) 出土状況 (北東から)



7. I区 SD1 溝跡調査状況 (西から))



8. I区 SD2 溝跡調査状況 (南東から)



写真図版 12 沖野城跡第17次調査出土遺物

第4章 郡山遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二～六丁目に所在する。北の広瀬川、南の名取川に挟まれ、その両河川の合流点から北西約2kmに位置する。遺跡の範囲は東西約800m、南北約900mで、面積は約60haに及んでいる。その一部は、平成18年に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廢寺跡」として国史跡に指定されている。

遺跡では、昭和54年(1979)に初めて発掘調査が行われて以来、昭和55年(1980)から継続的な調査が行われてきた。官衙は「Ⅰ期官衙」と「Ⅱ期官衙」の2つの時期がある。Ⅰ期官衙は7世紀中頃から後半にかけて機能し、陸奥国の拠点となる柵跡と考えられる。そのⅠ期官衙を取り壊し、建物や塀などの施設の基準を真北方向に変えて設けられたのが、Ⅱ期官衙である。Ⅱ期官衙は7世紀末から8世紀初頭にかけて機能し、多賀城創建までの陸奥国府と考えられる。

また、郡山遺跡の西側には長町駅東遺跡と西台畑遺跡が位置しており、竪穴住居跡が500軒以上発見されている。竪穴住居跡の大部分は7世紀前葉から8世紀前葉の時期のものである。また、南西約1.5kmには大型掘立柱建物跡が方形区画の溝の内部に規則性をもって配置されていることが確認された大野田官衙遺跡があり、遺構の時期や建物の規模から、郡山遺跡Ⅱ期官衙との関係性が考えられている。

第2節 第290次調査

1. 調査要項

遺跡名	郡山遺跡(宮城県遺跡登録番号01003)
調査地点	仙台市太白区郡山三丁目1番1外
調査期間	平成30年11月26日～平成30年12月12日
調査対象面積	143.96㎡(敷地面積:1318.56㎡)
調査面積	73.8㎡
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 整備活用係
担当職員	主事 五十嵐 愛 文化財教諭 三浦昂也



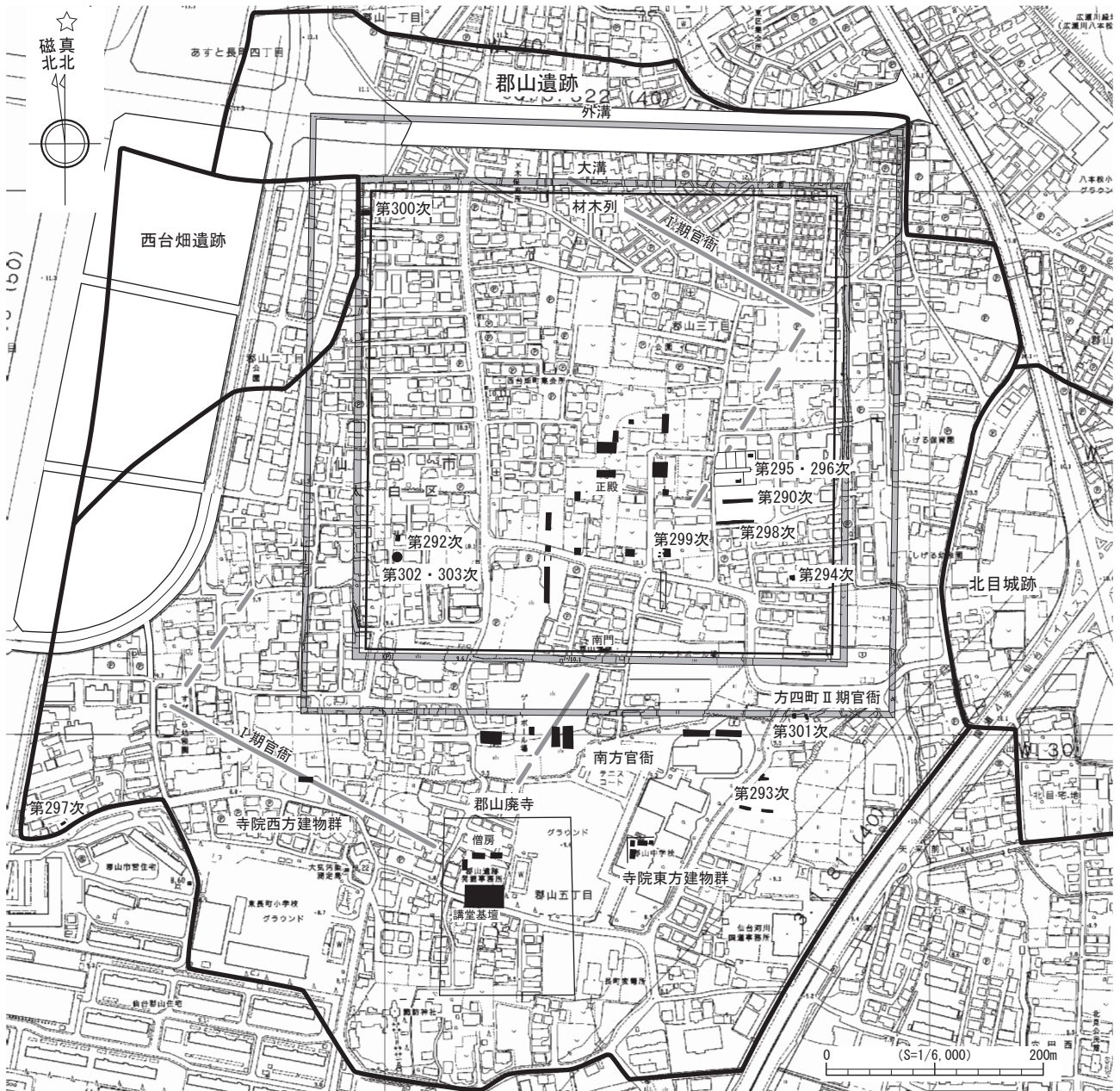
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
2	西台畑遺跡	集落跡、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
3	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
4	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
5	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

第29図 郡山遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成30年10月2日付で提出された「埋蔵文化財発掘の取扱いについて(協議)」(平成30年10月4日付H30教生文第105-085号で通知)に基づき実施した。

対象地は郡山遺跡Ⅰ期官衙の東側および方四町Ⅱ期官衙内の南東部に位置し、平成16年に調査が行われた第158次調査区の東～北側、平成17年に調査が行われた第168次調査区、平成18年度に調査が行われた第178次調査区の南側にあたる。

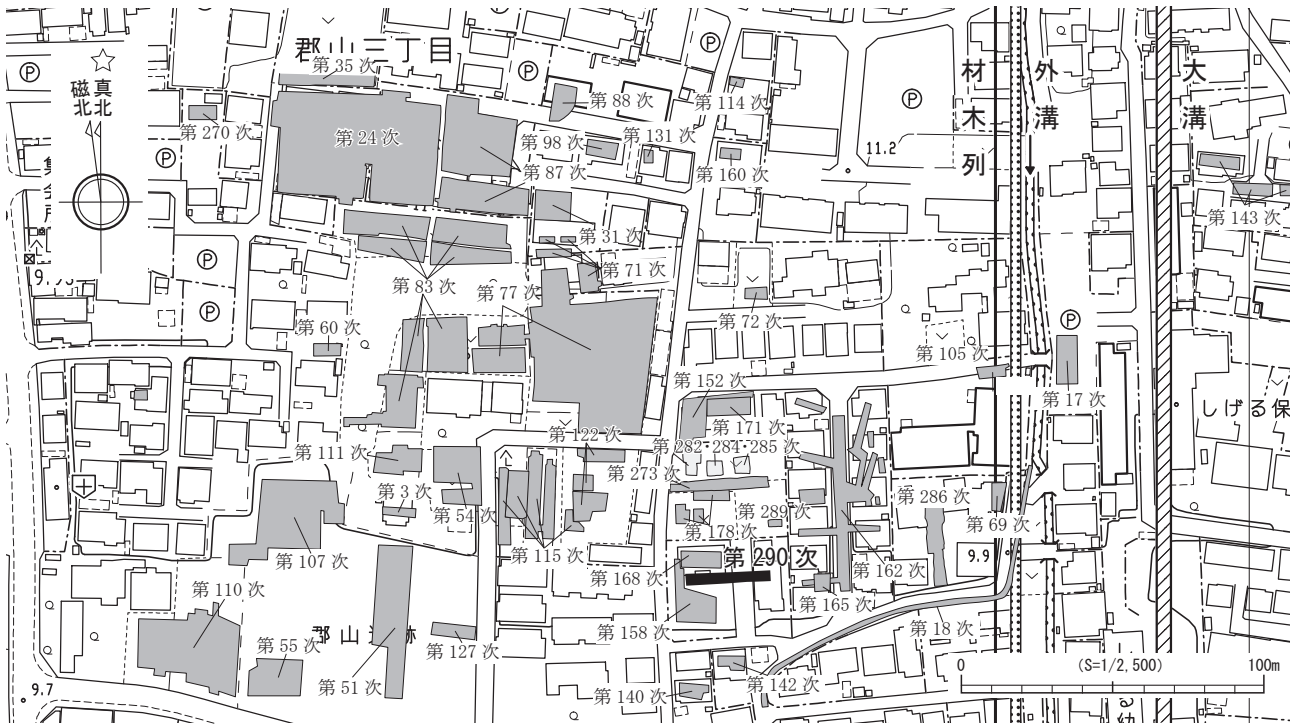


第 30 図 郡山遺跡調査地点位置図

調査は平成 30 年 11 月 26 日に着手し、以前に同敷地内で行われた第 158 次調査区を除く工事範囲内に東西 28m、南北 2.6m の規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層 I、II 層を掘り下げ、基本層 III 層上面 (GL-0.7 ~ 1.25m) で遺構検出作業を行った。調査の記録は、平面図、断面図 (S = 1/20)、遺構断面図 (S = 1/20) を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また、調査の際に郡山遺跡の座標点 (No. 22) から基準点の移設を行った。12 月 12 日に調査を終了し、埋戻しは 12 月 21 日に行った。

3. 基本層序

盛土下に基本層を大別 3 層、細別 4 層確認した。遺構検出面は III 層上面であるが、調査区壁断面の観察を行った結果、II 層上面から掘り込まれた遺構も少数存在することを確認している。遺構検出面である III 層上面までの深さは 75 ~ 105 cm である。



第31図 第290次調査区位置図

- I a層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。西側はグライ化している。旧耕作土である。
- I b層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。III層粒を少量含む。旧耕作土である。
- II 層：10YR4/2 灰黄褐色、10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。III層が斑状に混ざる。旧耕作土である。
- III 層：10YR7/6 明黄褐色粘土。
10YR5/1 褐灰色、2.5Y8/3 淡黄色粘土粒を含む。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、溝跡9条、土坑3基、ピット132基である。また、遺物は基本層および遺構堆積土から土師器、須恵器、土製品などが出土している。

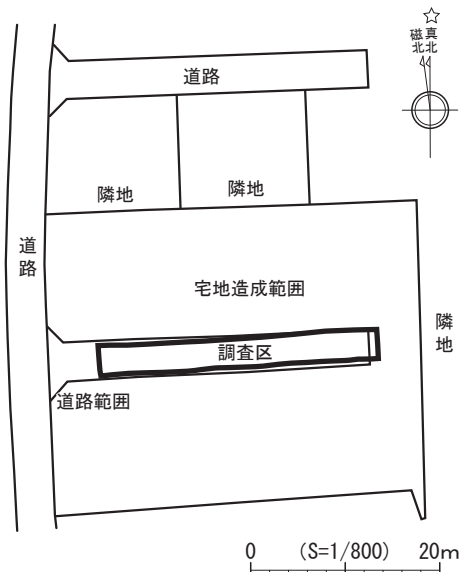
(1) 溝跡

SD2495 溝跡 (第33図)

調査区の西側で検出された東西方向の溝跡である。P3より新しい。規模は検出長が約1.1mで、調査区外にさらに延びる。方位はN-90°-Eで、上端幅が20~30cm、下端幅が15~18cmで、断面形状は上部が開くU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約15cmで、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD2496 溝跡 (第33図)

調査区の西側で検出された南北方向の溝跡で、II層上面から掘り込まれている。SD2498溝跡、P4、P120より新



第32図 第290次調査区配置図

しい。規模は検出長が約2.5mで、調査区外にさらに延びる。方位は $N-3^{\circ}-E$ で、上端幅が40～45cm、下端幅が18～30cmで、断面形状は上部が開くU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは35cmで、堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SD2497 溝跡（第33図）

調査区の西側で検出された北西－南東方向の溝跡である。SD2498 溝跡、P15、P17、P108、P126より新しい。規模は検出長が約4.2mで、調査区外にさらに延びる。方位は $W-47^{\circ}-N$ で、上端幅が0.9～1.3m、下端幅が0.7～0.9mで、断面形状は皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは20～40cmで、堆積土は4層に分層される。遺物は出土していない。

SD2498 溝跡（第33図）

調査区の西側で検出された北東－南西方向の溝跡である。P1、P2、P8、P118、P119、P120より新しく、SD2496、SD2497 溝跡より古い。規模は検出長が約5.9mで、調査区外にさらに延びる。方位は $N-76^{\circ}-E$ で、上端幅が45～55cm、下端幅が25～40cmで、断面形状は逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約25cmで、堆積土は2層に分層される。遺物は礫石器が1点（写真14-7）出土している。

SD2499 溝跡（第33図）

調査区の東側で検出された北東－南西方向の溝跡である。P74、P121より新しい。規模は検出長が約2.9mで、調査区外にさらに延びる。方位は $N-23^{\circ}-E$ で、上端幅が35～45cm、下端幅が16～30cmで、断面形状はU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約25cmで、堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SD2500 溝跡（第33図）

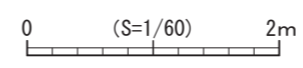
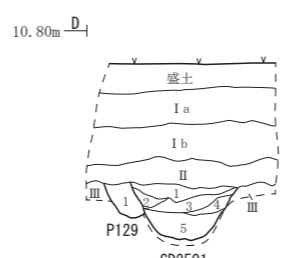
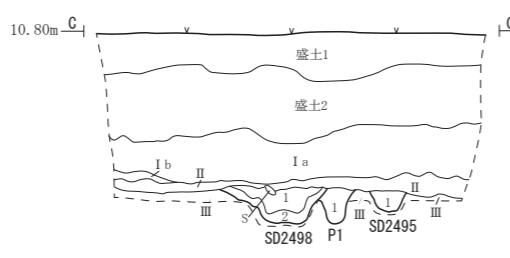
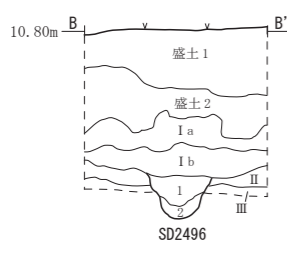
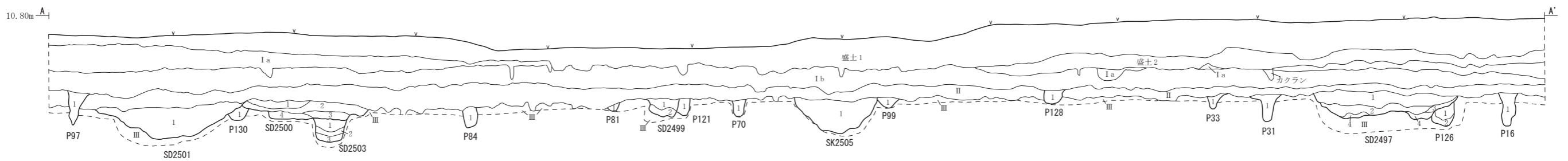
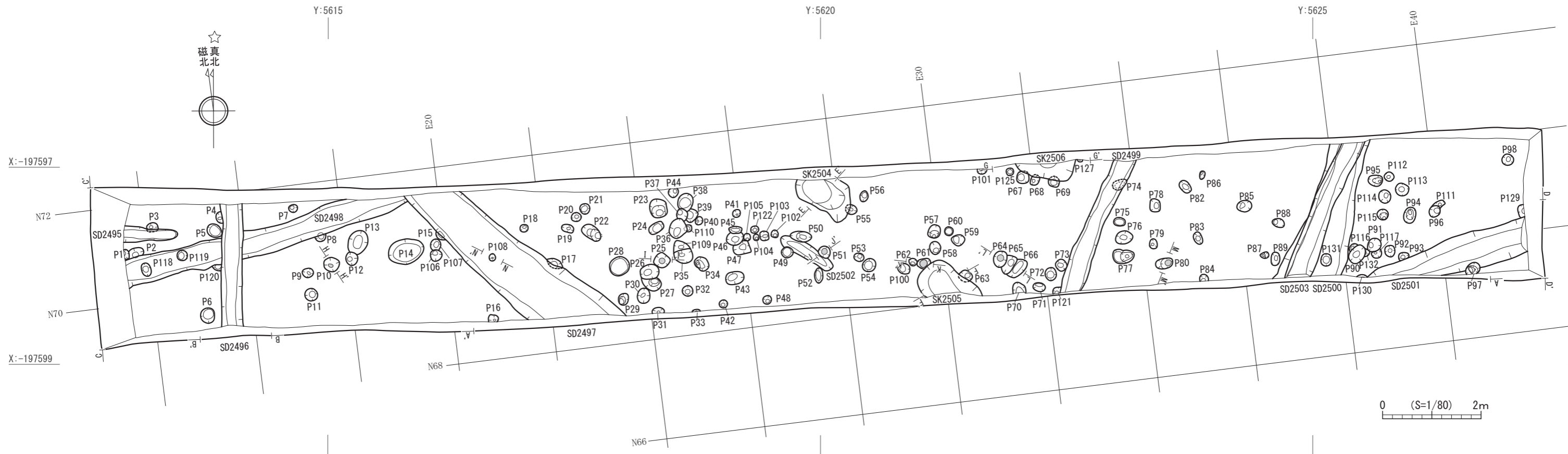
調査区の東側で検出された北東－南西方向の溝跡である。SD2503 溝跡、P131より新しく、SD2501 溝跡より古い。規模は検出長が約3.0mで、調査区外にさらに延びる。方位は $N-9^{\circ}-E$ で、上端幅が0.7～1.2m、下端幅が45～90cmで、断面形状は上部が開く皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約25cmで、堆積土は4層に分層される。遺物は出土していない。

SD2501 溝跡（第33図）

調査区の南東側で検出された北東－南西方向の溝跡である。SD2500 溝跡、P93、P129、P130より新しく、P97より古い。規模は検出長が約3.4mで、調査区外にさらに延びる。方位は $N-65^{\circ}-E$ で、上端幅が60～75cm、下端幅が20～35cmで、断面形状は上部が開くU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約45cmで、堆積土は5層に分層される。遺物は出土していない。

SD2502 溝跡（第33図）

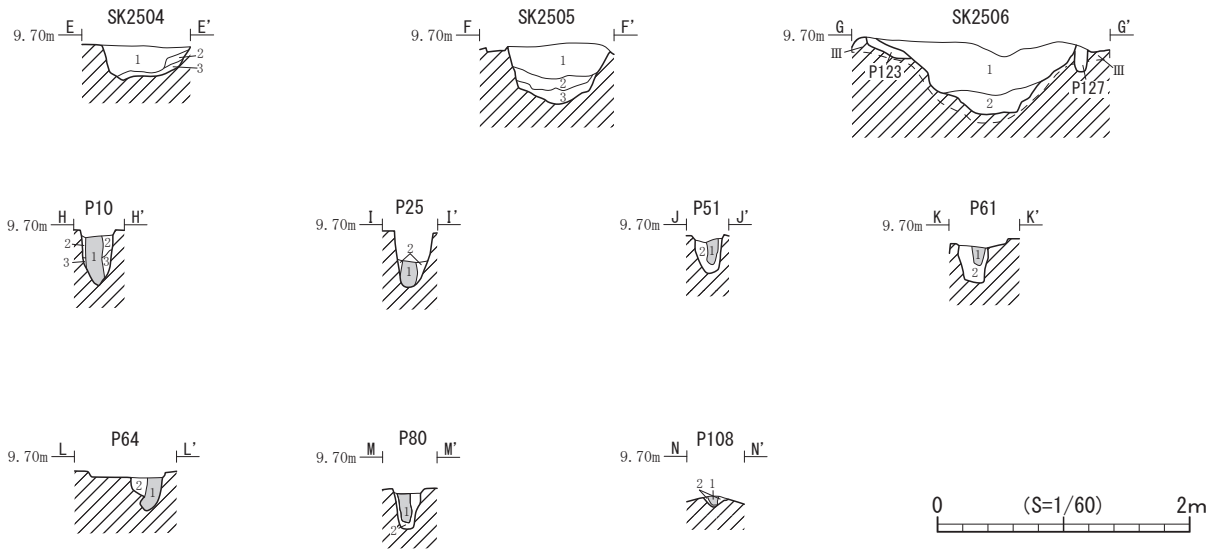
調査区の中央部で検出された北西－南東方向の溝跡である。P49、P50、P51より古い。規模は検出長が約1.2mで、方位は $W-26^{\circ}-N$ である。上端幅が約25cm、下端幅が約15cmで、断面形状はU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約15cmで、堆積土は単層である。遺物は出土していない。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2495	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	III層粒~小ブロックをやや多量含む。
	2	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	III層粒~小ブロックを少量含む。
SD2496	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	III層粒~中ブロックをやや多量斑状に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~大ブロックを中量含む。
	3	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	III層と粒~大ブロック状に斑状に混ざる。
	4	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	III層と黄灰色粘土を粒~小ブロック状に中量含む。
SD2497	1	2.5Y4/1 黄灰色	シルト質粘土	III層粒~小ブロックを少量含む。
	2	2.5Y4/1 黄灰色	シルト質粘土	III層と粒~大ブロック状に斑状に混ざる。
SD2498	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	褐色砂をブロック状に少量斑状に含む。III層粒~小ブロックを中量斑状に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層と粒~中ブロック状に斑状に混ざる。
SD2499	1	10YR5/1 褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土、III層と斑状に混ざる。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	褐色粘土、III層と斑状に混ざる。
	3	2.5Y5/1 黄灰色	シルト質粘土	褐色粘土、III層と斑状に混ざる。
SD2500	4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	III層と粒~大ブロック状に斑状に混ざる。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土と斑状に混ざる III層粒~小ブロックを中量含む。
SD2501	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	III層と灰黄褐色粘土を粒~小ブロック状に中量含む。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	III層と灰黄褐色粘土を粒~小ブロック状に少量含む。
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	III層粒をやや多量含む。
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	III層粒をやや多量含む。
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックを中量斑状に含む。

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2502	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~大ブロックをやや多量含む。
	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質粘土	黄褐色砂質粘土を小ブロックまたは薄層状に含む。褐色粘土粒~小ブロック少量含む。
	2	2.5Y6/1 黄灰色	粘土	III層粒を中量含む。酸化鉄粒を含む。
SD2503	3	2.5Y6/1 黄灰色	砂質粘土	III層が粒~中ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。
	3	2.5Y6/1 黄灰色	砂質粘土	III層が粒~中ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。
P1	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックをやや多量含む。
P16	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	III層粒~小ブロックを中量含む。
P31	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックを中量含む。
P33	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックを少量含む。
P70	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックを中量含む。
P81	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層が粒~小ブロック状にやや多量斑状に混ざる。
P84	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックをやや多量含む。
P97	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~中ブロックを中量含む。
P99	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~中ブロックを多量含む。
P121	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	III層粒~小ブロックをやや多量含む。
P126	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~大ブロックを中量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層と粒~小ブロック状に斑状に混ざる。
P128	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~中ブロックを中量含む。
P129	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	III層粒~小ブロックを少量含む。
P130	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	III層粒~小ブロックを中量含む。

第 33 図 第290次調査区平面・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SK2504	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を少量含む。炭化粒(～φ1cm)を少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックをやや多量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。
SK2505	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを中量含む。黒褐色粘土粒～中ブロックを少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土粒～小ブロックを少量含む。炭化粒(～φ1cm)を少量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～ブロック状に混ざる。
SK2506	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。
	2	10YR6/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。
P10	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを中量含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを多量斑状に含む。(掘方埋土)
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒状に混ざる。(掘方埋土)
P25	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を中量含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックをやや多量含む。(掘方埋土)
P51	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を微量含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックをやや多量含む。(掘方埋土)
P61	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒をやや多量含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。(掘方埋土)
P64	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色粘土粒～中ブロックを中量含む。Ⅲ層粒を少量含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを中量含む。褐灰色粘土粒～大ブロックを少量含む。(掘方埋土)
P80	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを中量含む。(掘方埋土)
P108	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化粒(～φ1cm)を含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを多量含む。(掘方埋土)
P123	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～中ブロックを中量含む。炭化粒(～φ1cm)を少量含む。
P127	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。

第34図 土坑・ピット断面図

SD2503 溝跡 (第33図)

調査区の東側で検出された北東－南西方向の溝跡である。SD2500 溝跡より古い。規模は検出長が約 3.0m で、調査区外にさらに延びる。方位は N - 14° - E で、上端幅が 40 ～ 50 cm、下端幅が 20 ～ 30 cm で、断面形状は U 字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 30 cm で、堆積土は 3 層に分層される。遺物は出土していない。

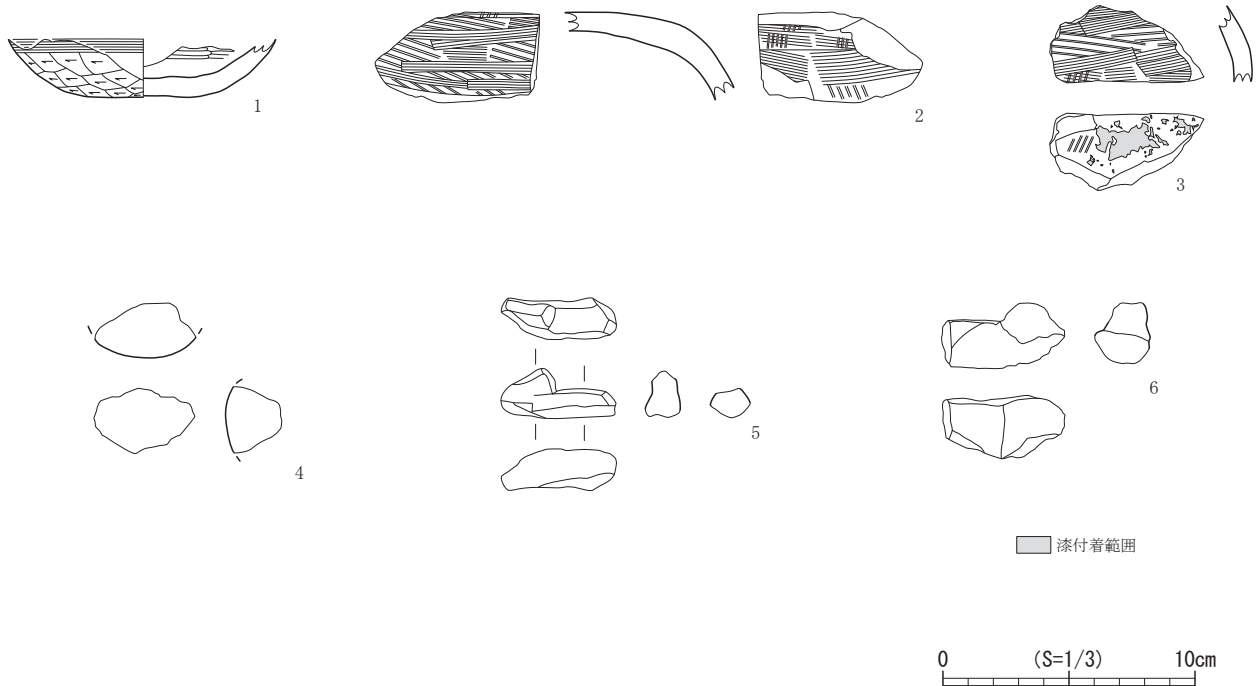
(2) 土坑

SK2504 土坑 (第33・34図)

調査区の中央部で検出された。P55 より新しい。規模は幅約 70 cm、長さ 1.2m 以上であり、平面形は楕円形を呈すると推測される。深さは約 30 cm で、断面形状は碗形を呈する。堆積土は 3 層に分層される。遺物は出土していない。

SK2505 土坑 (第33・34図)

調査区の中央部で検出された。P 61、P 63、P 99 より新しい。規模は幅約 80 cm、長さ 1.1m 以上であり、平



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1	SK2505	堆積土	土師器	坏	-	4.4	(2.3)	体上半:ヨコナデ 体下半:ヘラケズリ 底:ヘラケズリ	ヘラミガキ	胎土緻密 砂粒含む	14-1
2	E-1b	調査区壁	-	須恵器	平瓶	-	-	(3.5)	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ナデ	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 体上半の破片	14-9
3	E-1a	調査区壁	-	須恵器	平瓶	-	-	(3.1)	ハケメ→ヘラナデ	漆付着	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 体上半の破片	14-8

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	P-1	SK2505	堆積土	土製品	-	(2.6)	(4.0)	(2.2)	平面で円形を呈する 表面に白色の薄い層が付着 胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 重さ 11.3g	14-2
5	P-2	SK2505	堆積土	土製品	-	(4.6)	(1.6)	(2.0)	平面でリング状を呈する 断面には積上痕のような平坦面がある 胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 重さ 6.9g	14-3
6	P-3	SK2505	堆積土	土製品	-	-	-	-	平面で内面が弧状を呈する 断面は積上痕のような平坦面がある 胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 重さ 16.4g	14-4
-	P-4	SK2505	堆積土	土製品	-	-	-	-	積上痕のような平坦面がある 胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 重さ 19.9g	14-5
-	P-5	SK2505	堆積土	土製品	-	-	-	-	積上痕のような平坦面がある 胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 重さ 3.4g	14-6
-	K-1	SD2498	堆積土	礫石器	磨石	-	-	-	扁平な円礫の主面と側面に磨面が認められる 折損品 重さ 124.0g 石材は軽石質凝灰岩	14-7

第35図 溝跡・土坑・基本層出土遺物

面形は楕円形を呈すると推測される。深さは約45cmで、断面形状は上部が開くU字形を呈する。堆積土は3層に分層される。遺物は土師器の坏(第35図1)や土製品(第35図4~6)、焼成粘土塊などが出土している。

SK2506 土坑 (第33・34図)

調査区の中央部で検出された。P 67、P 68、P 69、P 123、P 127 より新しい。規模は東西1.2m以上、南北40cm以上であり、平面形は不明である。深さは約55cmで、断面形状は上部が開く逆台形を呈すると推測される。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

(3) ピット (第33・34図)

今回の調査では132基のピットが検出された。平面形状は円形や楕円形を呈するものが主体であり、直径は約10~70cmである。柱痕跡が検出されたピットは7基であるが、建物跡などを構成するか否かは、本調査区内では不明である。遺物は土師器、須恵器の小片が出土している。

(4) 遺構外遺物

調査区壁から同一個体とみられる須恵器平瓶の破片が2点出土しており、うち1点に漆が付着している(第35図2・3)。

5. まとめ

今回の第290次調査地点はI期官衙の東外側および方四町II期官衙内の南東部にあたる。これまで行われた周辺の調査では、I期官衙の南東辺を区画するとみられる溝跡(第178次)が確認されている。今回の調査では基本層II層上面で溝跡1条(SD2496)、III層上面で溝跡8条(SD2495・2497～2503)、土坑3基(SK2504～2506)、ピット132基を検出した。これらの遺構については、出土遺物や方向から官衙に伴うものであるかを判断することは困難である。

なお、調査区壁からは漆を入れる容器として使用したと推測される須恵器の平瓶が出土しているが、これまでに漆が付着した平瓶は43次、44次、91次、236次、241次、265次調査区などでも出土している。過去の出土事例では、I期官衙の工房とみられる建物跡や、方四町II期官衙の縁辺部からの出土が多い。今回、290次調査区で漆容器とみられる平瓶が出土したことにより、I期官衙の南東外側あるいは方四町II期官衙内の南東部で漆を使用した作業が行われていた可能性が考えられるが、I期官衙南東外側を想定するとI期官衙の中枢部前面にあたるため、II期官衙に関連する可能性が高いと考えられる。

今回の第290次調査では、郡山遺跡I期官衙の南東外側および方四町II期官衙内の南東部において、溝跡や土坑が検出された。遺構の時期は不明であるが、調査区内出土遺物から周辺で漆を使用した作業が行われていた可能性が考えられる。官衙における漆を使用した工房等の実態についてはいまだ不明な点が多く、今後も周辺での調査事例を重ねて検討していく必要がある。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1985 『郡山遺跡V』 仙台市文化財調査報告書第74集
- 仙台市教育委員会 1992 『郡山遺跡XII』 仙台市文化財調査報告書第161集
- 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編(1)』 仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡25』 仙台市文化財調査報告書第284集
- 仙台市教育委員会 2006 『郡山遺跡26』 仙台市文化財調査報告書第296集
- 仙台市教育委員会 2007 『郡山遺跡27』 仙台市文化財調査報告書第307集
- 仙台市教育委員会 2014 『郡山遺跡34』 仙台市文化財調査報告書第429集
- 仙台市教育委員会 2017 『郡山遺跡37』 仙台市文化財調査報告書第460集



1. 調査区全景遺構検出
状況（西から）



2. 調査区全景遺構検出
状況（東から）



3. 調査区全景遺構完掘
状況（西から）



4. 調査区全景遺構完掘
状況（東から）



5. SD2503 溝跡検出状況（南から）



6. SD2500・2503 溝跡断面（北から）



7. SD2501 溝跡断面（西から）



8. SD2497 溝跡断面（北から）



1. SD2496 溝跡断面 (北から)



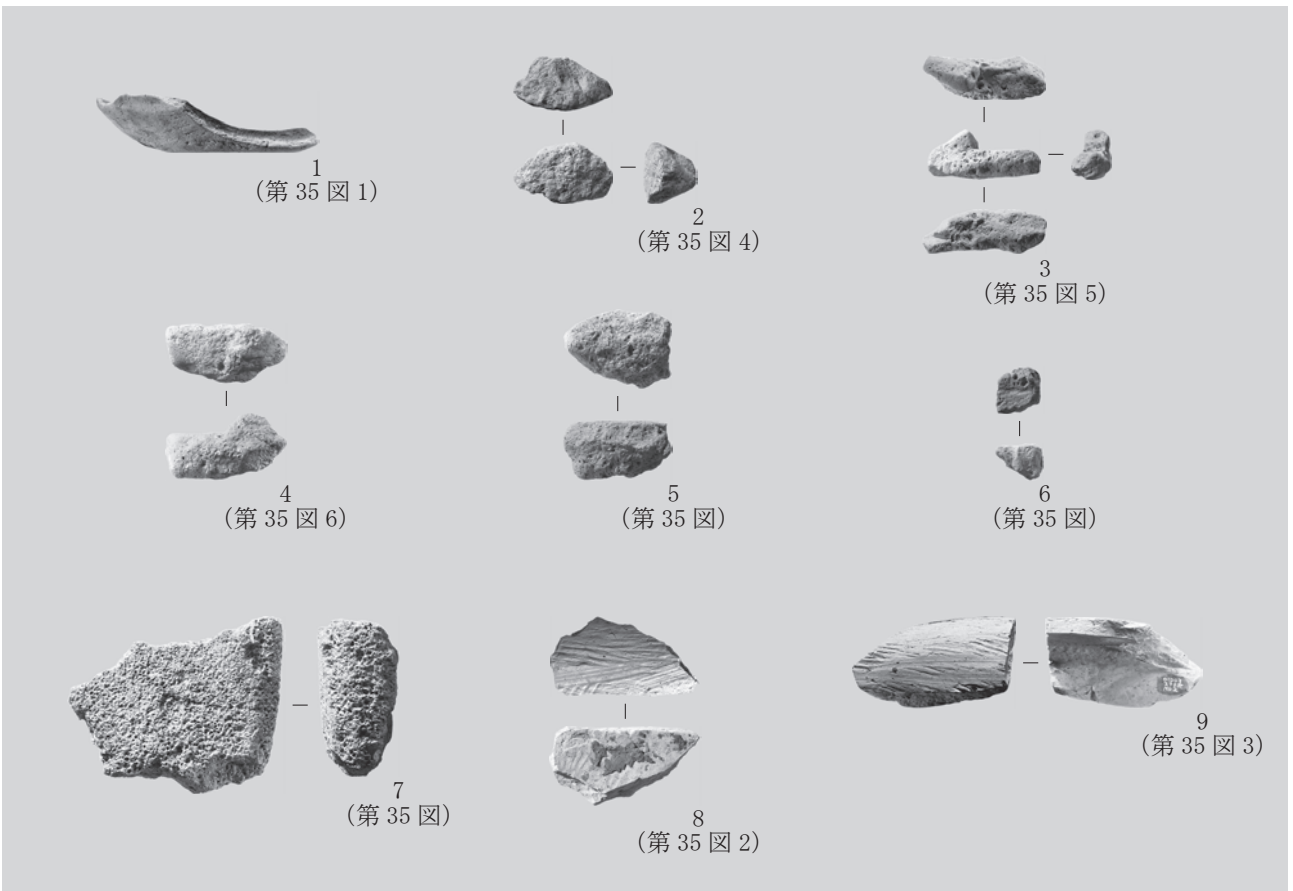
2. SD2499 溝跡断面 (北から)



3. SK2505 土坑断面 (北西から)



4. SK2505 土坑完掘状況 (南から)



写真図版 14 郡山遺跡第290次調査(2)・出土遺物

第3節 第293次調査

1. 調査要項

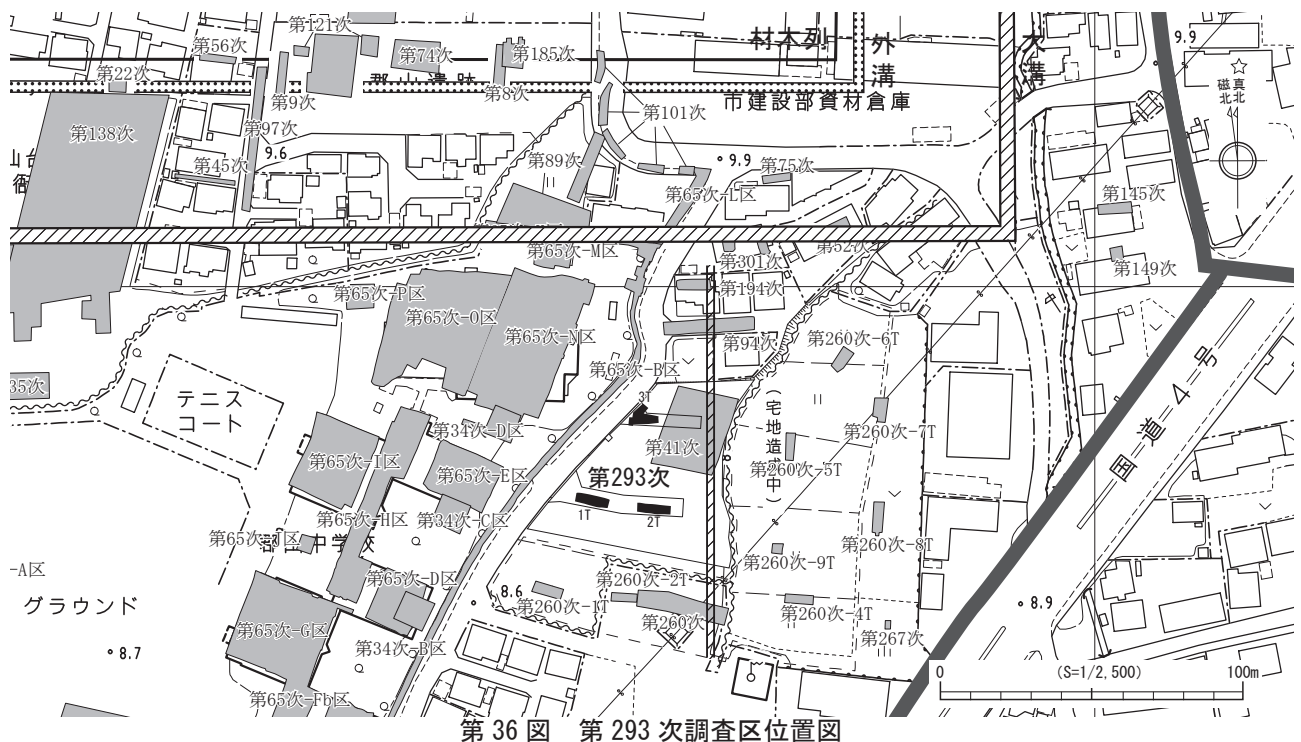
遺 跡 名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山五丁目 214 番 1、214 番 26
調 査 期 間	平成 31 年 2 月 18 日～ 20 日
調査対象面積	378.60 m ² （敷地面積：2655.44 m ² ）
調 査 面 積	88.83 m ² （1T：30.0 m ² 2T：30.0 m ² 3T：28.83 m ² ）
調 査 原 因	宅地造成工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主任 及川謙作 主事 小林航 文化財教諭 尾形隆寛 栗和田祥郎

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成 31 年 2 月 7 日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成 31 年 2 月 8 日付 H30 教生文第 105-119 号で回答）に基づき実施した。

調査区は道路建設範囲内に 3ヶ所設定した（1T：南北 3m、東西 10m、2T：南北 3m、東西 10m、3T：南北 2m、東西 5m）。1、2T はいずれも重機により I 層～IV a 層を除去し、IV b 層上面（GL-0.7m）で遺構検出作業を行ったが、遺構や遺物は検出されなかった。3T は I 層を除去し、II 層上面（GL-0.25～0.4m）で遺構検出作業を行ったところ、溝跡 2 条を検出した。遺構の範囲を確認するため、調査区の東側、北東側および西側を一部拡張した。

調査では、1、2T では調査区平面図（S=1/100）、調査区断面図（S=1/20）を作製した。3T では調査区平面図、

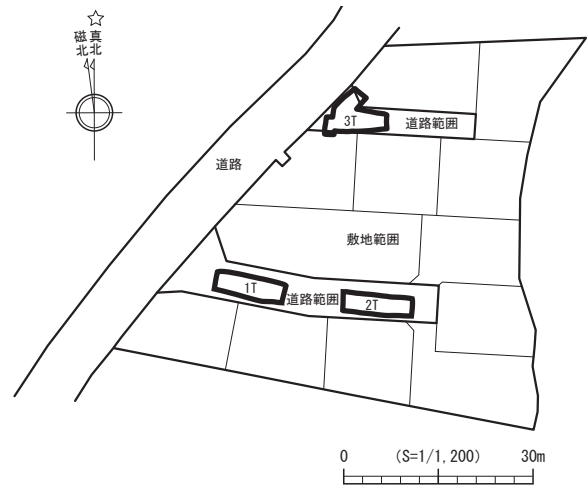


第 36 図 第 293 次調査区位置図

調査区西壁・南壁断面図、遺構断面図 (S = 1/20) を作製した。記録写真の撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、対象地を申請者側に受け渡して調査を終了した。

3. 基本層序

基本層は現代の水田耕作層である I 層以外は、1、2T と 3T では層の状況が異なる。今回の調査では、1、2T では大別 5 層、細別で 9 層確認した。3T では大別 4 層、細別で 5 層確認した。1、2T の古代の遺構検出面である IV b 層までの深度は 0.6m である。3T の古代の遺構検出面である II 層上面までの深度は 0.25m である。



第 37 図 第 293 次調査区配置図

I a 層: 10YR4/2 灰黄褐色シルト。酸化鉄粒を斑状に含む。層厚約 10 cm ~ 20 cm である。現代の水田耕作土である。

I b 層: 10YR4/6 褐色シルト。マンガン粒を斑状に含む。層厚は約 0 cm ~ 10 cm である。現代の水田耕作土の床土である。

1・2T

II a 層: 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。マンガン粒を斑状に含む。下面に凹凸がある。層厚は約 10 cm ~ 20 cm で、層序から中世 ~ 近代の水田耕作土であると考えられる。

II b 層: 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。下面に凹凸がある。層厚は約 4 cm ~ 14 cm で、層序から中世 ~ 近代の水田耕作土で II a 層の床土であると考えられる。

III a 層: 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。マンガン粒を斑状に含む。下面に凹凸があり、下層の土を巻き上げている。層厚は約 4 ~ 14 cm で、層序から古代 ~ 中世の水田耕作土であると考えられる。

III b 層: 10YR4/4 褐色粘土質シルト。層厚は約 5 ~ 8 cm で、層序から古代 ~ 中世の水田耕作土の床土であると考えられる。

IV a 層: 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。地山ブロック (IV b 層) を斑状に含む。下面に凹凸がある。層厚は約 2 ~ 10 cm で、層序から古代の水田耕作土であると考えられる。

IV b 層: 10YR4/6 褐色粘土。ほぼ均質で、層厚は約 10 ~ 16 cm である。古代の遺構検出面であり、IV a 層の床土であると考えられる。

V 層: 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土と 10YR3/1 黒褐色粘土のラミナ状堆積層。

3T

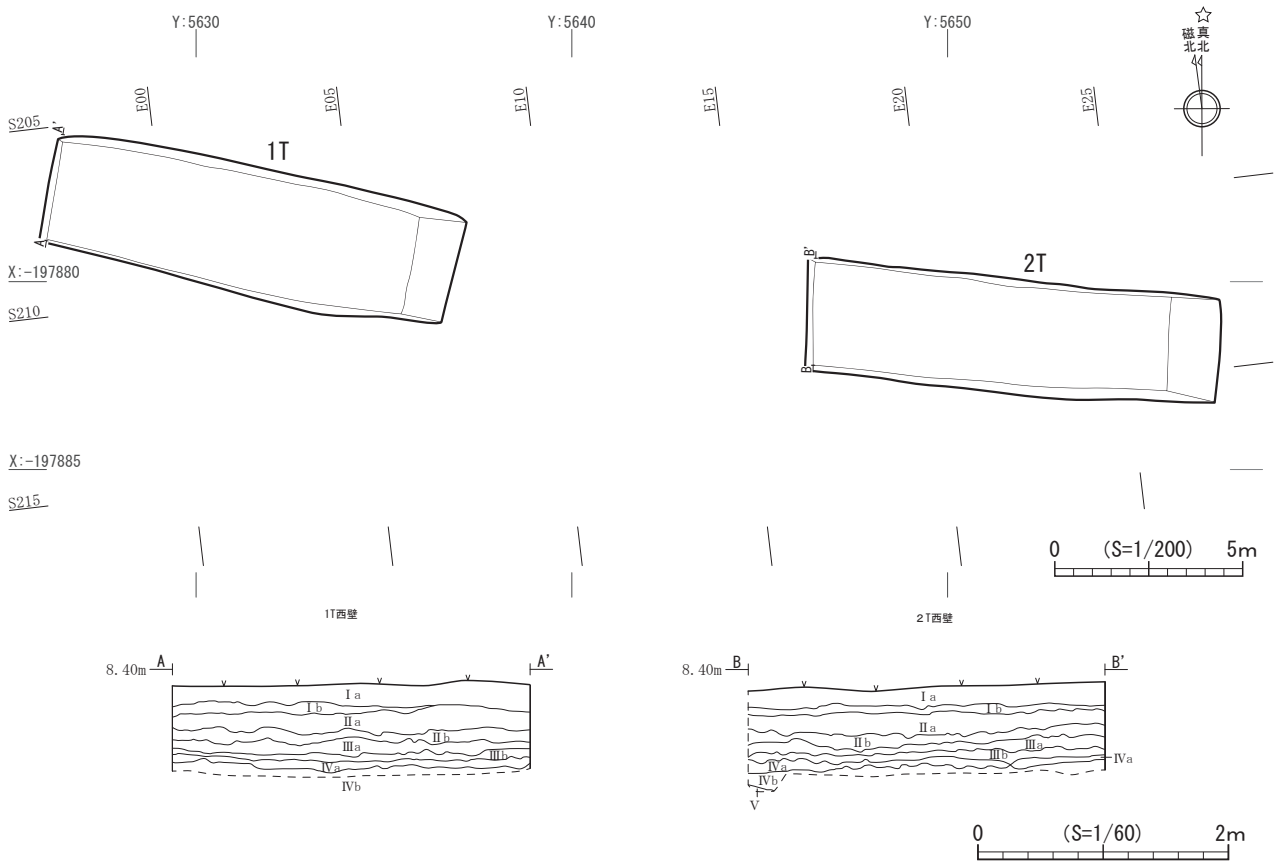
II a 層: 10YR4/4 褐色粘土。締りがやや強い。SD2531 溝跡の東側で検出された。酸化鉄粒を斑状に多量に含む。層厚は約 4 ~ 10 cm で、古代の遺構検出面であり、II b 層とともに整地層の可能性がある。

II b 層: 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土。締りがやや強い。SD2531 溝跡の東側で検出された。II c 層ブロックを巻き上げて下層との境に堆積していること、下面に凹凸があることなどから、II a 層とともに古代以前の整地層の可能性がある。層厚は約 6 ~ 16 cm である。

II c 層: 10YR4/6 褐色粘土。ほぼ均質で、層厚は約 24 cm である。1、2T の IV b 層に相当する。

III 層: 10YR4/4 褐色粘土。マンガン粒を斑状に含む。層厚は約 8 cm である。

IV 層: 10YR4/6 褐色粘土。マンガンブロックを少量含む。層厚は 18 cm 以上である。



第38図 1・2T調査区平面・断面図

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、3T から北東—南西方向の溝跡が2条、平行する形で検出された。遺物は出土していない。

SD2531 溝跡 (第39・40図)

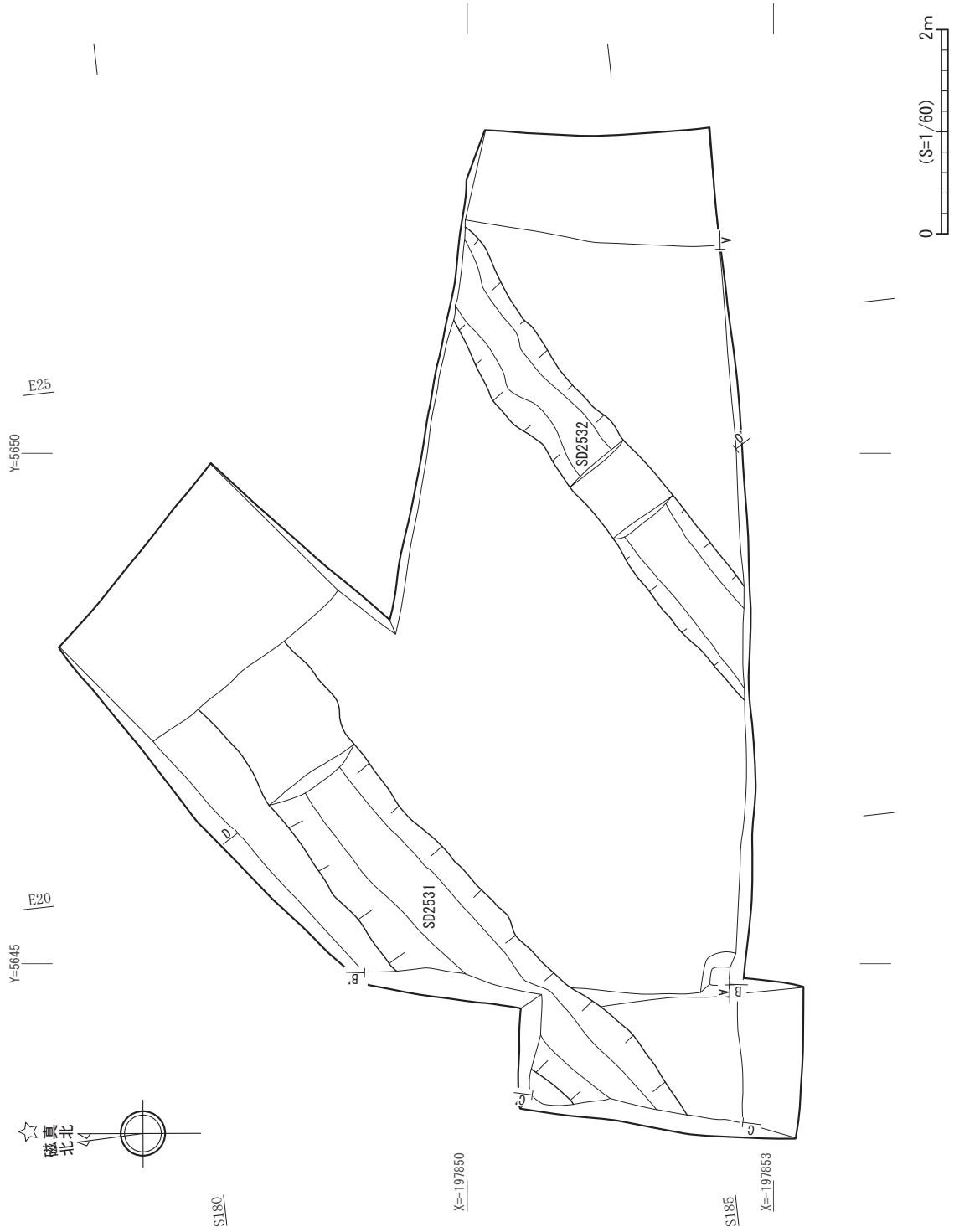
3Tの北西側で検出された北東—南西方向の溝跡である。方位はE-40° -Nである。遺構の規模は、検出長が約6.1m、幅は約1.0m、検出面からの深さは約45～55cmで、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は5～10層に分層される。上層に近い位置に灰白色火山灰を含む層が存在する。遺物は出土していない。

SD2532 溝跡 (第39・40図)

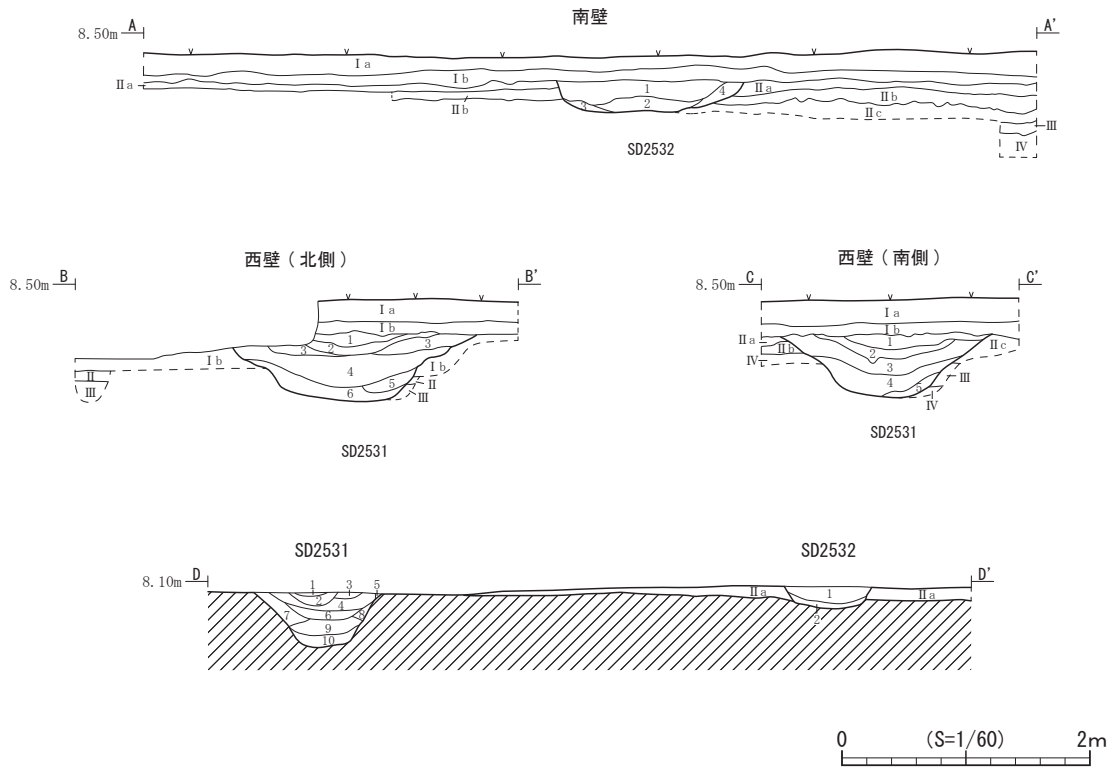
3Tの中央部で検出された北東—南西方向の溝跡である。方位はE-39° -Nで、SD2531 溝跡とほぼ平行する。遺構の規模は、検出長が4.8m、幅は約0.7m、検出面からの深さは約25cmである。断面形状は浅い皿型を呈する。堆積土は2～4層に分層され、地山ブロック(II c層)を斑状に含む層が多い。遺物は出土していない。

5. まとめ

今回の調査では溝跡が2条検出された。SD2531、SD2532 溝跡は、深さなどの規模は若干異なるものの、方位がほぼ同一であることから、一連の遺構の可能性はある。SD2531 溝跡とSD2532 溝跡の距離は、芯々間で約4.0mである。



第39図 3T調査区平面図



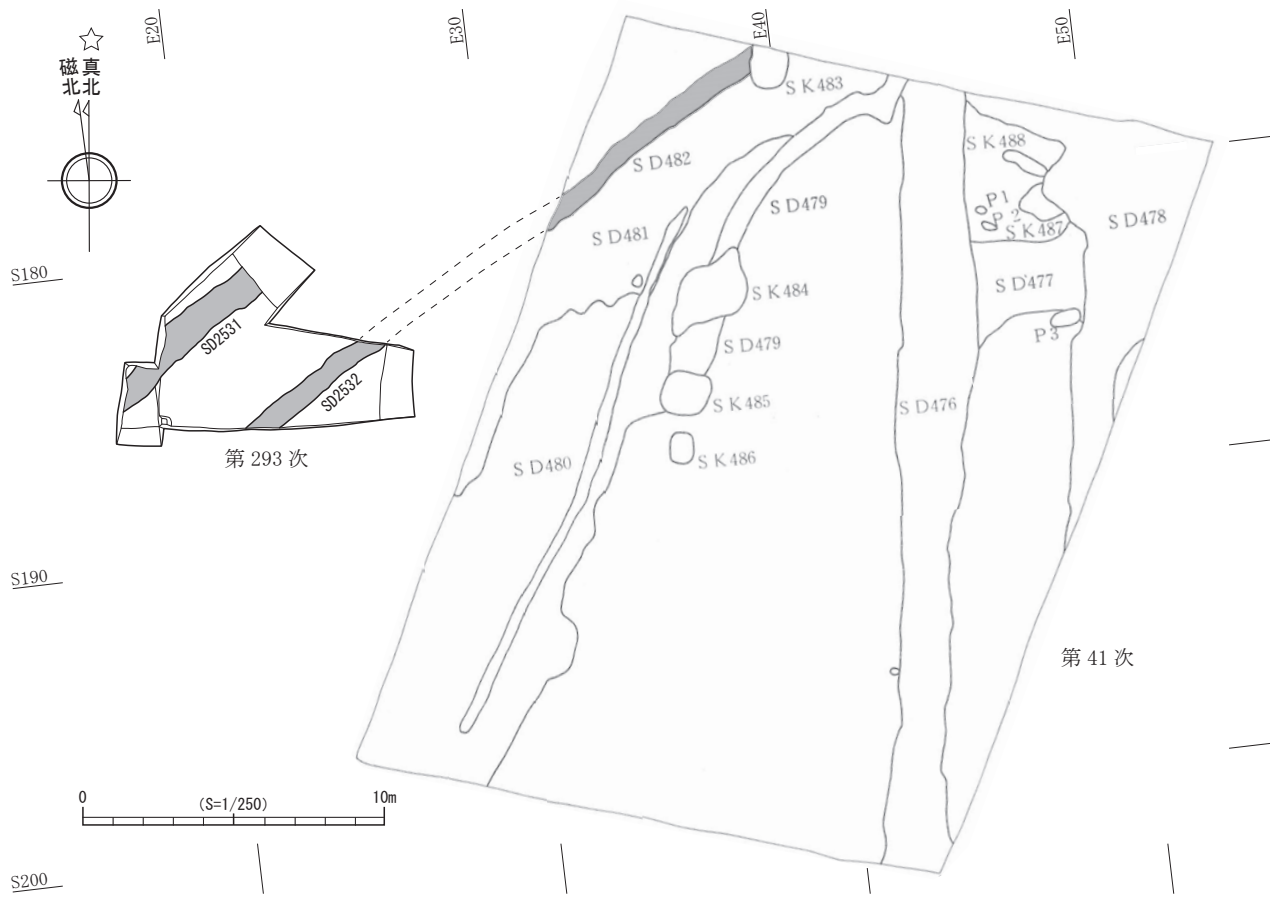
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2531	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン粒 (φ 2mm) を斑状に含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	灰白火山灰層。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	灰白火山灰ブロック (φ 2cm) を少量含む。
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック (φ 2cm) を少量含む。人為堆積層?
	5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック主体。人為堆積層?
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒 (φ 5mm) を少量含む。人為堆積層?
	7	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック主体。8層と対応か。人為堆積層?
	8	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック主体。7層と対応か。人為堆積層?
	9	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック (φ 1cm) を斑状に含む。人為堆積層?
	10	10YR4/6 褐色	粘土	IV層ブロック主体。
SD2532	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	マンガン粒 (φ 5mm) を斑状に含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック (φ 5cm) を斑状に含む。下層との境に酸化鉄堆積。
	3	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	II c 層ブロック主体。
	4	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	マンガン粒 (φ 5mm) を斑状に含む。

第40図 3T調査区・溝跡断面図

なお、SD2532溝跡は、検出された位置から第41次調査で検出されたSD482溝跡と同一の遺構である可能性が高い。またSD2531溝跡よりも東側からは整地層の可能性のある層が確認された。遺物が出土していないため、遺構の詳細な時期は不明だが、SD2531溝跡の最上層に灰白色火山灰が堆積していることから、SD2531溝跡は10世紀第1四半期にはほぼ埋没していたものと考えられる。これらの遺構の詳細な機能については不明であり今後の調査成果の蓄積を待ちたい。

引用・参考文献

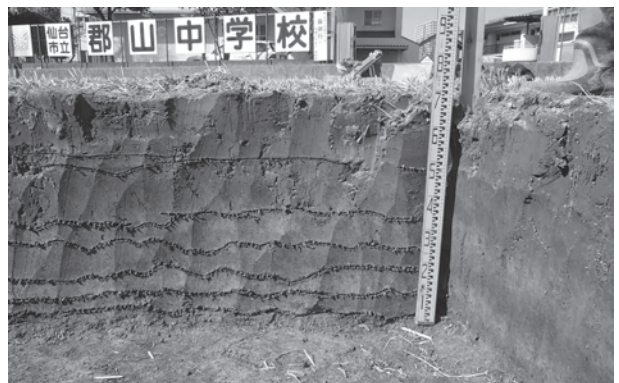
仙台市教育委員会 1984 『郡山遺跡Ⅳ 一昭和58年度発掘調査概報一』 仙台市文化財調査報告書第64集
 仙台市教育委員会 1992 『郡山遺跡 第65次発掘調査』 仙台市文化財調査報告書第156集
 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書 一総括編一』 仙台市文化財調査報告書第285集
 仙台市教育委員会 2017 『沓方遺跡他』 仙台市文化財調査報告書第458集 (郡山遺跡第260次)



第41図 第41次調査区・第293次3T調査区合成図



1. 1 T 全景 (北東から)



2. 1 T 西壁断面詳細 (東から)



1. 2 T 全景（東から）



2. 2 T 西壁断面（東から）



3. 3 T SD2531 溝跡検出状況（南西から）



4. 3 T 検出全景（東から）



5. 3 T SD2531 溝跡調査区西壁断面1（東から）



1. 3T 完掘状況（南西から）



2. 3T SD2532 溝跡調査区南壁断面（北東から）



3. 3T SD2531 溝跡調査区西壁断面2（南東から）



4. 3T SD2531・2532 溝跡土層断面（南西から）



5. 作業風景（南西から）

第4節 第298次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山三丁目1番1、1番9、1番10、2番1
調 査 期 間	令和元年7月17日～8月2日
調査対象面積	1461.85 m ²
調 査 面 積	37.4 m ²
調 査 原 因	宅地造成工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課整備活用係
担 当 職 員	整備活用係 主事 庄子裕美 文化財教諭 三浦昂也

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和元年5月29日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和元年6月3日付H31 教生文第101-025号で回答）に基づき、令和元年7月17日～8月2日に実施した。

調査区は対象地内の南北約1.1m、東西約34mの範囲とし、はじめに重機を用いて盛土および基本層Ⅰ、Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、竪穴住居跡1軒と溝跡4条、土坑9基、性格不明遺構1基、ピットを検出した。平面図（S=1/20）および断面図（S=1/20）を適宜作製し、写真記録はデジタルカメラにより撮影した。8月2日に現地での調査機材の撤収作業を行い、調査を終了した。

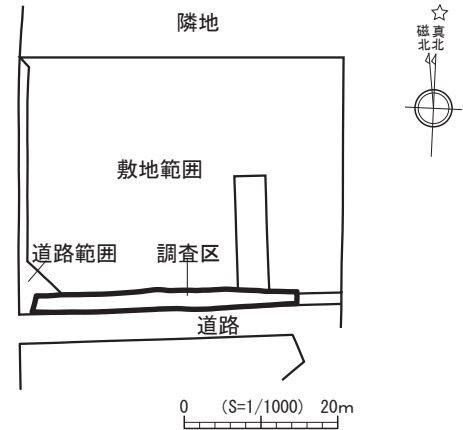


第42図 第298次調査区位置図

3. 基本層序

今回の調査では盛土（層厚約 25～90cm）の下に基本層を大別で3層確認した。今回の遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは0.5～1.0mである。

- I 層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。酸化鉄粒と炭化物粒を微量に含む。現代の畑の耕作土である。
- II 層：10YR4/4 褐色粘土。10YR5/6 黄褐色粘土粒および小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。畑の耕作土である。
- III 層：10YR5/6 黄褐色粘土。10YR4/4 褐色粘土を少量、マンガン粒を微量含む。



第43図 第298次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡1軒と溝跡4条、土坑9基、性格不明遺構1基、ピットを検出した。遺物は竪穴住居跡などから土師器や須恵器などが出土している。

(1) 竪穴住居跡

SI2534 竪穴住居跡（第44・45図）

【位置】調査区の東部で検出した。

【重複】SK2542、2545 土坑、P4 と重複しており、各遺構より古い。

【規模・形状】調査区の幅が狭く、住居跡の掘り方のみの検出であったため規模は不明だが、東辺が1.1m以上、南辺が0.66m以上確認しており、平面形は方形と推測される。

【方位】住居跡の東壁を基準にするとN-44°-Wである。

【堆積土】2層に分層された。ともに住居跡掘り方埋め土で、住居跡の東部と南部で残存していた。掘り方の深さは0～32cmである。

【床面】住居跡掘り方のみの残存であったため、床面は削平され確認できない。

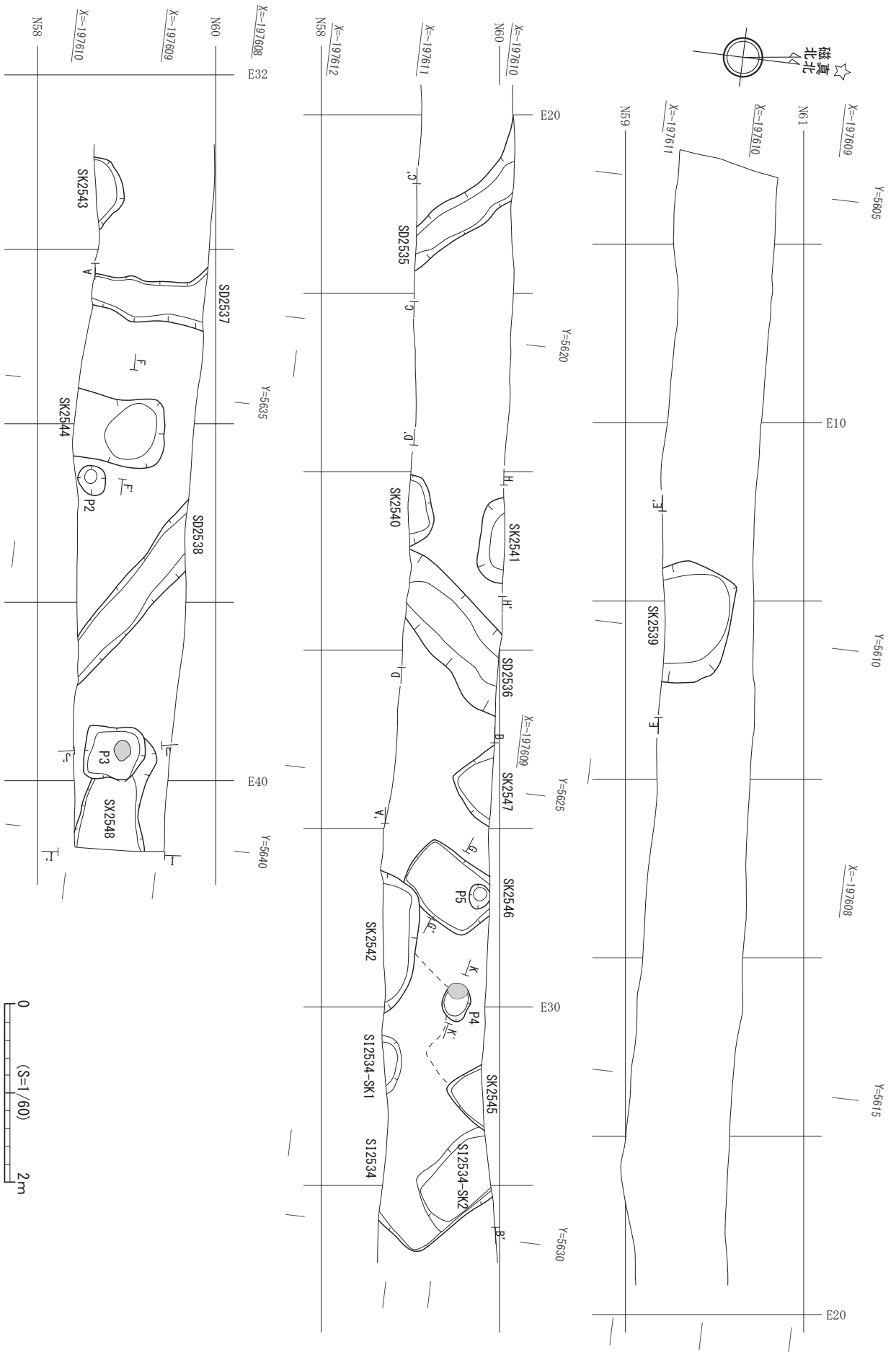
【その他の施設】調査区の南壁際で住居跡に伴うと考えられる土坑1基（SI2534-SK1）と住居跡掘り方底面で土坑1基（SI2534-SK2）を確認した。SI2534-SK1 土坑の規模は径が70cm以上で、調査区の南壁外に延びる。平面形は遺構の南側が調査区外に広がっているため、不明である。深さは14cmである。断面形状はU字状で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層され、炭化物や焼土を含んでいる。SI2534-SK2 土坑は住居跡東壁に沿って確認された。規模は長軸が96cm以上、短軸が66cm、深さは28cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。堆積土は2層に分層された。堆積土は基本層Ⅲ層起源の黄褐色粘土ブロックを多く含んでおり、埋め戻されている。

【出土遺物】SI2534-SK1 土坑から土師器と須恵器が出土しており、このうち土師器碗（第47図1）と須恵器甕（同図2）を図化した。1は内外面共にヘラミガキ・黒色処理が施される。

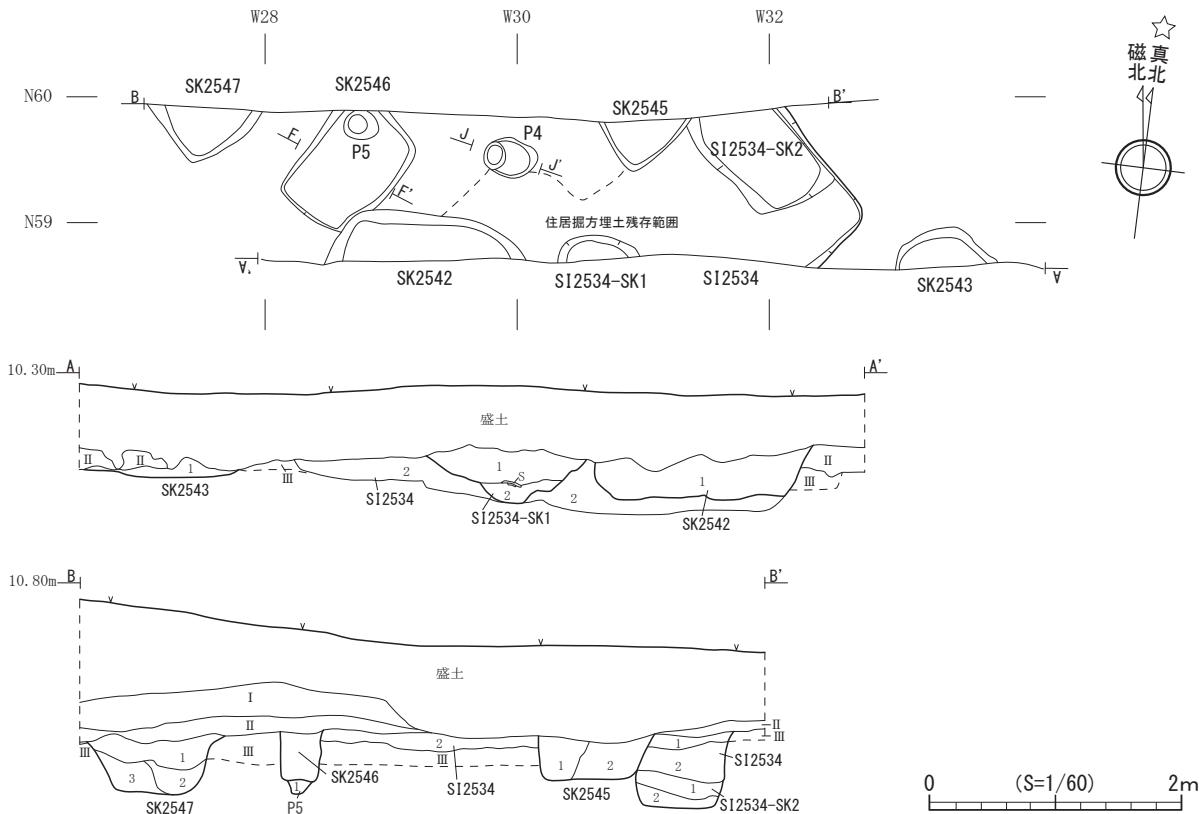
(2) 溝跡

SD2535 溝跡（第44・46図）

調査区の中央部で検出した北西から南東方向の溝跡で、方位はN-43°-Wである。検出長は1.40m、上端幅は36～42cm、下端幅は18～24cm、深さは10cmである。断面形状は皿状を呈し、堆積土は単層で、Ⅲ層起源の黄褐色粘土ブロックを多く含む褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。



第44図 第298次調査区平面・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
S12534	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒をやや多く含む。炭化物粒を微量に含む。(掘方埋土)
	2	10YR4/4 褐色	粘土	黄褐色粘土粒・ブロックをやや多く含む。(掘方埋土)
S12534-SK1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土小ブロックを少量含む。炭化物粒を微量含む。焼土粒を微量含む。
	2	7.5YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む。炭化物粒を少量含む。焼土を少量含む。
S12534-SK2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒をやや多く含む、ブロックを少量含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを多く含む。
SK2542	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを少量含む。
SK2543	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
SK2545	1	10YR2/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む。マンガンを微量含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。酸化鉄を少量含む。
SK2547	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒を微量含む。マンガンを微量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒をやや少量含む。酸化鉄を微量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土小ブロックを多く含む。酸化鉄を少量含む。
P5	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む。

第45図 SI2534 竪穴住居跡・土坑平面・断面図

SD2536 溝跡 (第44・46図)

調査区の中央で検出した北東から南西方向の溝跡で、方位はN-35°-Eである。検出長は1.4m、上端幅は67~80cm、下端幅は25~37cm、深さは20cmである。断面形状は皿状を呈し、堆積土は単層で、Ⅲ層起源の黄褐色粘土ブロックを多く含むにぶい黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

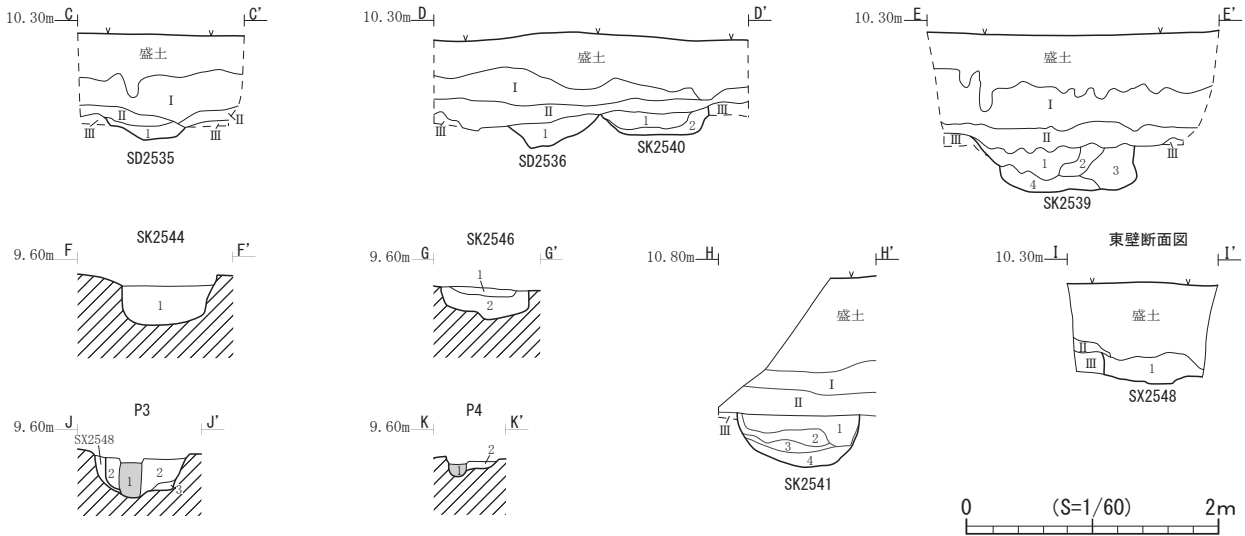
SD2537 溝跡 (第44図)

調査区の東部で検出した南北方向の溝跡で、方位はN-5°-Eである。検出長は1.24m、上端幅は35~72cm、下端幅は24~55cm、深さは6cmである。遺物は土師器片と鉄滓が出土している。

SD2538 溝跡 (第44図)

調査区の東部で検出した北西から南東方向の溝跡で、方位はN-57°-Wである。検出長は2.0m、上端幅は40~48cm、下端幅は27~34cm、深さは5cmである。堆積土は単層で、Ⅲ層起源の黄褐色粘土ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

第4節 第298次調査



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2535	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	細かい酸化鉄が混ざる。炭化物を少量含む。
SD2536	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を多く含む。
SK2539	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を多く含む。2層よりも占める割合が高い。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	6層よりも含まれる酸化鉄が細かく、酸化鉄を含む割合が高い。
	3	10YR4/2 灰黄褐色～10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を含む。含まれている酸化鉄粒がやや大きい。遺物を含む層。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトブロックを斑状に含む。下部の方で粘性が強くなる。下部の方でφ2～3程度の酸化鉄を含む。
SK2540	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	上下の層に比べて含まれる酸化鉄が少ない。
	2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロックを含む。下部でφ2～3cm程度の酸化鉄を含む。
SK2541	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	褐色粘土ブロックを多く含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土小ブロックを少量含む。炭化物粒を微量含む。酸化鉄粒をやや多く含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを非常に多く含む。炭化物粒を微量含む。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土小ブロックを少量含む。
SK2544	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロックを少量含む。 にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。
SK2546	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	黄褐色粘土小ブロックを少量含む。炭化物粒を少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
SX2548	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒を微量含む。(柱痕跡)
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を粒・小ブロックをやや多く含む。(掘方埋土)
P3	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を粒・小ブロックをやや多く含む。(掘方埋土)
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒を少量含む。(掘方埋土)
P4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを多量含む。酸化鉄を少量含む。(柱痕跡)
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土小ブロック・粒を多く含む。炭化物粒を微量含む。(掘方埋土)

第46図 溝跡・土坑・性格不明遺構・ピット断面図

(3) 土坑

SK2539 土坑 (第44・46図)

調査区の西部で検出した。南側は調査区外であるが、平面形は不整形を呈すると考えられる。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で東壁は緩やかに、西壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は東西長 137cm、南北長 74cm 以上、深さが 35cm である。堆積土は4層に分層された。遺物は出土していない。

SK2540 土坑 (第44・46図)

調査区の中央部で検出した。南側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形は皿形を呈し、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。規模は東西長 80cm、南北長 29cm 以上、深さは 19cm である。堆積土は2層に分層された。遺物は須恵器片が出土している。

SK2541 土坑 (第44・46図)

調査区の中央部で検出した。北側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形はU字形を呈す。規模は東西長 96cm、南北長 30cm 以上、深さは 41cm である。堆積土は4層に分層され、最下層はⅢ層起源の黄褐色粘土ブロックを多く含んでいる。

SK2542 土坑 (第44・45図)

調査区の中央部で検出した。SI2534 竪穴住居跡とSK2546 土坑と重複し、各遺構より新しい。南側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は東西長 162cm、南北長 41cm 以上、深さは 34cm である。堆積土は単層である。遺物は土師器片と須恵器片と鉄滓が出土している。

SK2543 土坑 (第44・45図)

調査区の東部で検出した。南側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形は皿形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。規模は東西長 81cm 以上、南北長 32cm 以上、深さが 6cm である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK2544 土坑 (第45・46図)

調査区の東部で検出した。南側は調査区外であるが、平面形は長方形を呈すると考えられる。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は南北長 131cm 以上、東西長 73cm、深さは 41cm である。堆積土は単層で、暗褐色粘土にⅢ層起源の粘土ブロックが多く含まれており、人為的埋土と考えられる。遺物は土師器片と鉄滓が出土している。

SK2545 土坑 (第44・45図)

調査区の中央部で検出した。SI2534 竪穴住居跡と重複しており、新しい。北側は調査区外であるが、平面形は方形、または長方形を呈すると考えられる。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は東西長 74cm 以上、南北長 40cm 以上、深さは 35cm である。堆積土は2層に分層された。遺物は出土していない。

SK2546 土坑 (第45・46図)

調査区の中央部で検出した。底面からはP5を確認した。北側の一部は調査区外であるが、平面形は長方形を呈する。断面形はU字形を呈し、底面には段がある。規模は東西長 104cm、南北長 74cm、深さは 27cm である。堆積土は2層に分層された。遺物は土師器片が出土している。

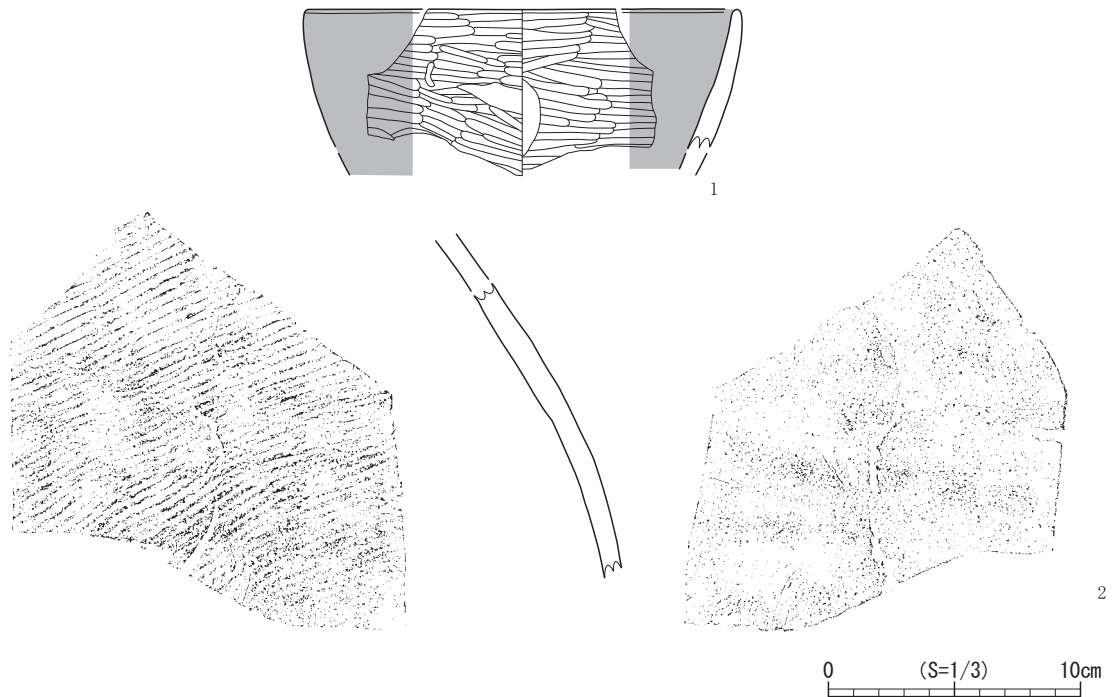
SK2547 土坑 (第44・45図)

調査区の中央部で検出した。北側が調査区外のため、平面形は不明であるが、方形の可能性が考えられる。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は南西辺 60cm 以上、南東辺 70cm 以上、深さは 43cm である。堆積土は3層に分層された。遺物は土師器片と鉄滓が出土している。

(4) 性格不明遺構

SX2548 性格不明遺構 (第44・46図)

調査区の東壁際で検出した。P3と重複しており、これよりも古い。一部の検出であり、溝跡の可能性も考えられるため、性格不明遺構とした。平面形は不明で、断面形は皿形を呈し、壁はほぼ直立して立ち上がり、底面には凹凸がみられる。規模は検出長が 133cm、幅が 67～88cm、深さは 25cm である。堆積土は単層で、Ⅲ層起源の黄褐色粘土粒を多く含む暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1322	SI2534-SK1	堆積土	土師器	碗	(17.0)	-	(6.6)	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海面骨針含む	20-1
2	E-642	SI2534-SK1	堆積土	須恵器	甕	-	-	(13.7)	平行タタキ目	ロクロナデ→ナデ	体部破片 胎土緻密 砂粒含む	20-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
-	N-161	SK2542	堆積土	鉄滓	碗形滓	5.3	5.7	2.9	重さ:81.9 g	20-3
-	N-162	SK2544	堆積土	鉄滓	-	6.2	4.8	3.3	7点 重さ:238.0 g	20-4
-	N-163	SK2544	堆積土	鉄滓	-	4.5	4.0	2.4	3点 重さ:22.9 g	20-5

第47図 竪穴住居跡・土坑出土遺物

(5) ピット (第44～46図)

ピットを4基検出した。ピットの規模は径が21～69cm、深さは16～38cmである。建物跡や柱列を構成する配列は確認されなかった。このうち柱痕跡を有するものはP3とP4である。柱痕跡の径はP3で23cm、P4で19cmである。またP3の柱穴の掘り方の形状は隅丸方形を呈し、一辺が約60cmである。

5. まとめ

第298次調査地点は、郡山遺跡の方四町Ⅱ期官衙の東部中央に位置する。本調査区の北側では竪穴住居跡や溝跡が検出されている(第158次調査)。第158次調査で検出された竪穴住居跡は、削平を受け残存状況が悪く、遺物は出土していないが、住居跡の主軸方向からⅡ期官衙段階の遺構である可能性が指摘されている。

今回の調査では、竪穴住居跡1軒、溝跡4条、土坑9基、性格不明遺構1基、ピット4基を検出した。検出された竪穴住居跡は掘り方埋め土のみが残存している状況で、溝跡も浅い。第158次調査でも削平を受けており、調査区の周辺は耕作などの影響で遺構の残存状況が悪いと考えられる。

参考文献

仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書 一総括編一』 仙台市文化財調査報告書第283集
 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡25—平成16年度発掘調査概報—』 仙台市文化財調査報告書第284集



1. 遺構完掘状況（東から）



2. SI2534 竪穴住居跡完掘状況（東から）



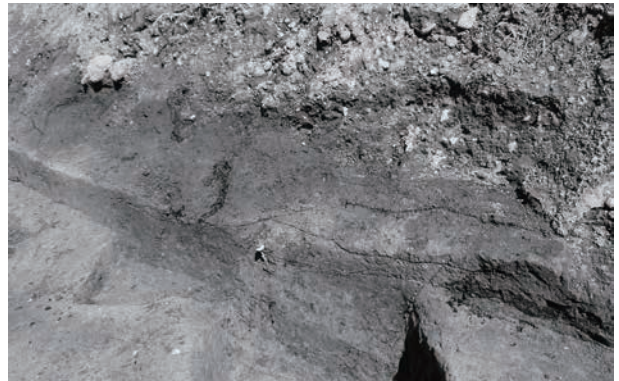
1. 遺構確認状況（西から）



2. S12534 竪穴住居跡検出状況（東から）



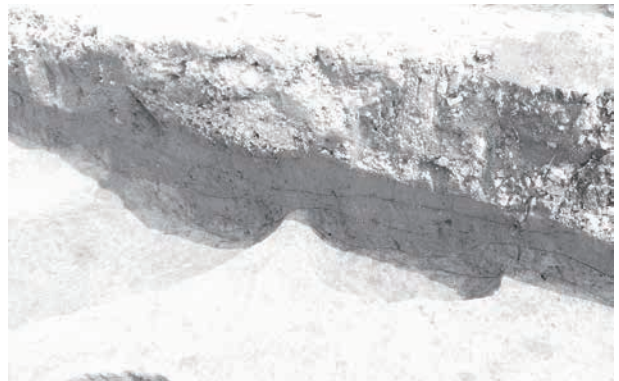
3. S12534 竪穴住居跡断面（北から）



4. S12534 竪穴住居跡断面（北西から）



5. S12534-SK1 土坑断面（北から）



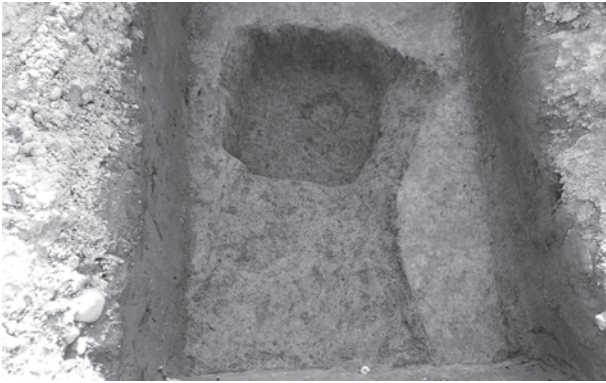
6. SD2536 溝跡・SK2540 土坑断面（北から）



7. SK2539 土坑完掘状況（北から）



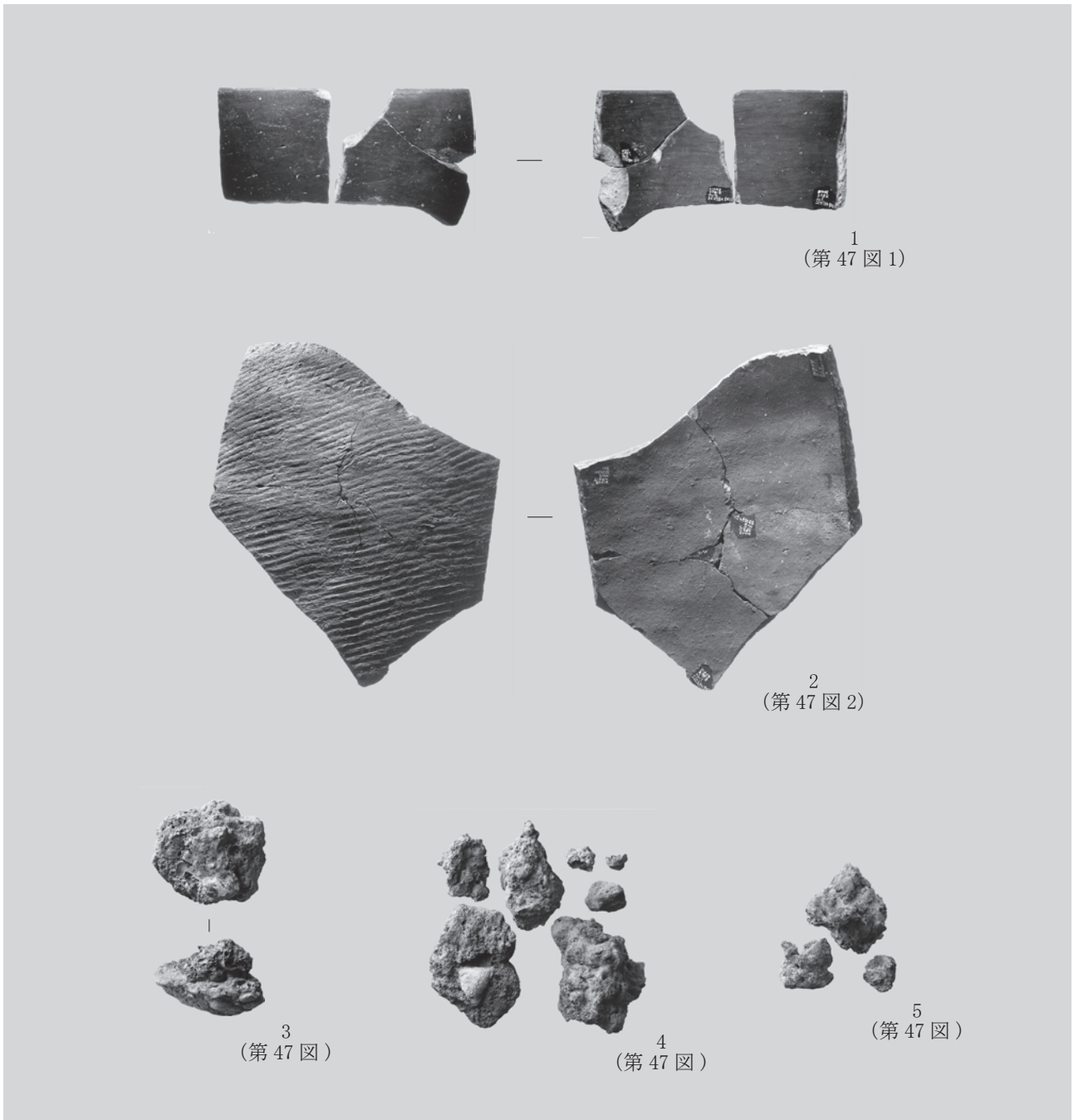
8. SK2544 土坑完掘状況（南から）



1. P3・SX2548 性格不明遺構完掘状況（東から）



2. P3 断面（西から）



1
(第47図1)

2
(第47図2)

3
(第47図)

4
(第47図)

5
(第47図)

写真図版 20 郡山遺跡第298次調査(3)・出土遺物

第5節 第300次調査

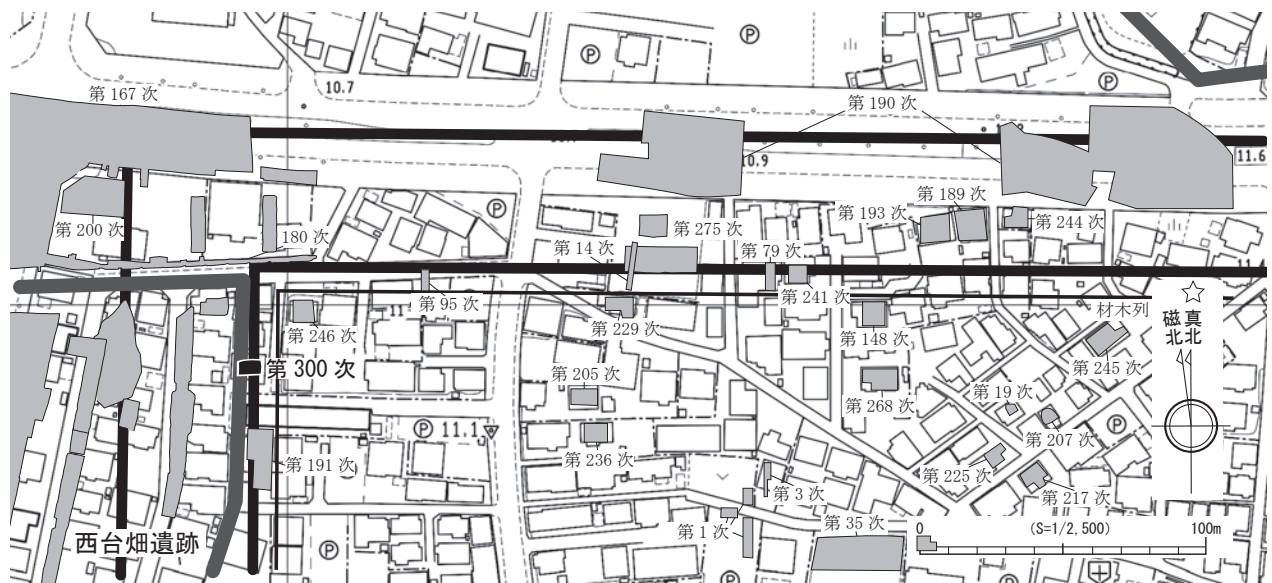
1. 調査要項

遺 跡 名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山二丁目 14 番 14 号
調 査 期 間	令和元年 10 月 2 日～令和元年 10 月 4 日
調査対象面積	104.34 m ²
調 査 面 積	30 m ²
調 査 原 因	集合住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課整備活用係・調査調整係
担 当 職 員	整備活用係 主事 庄子裕美 文化財教諭 三浦昂也 調査調整係 文化財教諭 元山祐一

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和元年 8 月 1 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和元年 8 月 2 日付 H31 教生文第 102-045 号で回答）に基づき、令和元年 10 月 2 日～10 月 4 日に実施した。

調査区は対象地内に南北約 4m、東西約 5m の範囲で設定した。重機を用いて盛土および基本層 I 層を除去し、基本層 II 層上面で遺構確認作業を行った。その結果、調査区の東側で南北方向の溝跡が確認された。溝跡の東側の上端が確認出来なかったため、調査区を東側に拡張した。なお、この調査では建物の建築計画の関係上、遺構の掘り下げの深さを現地表面から 1.2m までに留めている。調査では平面図（S = 1/40）および断面図（S = 1/20）を適宜作製し、写真記録はデジタルカメラにより撮影した。10 月 4 日に現地での調査機材の撤収作業を行い、調査を終了した。



第 48 図 第 300 次調査区位置図

3. 基本層序

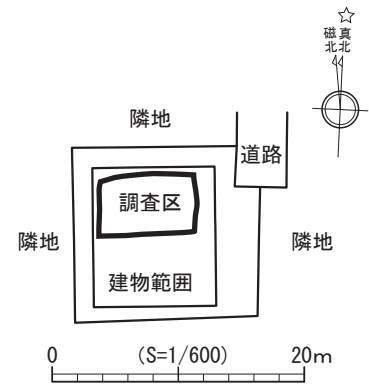
今回の調査では、盛土（層厚約40～74cm）の下に基本層を2層確認した。今回の遺構検出面であるⅡ層上面までの深さは0.6mである。

Ⅰ層：10YR3/3 暗褐色粘土。酸化鉄粒をやや多く、黄褐色粘土ブロックを少量含む。旧耕作土と考えられる。

Ⅱ層：10YR5/6 黄褐色粘土。酸化鉄粒を微量、砂を多量に含む。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡1条とピット2基を検出した。



第49図 第300次調査区配置図

(1) 溝跡

SD2551 溝跡 (第50図)

調査区の東部で検出された南北方向の溝跡で、調査区外に延びる。方位は $N-4^{\circ}-E$ で、検出長は3.9m、上端幅は3.88m、下端幅は溝跡の底面を検出していないため不明である。深さは56cm以上ある。断面形は不明であるが、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土は8層に分層された。すべて自然堆積層である。下層には砂が含まれている。遺物は堆積土から土師器片や須恵器片が出土しているが、その多くが小破片である。このうち須恵器高台付坏(第51図1)と須恵器甕(同図2)を図化した。

(2) ピット (第50図)

ピットは2基検出された。いずれも調査区の東部で確認した。規模は径23～46cm、深さは約20cmである。いずれも柱痕跡は確認されなかった。出土遺物は出土していない。

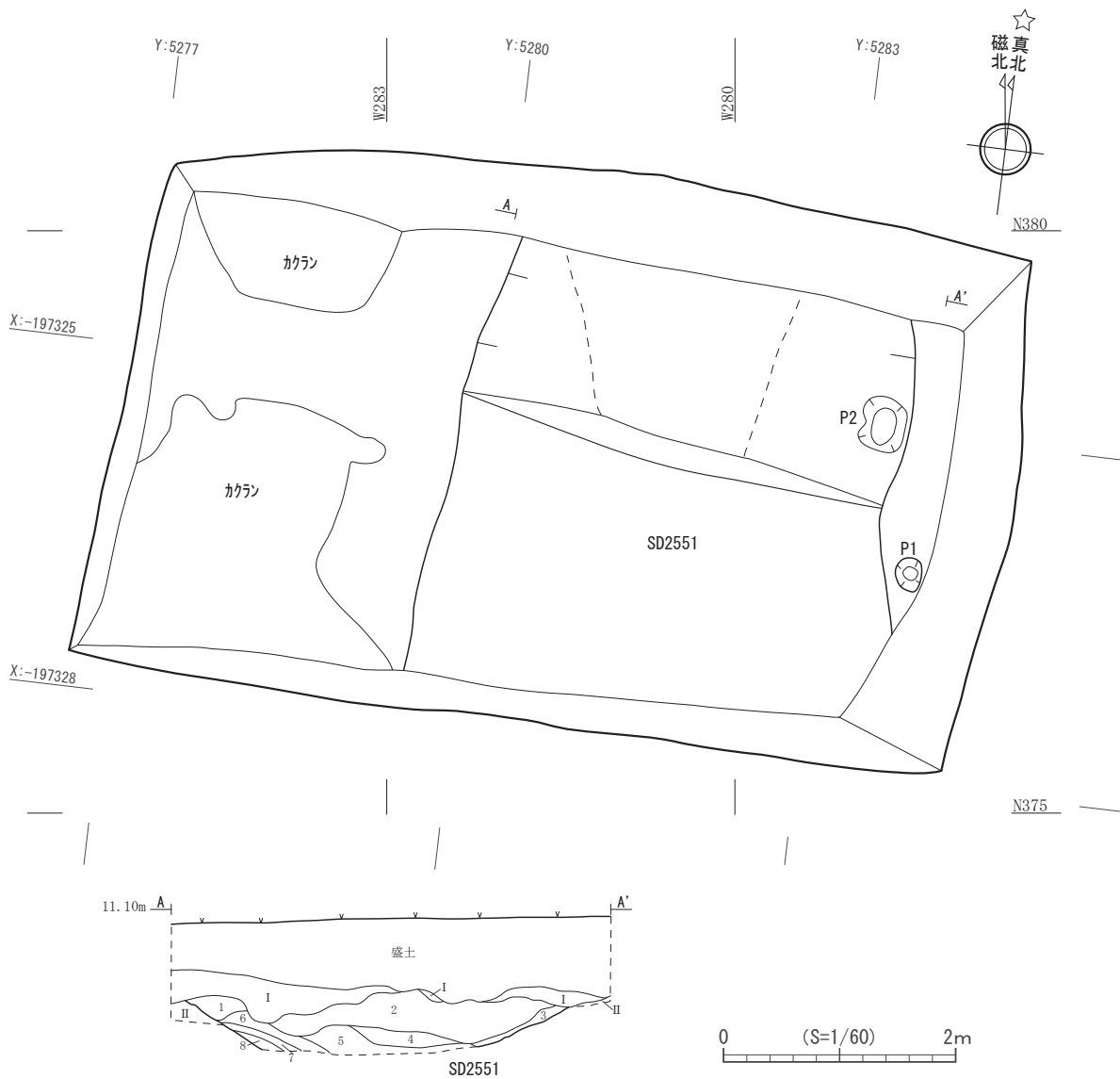
5. まとめ

今回の調査地点は、郡山遺跡の北西部に位置し、方四町Ⅱ期官衙西辺の大溝上にあたり、西台畑遺跡に隣接する。今回の調査では、溝跡1条とピット2基を検出した。SD2551 溝跡は南北方向の溝跡で、規模や断面形状など、これまでに確認された方四町Ⅱ期官衙大溝と類似している。また、検出した位置から、第16次調査と第80次調査で検出されている方四町Ⅱ期官衙の西辺大溝(SD132 溝跡)と同一のものと考えられる(第52図)。

これまで郡山遺跡の北西部では、第191次調査では攪乱により遺構面が削平されているなど、方四町Ⅱ期官衙西辺の大溝は検出されていなかったが、今回の調査で初めて確認された。郡山遺跡の北部の第95次調査や第241次調査では方四町Ⅱ期官衙北辺の大溝が検出されているが、河川跡で削平されている地点も多く不明な点が多い。今後の調査成果を待ち、あらためて検討していく必要がある。

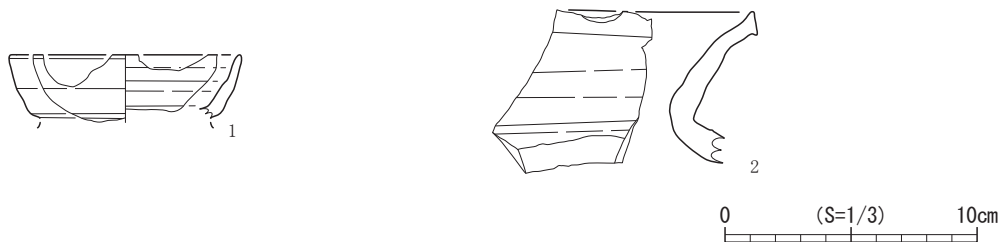
参考文献

- 仙台市教育委員会 1982 『宮城県仙台市郡山遺跡Ⅱ』 仙台市文化財調査報告書第38集
- 仙台市教育委員会 1989 『宮城県仙台市郡山遺跡Ⅸ』 仙台市文化財調査報告書第124集
- 仙台市教育委員会 1993 『宮城県仙台市郡山遺跡ⅩⅢ』 仙台市文化財調査報告書第169集
- 仙台市教育委員会 2005 『宮城県仙台市郡山遺跡発掘調査報告書総括編(1) 仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2013 『郡山遺跡第167・180・190次調査』 仙台市文化財調査報告書第412集



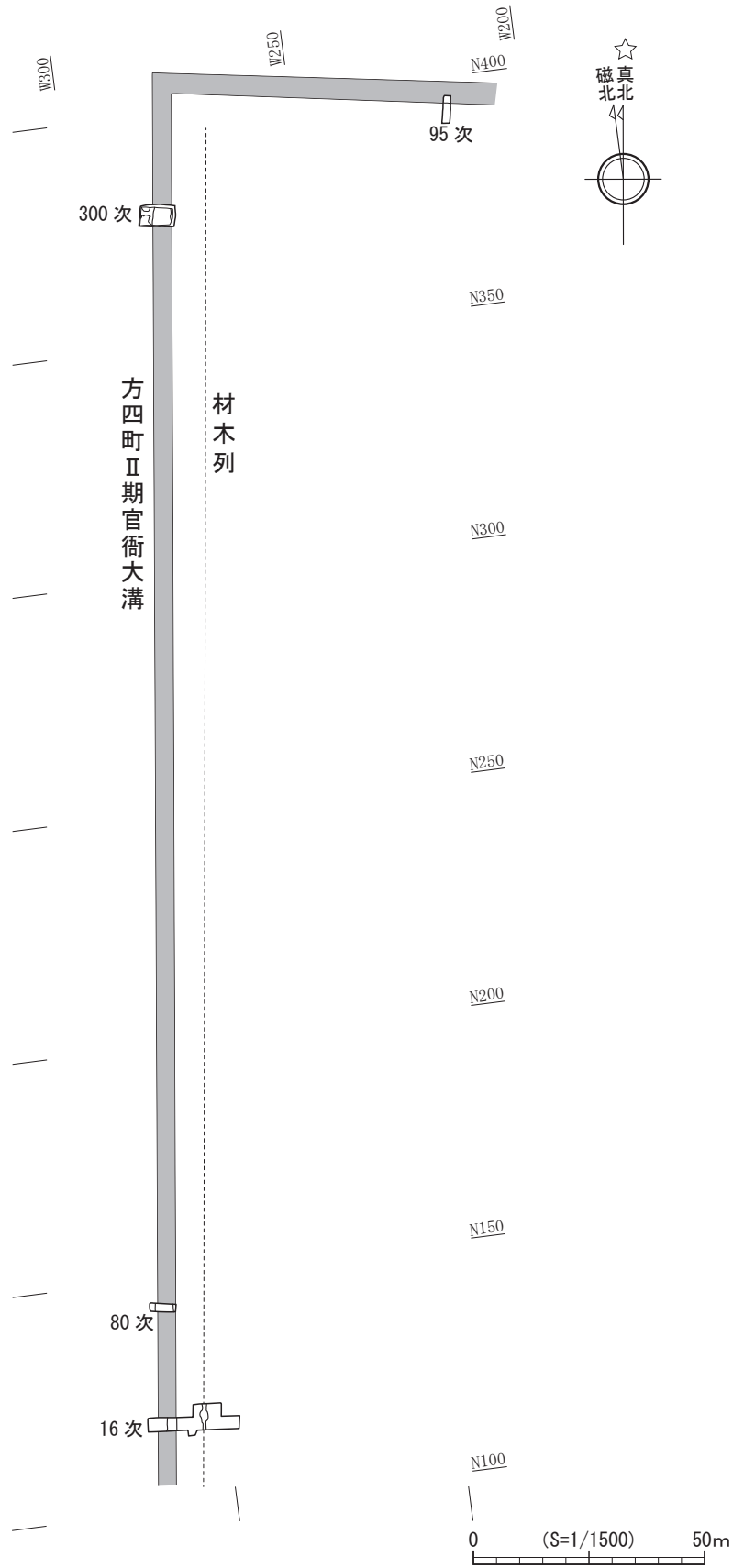
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2551	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガンを微量含む。黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を微量含む。
	3	10YR4/4 褐色	粘土	砂を少量含む。黄褐色粘土粒をやや多く含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物を微量含む。
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒を微量含む。灰黄褐色粘土粒をやや多く含む。
	6	10YR4/4 褐色	粘土	炭化物粒を微量含む。砂を少量含む。
	7	10YR4/4 褐色	粘土	炭化物を微量含む。黄褐色粘土粒をやや多く含む。砂を少量含む。
	8	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	砂を多く含む。暗褐色粘土粒を少量含む。黄褐色粘土粒を多く含む。

第50図 第300次調査区平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-646	SD2551	堆積土	須恵器	高台付 坏	(9.2)	-	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む 内面スス付着	21-1
2	E-647	SD2551	堆積土	須恵器	甕	-	-	(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒少量含む 自然釉付着	21-2

第51図 溝跡出土遺物



第52図 郡山遺跡 方四町Ⅱ期官衙大溝位置図



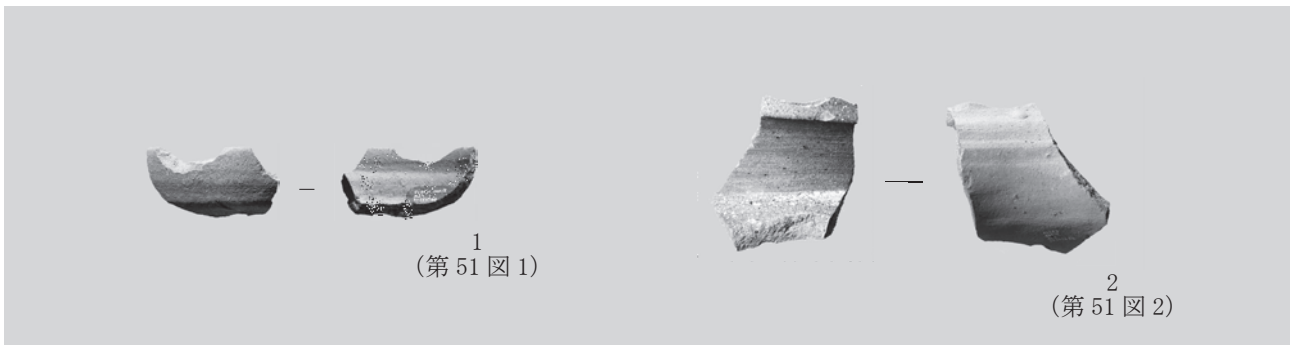
1. SD2551 溝跡検出状況（南から）



2. 調査終了状況（南から）



3. SD2551 溝跡断面（南から）



写真図版 21 郡山遺跡第 300 次調査・出土遺物

第6節 第301次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山五丁目 213 番
調 査 期 間	令和元年 12 月 9 日～ 16 日
調査対象面積	117.17 m ²
調 査 面 積	約 60 m ² （30 m ² × 2 棟）
調 査 原 因	分譲住宅 2 棟建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係、整備活用係
担 当 職 員	主事 庄子裕美 木村 恒

2. 調査に至る経過と調査方法

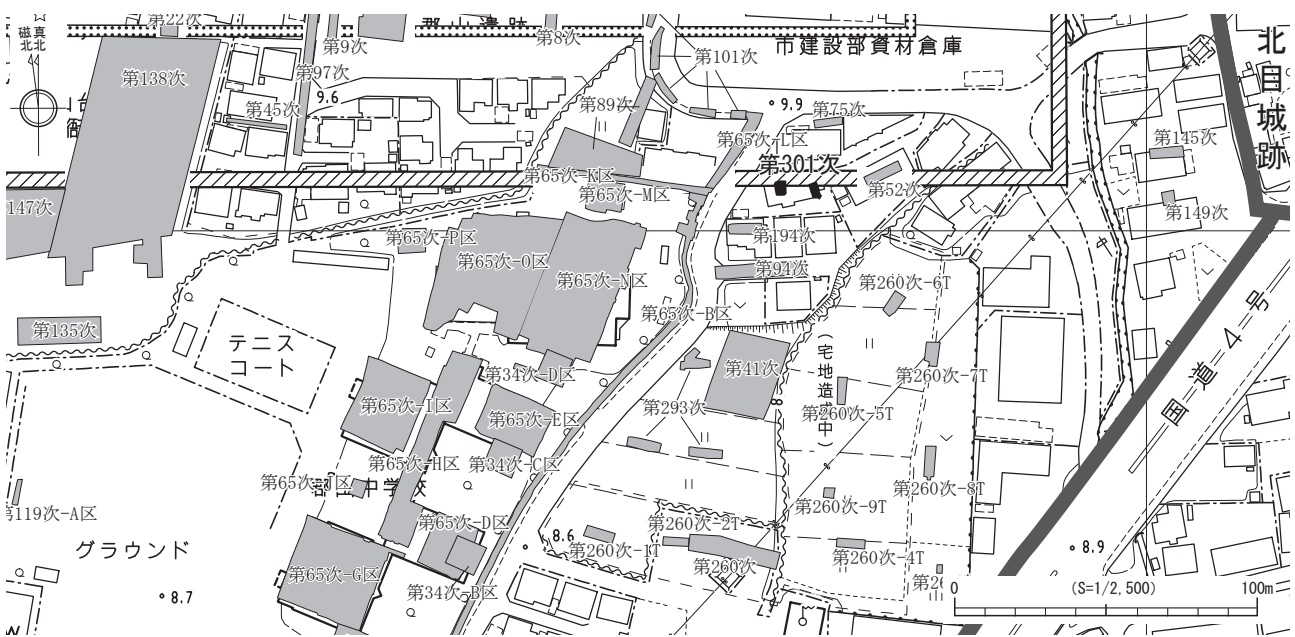
今回の調査は、令和元年 10 月 16 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和元年 10 月 17 日付 H31 教生文第 102-69 号で回答）に基づき実施した。

調査では 2 棟の建築範囲内にそれぞれ東西 3m、南北 5m の調査区を設定した。西側の調査区（1T）から調査を行い、埋戻し終了後に東側の調査区（2T）の調査に着手した。

重機により盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去した後、Ⅲ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、各調査区の北部で東西方向の溝跡が確認された。2T では西壁でピットが検出され、柱痕跡が認められた。

遺構検出、記録作業の後、各調査区内に下層調査区（1T：2m×2m、2T：2m×1.2m）を設定してⅣ層以下、下層の調査を行い、弥生時代の遺構、遺物の有無を確認した。下層調査区の掘削は基本的に重機で行い、平面、断面の精査は人力で行った。その結果、遺構、遺物は確認されず、GL-2.3m で掘削を終了した。

調査では、必要に応じてデジタルカメラにより記録写真を行い、調査区平面図（S = 1/20）および断面図（S = 1/20）を作製した。



第 53 図 第 301 次調査区位置図

3. 基本層序

今回の調査区では、厚さ約0.9～1.0mの盛土の下に大別6層、細別11層の基本層を確認した。

I a層：10YR5/2 灰黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。2Tの東側でのみ確認。耕作土。層厚約5～15cm。

I b層：10YR5/2 灰黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む、I a層よりも多く含む。耕作土。層厚約5～25cm。

I c層：10YR5/2 灰黄褐色粘土。10YR7/8 粘土ブロックと礫を含み、酸化鉄を斑状に含む。耕作土。部分的に残る。層厚約20cm。

II層：10YR4/2～4/3 灰黄褐色～にぶい黄褐色粘土。10YR3/3 粘土、10YR5/8 粘土質シルトブロックを含む。西から東にかけて層厚が薄くなり、2T東壁では確認されない。層厚約5～20cm。

III層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。遺構検出面である。酸化鉄を斑状に含む。層厚約20cm。

IV a層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚約15cm。

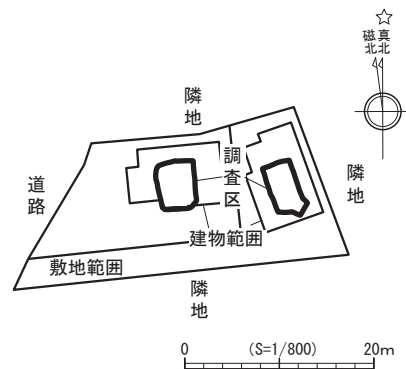
IV b層：10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚約15cm。

V a層：10YR6/1 褐灰色粘土。φ2～3cmの酸化鉄を斑状に含む。層厚約20cm。

V b層：10YR7/1 灰白色粘土。φ2～3cmの酸化鉄を斑状に含む。層厚約15～20cm。

V c層：10YR7/1 灰白色粘土。φ2～3cmの酸化鉄を斑状に含む。V b層より粘性、しまりともにやや強い。層厚約15～20cm。

VI層：10YR7/2 にぶい黄橙色粘土。V層よりも酸化鉄の含量が少ない。層厚15cm以上。



第54図 第301次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

調査では、溝跡1条、ピット1基が検出された。遺物は、基本層II層およびSD2552溝跡から、土師器、須恵器が少量出土している(第57図)。

(1) 溝跡

SD2552 溝跡 (第55・56図)

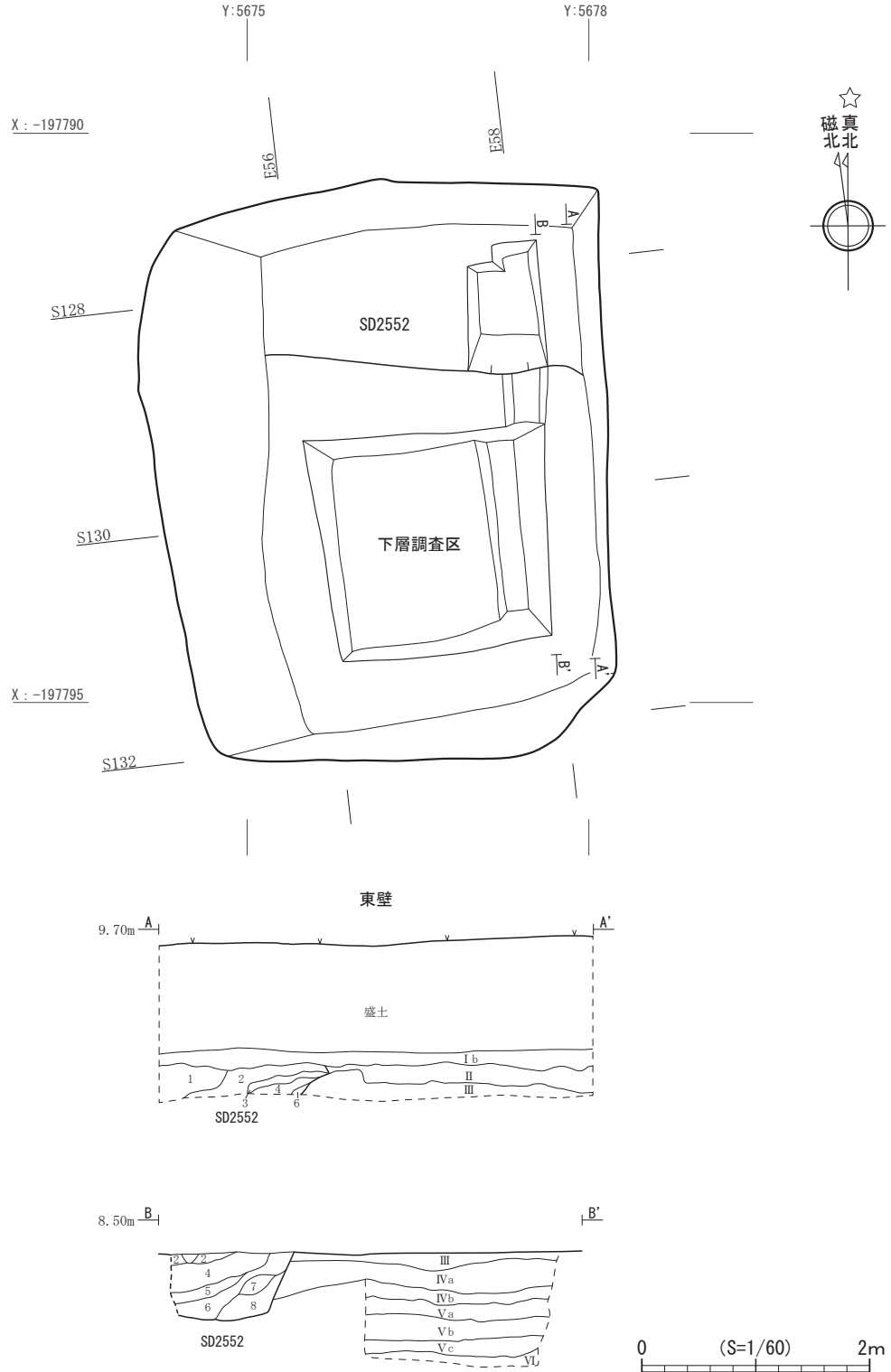
1T、2Tの北側にて検出された東西方向の溝跡で、方位はE-2°-Sであり、検出面はIII層上面である。同一の溝跡と考えられ、2つの調査区間を含めた総検出長は約13.5mである。

1T：検出長は約2.8mで、上端幅は1.3m以上であり、深さはIII層上面から約0.9mである。堆積土は8層に分層され、2層、5層から土師器、須恵器が出土した(第57図)。

2T：検出長は約2.7mで、上端幅は最大で1.2m以上である。底面は未検出であり、深さは0.7m以上である。堆積土は4層に分層され、1層から土師器が出土した。

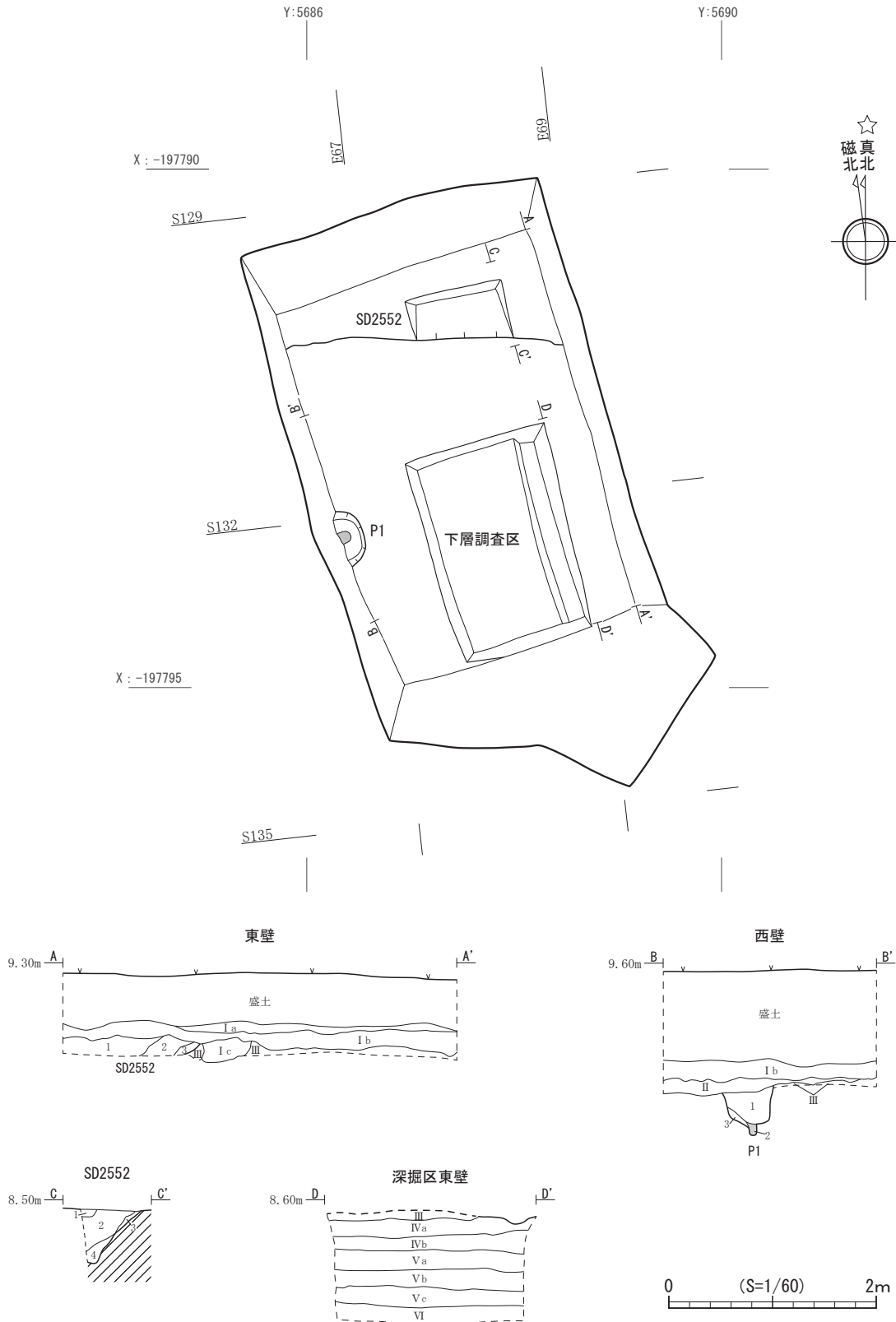
(2) ピット (第56図)

2Tの西壁際で検出された。調査区西壁の観察では確認できたピットの大部分は抜き取り穴であり、下部で掘り方埋め土と柱痕跡が確認された。西半部が調査区外のため全体の平面形は不明だが、検出された最大径は約50cm、深さ約40cm、柱痕跡の径は約10cmである。遺物は出土していない。



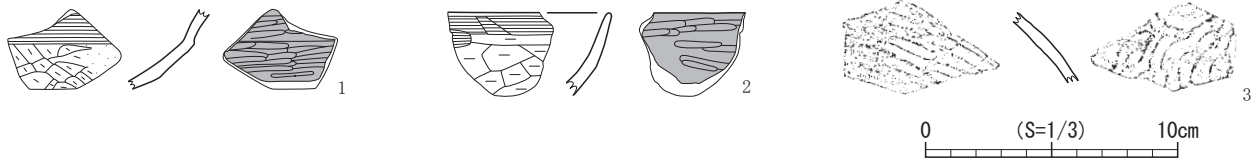
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2552	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	細かい酸化鉄が混ざる。炭化物を少量含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に多量に含む。
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に多量に含み、2層よりも占める割合が高い。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	6層よりも含まれる酸化鉄が細かく、酸化鉄を含む割合が高い。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を含む。含まれている酸化鉄粒がやや大きい。遺物を含む層。
	6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む。明黄褐色粘土質シルトブロックを一部斑状に含む。下部の方で粘性が強くなる。下部の方でφ2~3程度の酸化鉄を含む。
	7	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	上下の層に比べて含まれる酸化鉄が少ない。
	8	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロックを含む。下部でφ2~3cm程度の酸化鉄を含む。

第55図 1T調査区平面・断面図



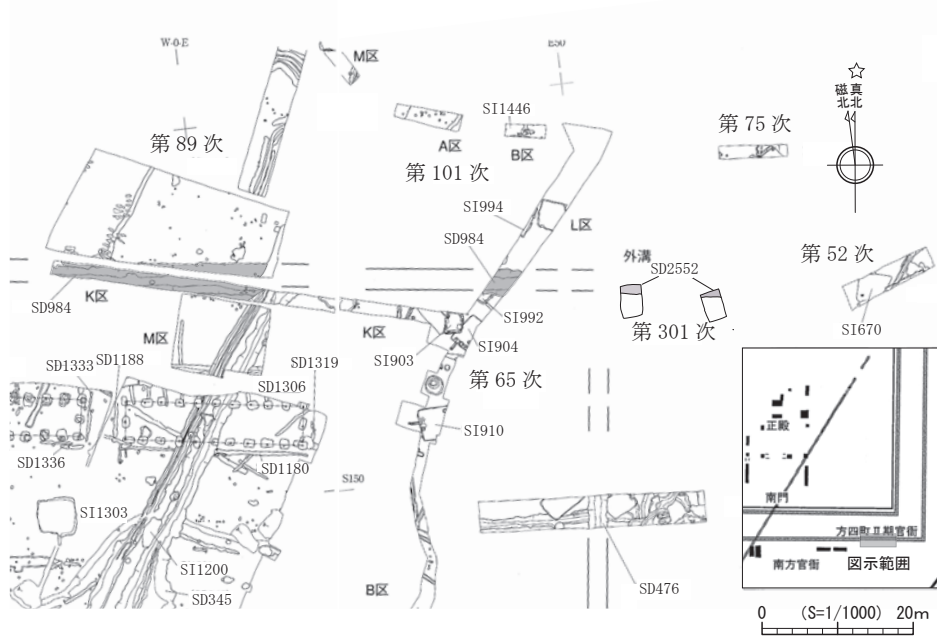
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2552	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に含む(1層より多い)。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。酸化鉄を含む(2層とほぼ同様)。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土質シルトブロックを含む(3層より多い)。酸化鉄を含む。
P1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色～明黄褐色の粘土質シルトブロックを斑状に含む。柱抜取穴
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	柱痕跡
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	掘り方埋め土

第56図 2T調査区平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-2	基本層	II	土師器	坏	-	-	(3.1)	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	22-1
2	C-1	SD2552	5	土師器	坏	-	-	(3.3)	口：ヘラナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海綿骨針含む	22-2
3	E-1	SD2552	5	須恵器	甕	-	-	(2.8)	ロクロナデ→平行タキ目	当て具痕(同心円文)	胎土緻密 砂粒・海綿骨針含む	22-3

第57図 溝跡・基本層出土遺物



第58図 郡山遺跡第301次調査区と周辺遺構

5. まとめ

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町II期官衙の南辺外溝の想定線上に位置している。今回の調査では、III層上面で遺構検出を行い、1T、2Tの北側で東西方向の溝跡、2Tの西壁でピットが1基検出された。

両調査区で認められた溝跡 (SD2552) は同一のものと考えられ、調査区間を含める検出長は約 13.5m である。今回の調査地点から西方約 30m の第 65 次調査 L 区、西方約 70m の第 89 次調査では、方四町II期官衙の南辺外溝である SD984 溝跡が検出されている。今回検出された SD2552 溝跡は、SD984 溝跡の延長線上に位置しており、溝跡の規模からも SD984 溝跡と同一の溝跡であり、方四町II期官衙の南辺外溝であると考えられる。

また、それぞれの調査区で下層調査を行った。近接する第 65 次調査の K 区では弥生時代初頭の土器を含む層 (GL-1.7 ~ 1.8m)、L 区では弥生時代中葉の土器を含む層 (GL-1.0 ~ 1.2m) が確認されている。今回の調査では GL-2.3m まで掘り下げたが、両調査区ともに弥生時代の遺構、遺物は確認されなかった。

参考文献

仙台市教育委員会 1991 『郡山遺跡XI—平成2年度発掘調査概報—』 仙台市文化財調査報告第146集
 仙台市教育委員会 1992 『郡山遺跡—第65次発掘調査報告書—』 仙台市文化財調査報告第156集
 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編—』 仙台市文化財調査報告書第283集



1. 1T SD2552 溝跡断面 (西から)



2. 2T SD2552 溝跡断面 (西から)



3. 2T 調査区西壁断面 (東から)



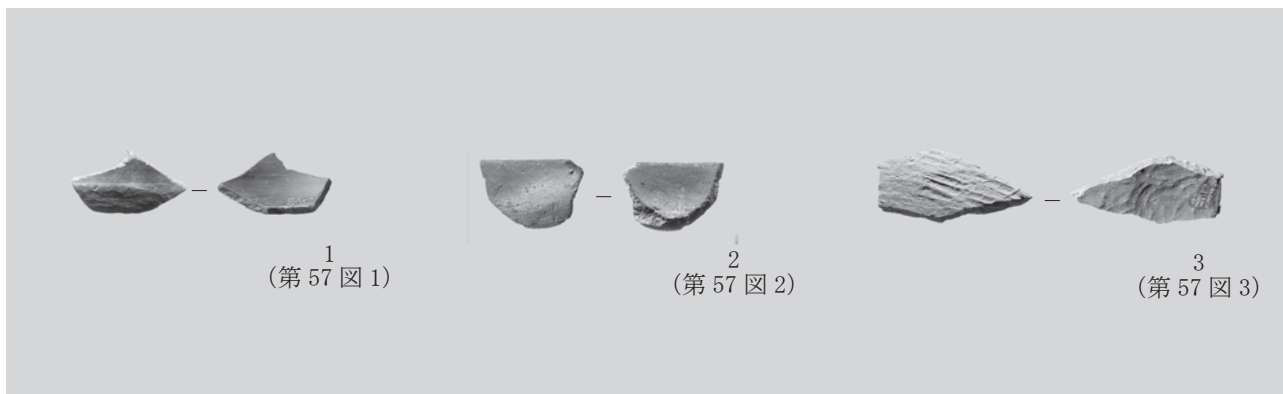
4. 2T P1 完掘状況 (東から)



5. 1T 下層調査区完掘状況 (西から)



6. 2T 下層調査区完掘状況 (西から)



1
(第57図1)

2
(第57図2)

3
(第57図3)

写真図版 22 郡山遺跡第301次調査・出土遺物

第5章 六反田遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

六反田遺跡は、仙台市太白区大野田に所在する。JR 仙台駅の南西約 5.4km に位置し、名取川の左岸によって形成された標高 11.0m ほどの自然堤防上に立地する。遺跡は東西約 600m、南北約 500m の範囲におよぶ。

本遺跡では昭和 51 年に社宅建設に伴う調査以来、14 回にわたる調査が行われている。また、平成 6 年以降は「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う調査が行われ、その後も個人住宅建築に伴う発掘調査などが断続的に行われている。調査の結果、主に縄文時代中期から後期初頭の集落、古墳時代の石棺墓、木棺墓、奈良時代から平安時代にかけての集落跡が確認されている。

また、遺跡の所在する大野田地区は仙台市内でも多くの遺跡が分布する地域であり、縄文時代から奈良時代の集落跡である下ノ内遺跡、多数の円墳が検出された大野田古墳群、奈良時代の官衙跡と推定される大野田官衙遺跡と隣接している。この他にも、周辺の遺跡からは縄文時代から近世の遺構、遺物が多数確認されている。これら遺跡の詳細については『元袋遺跡・六反田遺跡・大野田古墳群ほか』に詳しいため、参照されたい（仙台市教育委員会 2017）。

第2節 第15次調査

1. 調査要項

遺跡名 六反田遺跡
 （宮城県遺跡登録番号 01189）

調査地点 仙台市太白区大野田 5 丁目 27 番

調査期間 校舎増築部 平成 30 年 8 月 27 日
 ～ 10 月 22 日

給食棟 平成 31 年 2 月 18 日
 ～ 3 月 19 日

調査対象面積 校舎 122.0 m²

給食棟 385.0 m²

調査面積 校舎 約 71 m²

給食棟 約 93 m²

調査原因 大野田小学校校舎・

給食棟増築工事

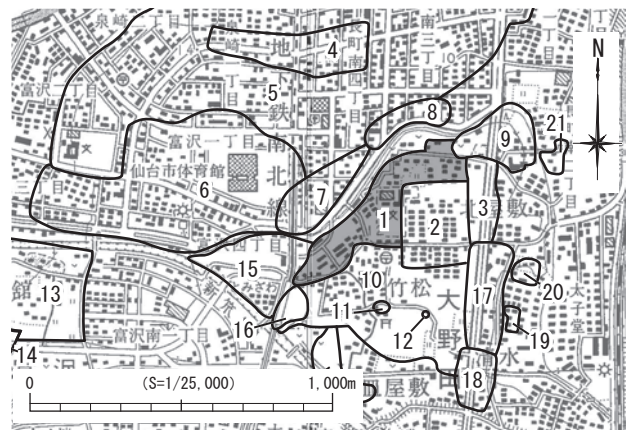
調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部文化財課

調査調整係

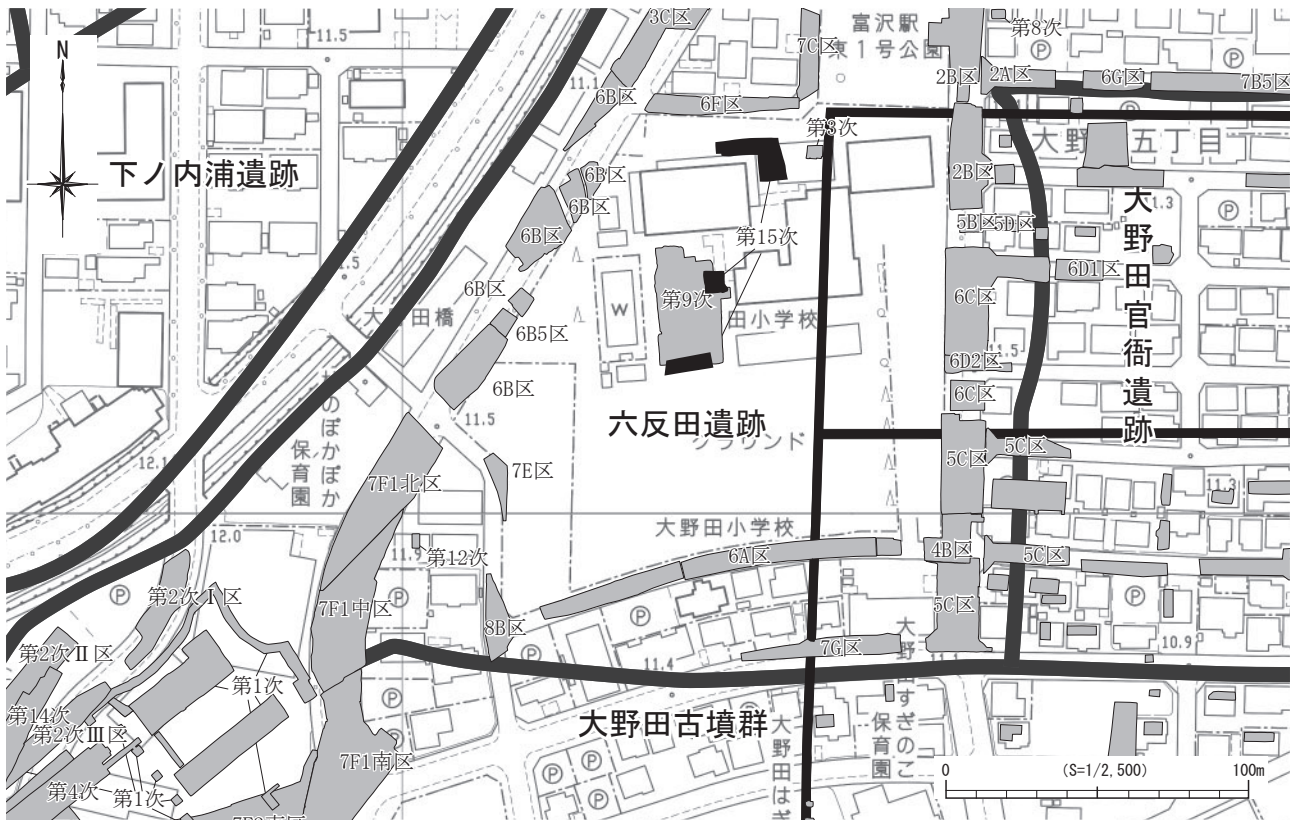
担当職員 主事 妹尾一樹

文化財教諭 佐藤文征



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（中～晩）～近世
2	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良
3	大野田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（後）・弥生（中）・古墳～平安
4	泉崎浦遺跡	自然堤防 後背湿地	水田跡・墓地	縄文（後）・弥生～古墳・平安
5	富沢遺跡	後背湿地	集落跡・水田跡・散布地	旧石器～近世
6	山口遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡・水田跡	縄文～平安
7	下ノ内浦遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡・水田跡	縄文（早・前・後）～中世
8	袋東遺跡	自然堤防	包含地	古墳・平安
9	元袋遺跡	自然堤防	集落跡	奈良～平安
10	大野田古墳群	自然堤防	古墳・集落跡	縄文～中世
11	春日社古墳	自然堤防	古墳	古墳
12	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳	古墳
13	富沢館跡	自然堤防 後背湿地	城館跡	戦国
14	鍛冶屋敷前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・奈良～中世
15	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡	縄文（中～晩）～中世
16	伊古田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文～平安
17	王ノ壇遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文（後）～中世
18	皿屋敷遺跡	集落跡・生産遺跡・屋敷跡・包含地	自然堤防	奈良～平安・中世
19	長町清水遺跡	古墳か	自然堤防	古墳か
20	北屋敷遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
21	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安

第 59 図 六反田遺跡と周辺の遺跡



第 60 図 第 15 次調査区位置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、校舎増築工事に伴って、平成 23 年 6 月 30 日付で仙台市長より提出された「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成 23 年 7 月 22 日付 H23 教生文第 107-6 号により宮城県教育委員会教育長へ進達）と、給食棟増築工事に伴って、平成 30 年 3 月 19 日付で仙台市長より提出された「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成 30 年 3 月 20 日付 H29 教生文第 104-79 号により宮城県教育委員会教育長へ進達）に基づき調査を実施した。

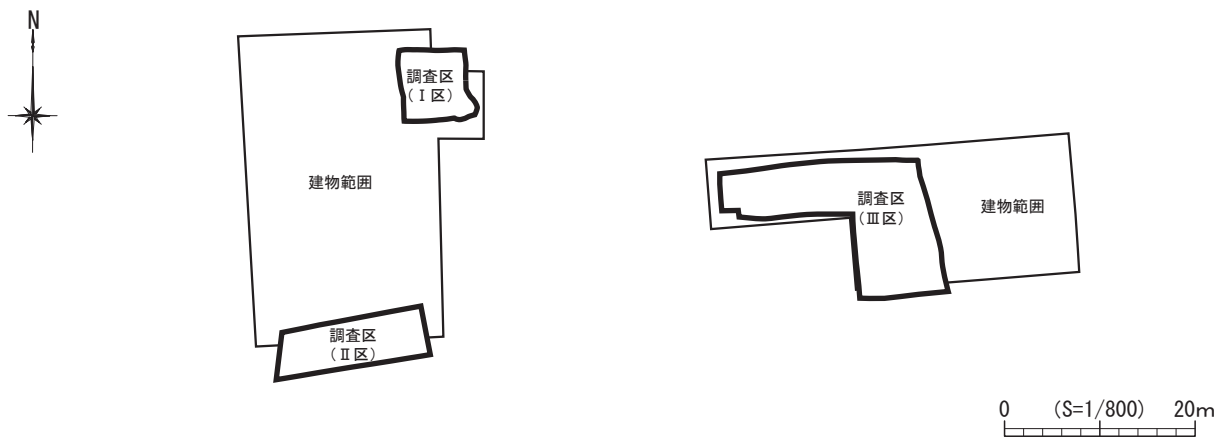
本発掘調査は校舎増築部と給食棟増築部の 2 つに分けて実施した。校舎増築工事対応のための調査は平成 23 年度に実施されており、六反田遺跡第 9 次調査として報告されている（仙台市教育委員会 2012）が、当時、既存施設のため調査できなかった箇所において堅穴住居跡が残っていたため、第 9 次調査の未着手部分を、追加で調査することとなった。

校舎増築部の調査は平成 30 年 8 月 27 日から実施した。第 9 次調査で検出された SI1 堅穴住居跡、SI2 堅穴住居跡の追加調査を目的として、対象地内の北東部に I 区、南部に II 区とする調査区を設定した。

重機により盛土および I 層を除去した後、人力により III 層上面、V 層上面で遺構検出作業を行った。結果、III 層上面では溝跡 1 条が、V 層上面では堅穴住居跡 2 軒、溝跡 7 条、土坑 4 基、ピット 33 基を確認した。

給食棟増築部の調査は平成 31 年 2 月 18 日から実施した。III 区として当初、既存給食棟部分を除く全域を調査区として設定したが、重機掘削の結果、対象地東部では既存の給食棟建築工事の影響とみられる削平を GL-2.8 m 以上受けており、基本層は確認できなかったことから調査区の規模を縮小して、調査を実施した。調査では重機により I～IV 層を除去した後、V 層にて遺構検出作業を行った。その結果、溝跡、土坑、ピットが検出された。V 層上面での作業終了後、3m×4m の範囲で、人力により X 層まで掘り下げを行い、下層状況の確認を行った。弥生土器と縄文土器の小片が出土するのみで遺構は確認されなかった。

調査では、必要に応じて平面図・断面図（S = 1/20）を作製し、デジタルカメラにて記録写真の撮影を行った。



第61図 第15次調査区配置図

3. 基本層序

厚さ約1.3～1.5 mの盛土の下に基本層序Ⅰ～Ⅹ層を確認した。層序の観察は「富沢駅周辺区画整理事業」に伴う調査や第3次調査の成果を参考とした。

- I a 層：2.5Y6/2 黄灰色シルト。下層に酸化鉄が集積する。学校建設前の旧水田耕作土と考えられる。
- I b 層：10YR4/1 褐灰色シルト。砂を少量含む。Ⅲ区でのみ確認された。
- Ⅱ 層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。ほぼ均質である。Ⅲ区でのみ確認された。
- Ⅲ 層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト。上面にはマンガンが集積し、下面ではやや起伏がみられる。SD1 溝跡の検出面である。
- Ⅳ 層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。下面は大きく起伏しており、耕作土であると考えられる。
- Ⅴ 層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。酸化鉄を斑状に含む。Ⅲ区では全体的にグライ化が顕著である。古代の遺構検出面である。
- Ⅵ 層：2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土。酸化鉄含む。Ⅲ区下層調査で確認した。
- Ⅶ 層：2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土。砂、酸化鉄少量含む。Ⅲ区下層調査で確認した。
- Ⅷ 層：2.5Y3/2 黒褐色粘土。オリーブ褐色粘土含む。砂、炭化物少量含む。Ⅲ区下層調査で確認した。
- Ⅸ 層：2.5Y3/2 黒褐色シルト。炭化物含む。φ 10～100 mmの礫を含む。酸化鉄を少量含む。Ⅲ区下層調査で確認した。
- Ⅹ 層：2.5Y4/1 黄灰色砂。酸化鉄少量含む。粗砂含む。

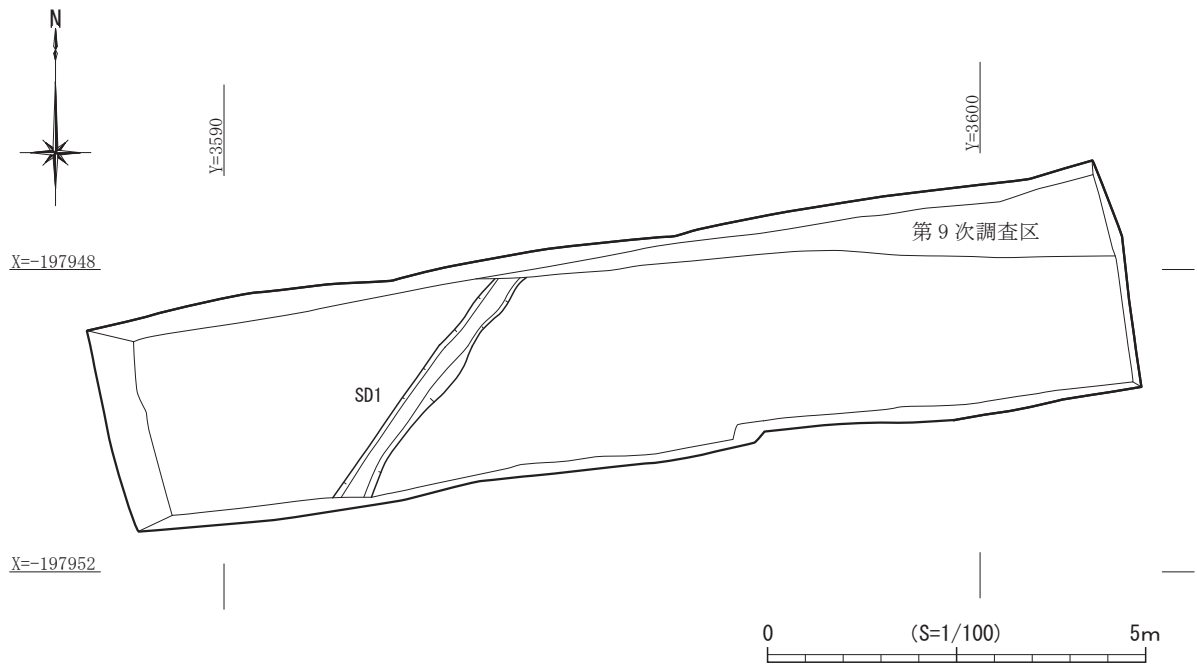
4. Ⅰ・Ⅱ区の発見遺構と出土遺物

【Ⅲ層上面検出遺構】

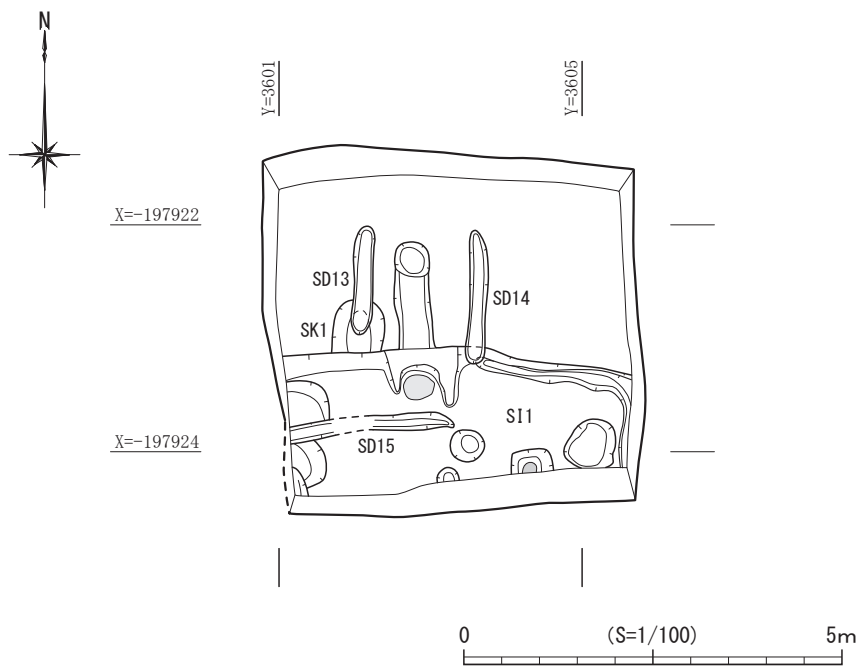
(1) 溝跡

SD1 溝跡 (第62図)

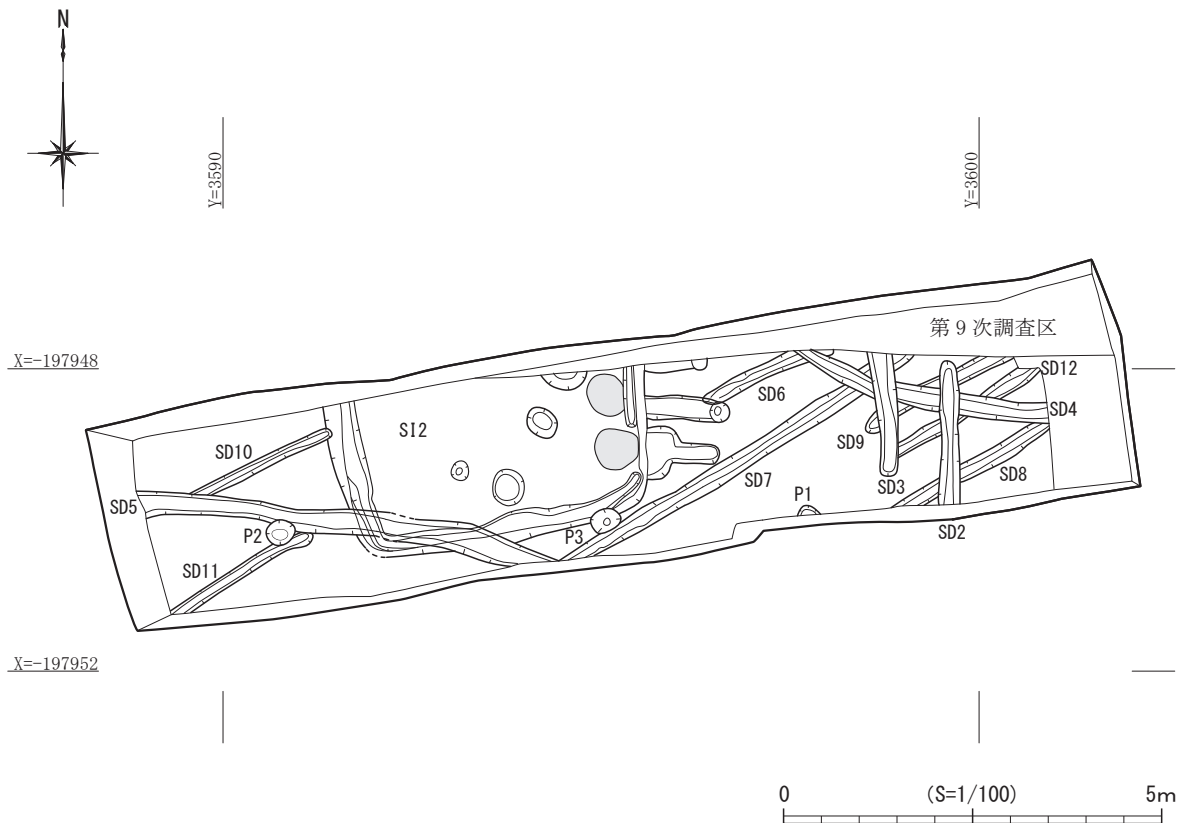
Ⅱ区西側で確認された。北東から南西方向の溝跡でその両端は調査区外へと延びる。規模は検出長3.6m、幅48cm、深さ26cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層である。その位置や規模から第9次調査のSD2溝跡と同一のものと考えられる。遺物は出土していない。



第62図 II区III層上面検出遺構



第63図 I区V層上面検出遺構



第 64 図 II 区 V 層上面検出遺構

【V層上面検出遺構】

(1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡 (第 63・65 図)

竪穴住居跡の北東部を検出した。本遺構の西半部及び南東部は第9次調査でSI1 竪穴住居跡として調査されている(仙台市教育委員会 2012)。

【位置】 I 区で検出された。

【重複】 SD14 溝跡、SK1 土坑と重複し、SK1 土坑より新しく、SD14、15 溝跡より古い。

【規模・形状】 検出した規模は、南北長 163 cm、東西長 453 cm である。平面形は、隅丸方形を呈する。第9次調査検出部分と合わせると南北長 8.5m、東西長 8.0m を測る。

【方位】 カマドを基準に、N-3°-W である。

【堆積土】 23 層に分層され、1～3 層が住居内堆積土、4 層が周溝堆積土、5 がカマド袖構築土、6～18 層がカマド堆積土、19～20 層がカマド掘り方、21 層が掘り方埋め土である。

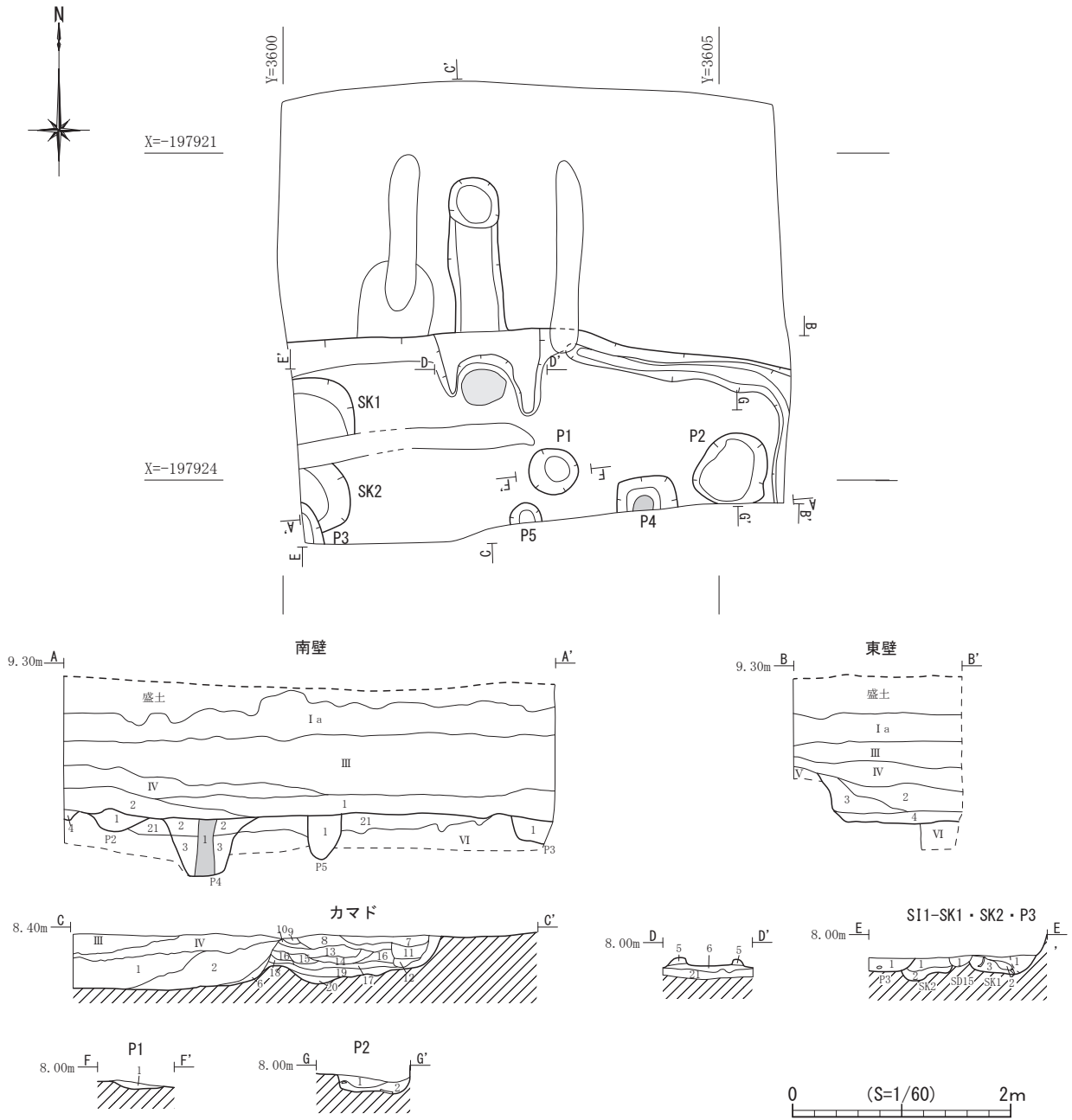
【壁面】 床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は床面から 37～40 cm である。

【床面】 掘り方を 10～15cm 埋め戻して構築されている。概ね平坦である。

【柱穴】 床面にてピットを 5 基確認した。そのうち、P4 は柱痕跡を持ち、支柱穴と考えられる。径 54 cm、深さ 53 cm で、柱痕跡は径約 20 cm である。

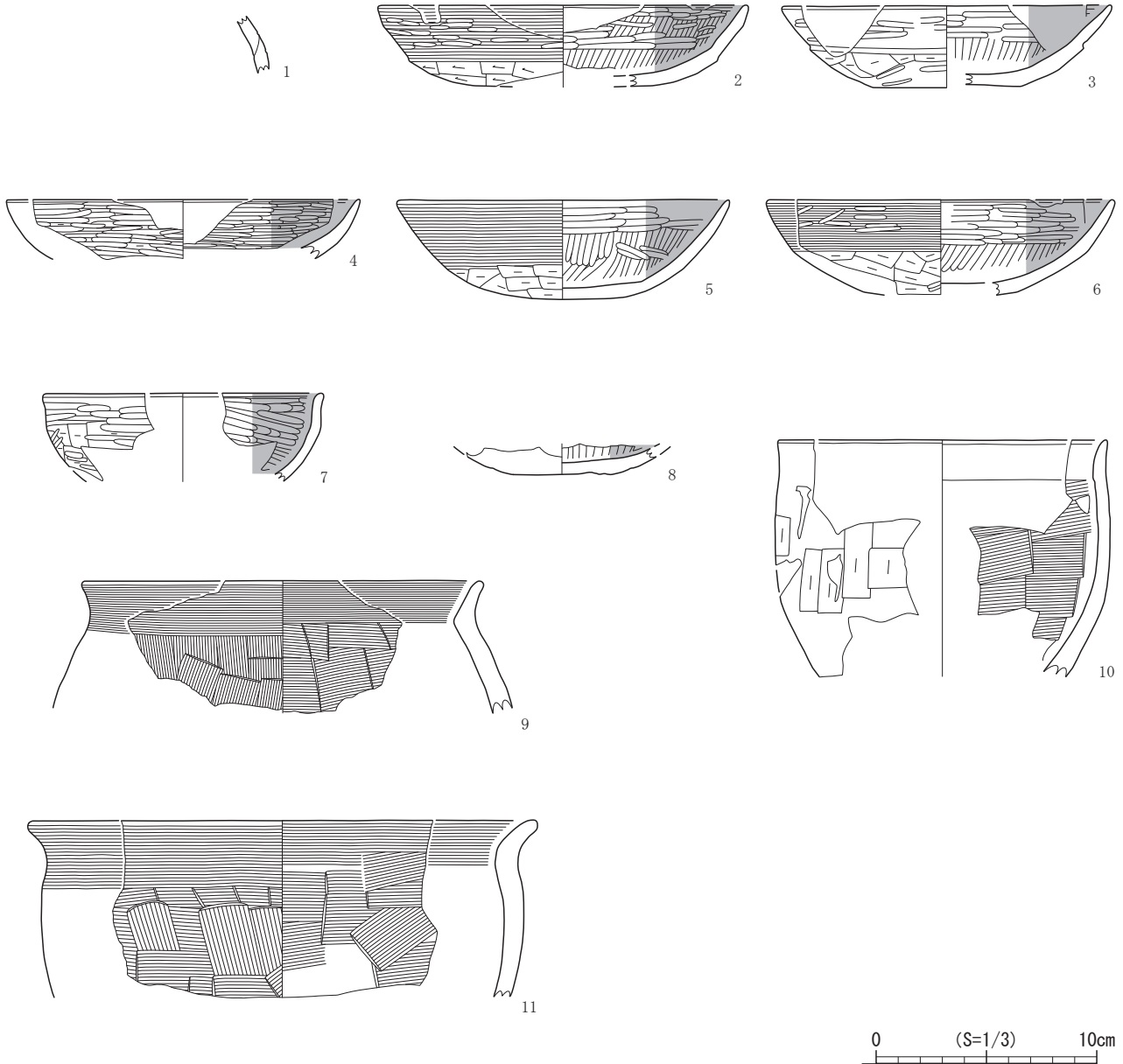
【周溝】 カマド周辺を除き確認した。

【カマド】 住居北壁で確認した。第9次調査の成果と照し合わせると、東よりに位置する。袖の規模は、東袖が長さ 82 cm、幅 28 cm、西袖が長さ 62 cm、幅 23 cm で、シルトにより構築されている。



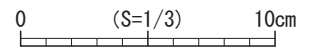
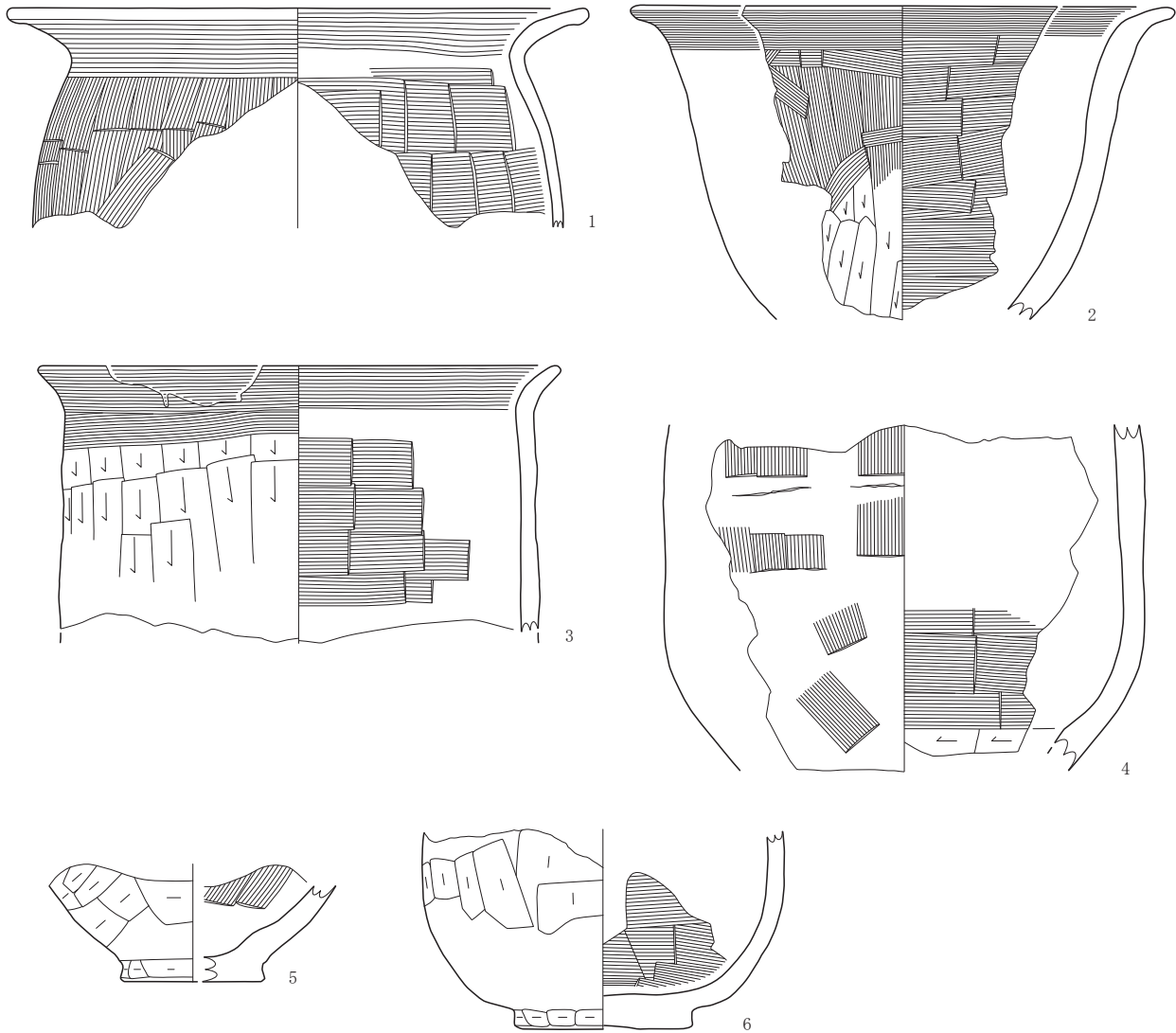
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SI1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物、焼土粒含む。灰白色焼土ブロック含む。	SI1	19	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化物極多量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物、焼土粒少量含む。		20	10YR8/3 浅黄色	粘土	均質。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土斑状に含む。		21	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	砂を少量含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト含む。	SI1-SK1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	焼土、炭化物多量に混じる。
	5	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む。		2	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物少量含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	焼土粒、炭化物含む。一部被熱。		3	10YR3/3 暗褐色	粘土	焼土含む。炭化物少量含む。
	7	10YR3/3 暗褐色	粘土	V層ブロック、焼土含む。	SI1-SK2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物、焼土粒少量 V層ブロック混じる。
	8	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物含む。焼土少量含む。		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	V層ブロック混じる。
	9	10YR3/1 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト少量含む。	SI1-P1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物、焼土粒わずかに含む。
	10	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物少量、焼土粒少量含む。	SI1-P2	1	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロック含む。(掘方埋土)
	11	10YR3/3 暗褐色	粘土	V層ブロック、焼土含む。		2	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土粒含む。炭化物含む。(掘方埋土)
	12	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物少量含む。	SI1-P3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物、焼土混じる。V層ブロック少量含む。
	13	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	V層ブロック、炭化粒少量含む。		SI1-P4	1	10YR3/2 暗褐色	粘土
	14	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物多量に含む。	2		2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロック含む。(掘方埋土)
	15	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物少量含む。	3		2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土粒、炭化物含む。(掘方埋土)
	16	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物多量含む。	SI1-P5	1	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロック含む。
	17	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物少、焼土粒少量含む。					
	18	10YR3/3 暗褐色	粘土	V層ブロック、焼土含む。					

第65図 SI1 竪穴住居跡平面・断面図



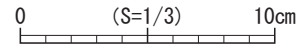
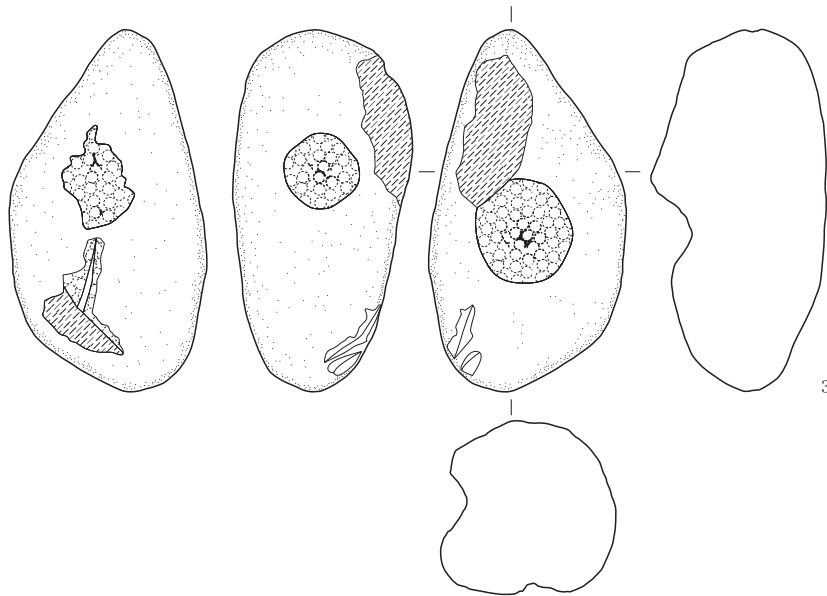
図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	器高				
1	B-5	SI1	1~2	弥生土器	壺	-	-	(2.6)	磨消工字文 (地文は器面の磨滅で不明)	ミガキ	胎土緻密 砂粒を含む	27-1
2	C-12	SI1	3	土師器	坏	(16.6)	-	(3.7)	口: ヨコナデ→部分的にヘラミガキ 体: ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海面骨針含む	27-2
3	C-9	SI1	1~3	土師器	坏	(14.8)	(6.8)	3.7	口: ヨコナデ→ヘラミガキ 体: ヘラケズリ →ヘラミガキ 底: ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	底部平底 胎土緻密 砂粒・海面骨針含む	27-3
4	C-14	SI1	2	土師器	坏	(16.0)	-	(2.7)	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	27-4
5	C-16	SI1	堆積土	土師器	坏	15.0	-	4.5	口: ヨコナデ 体~底: ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	27-5
6	C-1	SI1	堆積土	土師器	坏	(15.6)	-	(4.3)	口: ヨコナデ→ヘラミガキ 体~底: ヘラケズリ →ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海面骨針含む	27-6
7	C-13	SI1	1~2	土師器	坏	(12.0)	-	(4.0)	口: ヘラミガキ 体: ヘラケズリ→部分的に ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海面骨針含む	27-7
8	C-17	SI1	1~2	土師器	坏	-	4.4	(1.9)	体: ロクロナデ 底: 不明 器面剥落	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海面骨針含む 底部平底	27-8
9	C-3	SI1-P4	2	土師器	甕	-	-	(6.0)	口~体端: ヨコナデ 体: ヘラナデ	口: ヨコナデ 体上半: ヘラナデ	胎土緻密 砂粒含む	27-9
10	C-7	SI1	3	土師器	甕	(14.8)	-	(10.7)	口: 器面剥落 体: ヘラケズリ	口: 器面剥落 体: ヘラナデ	胎土緻密 砂粒多量含む	27-10
11	C-2	SI1-SK1	堆積土	土師器	甕	(22.4)	-	(8.9)	口: ヨコナデ 体上半: ヘラナデ	口: ヨコナデ 体上半: ヘラナデ	胎土緻密 砂粒含む	27-11

第66図 SI1 竪穴住居跡出土遺物 (1)



図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	器高				
1	C-11	SI1-SK1	堆積土	土師器	甕	(24.9)	-	(9.1)	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	胎土緻密 砂粒含む	27-12
2	C-6	SI1	2	土師器	鉢	(22.0)	-	(13.0)	口：ヨコナデ 体上半：ヘラナデ 体下半：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	胎土緻密 砂粒多量含む 瓶の可能性あり	27-13
3	C-8	SI1	堆積土	土師器	甕	(21.4)	-	(11.5)	口～体上半：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	胎土緻密 砂粒多量含む	27-14
4	C-5	SI1	堆積土	土師器	甕	-	-	(14.3)	ヘラナデ	ヘラナデ 下端：ヘラケズリ	胎土緻密 砂粒多量含む	27-15
5	C-4	SI1	1～2	土師器	甕	-	(6.9)	(4.9)	ヘラケズリ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒含む	27-16
6	C-10	SI1	堆積土	土師器	甕	-	7.4	(8.2)	ヘラケズリ 底：木葉痕	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒多量含む 外面は被熱している	27-17

第 67 図 SI1 竪穴住居跡出土遺物 (2)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	K-2	SI1	1~2	打製石器	剥片	4.6	4.0	0.7	流紋岩 重さ 13.5g	28-1
2	K-3	SI1	1	打製石器	剥片	8.8	5.5	1.5	凝灰質頁岩 重さ 75.6g 頭部調整をして打面を作り出し、縦長剥片を連続して剥離している	28-2
3	K-1	SI1	1~2	礫石器	凹石	14.2	7.7	6.9	安山岩 3面に凹部がある 平面形はa面2ヶ所が不定形、b面・c面各1ヶ所が円形 重さ 725.0g	28-3

第 68 図 SI1 竪穴住居跡出土遺物 (3)

【掘り方】全体に不規則な凹凸が認められ、ピット状の窪みが1箇所確認される。また、壁面から中央に向かって段状の落ち込みが確認される。

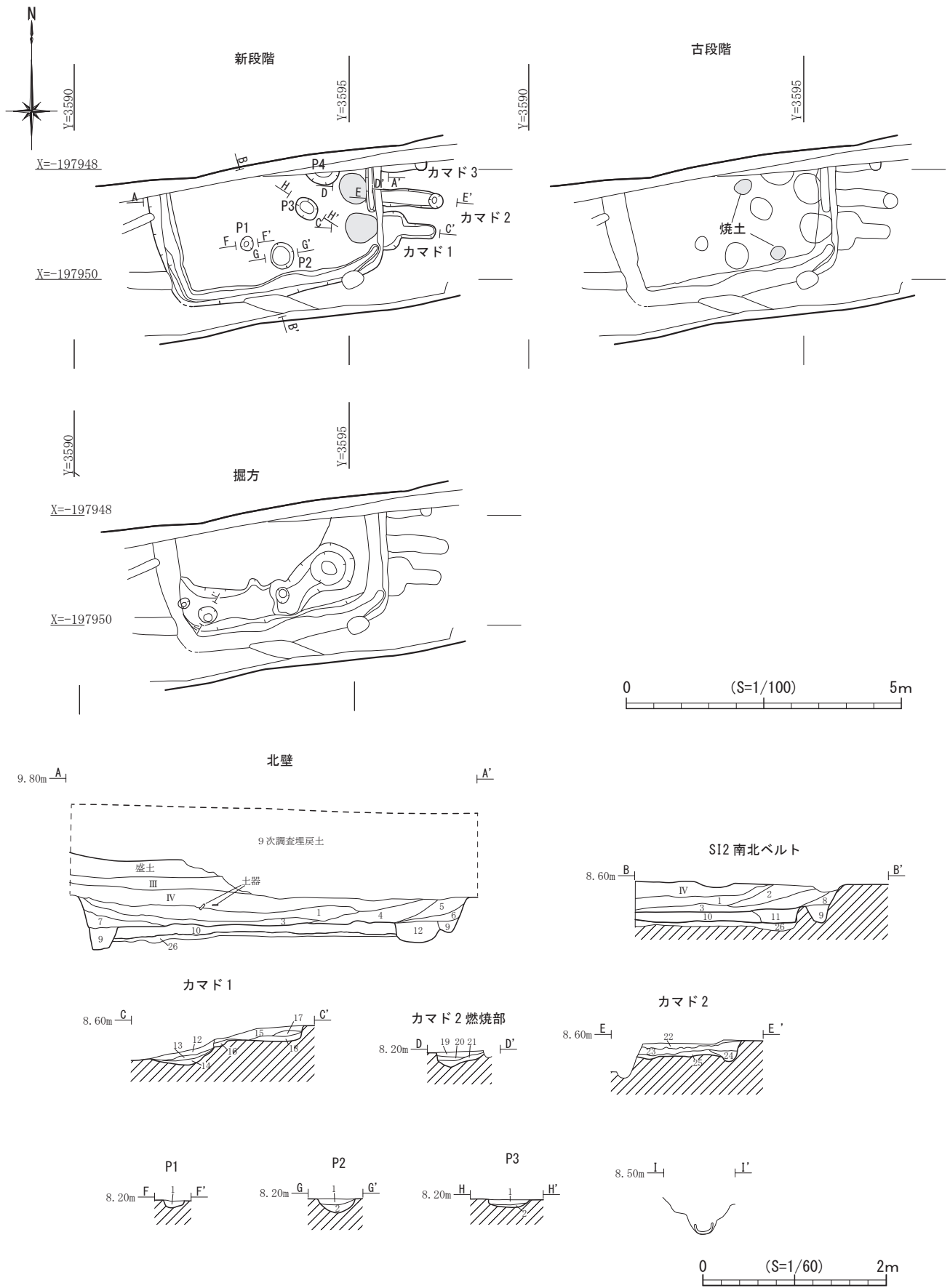
【その他の施設】床面で土坑2基、ピット5基を確認した。SI1-SK1土坑は規模、径60cm、深さは16cmである。堆積土は3層に分層され、いずれも焼土粒や炭化物を含む。遺物は土師器甕が出土している。SI1-SK2土坑は径45cm程度、深さ21cmで堆積土は2層に分層される。

【出土遺物】弥生土器、須恵器、土師器、石器などが出土した(第65~67図)。床面では遺物は確認されなかった。

第66図2~8は土師器の坏である。いずれも非ロクロ調整のもので、内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。第66図9~11、第67図1、3~6は土師器の甕、第67図2は土師器の鉢である。また、打製石器(第68図1・2)と礫石器(同図3)を示した。

SI2 竪穴住居跡 (第64・69図)

竪穴住居跡の南半部を検出した。北半部については第9次調査でSI2 竪穴住居跡として調査されている(仙台



第69図 SI2 竖穴住居跡平面・断面図

第3表 SI2 竪穴住居跡土層註記表

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SI2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄少量含む 焼土粒含む。	SI2	18	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物多量に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。		19	10YR3/3 暗褐色	粘土	焼土多量に含む。炭少量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土粒 (φ 5mm) 含む。		20	10YR3/3 暗褐色	粘土	焼土少量含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む にぶい黄褐色粘土含む。		21	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト少量含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。		22	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルトを含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト少量含む。		23	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物少量 にぶい黄褐色シルトブロックを含む。
	7	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量、焼土粒少量含む。		24	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物含む。
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物含む。焦土少量含む。		25	10YR2/1 黒色	シルト	暗褐色シルトブロック含む。焼土粒少量含む。
	9	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物少量含む。(周溝堆積土)		26	10YR3/4 暗褐色	粘土	V層ブロック含む。(掘方埋土)
	10	10YR3/3 暗褐色	粘土	V層ブロック、焼土含む。		SI2-P1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土
	11	10YR3/3 暗褐色	粘土	V層ブロック、焼土含む。	SI2-P2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色砂含む。
	12	10YR3/4 暗褐色	粘土	焼土粒極多量に含む。炭化物含む。	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色砂少し含む。	
	13	10YR3/4 暗褐色	粘土	焼土粒わずかに含む。	SI2-P3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	焼土を多量に含む。炭化物含む。
	14	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物少量含む。	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト少量含む。	
	15	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物少量含む。					
	16	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトブロック含む。					
	17	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物含む。					

市教育委員会 2012)。新段階床面 (10・11 層上面) の調査後、掘り方を基本層 V 層ブロックや焼土を含む粘土によって充填されたしまりの強い層 (26 層) が確認され、その上面では焼土範囲が 2 箇所確認された。周溝などは確認されなかったが、第 9 次調査では相当する層の上面でピットや煙道部が検出されていることから、この面を古段階と考え、新段階、古段階 2 つの時期として調査を行った。また、新段階床面ではカマドを 3 基確認しており、新段階と古段階を合わせて少なくとも 4 時期が確認される。

【位置】 II 区中央部で確認された。

【重複】 SD5、10 溝跡、P3 と重複しており、各遺構よりも古い。また、新段階では東側、南側をわずかに拡張しているとみられる。

【規模・形状】 規模は、南北長 220 cm、東西長 420 cm である。平面形状は、隅丸方形を呈すると推定される。

【方位】 南辺を基準に、W-9°-S である。

【堆積土】 26 層に分層された。1～8 層が新段階の住居堆積土、9 層が周溝堆積土、10～11 層が新段階の床面構築土、12～18 層がカマド 1 の堆積土、19～25 層がカマド 2 の堆積土、26 層が古段階の床面構築土である。

【壁面】 やや外傾して立ち上がる。壁高は床面から新段階が 32～34 cm、古段階が 38～40 cm である。

【床面】 新段階、古段階ともに概ね平坦である。古段階の北西部では一部掘り方を床面としている。

【柱穴】 新段階ではピットを 5 基検出したが、支柱穴と考えられるものは確認できない。また、古段階では確認していない。

【周溝】 新段階のカマド 1 周辺以外で確認された。古段階のものは確認されていない。

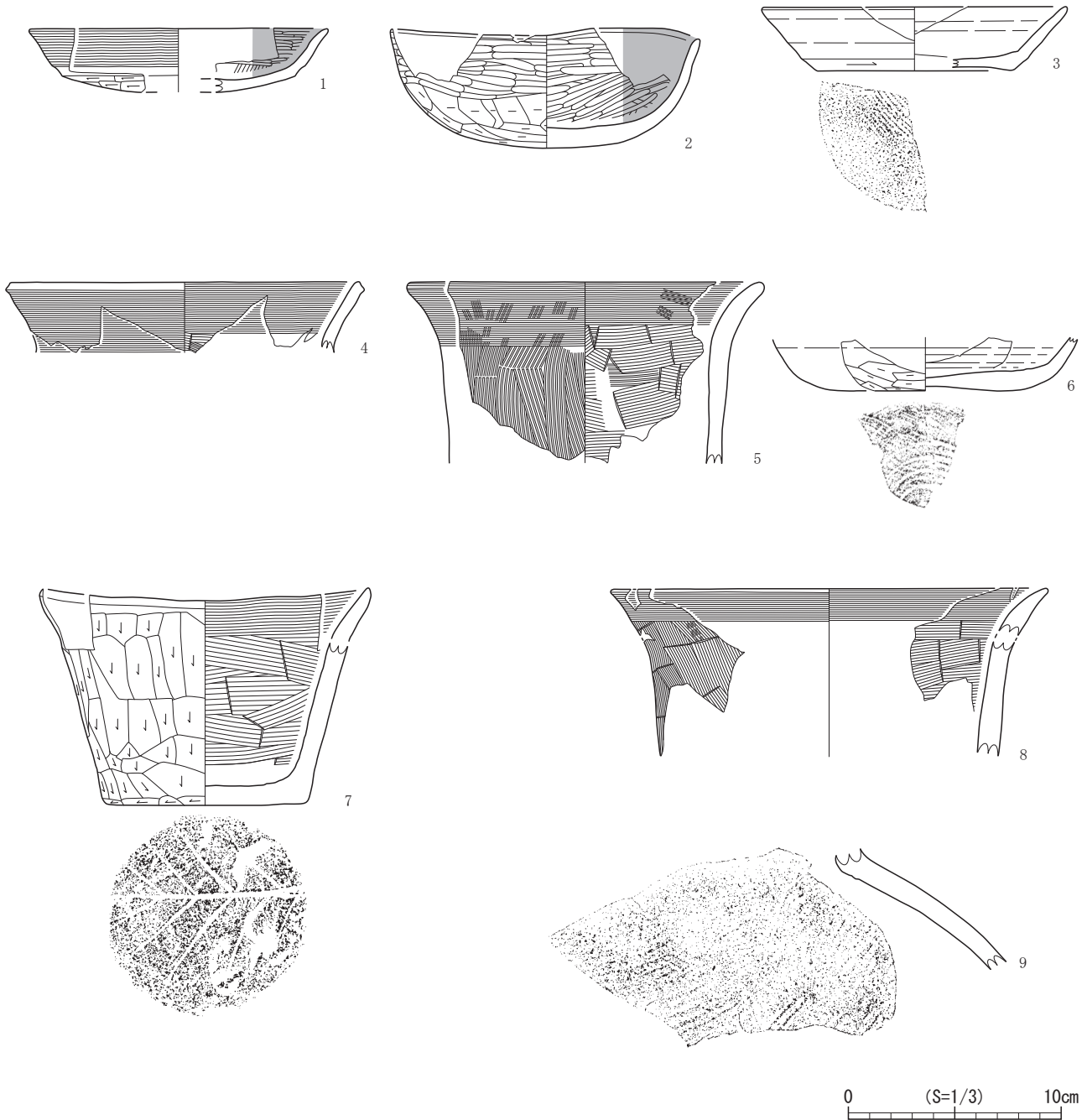
【カマド】 住居の東壁で焼土範囲を 2 箇所、煙道を 3 箇所確認された (カマド 1～3)。焼土範囲はそれぞれカマド 1、2 の燃焼部と推定され、カマド 3 の燃焼部は第 9 次調査で確認されている (第 9 次調査 SI2-SK1)。また、カマド 2、3 は周溝に切られることからカマド 1 が最終的なカマドであったと考えられる。カマド 2、3 の新旧関係については不明である。また、それぞれのカマド袖は確認できなかった。古段階では確認されないが、第 9 次調査では北側に煙道の一部が確認されており、北壁にカマドが設置されていたと推定される。

【掘り方】 壁面に沿って不規則な凹凸があり、深さ 3～25 cm のピット状の窪みが 4 ヶ所確認できる。そのうちの 1 つからは土師器の鉢 (第 70 図 7) が出土した。

【その他の施設】 新段階は床面でピット 5 基を確認した。規模 22～34 cm で、深さ 8～15 cm である。いずれも柱痕跡は確認されない。また、古段階では径 30 cm 程の焼土範囲を 2 ヶ所確認した。

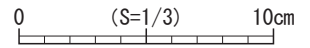
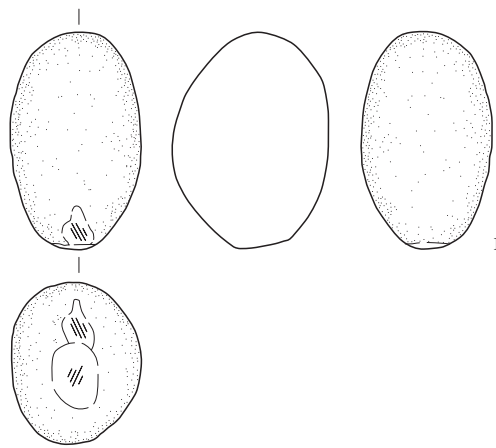
【出土遺物】 須恵器、土師器、石器、石製品などが出土した (第 70・71 図)。

第 70 図 1～2 は土師器の丸底の坏である。いずれも非ロクロ調整で、内面調整はヘラミガキ・黒色処理が施さ



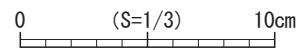
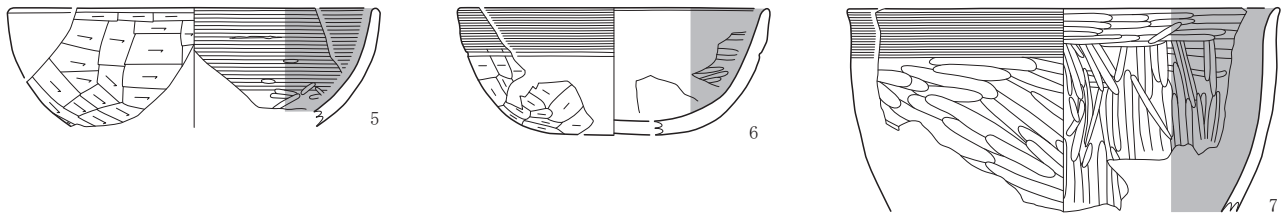
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-19	SI2	7	土師器	坏	(14.0)	-	(3.0)	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口～体：ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	28-4
2	C-18	SI2	1～8	土師器	坏	14.4	-	5.6	口：ヘラミガキ 体～底：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		28-5
3	E-2	SI2	1～8	須恵器	坏	(14.2)	(9.2)	3.0	口～体：ロクロナデ 体下端：回転ヘラケズリ 底：静止糸切り→周縁を回転ヘラケズリ	ロクロナデ 体部と底部の屈曲部：沈線状の工具痕	胎土緻密 砂粒含む 焼成良好	28-6
4	C-23	SI2	古段階焼土	土師器	甗	(16.4)	-	(3.3)	口～体上端：ヨコナデ	口：ヨコナデ 体上端：ハケメ→ヘラナデ	胎土緻密	28-7
5	C-21	SI2	9	土師器	甗	(16.4)	-	(8.5)	口：ハケメ→ヨコナデ 体：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ 体：ハケメ→ヘラナデ	胎土緻密	28-9
6	E-3	SI2	1～8	須恵器	坏	-	(8.4)	(2.5)	体：ロクロナデ→下部手持ちヘラケズリ 底：静止糸切り→周縁を手持ちヘラケズリ	ロクロナデ 体部と底部の境は屈曲している	胎土緻密 海面骨針を含む	28-10
7	C-20	SI2	26	土師器	鉢	15.4	9.4	(10.2)	ヘラケズリ (ケズリの方向に器面にスジ状の痕跡あり 石英粒などが動いた痕跡) 底：木葉痕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	胎土緻密 石英粒多量含む	28-8
8	C-22	SI2	26	土師器	甗	(20.4)	-	(7.9)	口上半：ヨコナデ 口下半：ヘラナデ (一部に先行する粗いハケメ状の痕跡)	口上半：ヨコナデ 口下半～体：ヘラナデ		28-11
9	E-1	SI2	12	須恵器	甗	-	-	(5.7)	平行タタキ目→ロクロナデ	当て具痕 ナデ	胎土緻密 砂粒含む	29-1

第70図 SI2 竪穴住居跡出土遺物 (1)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	K-4	SI2	堆積土	礫石器	磨石	8.5	5.1	6.1	端部に磨面が2面認められる 安山岩 重さ290g	29-2
-	K-5	SI2	堆積土	石製品	砥石	11.5	6.3	2.3	砥面が2面認められる 受熱痕が全体にある 凝灰岩 重さ109.8g	29-3
-	K-6	SI2	新段階床面	珪化木	-	14.8	9.2	3.2	一側面に磨滅痕がある 全体的にススが付着している 珪化木 重さ251.4g	29-4

第71図 SI2 竪穴住居跡出土遺物 (2)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	B-1	-	IV	弥生土器	壺	-	-	-	磨消工字文 (植物茎回転文)	ミガキ 粘土紐積上痕	胎土緻密 砂粒を含む	29-5
2	B-2	-	IV~V	弥生土器	甕	-	-	-	LR 縄文→横位沈線	ナデ	胎土緻密 砂粒を含む	29-6
3	B-3	-	IV~V	弥生土器	甕	-	-	-	LR 縄文	ナデ	胎土緻密 砂粒を含む	29-7
4	B-4	-	V	弥生土器	壺	-	-	-	磨消工字文 (植物茎回転文)	不明 (器面剥落)	胎土緻密 砂粒を含む	29-8
5	C-15	-	V	土師器	坏	(14.3)	-	(4.7)	ヘラケズリ	ヨコナデ→部分的にヘラミガキ・黒色処理 粘土積上げ痕有り	胎土緻密 砂粒・海面骨針含む 1/6 残	29-9
6	C-24	-	II	土師器	坏	(12.0)	-	5.0	口：ヨコナデ 体～底：手持ちヘラケズ 口縁部と体部の境に沈線一条あり 底部平底	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 海綿骨針含む	29-10
7	C-25	-	III~IV	土師器	鉢	(17.0)	-	(8.5)	口：ヨコナデ 体：ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		29-11

第72図 I・II区遺構外出土遺物

第2節 第15次調査

れる。3、6は須恵器の坏である。4、5、8は土師器甕である。6は鉢である。胎土が他の土器と異なり石英などの砂粒が多量に混じる。また、底部に木葉痕がある。

(2) 土坑

SK1 土坑 (第63図)

I区で検出した。SI1 竪穴住居跡、SD13 溝跡よりも古い。平面形は楕円形を呈し、規模は東西長63cm、南北長70cm、深さ22cmである。堆積土は4層に分層された。遺物は出土していない。

(3) 小溝状遺構群 (第63・64図)

畑の耕作痕と考えられる遺構群はSD2～15 溝跡が該当し、第9次調査との検出例を含めると3群に大別することができる。また、重複関係からこれらの小溝状遺構群は1～3群へと変遷することが推定される。なお、遺構群が検出された基本層V層の直上である基本層IV層がこれらに関連する耕作土と考えられる。

1群

SD6～12 溝跡で構成される。第9次調査からSD15 溝跡も同様に含まれる。方向はN-55～63°-Eで、規模は検出長1.8～5.1m、幅15～23cm、深さ18～25cmである。断面形は幅広のU字形を呈する。小溝同士の間隔は30～100cmである。遺物は出土していない。

2群

SD4、5 溝跡で構成される。方向はN-60～65°-Wで、規模は検出長3.5～5.5m、幅28～33cm、深さ28～35cmである。また、断面形は幅広のU字形を呈する。遺物は出土していない。

3群

SD2、3、13、14で構成される。方向はN-1～3°-Eで、規模は検出長1.6～1.8m、幅25～30cm、深さ19～27cmである。断面形はU字形を呈する。これらは方向が類似することから、Ⅲ区の小溝状遺構群(1群)と同一の可能性もある。遺物は出土していない。

(4) ピット

Ⅱ区で3基検出した。Ⅰ区では確認されない。規模は径19～28cmで、深さは約30cmである。いずれも単層で、柱痕跡は確認されない。また、遺物も出土していない。

(5) 遺構外出土遺物

基本層中から弥生土器、土師器が出土した(第72図)。1～4は弥生土器である。1、4には磨り消し縄文が認められる。5～7は土師器で、5、6は坏、7は鉢である。いずれも非ロクロ調整で、内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。

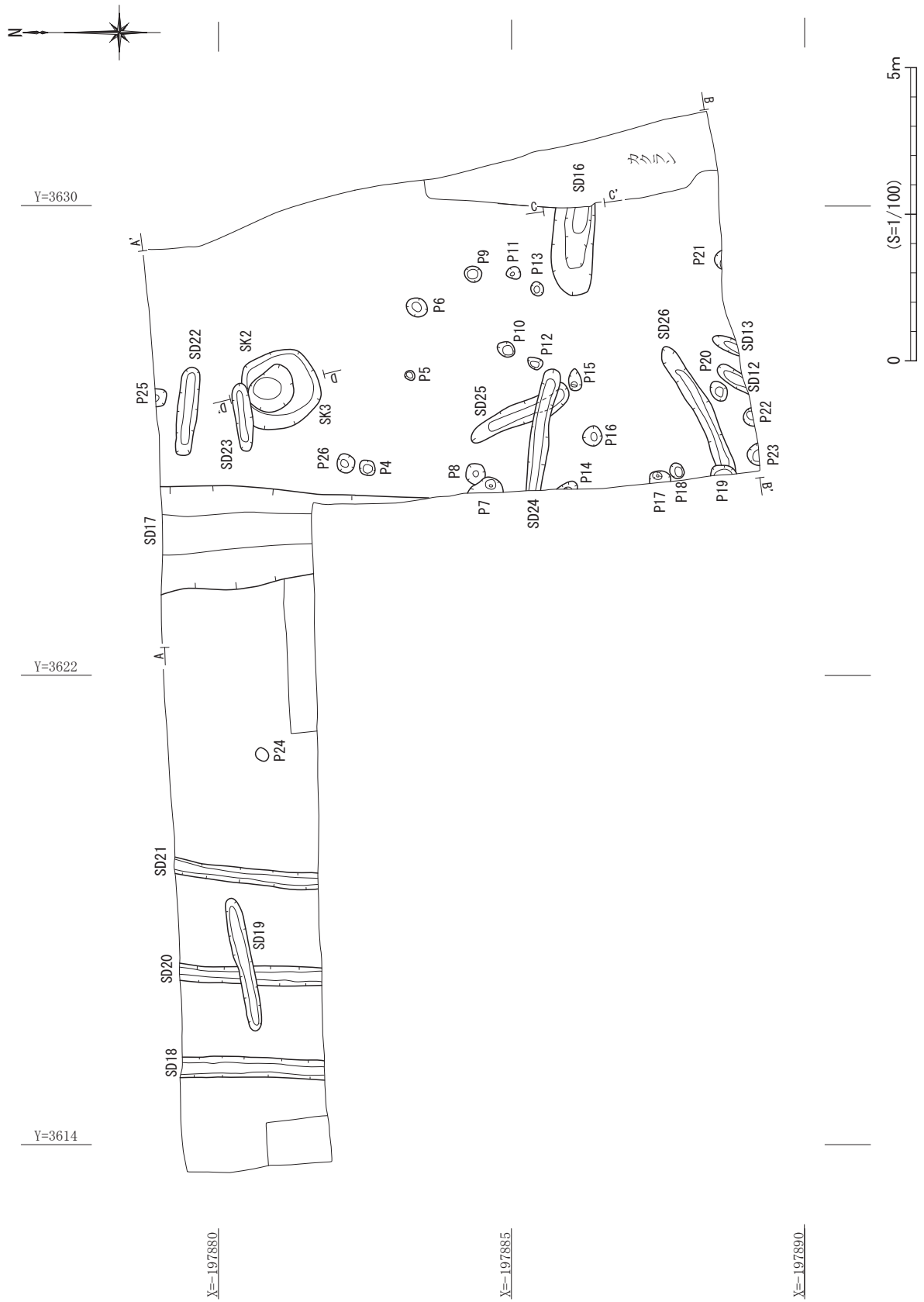
5. Ⅲ区の発見遺構と出土遺物

【V層上面検出遺構】

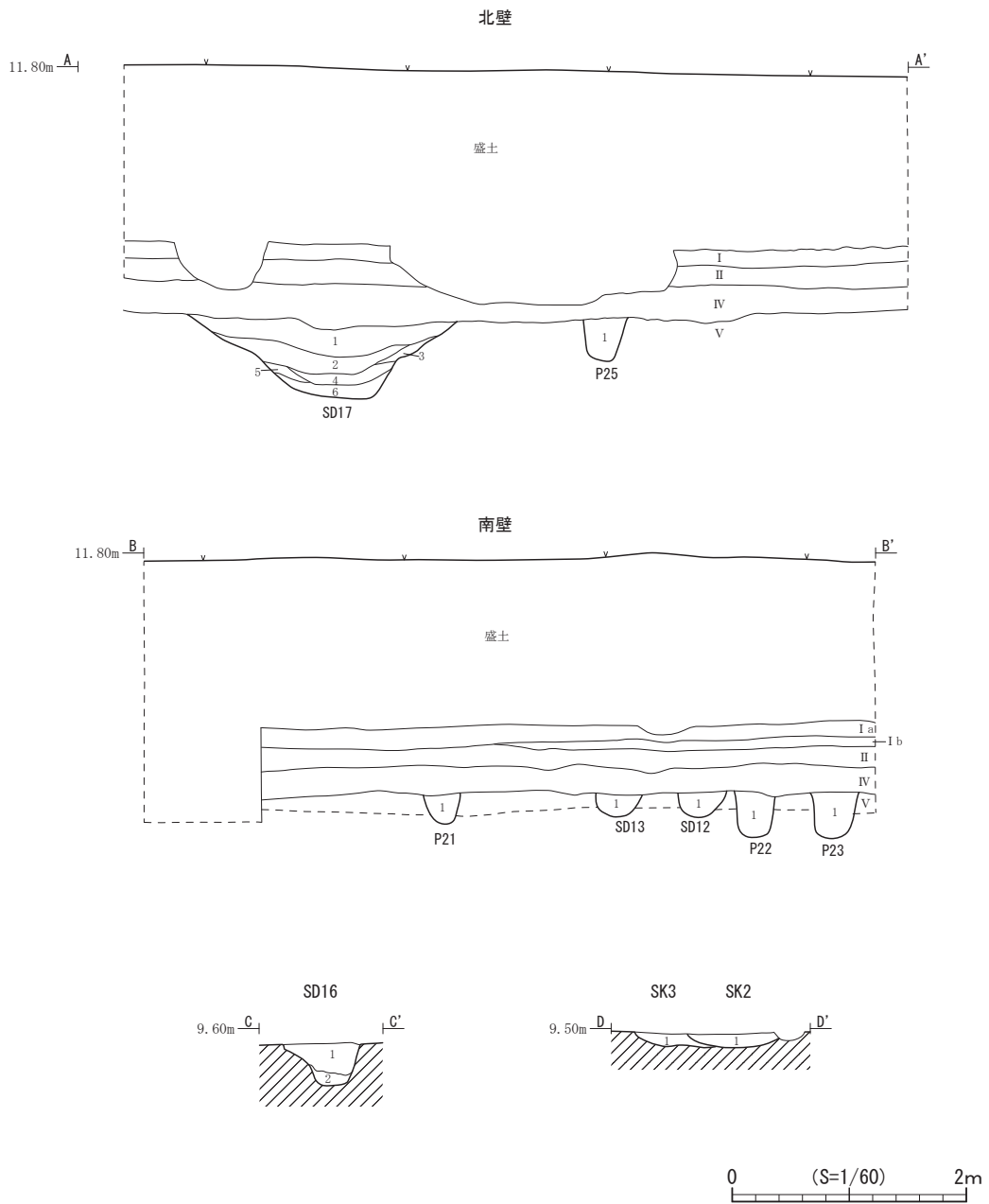
(1) 溝跡

SD16 溝跡 (第73図)

調査区南東部で検出した。東西方向の溝跡で東側は調査区外へと延びる。規模は検出長1.5m、幅70cm、深さ37cmである。断面形は逆台形状を呈し、堆積土は2層に分層される。また、遺物は出土していない。

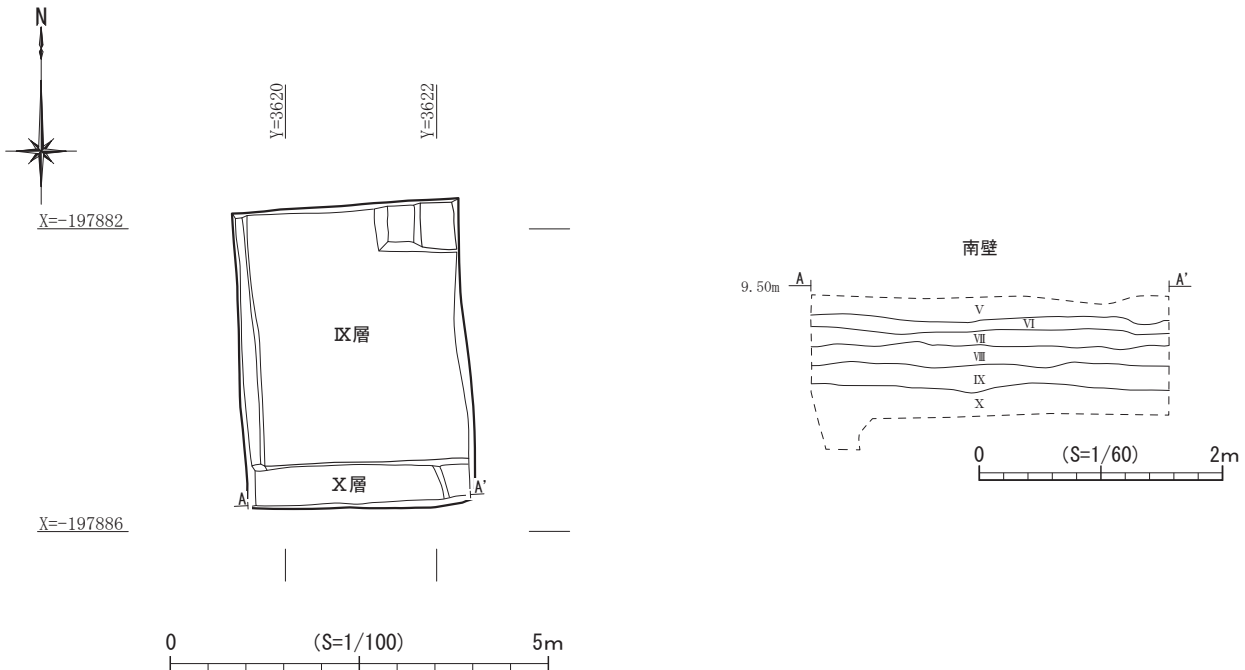


第73図 Ⅲ区Ⅴ層上面検出遺構

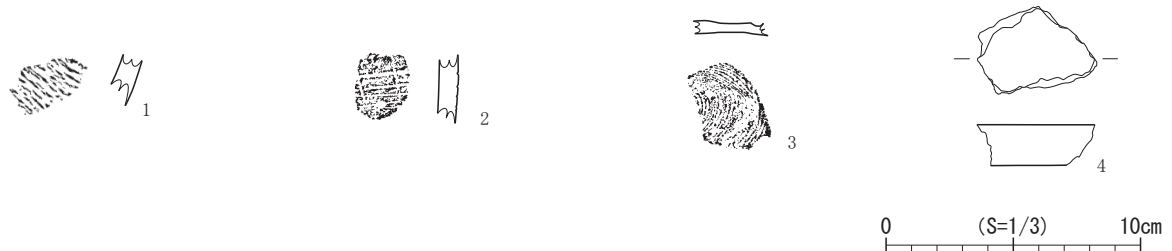


遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD16	1	10YR4/4 褐色	粘土	炭化物、黄褐色粘土ブロック含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土	黄褐色粘土ブロック含む。
SD17	1	10YR4/4 褐色	粘土	炭化物、酸化鉄少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土	黄褐色粘土、酸化鉄少量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	砂少量含む 酸化鉄を斑状に含む。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄多量に含む。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック少量含む。
	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロック少量含む。
SD27	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	砂少量含む。
SD28	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	砂少量含む。
SK2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物含む 砂少量含む。
SK3	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを少量含む 砂少量含む。
P22	1	10YR4/4 褐色	粘土	砂少量含む。
P23	1	10YR4/4 褐色	粘土	砂少量含む。
P25	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	砂少量含む。

第74図 III区調査区断面図



第75図 III区下層調査区平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	A-1	-	VI	縄文土器	深鉢	-	-	-	撚り糸文 ⁰	ミガキ	胎土緻密 砂粒含む	29-12
2	B-6	-	VI	弥生土器	深鉢	-	-	-	一本引き横位平行沈線→縦位沈線	ミガキ	胎土緻密 砂粒含む	29-13
3	Ia-1	-	I~IV	土師質土器	小皿	-	-	-	底：回転糸切り無調整	底：ヘラナデ	胎土緻密 砂粒含む	29-14
4	F-1	-	I~IV	瓦	平瓦	(3.4)	(4.7)	1.6	凸面：ナデ・いぶし 凹面：ナデ・いぶし 胎土緻密 砂粒含む			29-15

第76図 III区出土遺物

SD17 溝跡 (第73図)

調査区中央部で検出された。南北方向の溝跡で、その両端は調査区外へと延びる。規模は検出長 4.5m、幅 190cm 深さ 73cm である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は 6 層に分層される。遺物は出土していない。

(2) 土坑

SK2 土坑 (第73図)

調査区北東部で検出された。SK3 土坑よりも新しく、SD23 溝跡よりも古い。平面形は円形を呈し、規模は長軸 82cm、短軸 72cm で、深さは約 12cm である。断面形は U 字形を呈する。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

SK3 土坑 (第73図)

調査区の北東部で検出された。SD23 溝跡、SK2 土坑よりも古い。平面形は円形を呈し、規模は長軸 150cm、短軸 139cm で、深さは約 10cm である。断面形は U 字形を呈する。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

(3) 小溝状遺構群 (第73図)

畑の耕作痕と考えられる遺構群はSD18～26溝跡が該当すると考えられ、1群のまとまりを確認された。

1群

SD18、20、21で構成される。方向はN-2～7°-Eで、規模は検出長2.4～2.5m、幅26～37cm、深さ16～24cmである。断面形はU字形を呈する。小溝同士の間隔は120～145cmである。遺物は出土していない。

(4) ピット

23基検出した。規模は径11～38cmで、深さは13～39cmである。いずれも単層で柱痕跡は確認されなかった。また、遺物も出土していない。

(5) 遺構外出土遺物

基本層中からは土師質土器と近世のいぶし瓦が出土した(第76図3・4)。

【下層調査】

南北4m、東西3mの規模でGL-約3mまで掘り下げ、下層の調査を行った。基本層VI～X層上面のそれぞれにおいて遺構確認作業を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物はVI層から縄文土器と弥生土器が出土した(第72図1・2)。2は弥生時代中期のものと考えられる。

6. まとめ

今回の調査地点は六反田遺跡の中央部にあたる。調査ではⅢ層上面で溝跡を1条、Ⅴ層上面で竪穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑3基、小溝状遺構群、ピットを検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、近世の瓦、石器などが出土した。

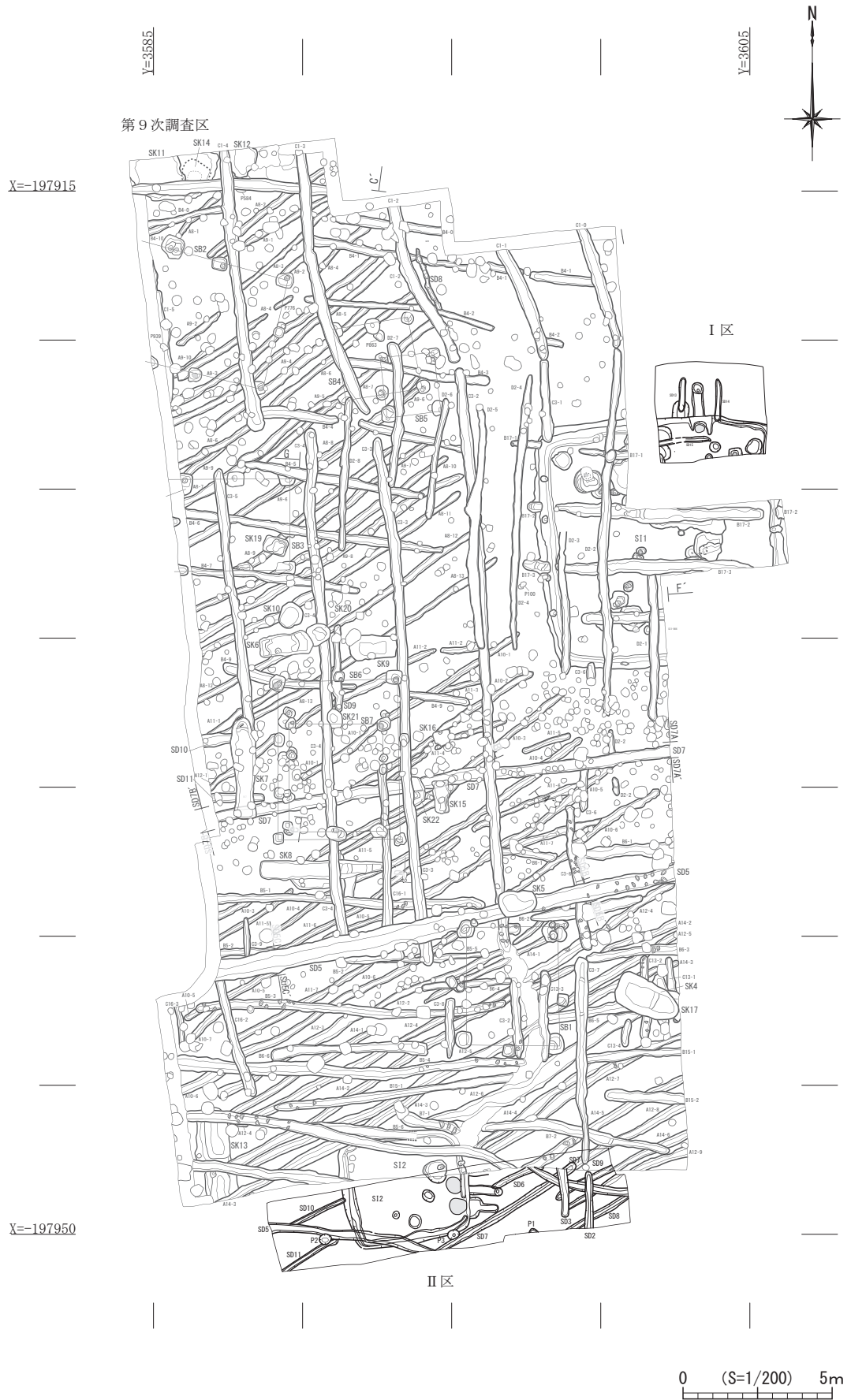
I、II区では第9次調査で確認されたSI1、SI2竪穴住居跡の未調査部分を調査した。その結果、SI1竪穴住居跡は規模、南北約8.5m、東西約8.0mと比較的大規模であり、北壁東よりにカマドが敷設されていることが確認された。また、出土した土師器はその特徴から国分寺下層式に位置付けられ、第9次調査で遺構の時期が8世紀前葉～中葉にかけてとされたことと矛盾しない。また、SI2竪穴住居跡は南北長3.8m、東西長4.3mの規模であることが確認された。住居は新旧2時期の変遷が確認され、新段階の時期に伴うカマドが住居跡東壁に3基確認された。出土した土師器はその特徴からSI1竪穴住居跡と同様に国分寺下層に位置付けられる。また、Ⅲ区ではⅤ層上面で幅が2mと比較的大規模な溝跡(SD17)が確認されたが、遺物は出土しておらず時期は不明である。また、他の調査区と比べ、遺構の密度や遺物の出土量が少ない。

参考文献

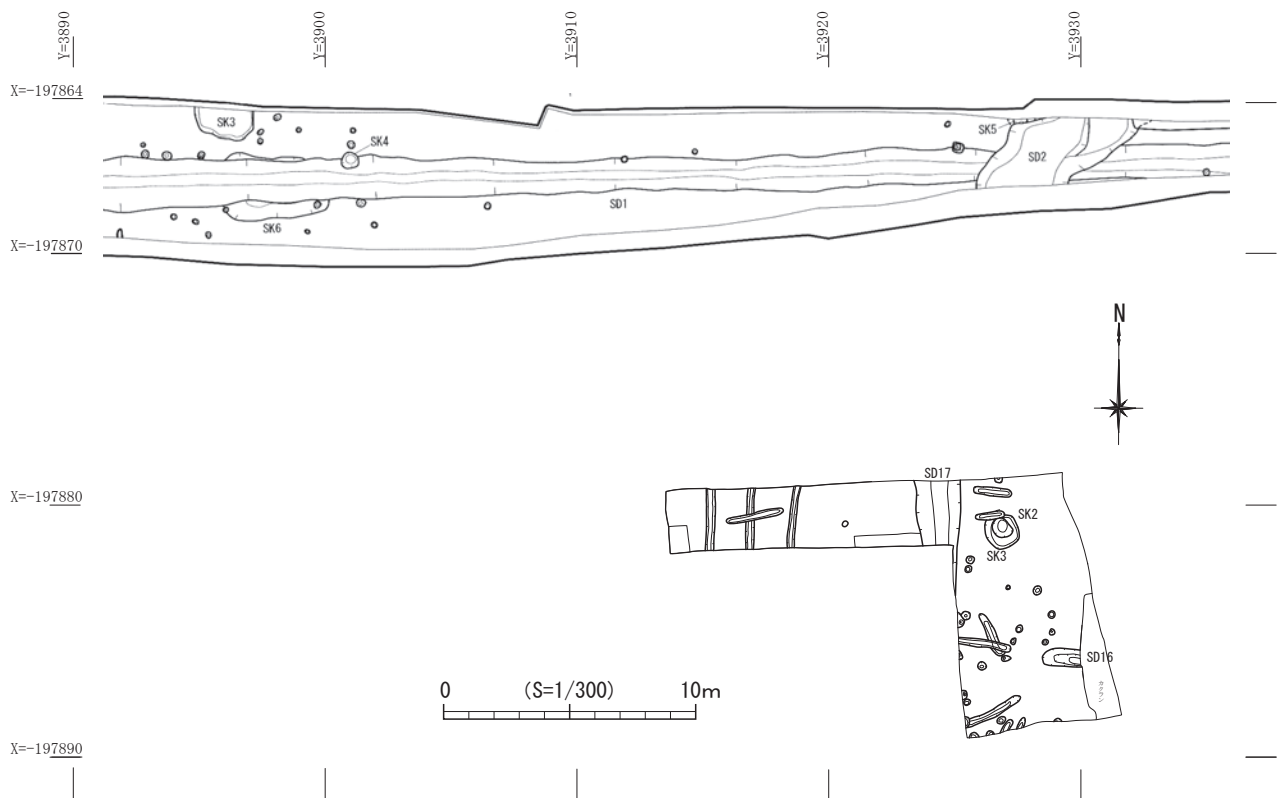
仙台市教育委員会 1984 『六反田遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第72集

仙台市教育委員会 2012 『六反田遺跡 第9次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第398集

仙台市教育委員会 2017 『元袋遺跡・六反田遺跡・大野田古墳群ほか—仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ—』仙台市文化財調査報告書第455集



第77図 I・II区と第9次調査区合成図



第78図 III区と第5次調査6F区合成図



1. I区V層上面遺構完掘状況（南から）



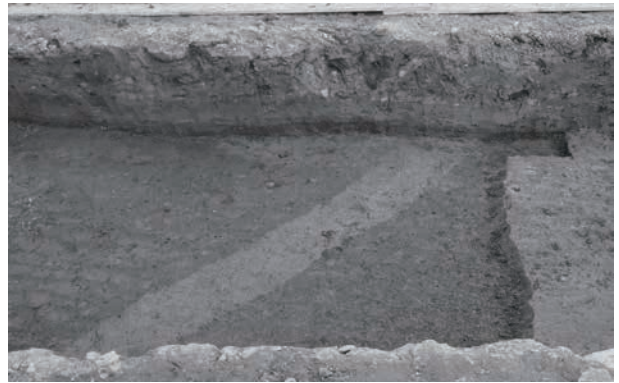
1. I区V層上面遺構検出状況（南から）



2. I区SI1 竪穴住居跡（西から）



3. SI1 竪穴住居跡南壁断面（北から）



4. II区III層上面SD1 溝跡検出状況（北から）



5. II区V層上面遺構完掘状況（西から）



1. II区V層上面遺構検出状況（西から）



2. S12 竖穴住居跡新段階床面検出（南西から）



3. S12 竖穴住居跡カマド2土層断面（南西から）



4. S12 竖穴住居跡カマド1土層断面（南西から）



5. S12 竖穴住居跡新段階完掘状況（南東から）



6. S12 竖穴住居跡古段階床面検出状況（南西から）



7. S12 竖穴住居跡掘方土師器出土状況（南から）



8. I・II区調査区埋戻状況（北東から）



1. Ⅲ区Ⅴ層上面遺構完掘状況（西から）



2. SD16 溝跡断面（東から）



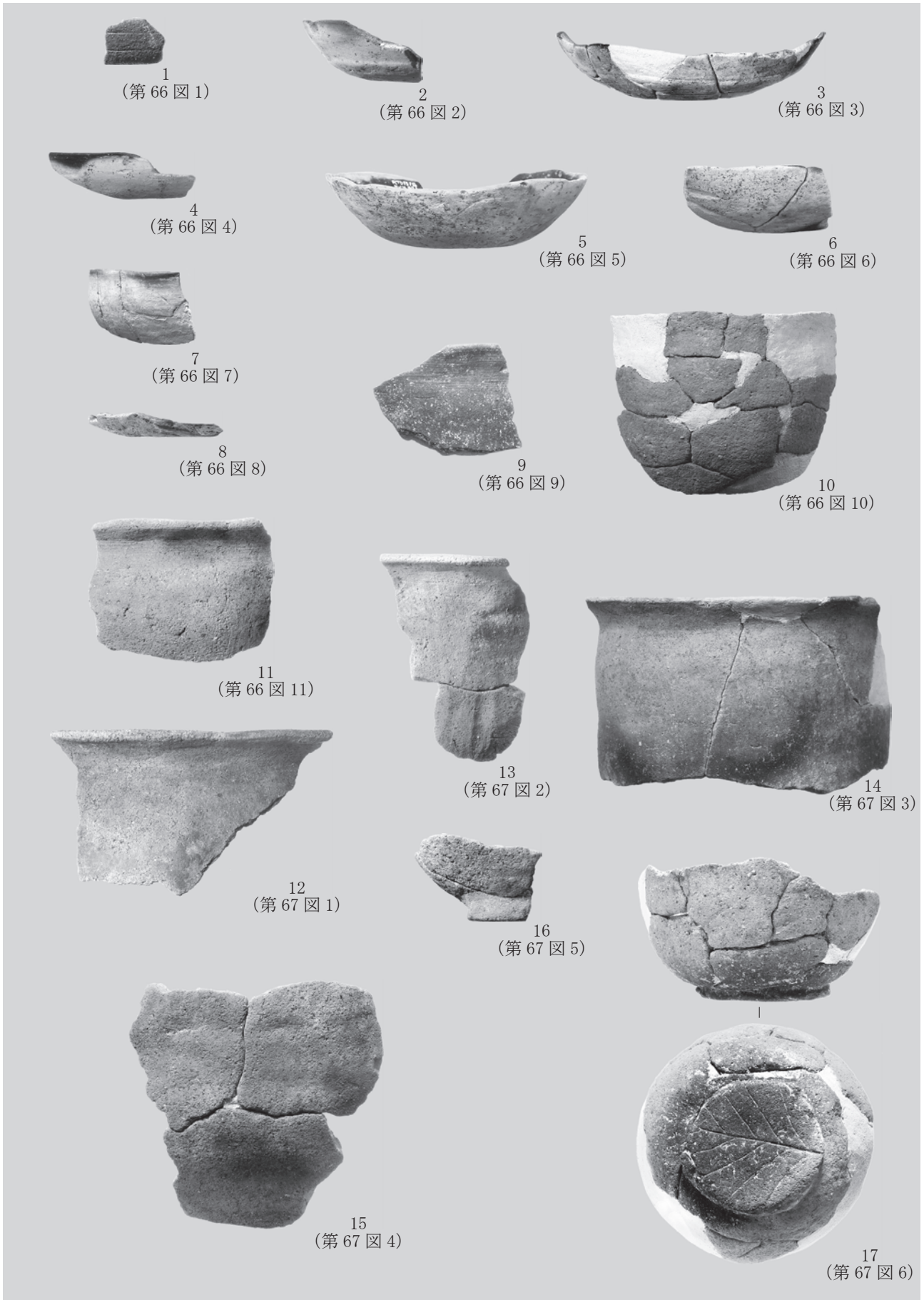
3. SD17 溝跡断面（南から）



4. 下層調査（Ⅹ層上面）遺構確認状況（北から）



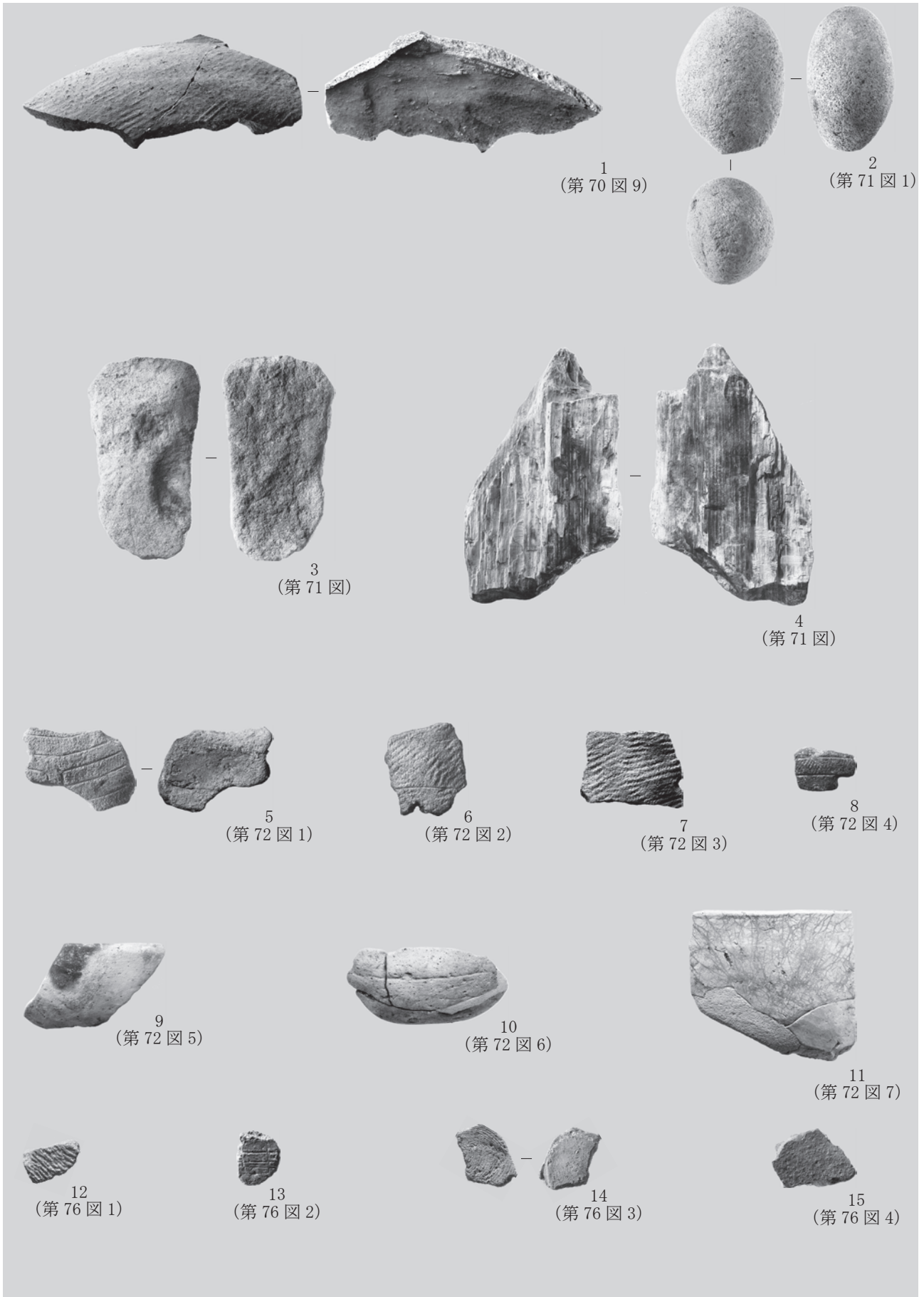
5. 下層調査区南壁壁面（北から）



写真图版 27 六反田遺跡第15次調査出土遺物(1)



写真図版 28 六反田遺跡第15次調査出土遺物(2)



写真图版 29 六反田遺跡第15次調査出土遺物(3)

第6章 富沢館跡の調査

第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流の笹川によって形成された自然堤防上に立地する。現況での標高は約14～18mである。

富沢館跡はこれまでに7次にわたる調査が行われており、縄文時代、古代、中近世の時期の遺構、遺物が発見されている。

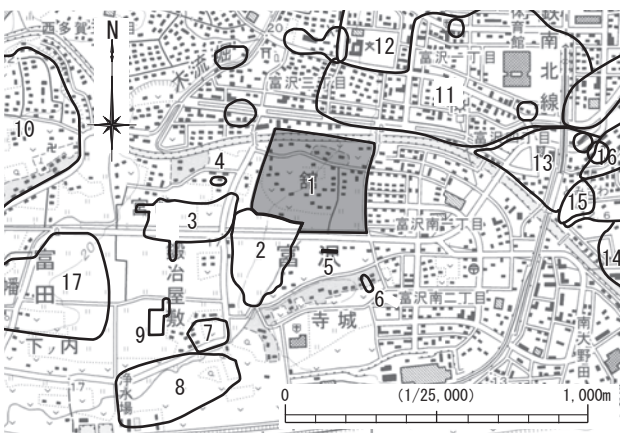
縄文時代では後期中葉の宝ヶ峯式の時期を主体として竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほか土偶やスタンプ形土製品なども出土している。

古代では炉跡を伴う竪穴遺構が複数確認されている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定され、鉄滓が多数出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。また同様の遺構は隣接する鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷A遺跡からは「謹解 申請稻事 合□□」「大田部」などと刻書された砥石が出土している。(仙台市教育委員会 2018)

中世になるとこの地域は国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった栗野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏家臣の富沢伊賀守が居城したと伝わる。

平成25年度から始まった土地区画整理事業に伴い、館跡の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には1～4条に渡る堀跡が巡らされていたことが判明した。また主郭部の東側には出入りに位置したと考えられる門跡が検出され、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることが確認され、虎口を形成していたものと考えられている。また2基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古銭などが出土した。(仙台市教育委員会 2018)

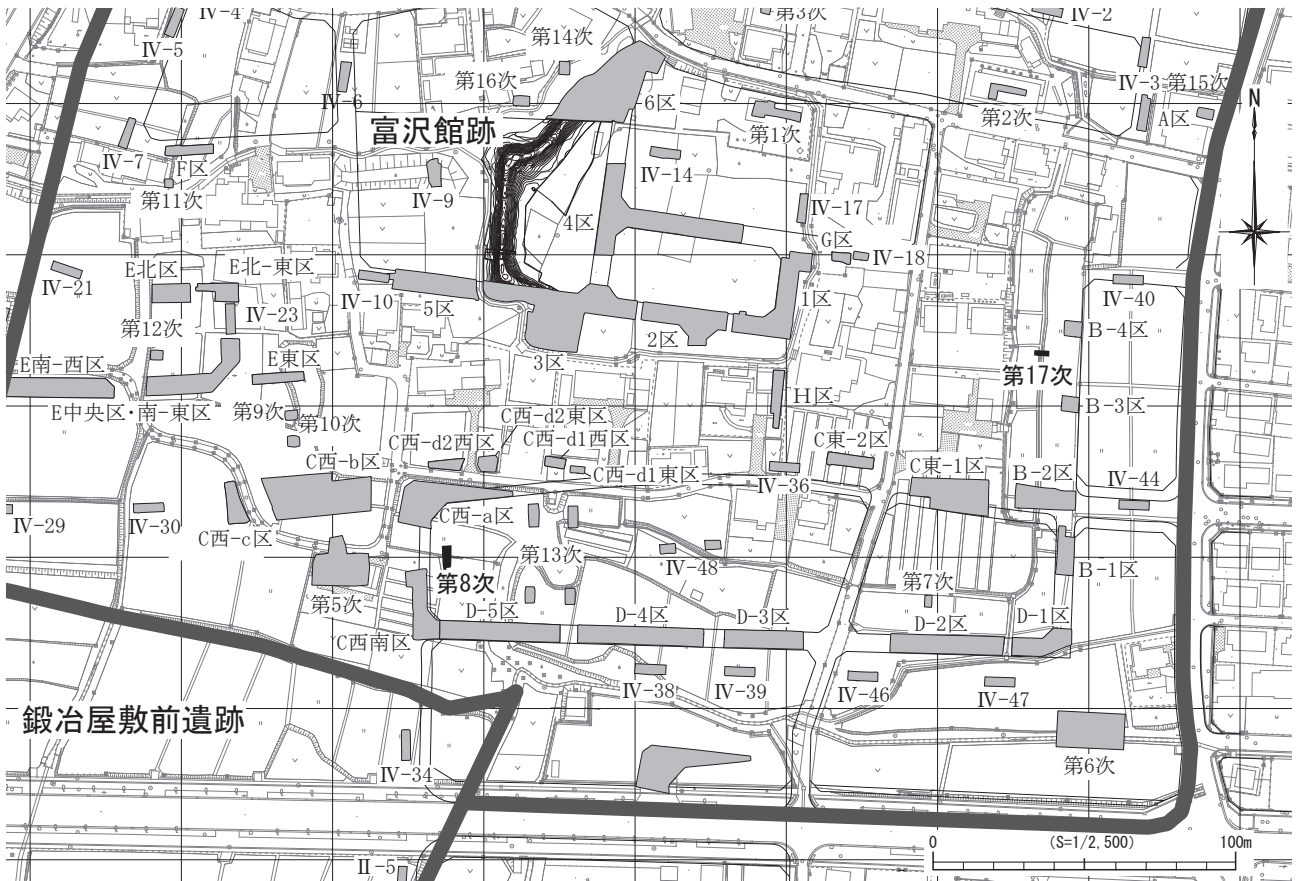
近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があつては城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畑や水田として利用していたと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡、集落跡	自然堤防	縄文、平安～近世
2	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良～中世
3	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～中世
4	宮崎遺跡	集落跡	丘陵	平安
5	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文晩、古代
6	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩
7	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防、後背湿地	縄文、古代～近世
8	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
9	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文中、古代～平安
11	山口遺跡	集落跡、水田跡、包含地	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
12	富沢遺跡	水田跡、包含地	後背湿地	旧石器～近世
13	下ノ内遺跡	集落跡、墓、畑跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
14	伊古田B遺跡	畑跡	自然堤防	古墳～平安
15	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、奈良、平安
16	六反田遺跡	集落跡、古墳、墓、畑跡	自然堤防	縄文～古墳、平安～近世
17	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安

第79図 富沢館跡と周辺の遺跡

第2節 第8次調査

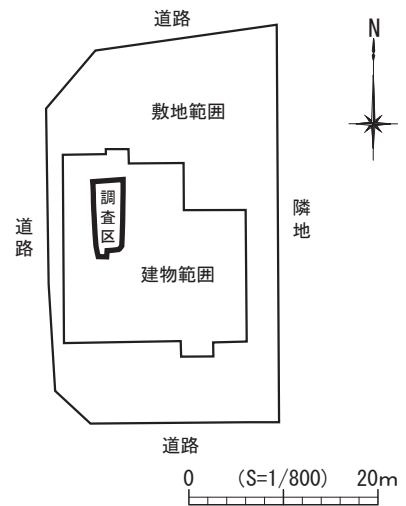


第 80 図 富沢館跡調査区地点位置図

第2節 第8次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	富沢館跡 (宮城県遺跡登録番号 01246)
調 査 地 点	仙台市太白区富沢字館 24、27、28、40、42 の各一部および 25、26、富沢字熊ノ前 37- 5 の一部
調 査 期 間	平成 30 年 12 月 20 日
調 査 対 象 面 積	338.02 m ²
調 査 面 積	21.0 m ²
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主事 小林 航 文化財教諭 尾形隆寛

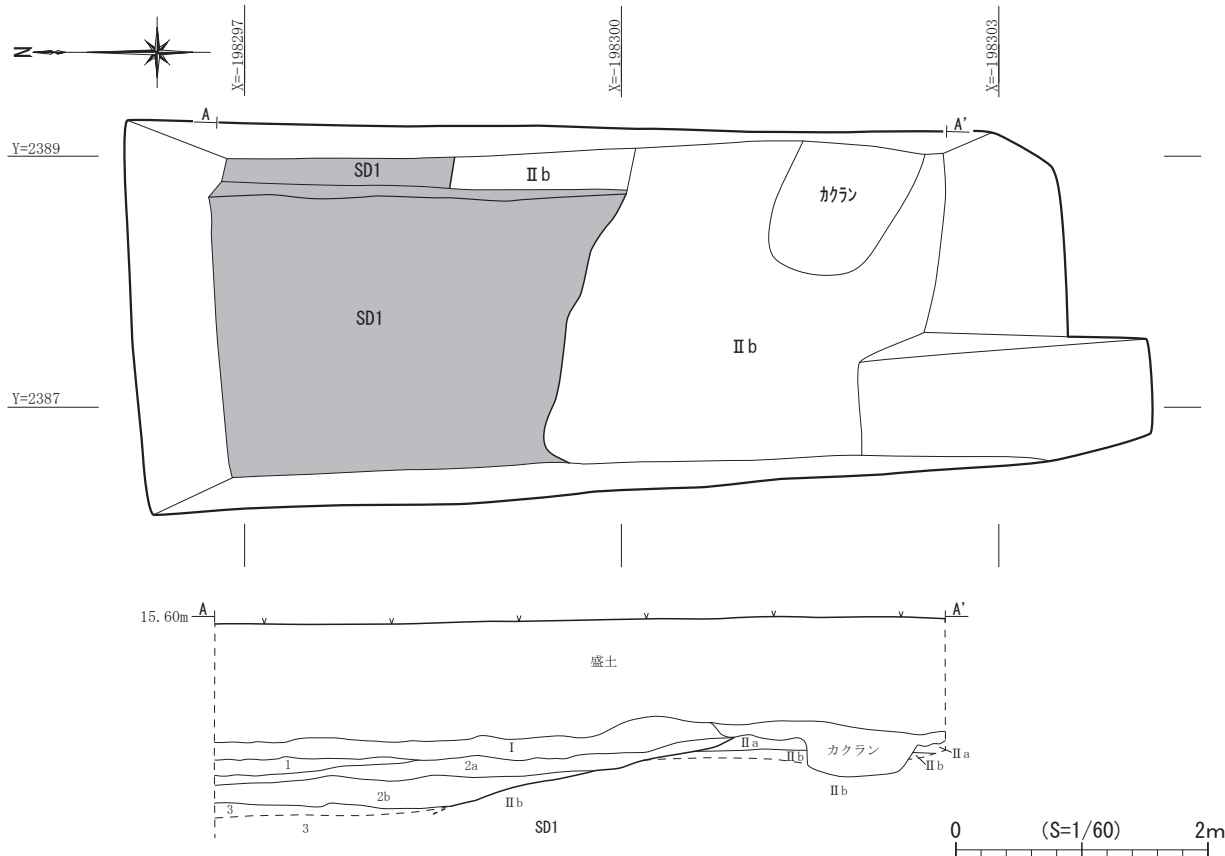


第 81 図 第 8 次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成 30 年 11 月 13 日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成 30 年 11 月 15 日付 H30 教生文第 105-096 号で回答）に基づき実施した。

調査地点は館に伴う東西方向の堀跡の存在が想定されたことから、当初調査区は東西 3m、南北 15m の規模で設定したが、設定範囲半ばで溝跡の南側上端を確認したことから、南北約 7m の長さに縮小した。調査は重機により



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
	2a	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に、マンガン粒を少量含む。
	2b	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に、マンガン粒を含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に少量含む。

第 82 図 第 8 次調査区平面・断面図

盛土および I 層の除去を行った。その後、II b 層上面にて遺構検出作業を行い、調査区東壁に沿って幅約 35cm の側溝状に堆積土を掘り下げたが、安全面を考慮して遺構の完掘は行わなかった。

調査後、調査区平面図 (S = 1/40)、調査区北壁断面図 (S = 1/20) を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土 (層厚 80 ~ 95cm) の下で、基本層を大別 2 層、細別 3 層確認された。遺構検出面である II a 層上面までの深さは 0.95 m である。

I 層：10YR4/2 灰黄褐色の粘土質シルト。区画整理以前の水田耕作土で、層厚は 15 cm ~ 30 cm。

II a 層：10YR4/4 褐色の粘土。酸化鉄、暗褐色粘土を粒状に含む。層厚は約 12cm。

II b 層：10YR4/3 灰黄褐色の粘土。酸化鉄、マンガン、暗褐色粘土を粒状に含む。層厚 45cm 以上。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、II 層上面で溝跡が 1 条確認された。遺物は出土しなかった。

(1) 溝跡

SD1 溝跡 (第 82 図)

調査区北半で確認された東西方向の溝跡である。規模は幅 3.4m 以上、長さ 2.5m 以上である。調査区東壁際を

第2節 第8次調査

側溝状に約40cm掘り下げたが、安全面を考慮し、遺構の完掘はしていない。堆積土は大別3層、細別4層に細分される。いずれの層も水平に堆積している。

5. まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の南部に位置し、城館に伴う堀跡の想定範囲内にあり、東西方向の堀跡の検出が予測された。調査の結果、溝跡が検出され、当初予想された場所よりも約5.5m北側であったが、近隣の調査で検出されている堀跡とは堆積土が類似しており、規模からも堀跡の一部と考えられる。

参考文献

仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』

仙台市教育委員会 2004 『保春院前遺跡他』仙台市文化財調査報告書第274集（富沢館跡第2次）

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか—仙台市富沢駅西土地区画整理事業遺跡発掘調査報告書一』仙台市文化財調査報告書第466集（富沢館跡第4次）



1. 遺構検出状況（南から）

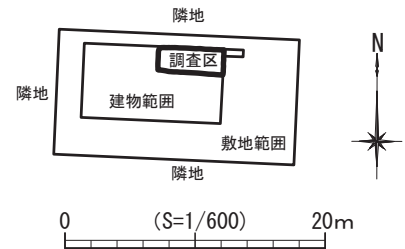


2. 調査区東壁断面（南西から）

第3節 第17次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	富沢館跡 (01246)
調 査 地 点	仙台市太白区富沢字館 57- 1、76- 1、77- 1、 77- 2、58、水の各一部 (34 街区 58 画地)
調 査 期 間	令和元年 11 月 18 日～ 11 月 19 日
調査対象面積	58.2 m ²
調 査 面 積	約 10 m ²
調 査 原 因	建売住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 仙台城史跡調査室、調査調整係
担 当 職 員	主事 須貝慎吾 佐藤恒介



第 83 図 第 17 次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より令和元年 11 月 11 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和元年 11 月 13 日付 H31 教生文第 101-334 号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築範囲内に 2 × 5 m の規模で設定した。重機により盛土および基本層 I ～ III 層の除去を行い、その後、IV 層上面で溝跡 1 条、溝跡堆積土上面で土坑 1 基を確認した。

調査では、必要に応じてデジタルカメラにより記録写真を撮影し、調査区平面図 (S = 1/20) および断面図 (S = 1/20) を作製した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土 70 ～ 90 cm の下で、基本層を大別 4 層、細別で 6 層確認された。遺構確認を行った IV 層上面までの深さは 1.6 m である。

I 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト。炭化物粒・小礫を少量含む。区画整理以前の旧表土と考えられる。層厚 29 cm ～ 30 cm。

II a 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト。斑文状の酸化鉄・炭化物粒を少量含む。黄褐色土をブロック状に含む。層厚 14 cm ～ 20 cm。

II b 層：10YR3/4 暗褐色砂質シルト。斑文状の酸化鉄を少量含む。層厚 12 cm ～ 18 cm。

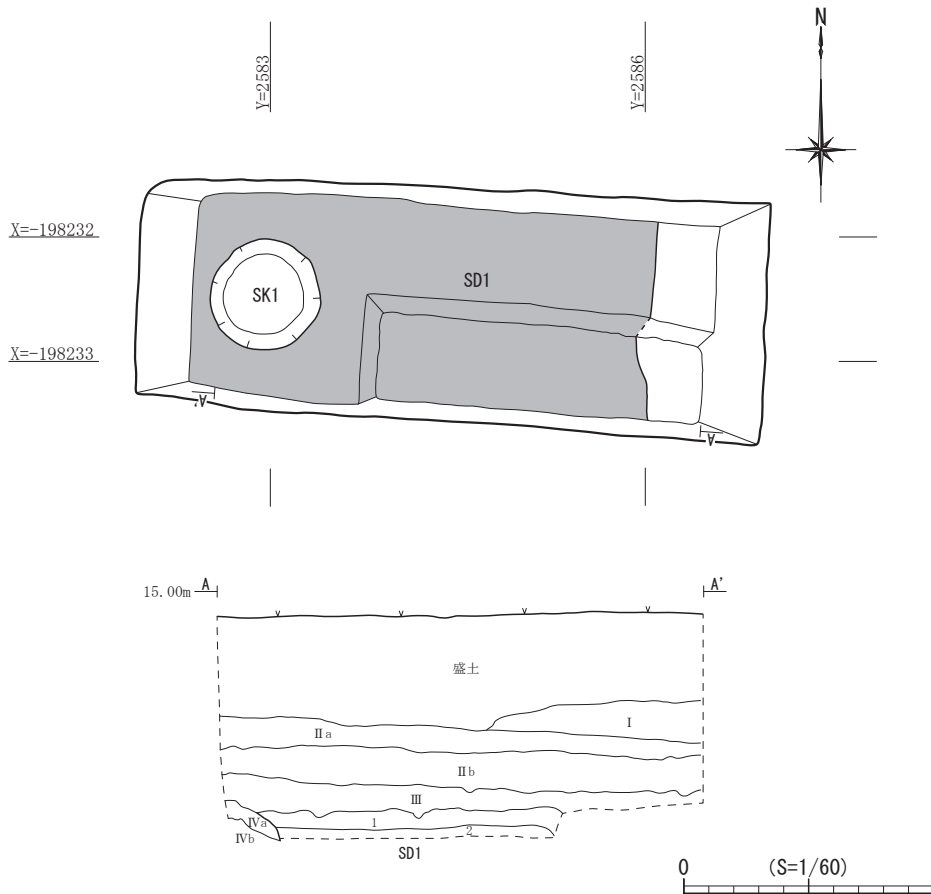
III 層：10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト。斑文状の酸化鉄を少量、炭化物粒を多く含む。層厚 14 cm ～ 34 cm。

IV a 層：10YR3/3 暗褐色粘性シルト。斑文状の酸化鉄、炭化物粒を少量含む。層厚 10 cm 程度。

IV b 層：10YR2/3 黒褐色粘性シルト。斑文状の酸化鉄を含む。

4. 発見遺構と出土遺物

調査では、溝跡が 1 条、土坑が 1 基確認された。遺物は出土していない。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に、マンガン粒を少量含む。

第84図 第17次調査区平面・断面図

(1) 溝跡

SD1 溝跡 (第84図)

調査区東側で東肩が確認された。検出長は1.6mで、南北方向にむけて調査区外に延びる。掘削深度の関係から完掘には至っていないが、調査区南壁で溝の立ち上がりが確認された。確認された堆積土は2層で遺物は出土していない。

(2) 土坑

SK1 土坑 (第84図)

調査区西側のSD1溝跡の堆積土上面で確認した。直径約90cmの円形で、深さは約25cmであった。断面形は、箱型を呈する。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

5. まとめ

第17次調査地点は、富沢館跡の主郭部から東側に展開する郭東辺に位置している。基本層IV層上面で溝跡1条、溝の堆積土上面で土坑1基が確認された。溝跡は、区画整備事業に伴う第4次調査B-2区で確認されているSD91(堀跡)と同一の堀跡の可能性があり、第17次調査区以南で一部確認されていたものが、さらに北方向に延びることが確認された。



1. 調査区全景（西から）



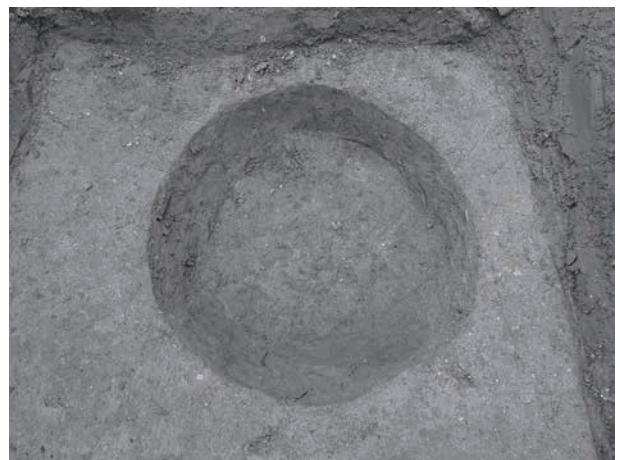
2. 調査区南壁（北から）



3. 調査区東壁（西から）



4. SD1 溝跡検出状況（北から）



5. SK1 土坑完掘状況（東から）



第85図 富沢館跡 検出堀跡位置図

第7章 羽黒堂遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

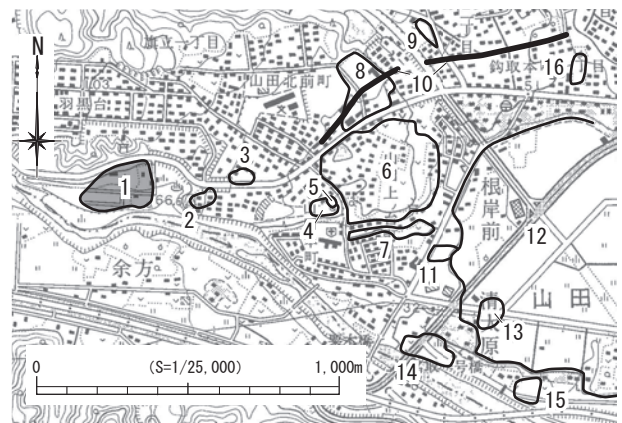
羽黒堂遺跡は仙台市の西部、太白区山田本町に位置し、名取川左岸の段丘上に立地している。遺跡の範囲は東西約350m、南北約170mに広がり、標高は約38～47mである。現況は畑地や宅地となっている。周囲には山田上ノ台遺跡〈6〉、北前遺跡〈8〉、杉土手〈10〉、山田条里遺跡〈12〉などが所在している。このうち山田上ノ台遺跡は旧石器時代から縄文時代、古代、近世にかけての時期の遺構、遺物が発見され、中でも縄文時代中期末葉の竪穴住居跡が30軒以上発見されており、現在も調査が行われている。隣接する北前遺跡においても早期末葉から中期にかけての竪穴住居跡と土坑群などが発見されている。また平安時代の窯跡も発見されており、須恵器の甕、土師器の坏などが出土している。山田条里遺跡からは近世から近代にかけての屋敷跡が発見され、屋敷を区画する堀跡からは陶磁器や瓦、木製品や金属製品などが多数出土している。

羽黒堂遺跡に関しては昭和54年に今回の調査地点の南西側で、宅地造成工事に伴い羽黒堂遺跡調査団により調査が行われ、10世紀以降の時期の土器焼成遺構が8基検出されている。遺物は内面が黒色処理され、底部が回転系切りの土師器の坏、ロクロ調整の後、肩部より下面をヘラケズリで調整している甕、赤焼土器、須恵器の甕などが出土している。

第2節 第1次調査

1. 調査要項

遺跡名	羽黒堂遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01048)
調査地点	仙台市太白区山田本町 14-18 外
調査期間	平成30年12月17日～19日
調査対象面積	925.33 m ²
調査面積	108.50 m ²
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主任 及川謙作 主事 小林 航 柳澤 楓 文化財教諭 尾形隆寛 佐藤文征

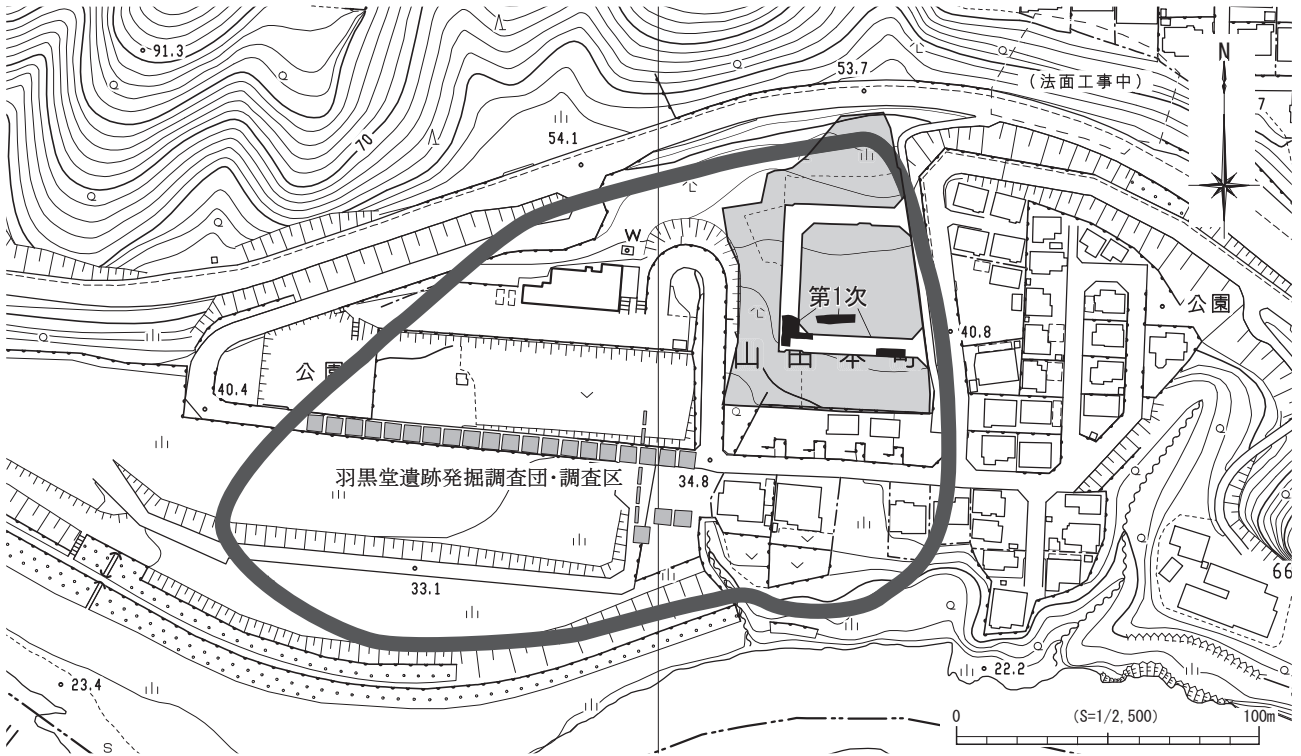


番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	羽黒堂遺跡	散布地	段丘	縄文、奈良、平安
2	羽黒堂前A遺跡	散布地	段丘	縄文、古墳、平安
3	羽黒堂前B遺跡	散布地	段丘	縄文、古墳、平安
4	山田本町遺跡	散布地、集落跡	段丘	縄文、平安
5	山田上ノ塚	塚	段丘	近世?
6	山田上ノ台遺跡	集落跡、包含地	段丘	旧石器、縄文、奈良、平安、近世
7	汚田通A遺跡	散布地	段丘	縄文、平安
8	北前遺跡	集落跡、包含地	段丘	縄文、平安、近世
9	上野山遺跡	散布地	丘陵麓	縄文
10	杉土手	土手	丘陵、段丘	近世
11	汚田通B遺跡	散布地	段丘	平安
12	山田条里遺跡	水田、屋敷、散布地	段丘、自然堤防	縄文、奈良、平安、近世
13	竹ノ内前遺跡	散布地	段丘	奈良、平安
14	清太原西遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
15	清太原東遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
16	町遺跡	散布地	丘陵麓	縄文、古墳、平安

第86図 羽黒堂遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成30年3月28日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成30年3月30日付H29教生文第103-103号で回答）に基づき実施した。

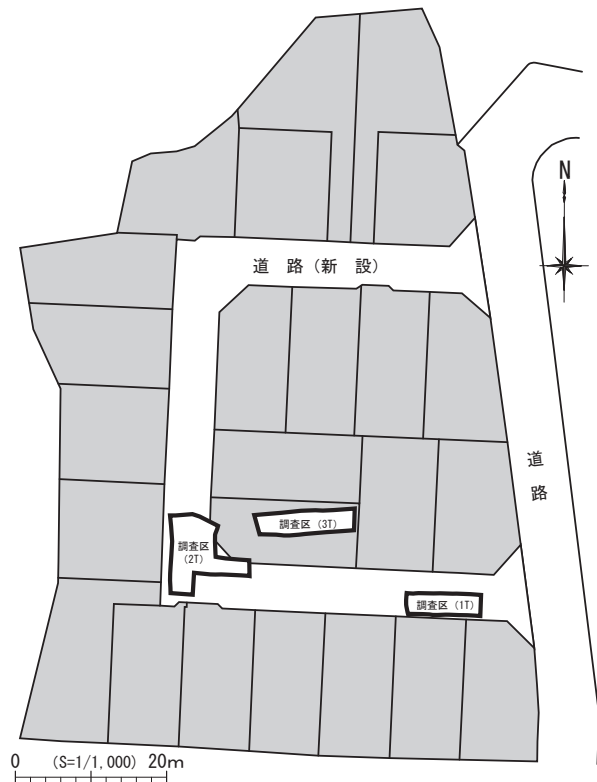


第 87 図 第 1 次調査区位置図

今回の事業地では平成 25 年度にも宅地造成工事に伴い確認調査が行われている。今回、道路や切土の範囲などが変更された新たな宅地造成計画で協議書が出し直されたことから、前回の事業計画で調査が行われなかった南側を中心に確認調査を行った。

調査区は敷地内道路建設予定範囲に幅 3m、長さ 10m の規模で 3ヶ所設定した。いずれの調査区も重機によりⅠa～Ⅲa層を除去し、Ⅲb層上面で遺構検出作業を行った。その結果、1T ではピット 1 基を、2T ではピット 5 基で構成された掘立柱建物跡 1 棟、土坑 3 基、ピットを 4 基検出した。2T は掘立柱建物跡が検出されたため、調査区を当初の予定よりも東側に拡張した。

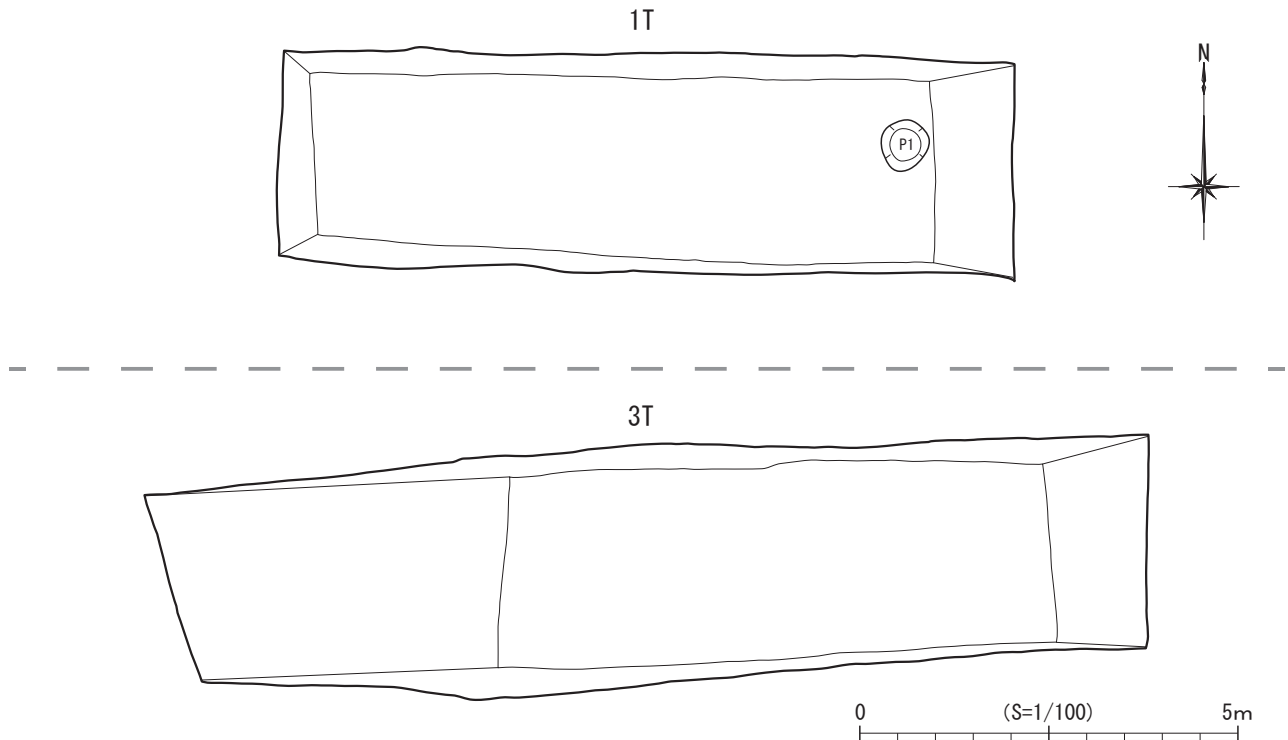
今回の調査では遺構配置図(S = 1/20)、調査区配置図(S = 1/50、1/100)、断面図(S = 1/20) を作製した。記録写真はデジタルカメラにて撮影した。記録作業終了後、現地を申請者側に引き渡すことで調査を終了した。



第 88 図 第 1 次調査区配置図

3. 基本層序

今回の調査では、基本層を大別で 3 層、細別で 7 層確認した。遺構検出面であるⅢa層までの深度は 0.6～0.85m である。



第89図 1T・3T 調査区平面図

- I a 層：10YR2/3 黒褐色シルト。炭化物粒を少量含む。層厚は約0～35 cmである。現代の耕作土層である。
- I b 層：10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。炭化物粒を斑状に含む。下層との境に畑の耕作に伴うと推定される凹凸が存在する箇所がある。近現代の耕作土層である。
- II a 層：10YR3/3 暗褐色シルト。凝灰岩礫を斑状に、炭化粒を少量含む。
- II b 層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。凝灰岩礫と炭化粒を斑状に含む。II a 層と混入物の構成はほぼ同一である。
- III a 層 (2T)：10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。地山ブロック (III b 層) を下層との境に斑状に多量に含む。その他の混入物は少ない。2T でのみ確認された今回検出された遺構の検出面である。
- III a 層 (3T)：10YR4/4 褐色粘土質シルト (場所によっては砂質シルト)。凝灰岩礫を斑状に含む。3T でのみ確認された。
- III b 層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。酸化鉄ブロックを斑状に含む。

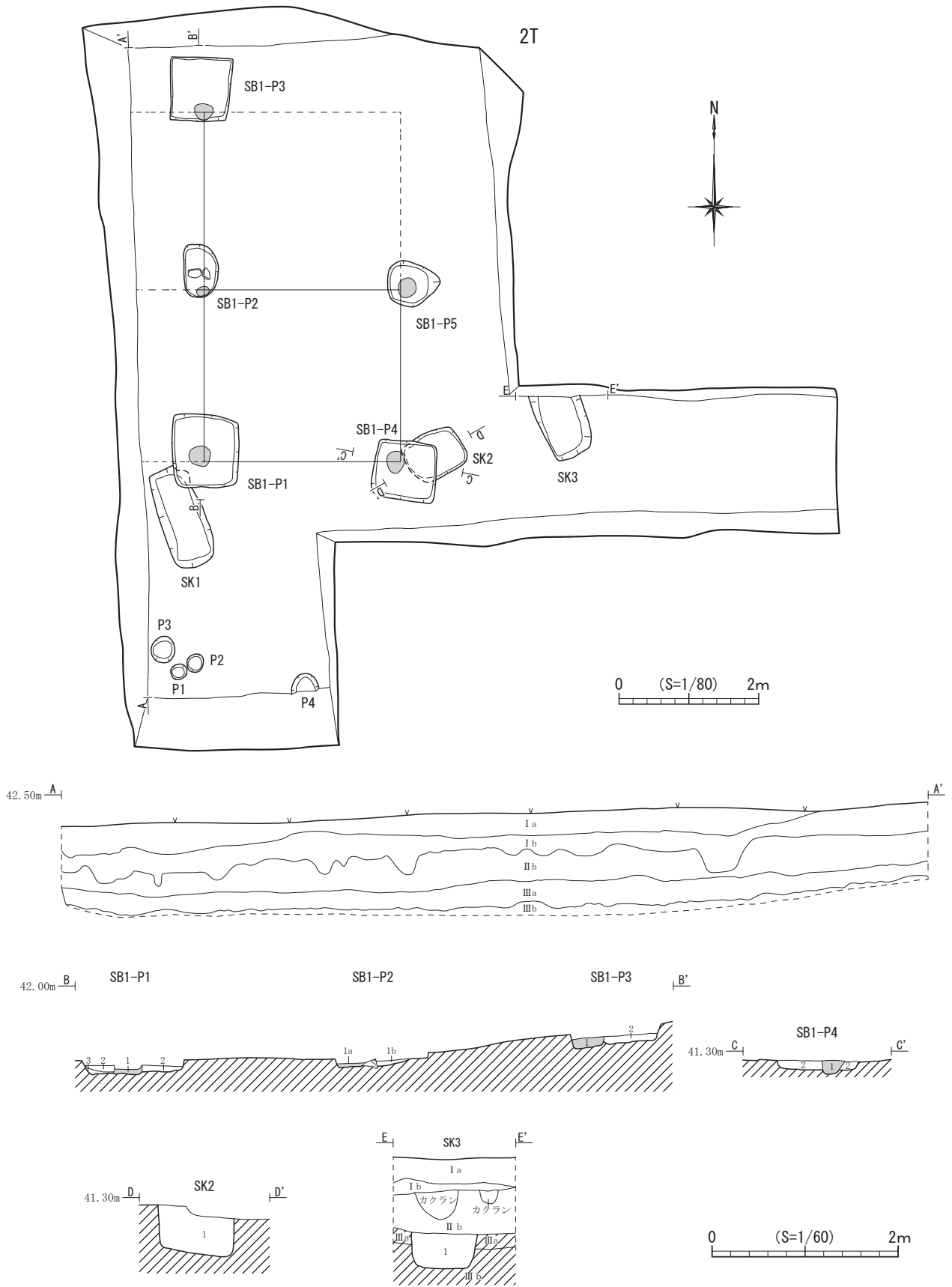
4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、柱穴5基で構成される掘立柱建物跡1棟、土坑3基、ピット5基が検出された。遺物は土師器片が1点出土した。

SB1 掘立柱建物跡 (第90図)

2T 中央部で検出された。梁行2間、桁行2間以上の規模で、東西棟の総柱建物跡の可能性ある。柱間寸法は梁行が約2.3～2.45mで、桁行は約2.7～2.9mである。

柱穴は5基確認されている。側柱 (P1・3・4) は直径約0.9mの隅丸方形を呈する。妻柱と束柱 (P2・5) は直径約0.65～0.75mの楕円形を呈する。柱痕跡は15～30cmで、掘方の深さは検出面から約10～19cmである。P2



第90図 2T調査区平面・断面図

第4表 2T 掘立柱建物跡・土坑土層註記表

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SB1-P1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性強、しまりやや弱、褐色粘土質シルトブロック(φ5~30mm)含む。底面にぶい黄褐色に変色。(柱痕跡)
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性やや強、しまりあり、褐色粘土質シルトブロック(φ5~50mm)含む。凝灰岩粒少量含む。黒褐色シルト斑状に含む。
	3	10YR4/6 褐色	シルト	粘性あり、しまりやや強、黄褐色シルトブロック(φ5mm)少量含む。
SB1-P2	1a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	粘性やや強、しまりあり、黄褐色砂質シルトブロック(φ5~10mm)斑状に含む。(柱痕跡)
	1b	10YR2/3 黒褐色	シルト	粘性あり、しまりあり、暗褐色および褐色シルトブロック斑状に多く含む。
SB1-P3	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりやや強、黒褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト斑状に含む。(柱痕跡)
	2	10YR4/6 褐色	砂質シルト	粘性やや弱、しまりやや強、暗褐色砂質シルト、黒褐色粘土質シルト不規則に含む。
SB1-P4	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	粘性あり、しまりやや弱、下層に白色粘土が堆積。柱痕跡。
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	粘性やや弱、しまりあり、地山(Ⅲ層)ブロック(φ2~5cm)斑状に含む。炭化物粒(φ10mm)少量含む。(掘り方埋土)
SK2	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	凝灰岩粒(φ5~20cm)含む。部分的に褐色粘土質ブロック、褐色粘土少量含む。
SK3	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	凝灰岩粒(φ5~21cm)含む。部分的に褐色粘土質ブロック、褐色粘土少量含む。

の掘方底面には円礫が据えられていた。現地形の傾斜に沿う形で基本層も南側に傾斜しており、掘方の底面もそれに沿う形で南側が低く、北側が高くなっている。P5の北側に北側柱列の東端部分の柱穴が存在した可能性がある。SK1・2土坑よりも新しい。

SK1～3土坑(第90図)

2Tの南側で検出された。遺構の規模はいずれも長軸約0.85～1.4m、短軸約0.65～0.7mの隅丸長方形を呈する。断面形状は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、深さは約30～54cmである。堆積土はいずれも10YR3/4暗褐色の砂質シルトで、凝灰岩礫を含む。SK1～3は、一定ではないものの、方位がほぼ同一で、堆積土の状況なども類似し、いずれもSB1掘立柱建物よりも古いことなどから、一連の遺構群を形成する可能性があるが、遺物は出土しておらず時期や機能、性格などについては不明である。

5. まとめ

今回の調査地点は羽黒堂遺跡の東部に位置する。今回の事業地では過去にも宅地造成工事に伴い確認調査が行われているが、その際には遺構、遺物とも検出されなかった。また昭和54年に今回の調査地点の南西側で行われた調査では、土器焼成遺構が8基検出されている。出土遺物の様相から10世紀代の時期であると推定される。

今回の調査では、事業予定範囲の南側を中心にトレンチを3ヶ所設定し調査を行ったところ、2Tから掘立柱建物跡(SB1)を検出した。遺物が出土していないため正確な時期は不明だが、掘立柱建物跡を構成する柱穴の規模などから古代の可能性もある。またSB1掘立柱建物跡よりも古い土坑群(SK1～3)が検出された。これらの土坑群も、配置や堆積土に規則性を見いだせることから一連の遺構群であると考えられるが、詳細な時期や機能などは不明であり、これらについては今後の調査の蓄積を待ちたい。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1982 『北前遺跡』仙台市文化財調査報告書第36集
 仙台市教育委員会 1987 『山田上ノ台遺跡』仙台市文化財調査報告書第100集
 仙台市教育委員会 1987 『北前遺跡』仙台市文化財調査報告書第105集
 仙台市教育委員会 1991 『仙台平野の遺跡群X』仙台市文化財調査報告書第147集
 仙台市教育委員会 1993 『仙台平野の遺跡群XⅡ』仙台市文化財調査報告書第170集
 仙台市教育委員会 2007 『山田上ノ台遺跡』仙台市文化財調査報告書第308
 羽黒堂遺跡発掘調査団 1980 『仙台市羽黒堂遺跡発掘調査報告』



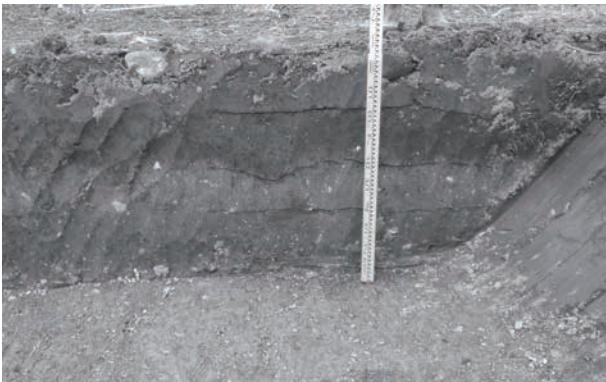
1. 1T 遺構検出状況（東から）



2. 3T 全景（東から）



1. 2T 遺構検出状況（北から）



2. 1T 北壁断面（南から）



3. 3T 南壁断面（北から）



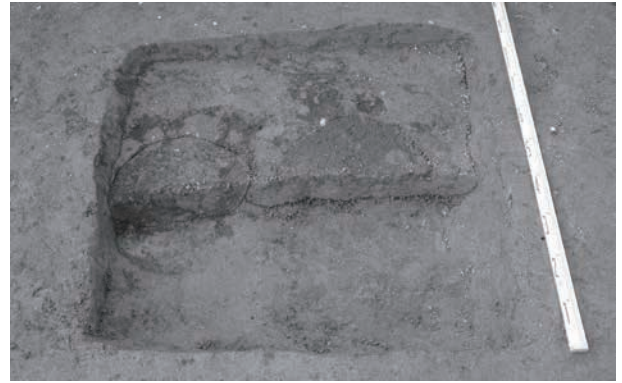
4. 2T 遺構検出状況（南東から）



5. 2T P1 断面（東から）



1. 2T P2 断面（東から）



2. 2T P3 断面（東から）



3. 2T P4 断面（北から）



4. 2T SK2 土坑断面（北から）



5. 2T 遺構完掘状況（南西から）



6. 2T P1 完掘状況（東から）



7. 2T 南西部遺構完掘状況（南東から）



8. 2T P8 断面（南から）

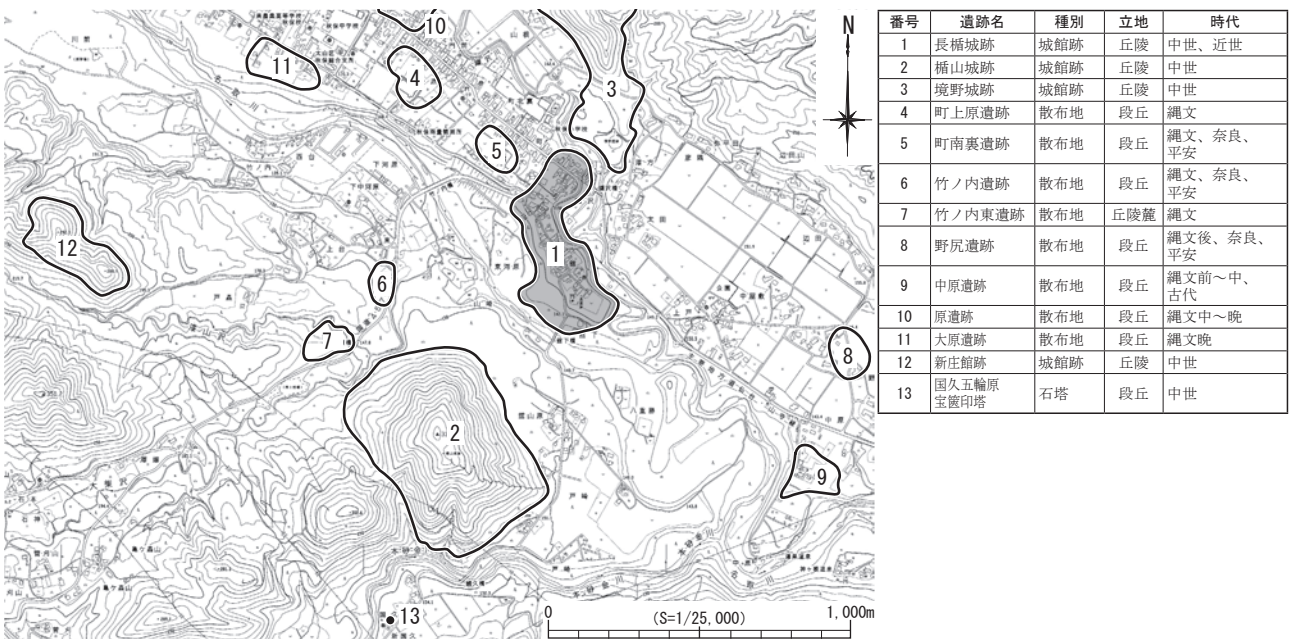
第8章 長楯城跡の調査

第1節 遺跡の概要

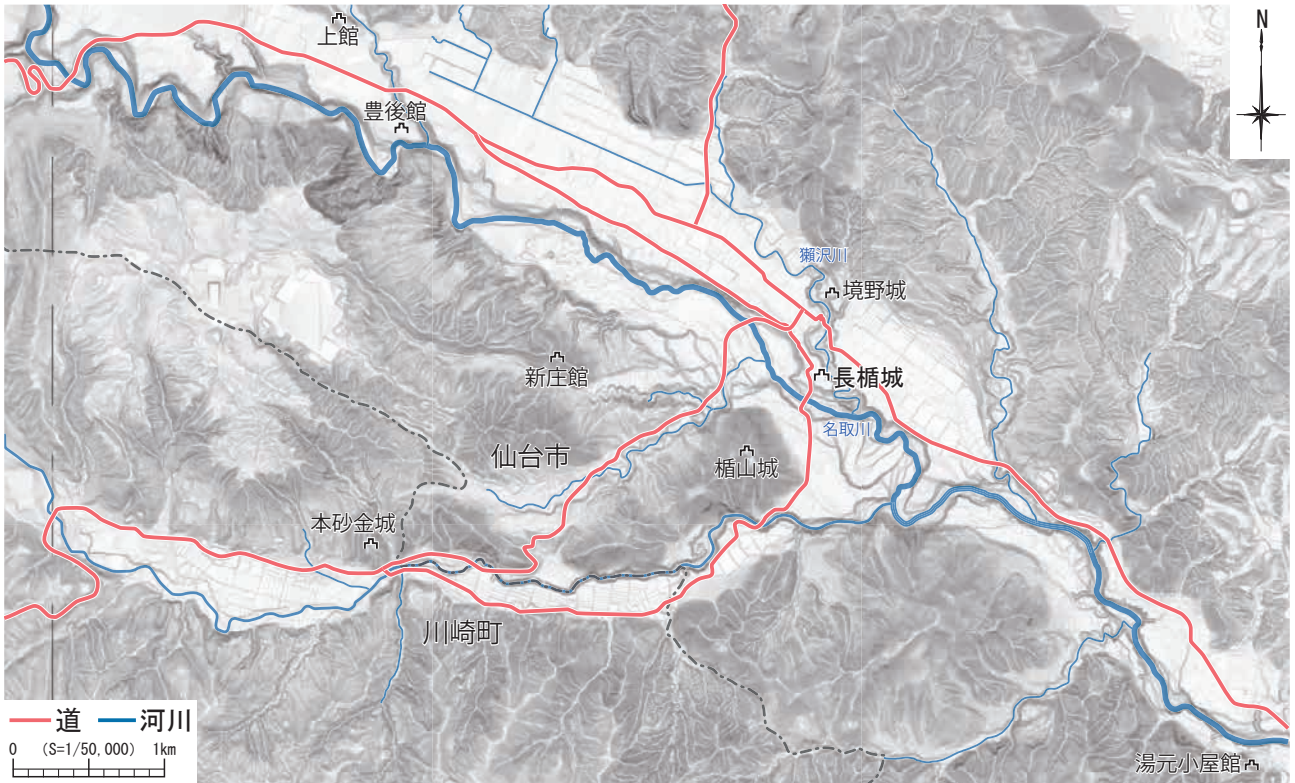
長楯城跡は、仙台市の西部、太白区秋保町長袋字館に所在する。名取川の左岸、名取川と瀬沢川の合流地点に突き出た段丘堆積層で構成された台地上に位置する。遺跡の範囲は東西約350m、南北約600mに広がり、標高は約130～160mである。現況は畑地や宅地となっている。周囲には町上原遺跡〈4〉、町南裏遺跡〈5〉、竹ノ内遺跡〈6〉野尻遺跡〈8〉、などが所在しているが、縄文時代もしくは古代の遺跡が多い。また後述するように周囲には数多くの城館跡が確認されている。

城の北側には二口越えの出羽街道が通り、長袋宿が接している。また城の内部を通り、南に抜ける道筋（現在の市道館国久線）は「大手道」とも呼ばれ、川崎方面へと抜ける古い街道であると考えられている。また周囲には長楯城の「詰め城」と考えられる楯山城跡〈2〉をはじめ、境野城跡〈3〉や豊後館跡など、街道筋に多くの城跡が所在している。これらの城は街道同士が交差する地点、もしくは街道と川が交差する交通の要衝に築かれているものが多い。また川崎方面に抜ける道沿いの国久には中世の五輪塔と宝篋印塔が存在しており、「国久五輪原宝篋印塔〈13〉」として登録されている。

長楯城跡は戦国時代に秋保の大部分を領有していた秋保氏の本城である。古文書などによると、秋保氏は戦国時代には伊達氏との関係を持ちながら秋保の地を領有しつつ、出羽側で領地を接する最上氏とも縁戚であったことが知られている。天正16（1588）年の大崎合戦により、伊達氏と最上氏の関係が悪化した際には伊達政宗から最上領との国境などを厳重に固めるよう指示が出されており、同年秋保方からは「山かたしゅ（最上勢）101名を討ち取った」との報告がなされている。また関ヶ原合戦の直前の時期には、伊達政宗から秋保一族で馬場に居を構えた秋保長津守定重と周囲の伊達氏の家臣たちに対し、もしもの時には近隣に所在する「馬場ノ城」（豊後館）に参集し、城の普請をする際には春秋に一度ずつ勤めるようにとの黒印状が発給されている。江戸時代の慶長8（1603）年に入ると、秋保氏は現在の蔵王町小村崎などに領地替えとなり、秋保は仙台藩の直轄領となり、長楯城も廃城になった。その後天明年間（1781～1789）に秋保氏がこの地に屋敷地と家中集落15軒を「所」として拝領し、約180年ぶりに秋保氏がこの地に居を構えた。

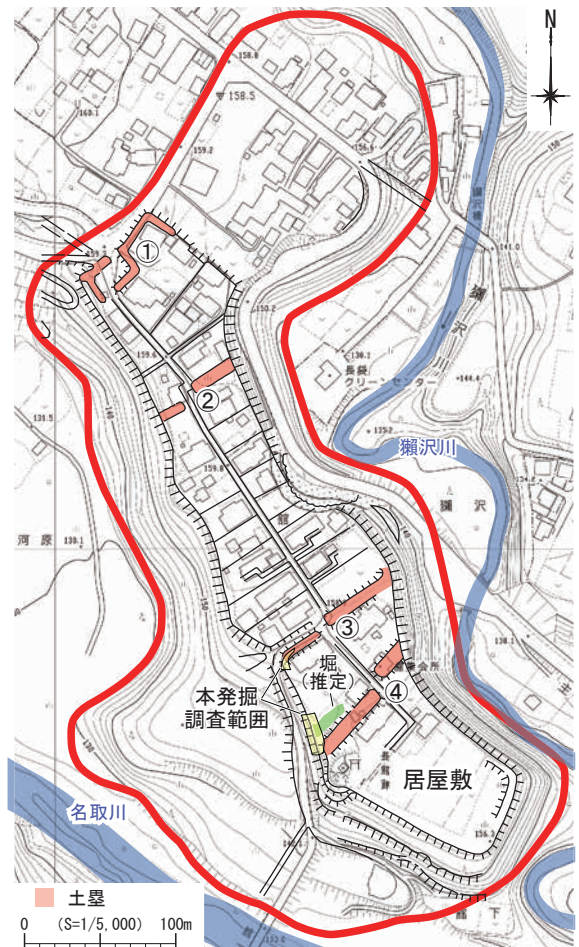


第91図 長楯城跡と周辺の遺跡



第 92 図 長楯城跡と周辺の城跡（国土地理院地図傾斜量図使用）

城の内部には幅約5mの「大手道」が走っており、4つの曲輪が設けられている。長袋宿側の曲輪内の道の両脇には、家臣が居住した「家中集落」が、最も奥には秋保氏の「居屋敷」が存在していた。『古館記』等には、長楯城は「東西七十六間（約137m）、南北百三十間（約234m）」の規模であると記されているが、これは城の中心部分「居屋敷」と「重臣屋敷」の区画を合わせた規模と考えられる。それぞれの曲輪は、①全体の出入り口の「遠門」、②家臣屋敷の密集する曲輪に設けられた「中門」、③重臣屋敷の曲輪に設けられた門、④居屋敷の曲輪に設けられた門の合計4つの門で仕切られている。また門に付随し、各曲輪を区画した土塁の一部が現在も残存している。居屋敷が存在する曲輪（④）には、最も大きな土塁が付随しており、規模は幅約16m、高さ約2.5mで、今回調査を行ったのはこの土塁の南西側の端部分にあたる。



第 93 図 長楯城跡各区画施設と調査区位置図

第2節 第1次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	長楯城跡（宮城県遺跡登録番号 16043）
調 査 地 点	仙台市太白区秋保町長袋字館6番地外

調査期間	確認調査	平成30年7月20日～7月27日		
	本発掘調査	令和元年8月8日～11月15日		
調査対象面積	約1183㎡			
調査面積	確認調査	計12.66㎡(1T:3.12㎡、2T:1.80㎡、3T:1.71㎡、4T:1.90㎡、5.0T:1.71㎡、6T:0.72㎡、7T:1.70㎡)		
	本発掘調査	128.21㎡(南区:119.46㎡、北区:8.75㎡)		
調査原因	市道館国久線拡幅工事			
調査主体	仙台市教育委員会			
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係			
担当職員	確認調査	主任 及川謙作	主事 三浦一樹	文化財教諭 栗和田祥郎
	本発掘調査	主任 及川謙作	主事 佐藤恒介	

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成28年7月20日付H28太秋建第705号で仙台市長より提出された「(市) 館国久線(長袋館地区) 道路改良事業」(平成28年7月26日付H28教生文第104-29号で宮城県に進達)に基づき実施した。調査に先立ち現地の踏査を行ったところ、事業予定地の北側は重臣屋敷を区画する土塁に、南側は居屋敷の土塁に重複すること、また居屋敷を区画する土塁の北側に堀の痕跡と思われる落ち込みが現地表面に確認されたことから、これらの範囲を中心に確認調査を行うこととなった。

確認調査は平成30年7月20日に着手した。調査区は工事予定範囲に全長2～2.5m×幅1～1.5mの規模で5ヶ所を設定し、北から順に1～5Tの調査区番号を付与した。遺構の広がりを確認するため6、7Tを追加したため最終的に7ヶ所の調査を行った。遺構検出作業は1Tでは重機を用いて、それ以外のトレンチでは人力で基本層I層を除去し、II層上面で行った。その結果1Tでは土塁の構築土層を、また4Tからは堀跡の北側の落ち込みを5、6Tからは堀の堆積土が検出された。

確認調査の結果から土塁と堀跡が検出された範囲を中心に本発掘調査が必要であると判断され、令和元年8月8日に本発掘調査に着手した。調査区の掘削に先立ち地表面に顕在する土塁と堀の痕跡の計測作業を行った。調査区は確認調査時の1T周辺を北区、4～6T周辺を南区として設定し、重機によりI層を除去し、II層上面、もしくは土塁の上面で遺構検出作業を行った。その結果、南側の土塁の表面には石が積まれている可能性が高いことが確認された。また堀も埋め戻されて土橋が構築され、その東側の裾部分に石積みが施されていることが確認された。そして堀跡の底面からも礫を充填させた暗渠状の遺構が検出された。これらの調査成果を広く一般に公開するため、遺跡見学会を10月26日に実施したところ、見学者は約90名に達した。その後11月14日に調査区の埋戻しを、19日に仮設事務所の撤去を行い、調査の一切を終了した。

遺構の記録は、確認調査では遺構平面図(S=1/20)と、必要に応じて調査区壁土層断面図(S=1/20)を、また事業予定地周辺の堀跡や一部の土塁などの地表顕在遺構の現況平面図(S=1/100)を作製した。本発掘調査では遺構平面図作成および調査区周囲の地表顕在遺構の計測の際にはトータルステーションを用いた電子平板システムを使用した。また調査区の各土層断面図(S=1/20)を必要に応じて作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また図化が難しい一部の遺構についてはデジタルカメラを用いた三次元写真計測を行った。

3. 基本層序

今回の調査では基本層を大別2層、細別4層を確認した。今回遺構検出作業をおこなったのはII層上面である。

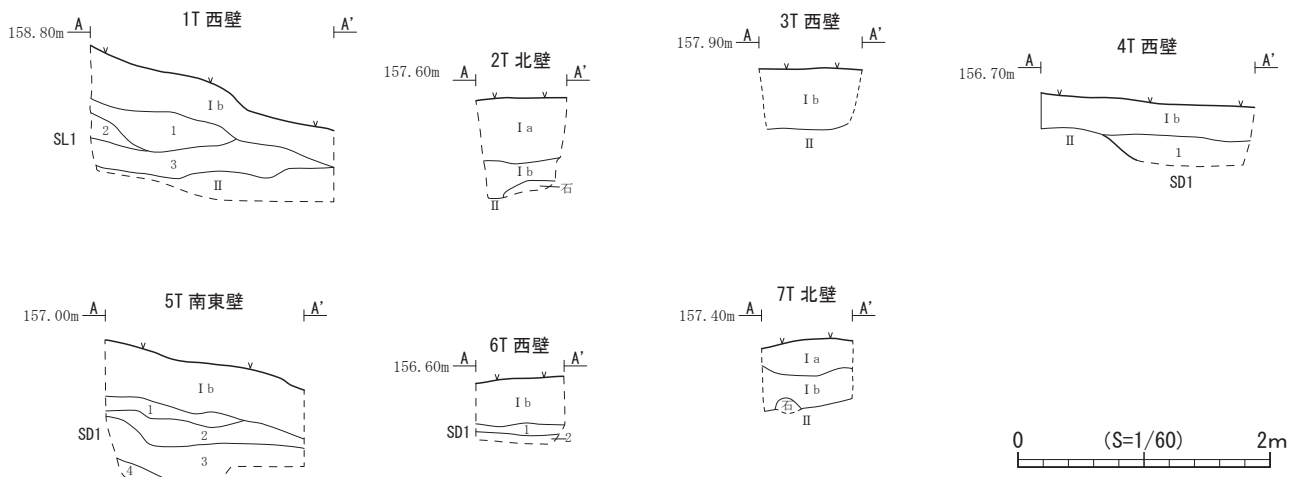
第2節 第1次調査

- I a 層：10YR2/3 黒褐色シルト、もしくは7.5YR4/4 褐色シルト。層厚は約 15 ～ 50 cmである。耕作土の一部もしくは林の表土である。全体的に粘性、締まりとも弱い。下層のII層との境に円礫が混入する。
- I b 層：10YR3/4 暗褐色シルト。層厚は最大で約 15 cmである。南区の調査区北側で確認された。粘性はなく、しまりが若干存在する。地山ブロック（II層）が主体で、円礫が多量に混入する。II層が攪拌された耕作層であると考えられる。
- I c 層：7.5YR3/4 暗褐色シルト。層厚は最大で約 15 cmである。南区の調査区南側、土塁の下部を覆うような形で検出された。土塁が崩落して堆積した層であると考えられる。
- II 層：10YR4/4 褐色の粘土質シルト。粘性はやや強く、しまりも強い。円礫を多量に含む。低位段丘礫層であり、今回の遺構検出面である。

4. 確認調査の発見遺構と出土遺物

1Tには重臣屋敷を区画する土塁（SL2）が残存している。土塁の一部を断ち割って精査したところ、土塁はII層の上面に構築されており、下層は土を主体に構築された層で、上層は石を主体に構築されていることが確認された。遺物は土塁のI層～構築層中から近世陶器などが出土した。2Tからは遺構検出面から巨大な石が検出された。遺物はI層中から陶器、磁器が出土した。3Tからは直径約50～60cm、深さ約20cmの規模のピットが1基検出された。4Tからは東西方向の堀跡（SD1）の落ち込みが検出された。この堀跡は周囲の現地表面に居屋敷の土塁の北側に隣接する形で確認された落ち込みとして現れた堀跡の一部である。5、6TからSD1堀跡の堆積層が検出された。当初5TからはSD1堀跡の南端部分の落ち込みが想定されたが、この堆積層は本発掘調査の結果、SD1堀跡を埋戻して築造された土橋の構築層であることが判明し、調査区の南端にまで続いていることが判明した。またSD1堀跡の南側の落ち込みは本発掘調査の際に当初の想定よりも南側で検出された。7Tからは遺構、遺物ともは検出されなかった。

その後秋保総合支所により事業地内の地盤調査が行われ、SD1堀跡の地表面からの深さは約1.3～1.5mであるとのデータが示された。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SL1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	円礫（φ 5 ～ 30cm）多量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	円礫（φ 5cm）少量含む。
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土	地山（II層）ブロック（φ 1cm）下層との境に少量含む。
SD1	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山（II層）粒子（φ 5mm）斑状に多量含む。円礫（φ 5cm）少量含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	円礫（φ 5cm）少量含む。
	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	円礫（φ 5 ～ 15cm）多量含む。
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	円礫（φ 3cm）少量含む。

第94図 確認調査区断面図



1. 1T 西壁断面（東から）



2. 2T 遺構検出状況（南から）



3. 7T 遺構検出状況（南東から）



4. 3T 遺構検出状況（南から）



5. 4T SD1 検出状況（南から）



6. 4T 遺構検出状況（西から）



7. 5T 遺構検出状況（北から）



8. 6T 遺構検出状況（南から）

5 本発掘調査の発見遺構と出土遺物

本発掘調査に先立ち、地表顕在遺構である SL1 土塁、SL2 土塁、SD1 堀跡とその周囲の計測を行った。計測の際、地表面を詳細に観察したところ、SD1 堀跡の痕跡と調査区がちょうど交わる箇所において、わずかながらも南西堀跡の崖側から北東の台地側に向かって若干標高が下がる比高差が確認された。これは本発掘調査区で発見された SD1 堀跡を埋め戻して構築された土橋の裾部分の段差が、地表に顕在したものであると考えられる。

居屋敷の土塁である SL1 土塁は調査区と交わる箇所以南西側の端部となっているが、今回の計測で SL1 土塁には崖に沿う形で高まりが付随し、居屋敷の北西に鎮座する稲荷社と一体化していることが判明した。この社には樹齢 500 年を超える仙台市の保存樹木にも指定されている銀杏の木（「秋保のいちよう」）が存在している。また土塁の南西側は崖との間に幅約 3.5 ～ 5.0m の平坦面が存在し、この部分は発掘調査で見つかった土橋につながる通路となる可能性が高い。この通路は『仙台市史 特別編 7 城館』において存在が指摘されていた居屋敷の南西崖部分の帯曲輪と一体のものとの可能性がある。また各遺構および調査区のⅡ層上面からは少量ながら縄文土器をはじめ陶器や瓦質土器、硯などの石製品が出土している。

SL1 土塁（第 95 ～ 103 図）

南区の南東側に SD1 堀跡に隣接する形で所在する南西—北東方向の土塁で、長楯城跡の中で最も規模の大きい土塁である。幅は約 17.0m、高さは約 2.4 ～ 3.4m である。現存する長さは約 23.3m だが、本来は居屋敷に通じる道までさらに約 30m 北西方向に延びていたものと考えられる。また南東側にも高まりが付随しており、その規模は幅約 12.5m、長さ約 10.0m、高さは約 1.6m である。

構築土は 6 層に細分される。表土直下の 1 層からは直径約 30 cm 以上の未加工の礫が多量に検出された。また本発掘調査区以外からも大型の礫が地表に現れていることから、土塁の表面は大型の礫が積まれていた可能性がある。SD1 堀跡を埋め立てて構築された土橋の石積みよりも上層の自然堆積層 1 ～ 3 層は SL1 土塁よりも新しく、4 ～ 9 層は SL1 土塁よりも古いことが確認されたことから、土橋を構築してから時期を隔てて SL1 土塁は構築されたものと考えられる。

土橋状遺構・整地層（第 95 ～ 103 図）

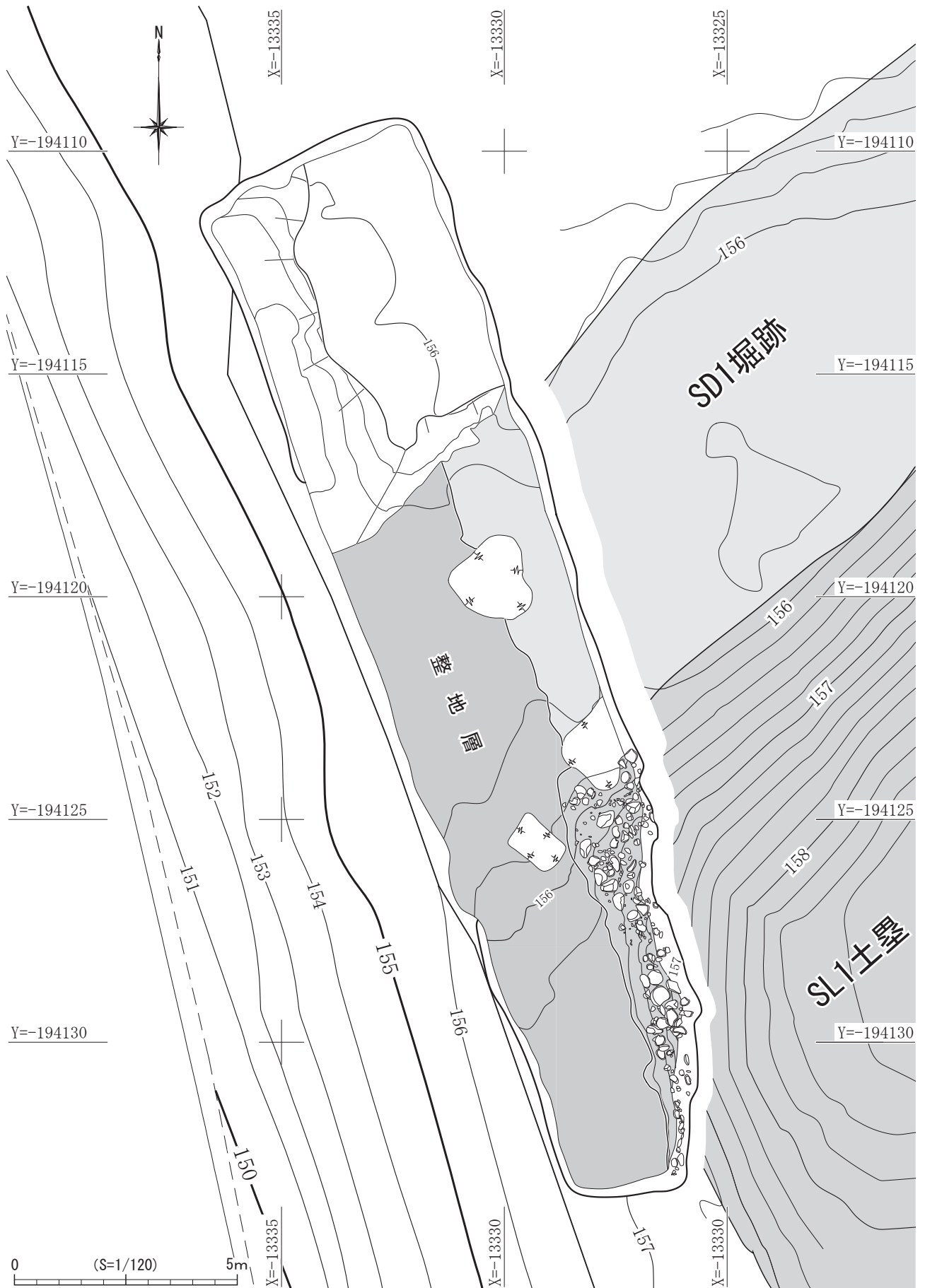
土橋状遺構は南区の SD1 堀跡内の自然堆積層の上面を、約 25 ～ 100 cm 埋め立てて構築されている。検出された幅は下端部で約 5.0 ～ 5.5m、上端部で約 2.8 ～ 3.5m である。土橋上面の整地層は SD1 堀跡から調査区の南端まで延びてⅡ層上面を覆っており、土塁と崖の間に平坦面を構成している。調査区の南端部分ではⅡ層上面で風倒木痕と考えられる掘り込みが検出されたが、この上層にも整地層が覆っている。C ベルト南壁で検出された攪乱は調査前に存在していた電柱の支線掘削に伴うものである。土橋の東側には裾が形成されており、深さ約 40 ～ 80 cm の段が構築されている。裾の底面には 5 ～ 40 cm の未加工の円礫を用いて石積みが構築されている。土橋の構築土から常滑産陶器の体部から肩部の破片（第 104 図 1）が、石積みの中からは縄文土器の破片が出土している。

SD1 堀跡（第 95 ～ 103 図）

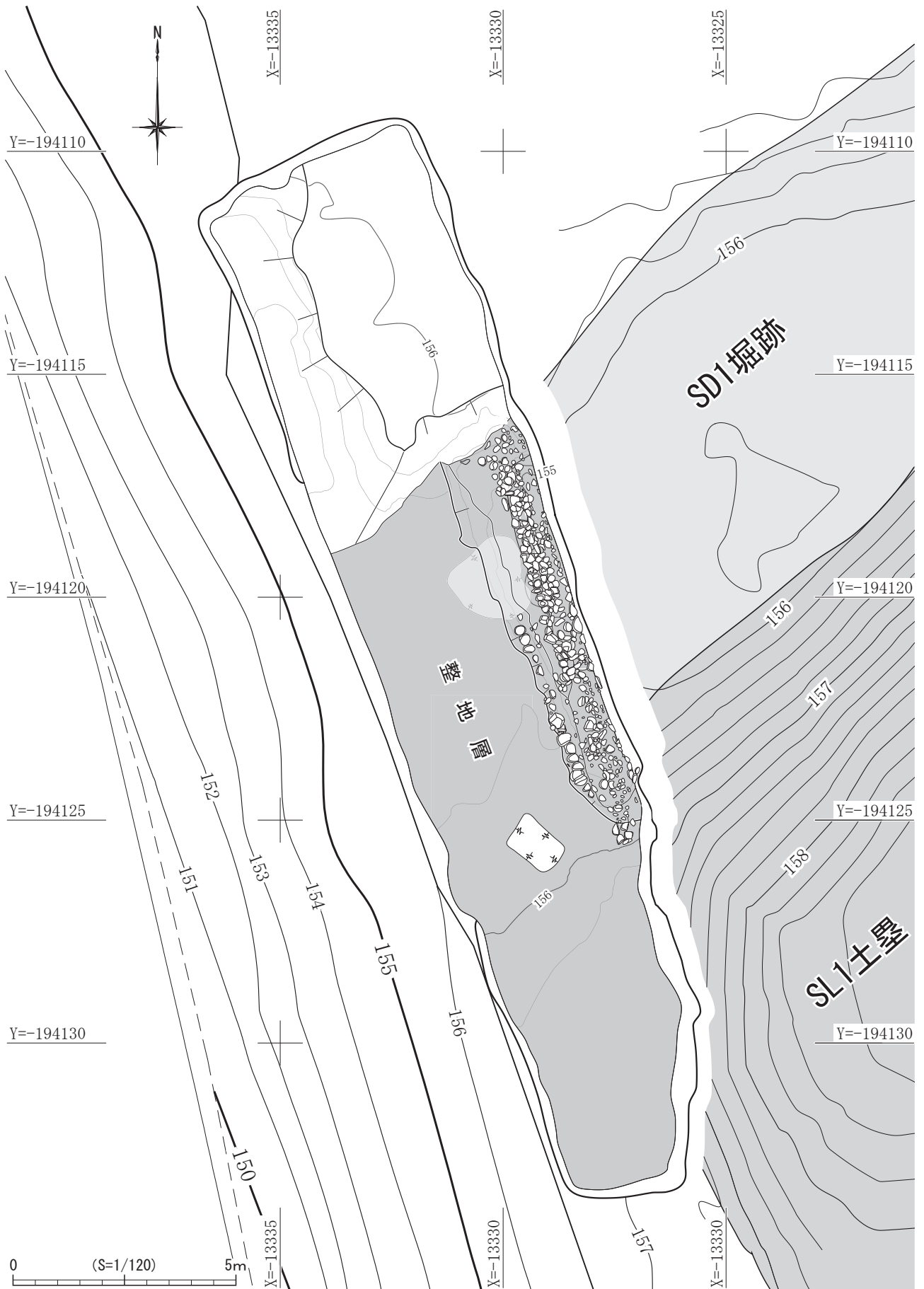
南区の南東側に SL1 土塁に隣接する形で所在する南西—北東方向の堀跡である。Ⅱ層上面から掘り込まれており、遺構の規模は幅約 11.6m、検出長は 6.9m で、断面形状は逆台形を呈する。検出面からの深さは最深で約 1.4m である。堀跡西端部の底面には、崖側に向かって底面が傾斜する暗渠状の掘り込みが存在する。掘り込みは南北約 2.5m、東西約 2.5m の規模で平面形状は楕円形を呈し、深さは約 60 cm である。掘り込みには直径約 5 ～ 20 cm の礫が充填されている。この掘り込みは SD1 堀跡の最下層の自然堆積層を掘り込んでおり、この上に土橋状遺



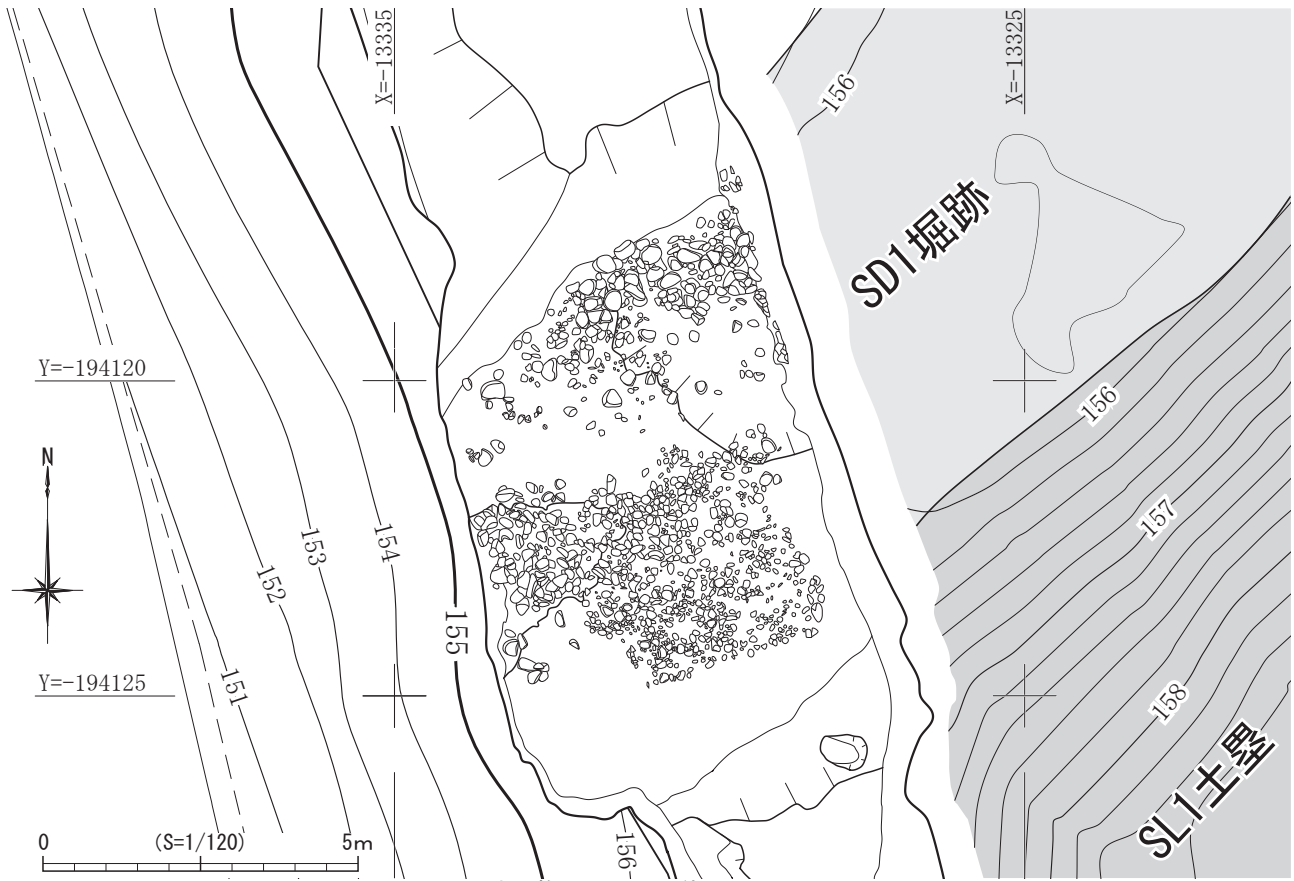
第95図 調査区全体図



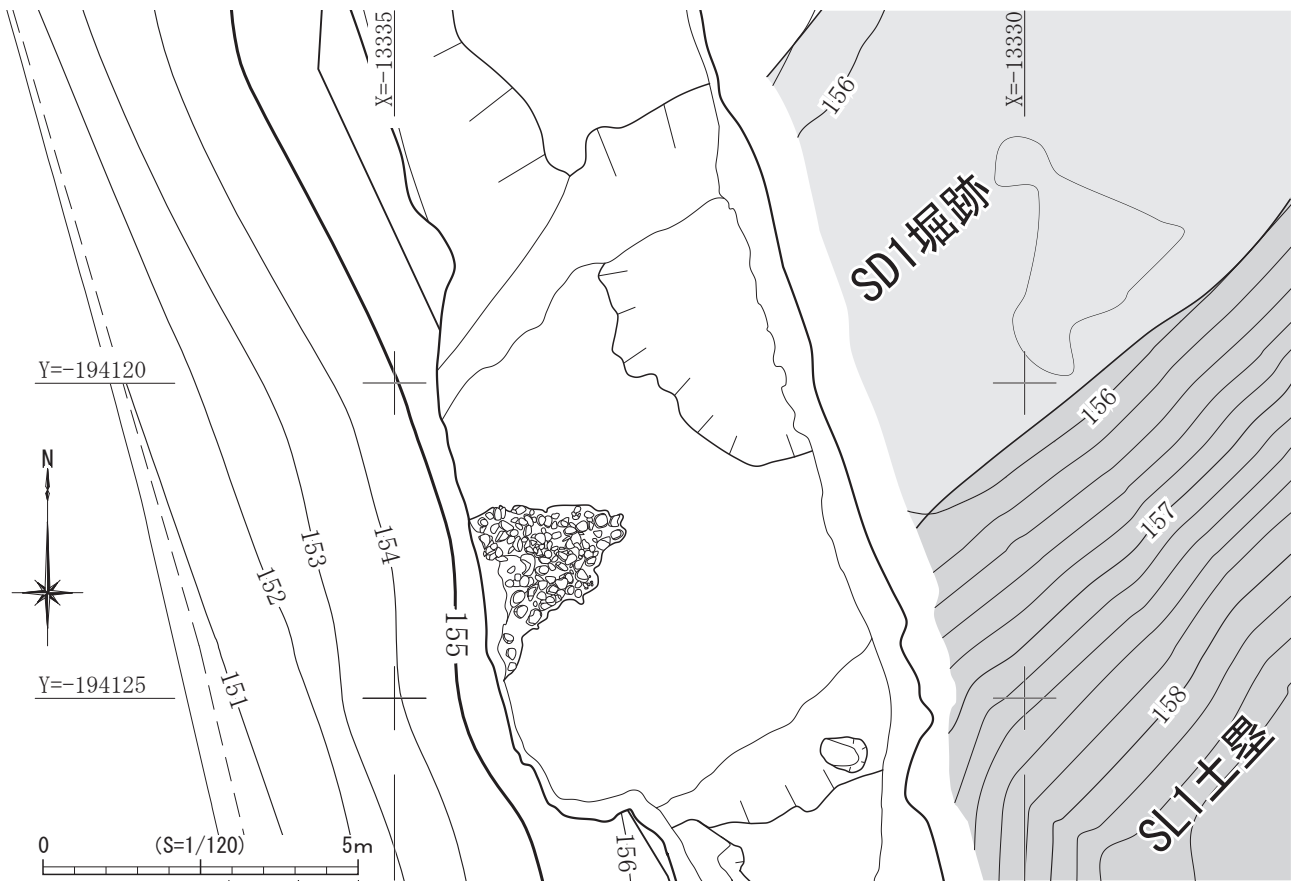
第96図 南区遺構検出状況



第97図 南区土橋石積み検出状況

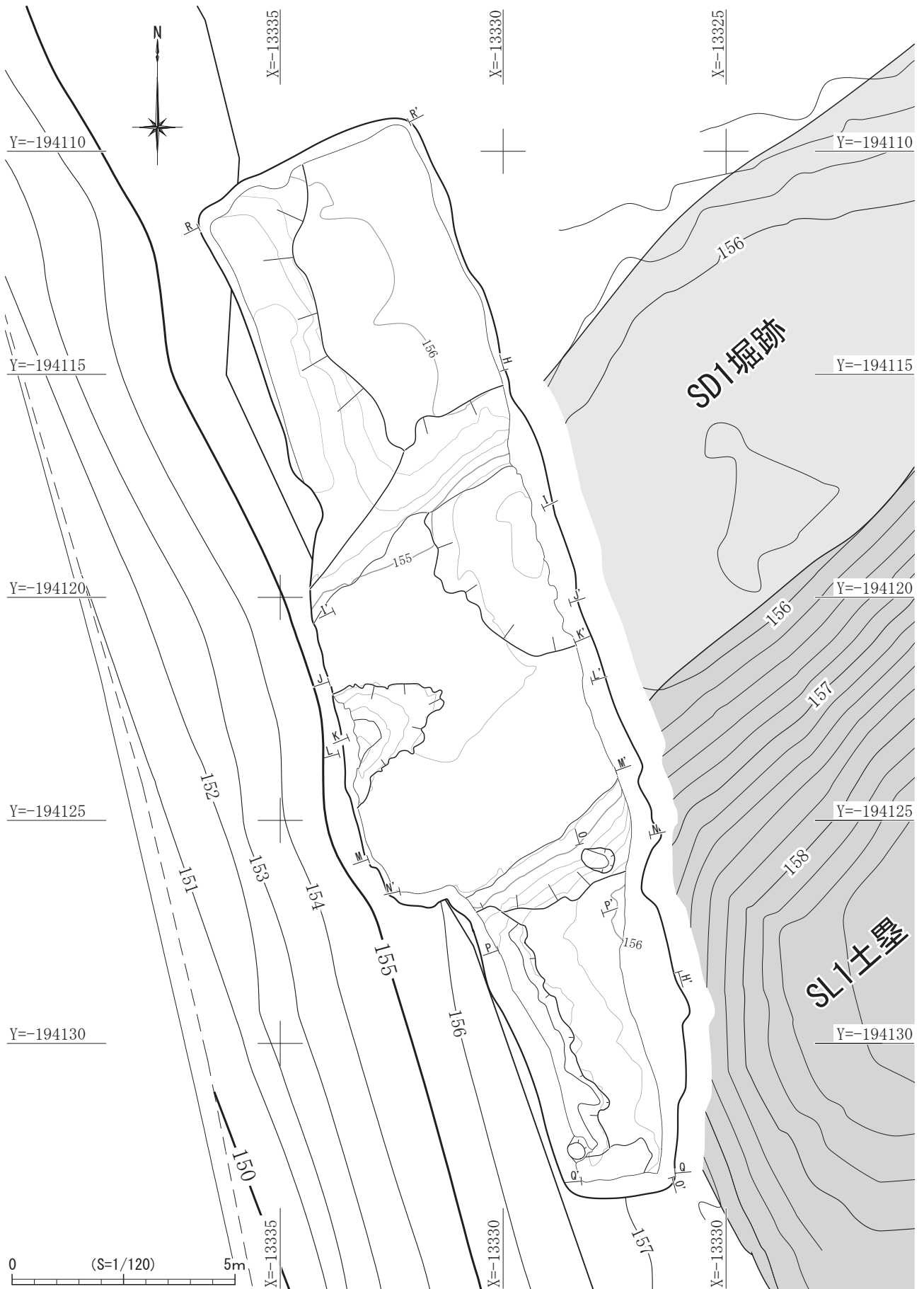


SD1 堀跡・整地層下層石積み

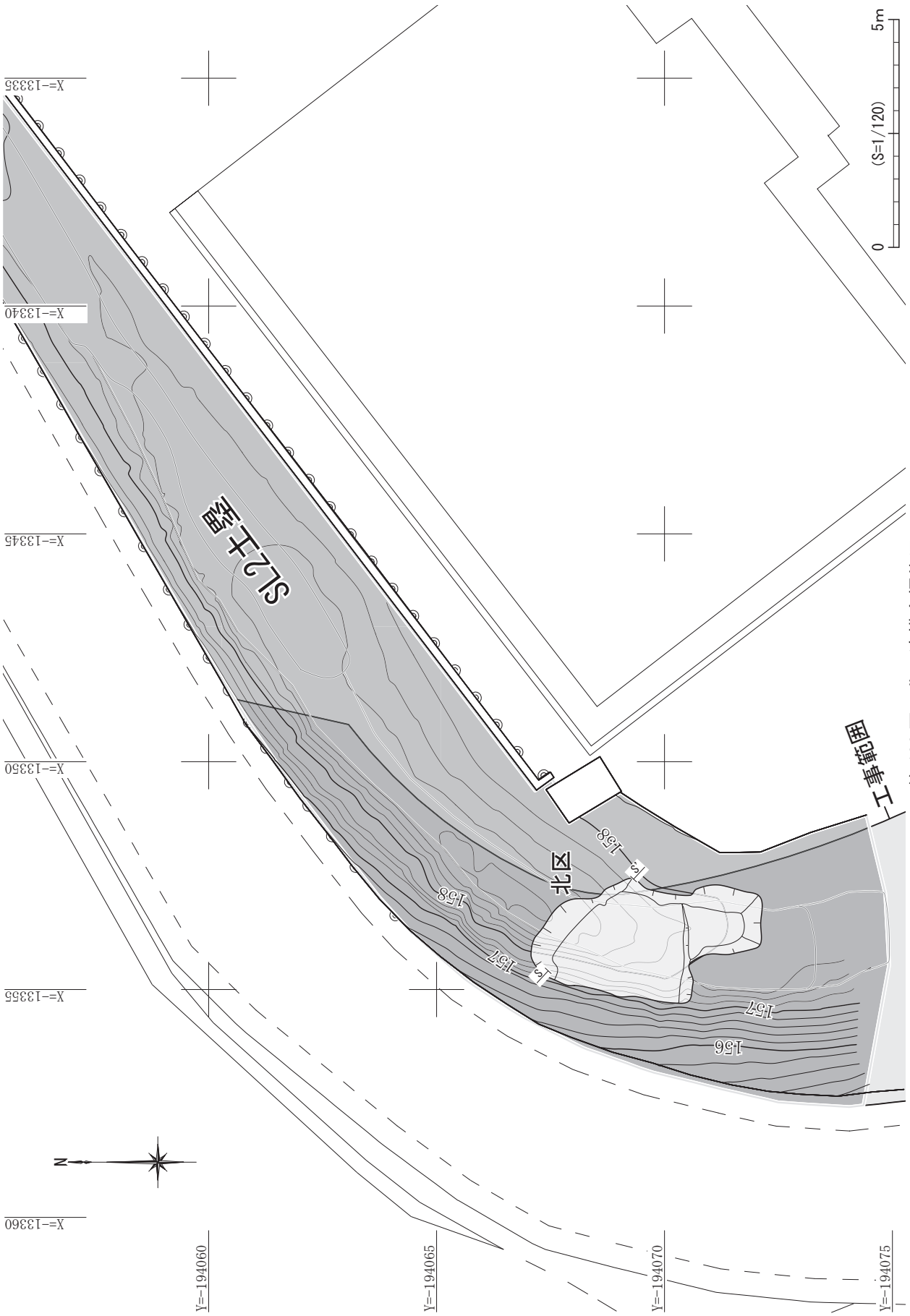


SD1 堀跡底面石積み

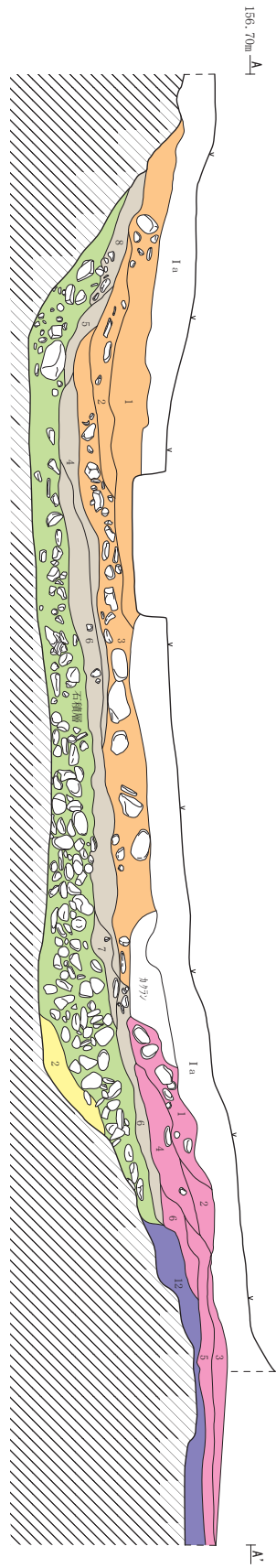
第98図 南区下層・底面石積み検出状況



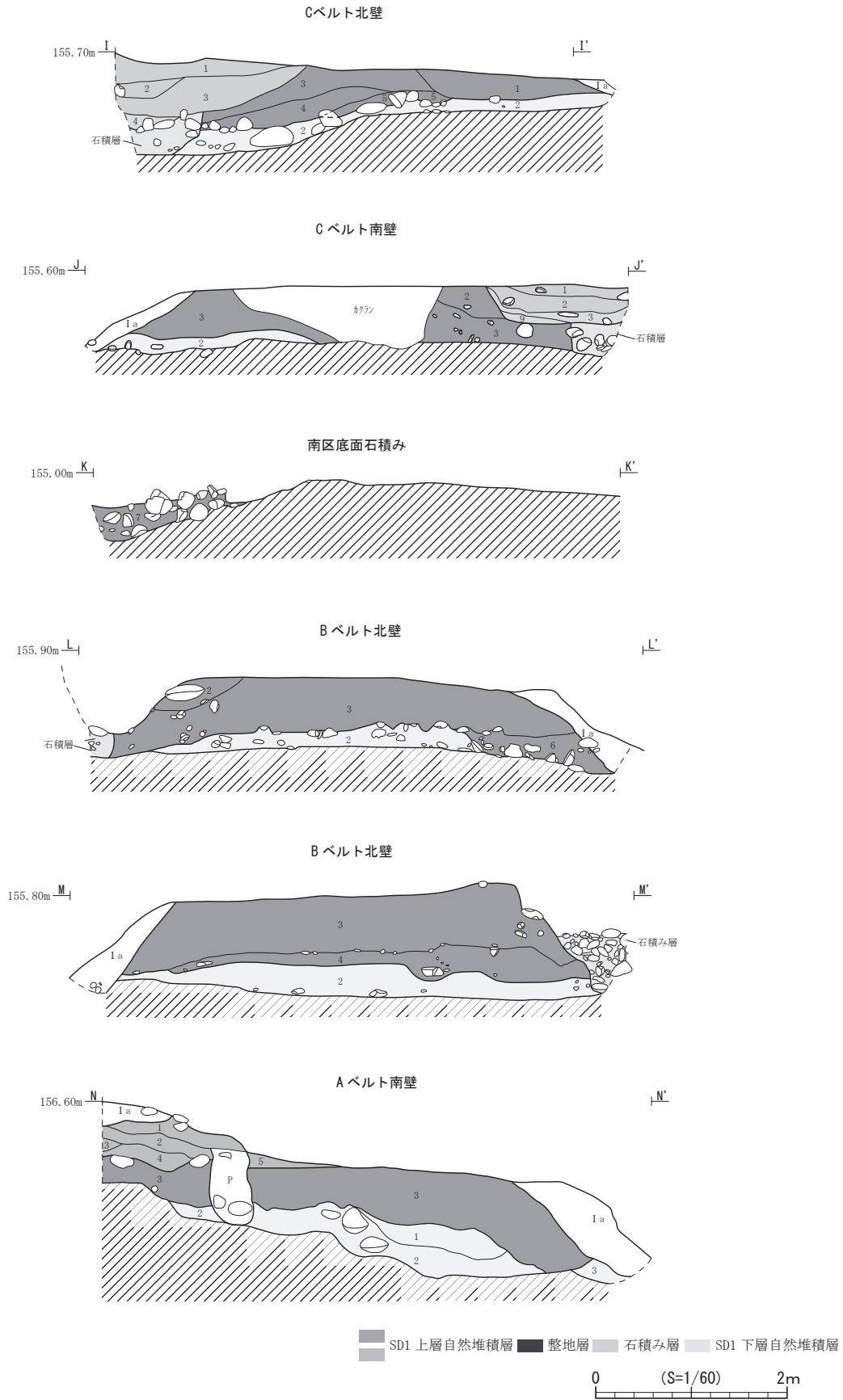
第99図 南区遺構完掘状況



第100図 北区遺構完掘状況

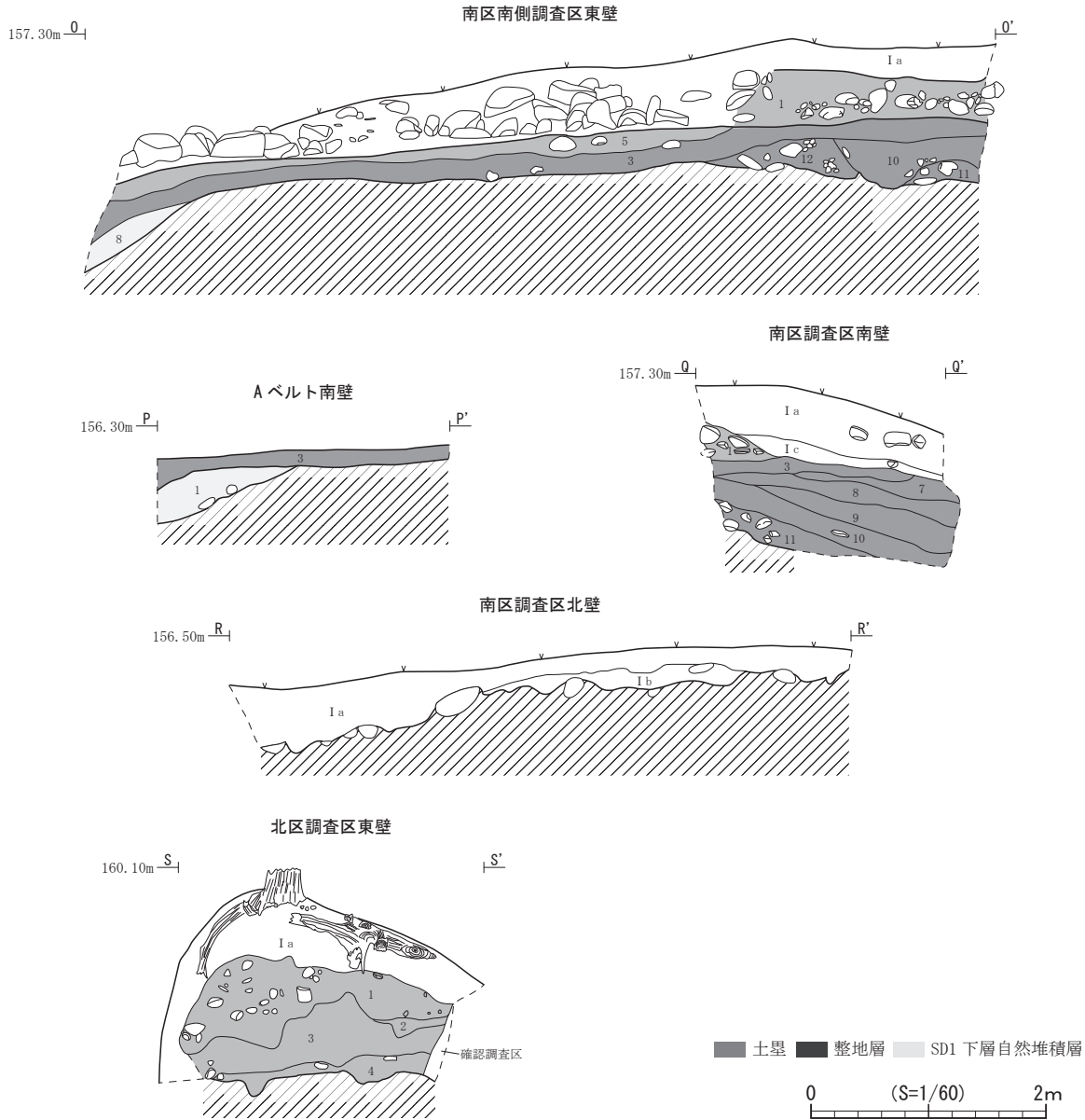


第101図 調査区南壁断面図・オルソ画像



第102図 南区各遺構断面図

第2節 第1次調査



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1 上層 自然 堆積層	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 5 ~ 20cm) 少量含む。	整地層	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 5 ~ 25cm) 主体。腐植土充填。
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 10 ~ 20cm) 少量含む。地山 (II層) 粒子 (φ 2mm) 少量含む。		1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	地山 (II層) ブロック (φ 0.5 ~ 1cm) 斑状に含む。
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 10 ~ 40cm) 多量に含む。炭化粒 (φ 3mm) 少量含む。		2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	地山 (II層) ブロック (φ 1cm) 斑状に多量含む。円礫 (φ 2 ~ 5cm) 含む。
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山 (II層) 粒子 (φ 2mm) 斑状に含む。礫 (φ 5cm) 含む。		3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 5 ~ 10cm) 斑状に含む。地山 (II層) 粒子 (φ 2 ~ 20mm) 斑状に含む。
	5	10YR2/3 黒褐色	シルト	円礫 (φ 5cm) 少量含む。		4	10YR3/3 暗褐色	シルト	円礫 (φ 5 ~ 20cm) 斑状に多量含む。地山 (II層) ブロック (φ 0.5cm) 少量含む。下層石積。
	6	10YR3/3 暗褐色	シルト	円礫 (φ 10cm) 少量。地山 (II層) ブロック (φ 1cm) 斑状に含む。		5	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	ほぼ均一。
	7	10YR2/2 黒褐色	シルト	円礫 (φ 5 ~ 15cm) 少量含む。		6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	地山 (II層) 粒子 (φ 5mm) 斑状に含む。
	8	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 10cm) やや多量含む。地山 (II層) 粒子 (φ 2mm) 斑状に多量含む。		7	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 10 ~ 30cm) 主体、地山 (II層) 粒子をブロック状に含む。腐食土充填。
	9	10YR2/2 黒褐色	シルト	円礫 (φ 5 ~ 15cm) 少量含む。		8	7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山 (II層) 粒子やや混じる。
SL1	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	円礫 (φ 5 ~ 20cm) やや多量に含む。(石積層?)		9	7.5YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山 (II層) 粒子斑状に含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 5cm) 少量含む。		10	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	3	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 2cm) 少量含む。		11	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	礫 (15cm以下) を多量含む。
	4	10YR2/2 黒褐色	シルト	円礫 (φ 20cm) やや多量に含む。地山 (II層) 粒子 (φ 2mm) 斑状に含む。	12	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 5cm) 少量含む。地山 (II層) 粒子 (φ 2 ~ 5mm) 斑状に含む。	
	5	10YR2/3 黒褐色	砂室シルト	部分的に地山 (II層) ブロック主体、円礫 (φ 2 ~ 10cm) 斑状に含む。地山 (II層) 粒子 (φ 2 ~ 5mm) 斑状に含む。	SD1 下層 自然 堆積土	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	円礫 (φ 5 ~ 10cm) 地山 (II層) 粒子 (φ 5mm)、炭化粒 (φ 2mm) 少量含む。
	6	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	円礫 (φ 3cm) 少量含む。地山 (II層) ブロック (φ 1cm) 斑状に含む。		2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山 (II層) 粒子 (φ 2mm) 斑状に含む。礫 (40 ~ 65cm) 多量含む。
				3		10YR2/3 黒褐色	シルト	円礫 (φ 10cm) 少量含む。地山 (II層) ブロック (φ 1cm) 斑状に含む。	

第103図 南・北区各遺構断面図

構が構築されていることから、土橋状遺構と同時期かそれ以前に掘り込まれたものと考えられる。

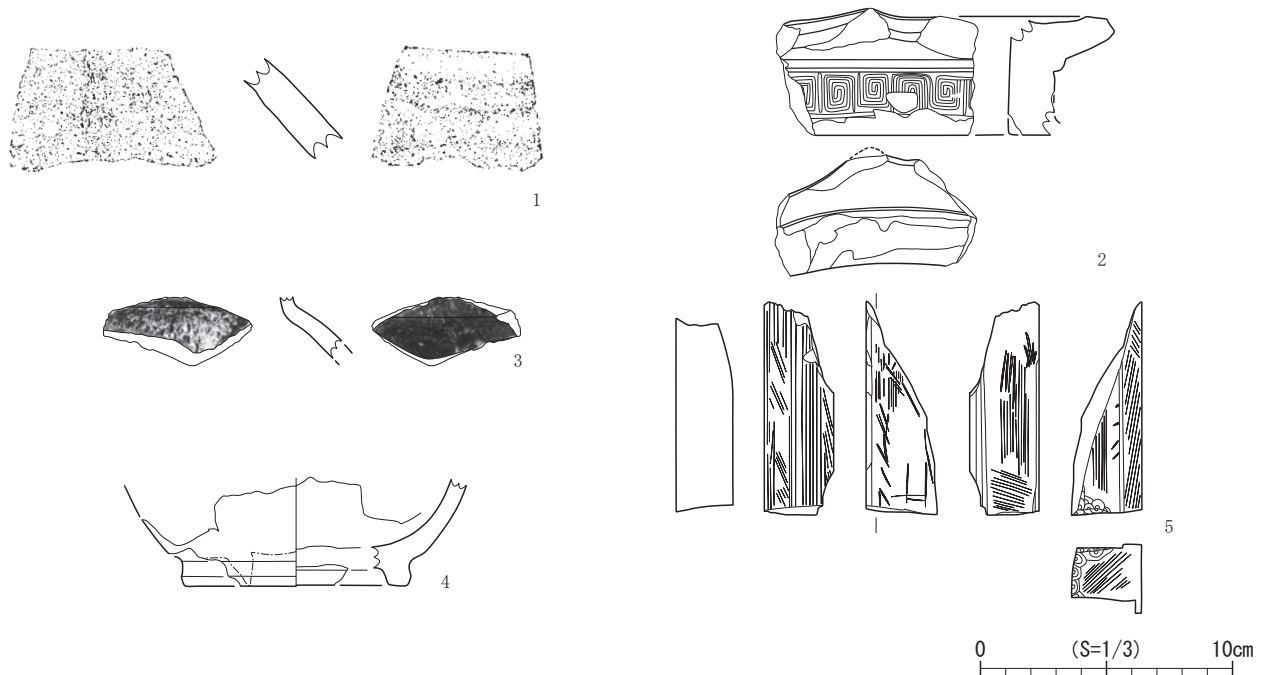
SL2 土塁 (第95～103図)

北区の北東側に市道に隣接する形で所在する南西-北東方向の土塁である。幅は約2.0～5.0m、高さは約2.6mで、現存する長さは約33.2mである。土塁の南側法面は改変を受け、L字型擁壁が設置されている。構築土は4層に細分され、いずれの層にも直径約5～20cmの円礫が混入しているが、最上層の1層上面に多量に混入している。表土付近からは雷紋を施した瓦質土器や、硯の破片が出土している

6. まとめ

今回の調査では地表頭在遺構として土塁2条、堀跡1条、そして堀を埋め立てて構築した土橋状遺構が検出された。このうち南区で検出された各遺構の想定構築順序は第105図の模式図に示した。各遺構の想定される構築順序は以下の通りである。

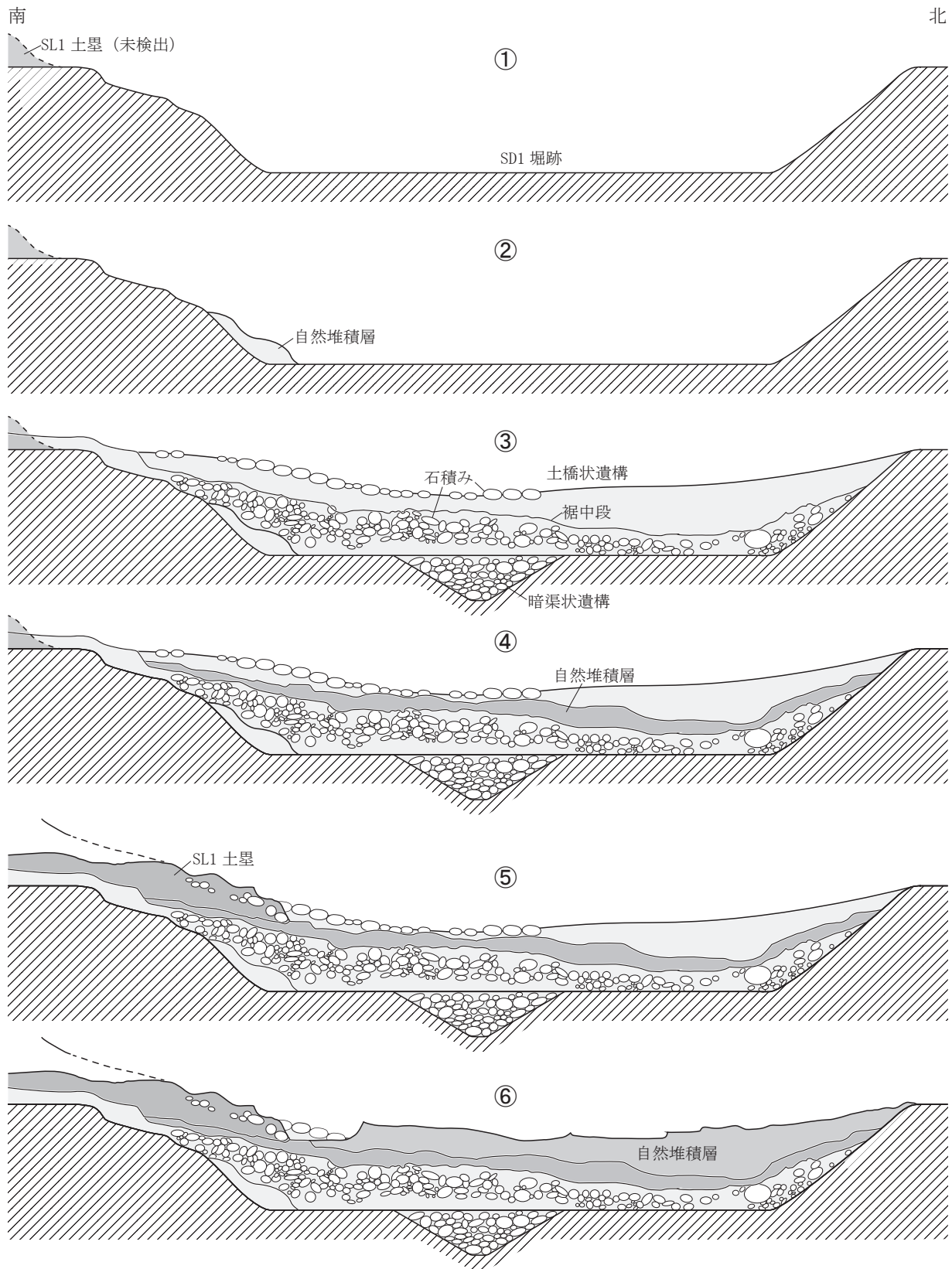
- ① SD1 堀跡が構築される。その際に SL1 土塁の一部も構築された可能性があるが、今回の調査では SD1 堀跡と同時期の構築土は検出されなかった。
- ② SD1 の底面付近に自然堆積層が形成される。
- ③ SD1 堀跡の中央部に②で形成された自然堆積層と堀跡の底面を掘り込む形で暗渠状遺構と考えられる窪みが掘



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	1c-1	南区	整地層	陶器	甕	-	-	(4.0)	ナデ	ケズリ→ナデ	胎土緻密 産地：常滑	38-1
2	1b-1	北区	表土	瓦質土器	台(灯籠?)	-	-	(4.7)	雷紋(型押)		胎土緻密 砂粒含む	38-2
3	1c-2	南区	表土	陶器	甕	-	-	(2.7)	釉	釉	胎土緻密 砂粒含む 産地：堤	-
4	1c-3	南区	表土	陶器	甕	-	(8.9)	(4.3)	釉	釉	胎土緻密 砂粒含む 産地：堤	38-4

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
5	K-1	北区	表土	石製品	転用砥石	(8.4)	(2.8)	2.8	硯を砥石に転用 石材：細粒凝灰岩? 重さ56.9g	38-3

第104図 調査区内出土遺物



第 105 図 SD1 堀跡・土橋状遺構・SL1 土塁構築順序模式図

削される。また自然堆積層の上層に最大で約 1.0m の高さで土が盛られ、土橋状遺構が構築される。土橋状遺構の東側の裾には石積みが施される。

- ④ 土橋状遺構の東側裾部分中段の上面に自然堆積層が形成される。
- ⑤ ④で形成された自然堆積層の上に SL1 土塁が構築される。
- ⑥ 土塁と SD1 堀跡の北側法面の間に自然堆積層が形成され SD1 堀跡が埋没する。

このように SD1 堀跡の内部の土層の堆積状況から、各遺構の構築された時期には時間差が存在することが判明した。しかし出土遺物が土橋状遺構の構築土内からの常滑産陶器の破片が 1 点のみであるため、各遺構が構築された時期を比定することは非常に難しい。遺構内から近世陶磁器が 1 点も出土しなかったことを評価すれば一連の遺構は中世に構築された可能性も考えられるが確証に乏しい。ただし土橋状遺構を下の道を望む防御施設として構築されたものと考えるのであれば、その構築時期は中世の段階である可能性が高い。その一方で SL2 土塁の近辺からは調査区が狭いながらも遺物が一定量出土した。この違いは生活の場が近隣に存在したかの違いによるものと考えられる。

今回の調査で SL1、2 土塁や土橋状遺構など、土を盛って構築した各遺構には、大小様々な規模の未加工の円礫が遺構の内部と表面に多量に用いられていることが確認された。その中でも SL1 土塁の表面にはかなり大型の礫が積まれている可能性が高く、また土橋状遺構の東側の裾部分の表面には、比較的大きさの揃った円礫が遺構を覆うような形で積まれていたことが判明した。このように城の区画施設に石を多用する事例は近隣の豊後館の虎口部分でも確認されている。豊後館跡は発掘調査が行われていないため各遺構の詳細な時期に関しては不明だが、慶長四（1599）年の黒印状では城の普請について記載されていることから、この時期までは城として機能していたことが確認でき、また慶長八（1603）年に秋保氏一族は刈田郡小村崎村、円田村（現蔵王町）、加美郡大村（色麻町）に知行を与えられ移住していったことから、豊後館が機能していたのは同年頃までと考えられる。

長楯城についても同様に、秋保氏の所替えにより近世初期に一度廃城になったものの、天明年間（1781～1789）に秋保氏盛がこの地に屋敷地と家中集落 15 軒を「所」として拝領しこの地を再度支配することになった。今回見つかった遺構の一部は、秋保氏により「所」として当地を整備する際のものである可能性も否定できない。「所」として拝領される際の天明三（1783）年、秋保氏が家中屋敷について「地狭く家中ら差し置き難し」と訴え、藩から「長館に続く西の方并東館」を敷地として許可されたという記録が残されていることから、城の西側に関してはその際に新たに造営された可能性がある。

長楯城跡に残存する他の土塁の法面部分においても礫が顕在している箇所があり、秋保町史に掲載された写真の中にも確認することができる（写真図版 38-6）。礫を多用して城の区画施設が構築されていたことが発掘調査で確認され、貴重な発見例となった。このように様々な礫を使用して区画施設を構築することが、当地域における城の構造の特徴の一つであることが判明した。

参考文献

- | | | |
|------------|------|------------------|
| 秋保町史編さん委員会 | 1975 | 『秋保町史 資料編』 |
| 秋保町史編さん委員会 | 1976 | 『秋保町史 本編』 |
| 仙台市史編さん委員会 | 1994 | 『仙台市史 特別編 1 自然』 |
| 仙台市史編さん委員会 | 2006 | 『仙台市史 特別編 7 城館』 |
| 仙台市史編さん委員会 | 2014 | 『仙台市史 特別編 9 地域誌』 |



1. 南区遺構検出状況（北西から・右奥の山頂が館山城跡）



2. 南区遺構検出状況（南から）



3. 土塁検出状況（北から）



4. 土橋上層自然堆積層断面（南から）



5. 土橋上層自然堆積層断面（北から）



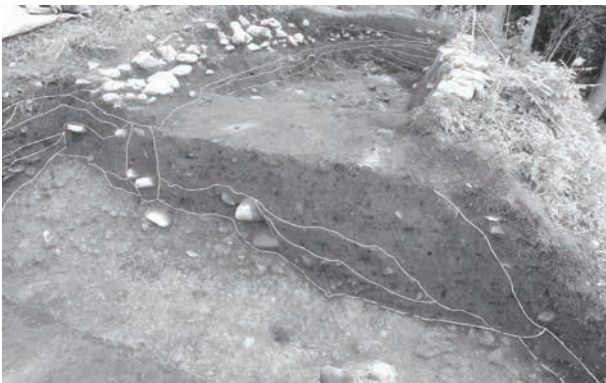
1. 土橋状遺構検出状況（オルソ画像）



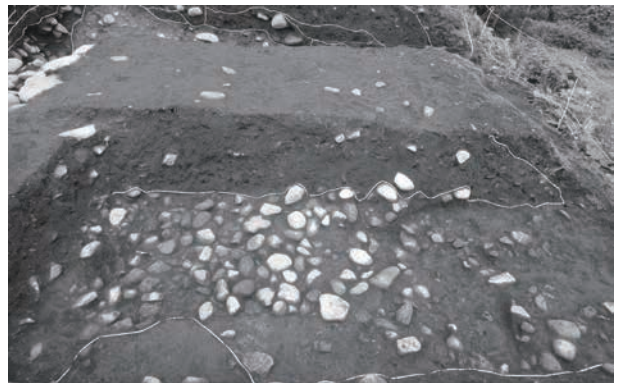
2. 土橋状遺構検出状況（北から）



3. 南区調査区南壁断面（北西から）



4. 土橋状遺構断面（SPN-N'・北西から）



5. 土橋状遺構断面（SPL-L'・北西から）



6. 土橋状遺構断面（SPJ-J'・南東から）



7. 土橋状遺構断面（SPI-I'・南東から）



1. 下層石積み検出状況（北西から）



2. 調査区東壁断面（北西から）



3. SD1 底面石積み断面（南東から）



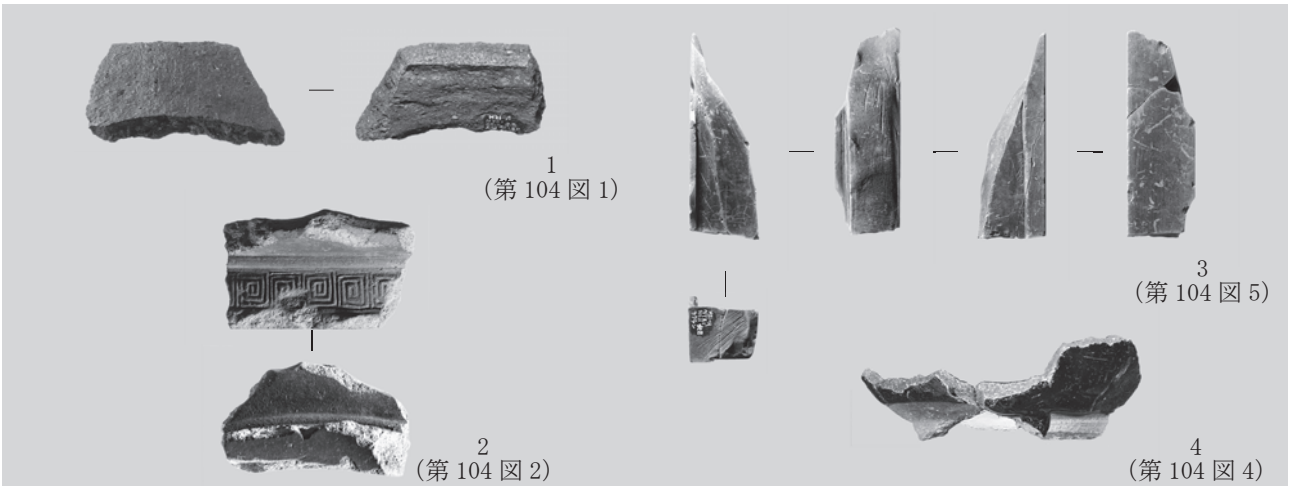
4. 南区遺構完掘状況（北から）



5. SL2 土塁断面（南東から）



6. 『秋保町史 本編』掲載「三の土手」



1
(第104図1)

2
(第104図2)

3
(第104図5)

4
(第104図4)

写真図版 38 長楯城跡第1次調査(3)・出土遺物

第9章 総括

令和元年度に他局予算および事業者負担で実施した調査件数は、令和元年12月末で26件（18遺跡）である。平成29、30年度の調査を含め、令和元年12月までに行った12件（7遺跡）の調査について報告した。その成果については以下のようにまとめられる。

1. 洞ノ口遺跡（第24次）

溝跡7条、土坑12基、性格不明遺構2基、ピット66基を確認した。遺物は土師器、須恵器、中世陶器、陶器、鉄製品、土製品が出土した。遺構の時期は、主に古代と中世の2時期が認められる。調査区周辺では同時期の遺構、遺物が多数発見され、集落跡および屋敷地の広がりが見られることから、これらと一連の遺構であった可能性がある。I区のスX1性格不明遺構からは鋳型、炉壁、羽口などの鋳造関連品が出土しており、II区からは高温焼成のためと推定される炉跡、SK12土坑を検出した。スX1性格不明遺構の年代については検討の余地があるものの、いずれも中世の時期に収まると考えられる。これらの資料は遺跡内部における場の利用を考える上で、貴重な発見といえる。遺跡が所在する岩切地区は中世において様々な性格の遺跡が集中して分布する。遺跡内だけでなく、周辺遺跡も含めた場の利用について検討していく必要がある。

2. 沖野城跡（第17次）

沖野城跡の南北方向の堀跡を2条検出した。遺物は陶器、磁器、木製品などが出土している。堀跡は位置や規模などから北側隣接地の第5次調査で検出された2条の堀跡とそれぞれ同一のものと考えられる。第5次調査を含め、検出長が100mにもおよぶ大規模なものであったことが確認された。堀跡の詳細な時期については判断できず、2条の堀跡の新旧関係については不明である。

また、遺跡西側で検出されている堀跡とは、規模や様相が異なっていることから、遺跡の東西で別区画が展開していた可能性も考えられ、今後の調査成果を含め検討していく必要がある。

3. 郡山遺跡（第290・293・298・300・301次）

5ヶ所の調査地点で古代の遺構、遺物が確認された。検出された遺構は竪穴住居跡、溝跡、土坑、ピットで遺物は、土師器、須恵器、土製品などが出土している。

古代の遺構はII期官衙段階のもの、官衙期以降のものが確認され、明確にI期官衙段階やそれ以前に位置づけられる遺構は確認されていない。II期官衙に関わるものは第300次調査で外郭大溝西辺が、第301次調査では外郭外溝南辺が検出されている。

官衙期以降のものとしては第293次調査で溝跡が確認された。堆積土最上層には灰白色火山灰が堆積することから、10世紀前葉には埋没していたと推定される。

4. 六反田遺跡（第15次）

竪穴住居跡、溝跡、土坑、小溝状遺構群、ピットを検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品などが出土している。検出された遺構は周辺調査の成果から奈良時代から平安時代に属するとみられる。竪穴住居跡は、第9次調査で調査した遺構の未調査部分の調査を行った。年代は出土土器から8世紀と考えられ、第9次調査の成果と矛盾しない。また、下層調査を行ったが縄文、弥生時代の遺物が少量出土するのみで遺構は確認さ

れなかった。

5. 富沢館跡（第8・17次）

2ヶ所の調査地点で堀跡、土坑を検出した。各調査区で検出された堀跡は、規模や方向から富沢館跡に関わるものと推定される。

それぞれの調査では外郭部を構成する堀跡が検出された。第8次調査では南外郭部、第17次調査では東外郭部の堀跡を確認している。各堀跡からは年代を判断する資料は出土していない。これまでの調査を含め、堀跡は重複状況から新旧関係が認められ、数時期の変遷があることが推定される。城館の造営時期や堀跡等遺構の変遷については、検討が必要であり、調査成果の蓄積が待たれる。

6. 羽黒堂遺跡（第1次）

掘立柱建物跡1軒、土坑3基、ピットを検出した。遺物が出土していないことから、遺構の年代については不明であるが、掘立柱建物跡は柱穴の規模から古代の可能性もある。また、土坑は配置や堆積土に規則性を見いだせることから一連の遺構群であったと考えられる。過去の調査では10世紀代の遺物を伴う遺構が確認されているが、どのような広がりを持って分布しているかは不明であり、今後の調査成果の蓄積を待ちたい。

7. 長楯城跡（第1次）

長楯城跡に関連する土塁2条、堀跡1条を検出した。また、堀跡を埋め立てて土橋状遺構が構築されることが確認された。出土遺物が僅少であるため、年代について判断することは難しいが、土橋状遺構から中世陶器が出土することや、遺構の性格を考慮すると、中世の段階である可能性がある。

また、土塁や土橋状遺構の構築土には大小様々な大きさの円礫が多量に用いられる。このような特徴は材料となる礫が比較的採取しやすい環境である当地域における、城の構造の一端を示しているものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	ろくたんだいせきほか							
書名	六反田遺跡ほか							
副書名	発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 482 集							
編著者名	妹尾一樹 五十嵐 愛 及川謙作 庄子裕美 木村 恒 佐藤恒介 斎野裕彦							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10 階 TEL : 022-214-8894							
発行年月日	令和 2 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	要約							
どうのくち 洞ノ口遺跡 (第 24 次)	仙台市宮城野区 岩切字洞ノ口	04102	01222	38° 18' 05"	140° 57' 12"	2017. 10. 2 ~ 2017. 10. 30	約 83.0 m ²	記録保存 (共同住宅建築)
	集落跡、城館跡、屋敷跡、 水田跡	古墳～近世		溝跡、土坑、性格不明遺構、 ピット		土師器、須恵器、陶器、磁器、 鉄製品、土製品		
溝跡、土坑、性格不明遺構などを検出した。特に SX1 性格不明遺構からは炉壁や鋳型などの鑄造関連遺物が出土した。								
おきのじょう 沖野城跡 (第 17 次)	仙台市若林区沖野七丁目	04103	01234	38° 13' 43''	140° 55' 06"	2019. 7. 3 ~ 2019. 8. 3	約 340.0 m ²	
	城館跡	中世		溝跡		陶器、磁器、木製品		記録保存 (宅地造成)
底面に障壁が伴う溝跡を 2 条検出した。その規模や構造から検出された溝跡は城館に伴う堀跡と考えられる。								
こおりやま 郡山遺跡 (第 290 次)	仙台市太白区郡山	04104	01003	38° 13' 17"	140° 53' 38"	2018. 11. 26 ~ 2018. 12. 12	約 73.8 m ²	記録保存 (宅地造成)
	官衙跡、寺院跡、包含地	縄文～古代		溝跡、土坑、ピット		土師器、須恵器、土製品		
溝跡、土坑などを検出した。これらの遺構が官衙に伴うものであるか判断するのは困難である。また、遺物は漆容器と考えられる須恵器の平瓶などが出土した。								
こおりやま 郡山遺跡 (第 293 次)	仙台市太白区郡山	04104	01003	38° 13' 13"	140° 53' 39"	2019. 2. 18 ~ 2019. 2. 20	約 88.8 m ²	記録保存 (宅地造成)
	官衙跡、寺院跡、包含地	縄文～古代		溝跡		遺物なし		
溝跡を 2 条検出した。SD2531 溝跡の最上層では灰白色火山灰が堆積しているため、10 世紀前半には埋没していたと考えられる。								
こおりやま 郡山遺跡 第 298 次	仙台市太白区郡山	04104	01003	38° 13' 21''	140° 53' 39"	2019. 7. 17 ~ 2017. 8. 2	約 37.4 m ²	記録保存 (宅地造成)
	官衙跡、寺院跡、包含地	縄文～古代		堅穴住居跡、溝跡、土坑、 性格不明遺構、ピット		土師器、須恵器		
堅穴住居跡、溝跡、土坑などを検出した。また、遺物は須恵器、土師器、鉄滓などが出土した。								
こおりやま 郡山遺跡 第 300 次	仙台市太白区郡山	04104	01003	38° 13' 30"	140° 53' 26"	2019. 10. 2 ~ 2019. 10. 4	約 30.0 m ²	記録保存 (集合住宅建築)
	官衙跡、寺院跡、包含地	縄文～古代		溝跡、ピット		土師器、須恵器		
溝跡を検出した。溝跡はその位置や規模から、II 期官衙の外郭大溝の西辺の一部と推定される。遺物は土師器や須恵器が出土した。								
こおりやま 郡山遺跡 第 301 次	仙台市太白区郡山	04104	01003	38° 13' 16"	140° 53' 42"	2019. 12. 9 ~ 2019. 12. 16	約 60.0 m ²	記録保存 (分譲住宅建築)
	官衙跡、寺院跡、包含地	縄文～古代		溝跡、ピット		土師器、須恵器		
溝跡を検出した。溝跡はその位置や規模から、II 期官衙の外郭外溝の南辺の一部と推定される。遺物は土師器や須恵器が出土した。								
ろくたんだ 六反田遺跡 第 15 次	仙台市太白区 大野田五丁目	04104	01189	38° 13' 01"	140° 52' 28"	2018. 8. 27 ~ 2019. 3. 19	約 164.0 m ²	記録保存 (宅地造成)
	集落跡	縄文～近世		堅穴住居跡、溝跡、土坑、 小溝状遺構群、ピット		縄文土器、弥生土器、土師器、 須恵器、瓦、石器		
堅穴住居跡、溝跡、土坑などを検出した。堅穴住居跡は出土遺物から 8 世紀頃のものと考えられる。遺物は土師器、須恵器などが出土した。								

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
とみざわて 富沢館跡 第8次	仙台市太白区 富沢字熊ノ前	04104	01246	38° 12' 49"	140° 51' 35"	2018.12.20	約21.0㎡	記録保存 (共同住宅建築)
	城館集落跡	縄文・平安 ～近世		堀跡		遺物なし		
	大規模な溝跡を確認した。城館の南部を構成する堀跡と考えられる。							
とみざわて 富沢館跡 (第17次)	仙台市太白区富沢字 館	04104	01246	38° 12' 50"	140° 51' 47"	2019.11.18～ 2019.11.19	約10.0㎡	記録保存 (建売住宅建築)
	城館跡、集落跡	縄文・平安 ～近世		堀跡		遺物なし		
	大規模な溝跡を確認した。城館の東部を構成する堀跡と考えられる。							
はぐろどう 羽黒堂遺跡 (第1次)	仙台市太白区	04104	01048	38° 13' 08"	140° 49' 21"	2018.12.17～ 2018.12.19	約108.5㎡	記録保存 (宅地造成)
	散布地	縄文・奈良 ・平安		掘立柱建物跡、 土坑、ピット		土師器		
	掘立柱建物跡、土坑などを検出した。掘立柱建物跡は柱穴の規模から古代の可能性が考えられる。また、遺物は土師器片が出土した。							
ながたてじょう 長楯城跡 (第1次)	仙台市太白区秋保	04104	16043	38° 15' 05"	140° 40' 48"	2019.8.8～ 2019.11.15	約128.2㎡	記録保存 (道路拡幅工事)
	城館跡	中世・近世		溝跡		縄文土器、土師器、瓦質土器、 陶器、石製品		
	城跡に伴う土塁、堀跡を検出した。さらに堀跡は石積みにより埋め立てられ土橋状遺構が構築されることを確認した。遺物は縄文土器、中世陶器、瓦質土器などが出土した							

仙台市文化財調査報告書第 482 集

六反田遺跡 ほか

発掘調査報告書

2020 年 3 月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12
仙台市役所上杉分庁舎 10 階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目 1-14
TEL 022 (231) 2245 (代)
